

インフィニット・ストラトス～悪魔は乙女と踊る～

ラグ0109

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

女尊男卑：インフィニット・ストラトスの誕生により根付いてしまったこの世界に、異世界から異物とも言うべき悪魔が送り込まれてくる。

悪魔はただただ世界を見つめる…この地に踏み入れたが最後、決して離れる事の出来ない運命と出会うなどと思ってもせずに…。

・このSSは作者の『人形遣いは夢見るか?』のリメイク作になります。

・このSSは作者の『狼は誰が為に吼える』の主人公の前世における友人が主人公になります。

・熱い原作改変、設定改変、性格改変が巻き起こります。拒否感がある方はブラウザバックを強くお勧めします。

・ああ…両手に華にしてみました…すまない…本当にすまない…

# 目次

## 序章

# 1	少年と悪魔	1
# 2	悪魔と戦乙女	10
# 3	厄介事はやってくる	18
# 4	早い再会	28
# 5	別れと出会いは紙一重	42
# 6	眠れ、地の底で	57
# 7	悪魔と少年	72
# 8	腐海ファイト	80
# 9	動きだす歯車	91
# 10	ウサギと悪魔と戦闘狂	103
悪魔と少年と女の園		
# 11	華のIS学園	118
# 12	お嬢と少年、悪魔と暴君	129
# 13	初日の終わりに	146
# 14	夜明けと姉妹と煙草の味と	159
# 15	アリスとウサギと悪魔の溜息	172
# 16	暗月の舞踏	183
# 17	剣聖、魔刃、桜花嵐舞	195
# 18	白と青の輪舞	208
# 19	夜明けにて、雨上がり	220
悪魔と少女と恋物語		
# 20	日常にて	232
# 21	師弟再会	244

# 2 2	夜空と煙草と後悔と	256
# 2 3	ランチタイムは憂鬱に	270
# 2 4	恋の道化	283
# 2 5	始まりの夜	295
# 2 6	襲撃	306
# 2 7	黒鬼と悪魔	318
# 2 8	悪魔と乙女と帰る場所	332
# 2 9	タヌキと乙女と一人の男	344
悪魔としがらみと		
# 3 0	ようこそ、I S 学園へ	356
# 3 1	優しい日常	368
# 3 2	梅雨の空と人模様	380
# 3 3	眠れぬ夜に	391
# 3 4	悪魔と悪だくみ	402
# 3 5	悪魔は嗤う	413
# 3 6	汝、血を奉げよ	425
# 3 7	悪魔と親父と悪だくみ	437
# 3 8	パリで出会う雨	446
# 3 9	帰還	453
# 4 0	一難去つて次二難	460
# 4 1	難題と日常と	471
# 4 2	放課後談話	480
# 4 3	黒い雨	490

## 序章

### #1 少年と悪魔

ジリジリとした太陽が照り付けてくる夏真っ盛りだと言うのにも関わらず、俺は着古されたボロコートを羽織り、これまた使い古されたトランクを担いで辺りを見渡している。

「まったく…また情報無しの一ワンマンアーミーかよ…勘弁してくれ…」

俺は陽の射さない薄暗い路地を歩きながら『雇い主』のいつもの無茶振りに応える為、今居る土地を調べ回っている。

表向き大道芸人として生計を立てている俺は、特定の居住地を持たない放浪者と言う事になっているそうだ。

これらの戸籍は全て雇い主が用意してくれるんだが…一体この世界で何が起きていて、何をすればいいのかと言う事を一切知らせてくれない。

と、言うか異物である『旅行者』である俺を、この世界にぶち込むので手一杯らしい。

…ああ、どういう立場の存在なのか教えてなかったな。

俺は一般的に『悪魔』と呼ばれる存在だ。

勿論、そんなものは今俺が居る世界においては、ホラ話として処理されるようなものなんだが…。

本来俺が居る世界においては悪魔どころか神なんてのも居る、常識が通用しない世界だ。

正直、俺なんかは末端も良い所の存在で、大して強力な力を持っているわけでもない。

そんな存在は、大体誰かしらの庇護下に入って細々と生きている。で、そんな俺を庇護してくれてるのが『桜花』って言う俺の雇い主になる。

「見た所科学技術はソコソコってところだな…」

雇い主の願いはただ一つ…あらゆる世界を観測し続ける事。

要は覗き魔だな。

本を読む様に、音楽を聴く様に、演劇を鑑賞する様に：そうして世界を見て、聞いて、知って、知識として蓄える俗物。

知りたいと思う事はトコトン調べ上げ、自身の糧にしなければ気が済まない強欲者：何とも俺の雇い主に相応しいものだ。

本人が調べに行けば良いんだろが、本人は所謂引き籠りの出不精：だからこうして俺が調べに向いてる訳だ。

：何を調べりゃいいのかくらい、伝えろってんだよクソが…。

大通りに出ると、昔ながらの街並みと近代化の進んだ街並みとが入り乱れる景色が視界に広がる。

通りには等間隔に街路樹と街灯が設置されていて、無駄に開発をしていない風に見受けられる。

便利さを突き詰めてしまうと、環境を破壊し兼ねないからな：なるほど、自然との折り合いはソコソコつけてるらしい。

人の流れに沿って道を歩いていくと、街の至る所に何かの大会が開催している事を告げる垂れ幕が視界に入る。

第二回モンド・グロツソと書かれたそれらの垂れ幕には、参加国を示しているであろう国旗と『インフィニット・ストラトス』なる単語が目止まる。

「無限の成層圏…？なんだそりや…？」

首を傾げて立ち止まっていると、いきなり背中をバックか何かで叩かれる。

どうも、随分とこの世界の人間は野蛮みたいだな…こりや。

俺は若干苛立ちつつも穏便に事を済ませようと怒りを腹の中に押し込んで、穏やかに振り返る。

「なんか用か？」

「あんた邪魔よ！小汚いホームレスが立っていて良い場所じゃないの！！」

「ああ、そりゃ悪かったな。キビキビ歩くとすつかね」

振り返った先に居る40歳手前くらいのシヨートヘアのブロンド女性は、金切り声を上げながら俺に抗議の文句を浴びせてくる。

合わせて、周囲の男性は巻き込まれまいと視線を逸らし、そそくさ

と歩いていくのが見える。

つまり、此処は女性が特権階級にいるって事を示してるんだろう。なんつー、面倒臭い世界なんだ：や、此処よりも面倒臭い世界はゴマンとあるんだが。

そんな俺の面倒臭そうな気持ちが表示に出ってしまったのか、或るいは最初から『八つ当たり』目的で突っかかってきたのか女性は益々顔を赤くして此方を睨んでくる。

「なに、その態度は！警察呼ぶわよ!？」

「これは失礼をした、レディ…これで満足か？」

慇懃無礼にならない程度に：胸元に手を添えて軽く会釈すれば、女性はやめた顔で俺の顔を見つめてくる。

それを隙と見た俺はそそくさと歩きだし、人込みに紛れる様に歩いていく。

また捕まったら面倒だし、そもそも騒ぎは起こさないに越したことはないからな。

後ろから金切り声が響いてくるが、俺は素知らぬ顔で離れていくだけだ。

人の流れに沿って歩いていくと、古代の剣闘士が戦うコロッセオの様な外観のスタジアムへと辿り着く。

どうやら、此処が例のモンド・グロッソの会場らしい。

会場入り口前の広場には大小様々な屋台があり、良い匂いが漂ってくる。

この世界に来て既に3時間…そろそろ小腹が空いてきたんで、俺は屋台のある方へと向かう。

こちらも盛況な様で、人でごった返している。

飯にあり付けるのは何時になるのやら…等と内心ため息を吐くと、スタジアムから大きな歓声上がる。

大会はどうやら大盛り上がりの様だ：スタジアムの外側に付けられた巨大な液晶スクリーンには、チフユ オリムラと書かれたテロツプと機械を身に纏った女性が、輝く太刀を振り払っている姿が映し出されている。

…どうも、あの機械が『インフィニット・ストラトス』ってやつらしいな。

「やっぱブリュンヒルデは格が違うなあ！」

「だー…このままじゃ、またチフユの優勝かよ！」

「アリーシャだって強いんだから！今回こそ彼女がブリュンヒルデになるのよ！」

楽し気に観戦している少年少女達の声に耳を傾けながら、屋台でエールとソーセージを購入して手早く胃に納めていく。

ブリュンヒルデ…ってというのは、確か悲恋のワルキューレの名前だったよな…？

液晶スクリーンに映し出されているトーナメント表を見る限り、どうも出場しているのは女性ばかりらしい。

と、なるとこの大会の優勝者に送られるのが『ブリュンヒルデ』と言う称号と言う事か。

周囲でお祭り騒ぎをしている連中の中から少しばかり、不思議な話が出てくる。

曰く：『インフィニット・ストラトスは女性しか乗れない』、だ。

どうも、あの機械は女性にしか扱えず、男性が使おうとしてもウンともスンとも言わないそうだ。

こう、どうにも嫌な予感がしてしまって、堪らなく帰りたくなる。

だが、此方から帰還しようにも、桜花が満足するまでは帰れないのでどうしようもない…。

途方に暮れて肩を落としながら歩いていると、人の波に押されてスタジアムの入り口まで押されて行ってしまう。

どうもこれから、さっきのチフユってやつとアリーシャってやつの決勝戦が始まるらしい。

どちらも人気の選手らしく、会場内はどちらが勝つのかの話題で持ちきりになっている。

少しばかり、興味の引く存在であるインフィニット・ストラトスを間近に見るのも悪くないと考え、立ち見席のチケットを購入して人の少ない道を歩いていく。



…一歩一歩踏み出すのにやたらと勇気がいるのは気のせいと思いつつ、歩いていくとトイレが視界に入ってくる。

さつき飲んだエールが効いたのか尿意を感じた俺は、そそくさとトイレに入ろうとしたところで騒ぎが耳に入る。

「クソガキっ！大人しくしやがれ！」

「むー!!むー!!」

「うわあ…」

嫌な予感がしつつもトイレに入ると、大の大人数人が中学生くらいの少年をトランクに押し込めようとする場面に遭遇したのだ。

…直感に頼るとロクな事が起きないが、頼らなくても巻き込まれるんだな…クソが…。

俺を含めた全員が固まり、トイレの中を嫌な沈黙が支配していく。先に動き出したのは、目の前の男たちの方だった。

「て、てめえなにもんだ!」

「なにもんって…芸人？」

「おちよくってんのか!?まあ、いいや…テメエもついてこい!!」

「シヨンベンしてえんだけど、先にしていいか？」

「良いわけあるか!!」

男たちはハンドガン豆鉄砲を此方に向けて、怒りに顔を赤くして怒鳴り声をあげる。

拳銃を見た少年は恐怖に顔を真っ青にするが、それでも諦めていないのか男たちの隙を伺っている。

何をしでかすか分からないので、俺は少年の目をジッと見つめて首を横に振る。

今は、大人しくしていた方が生存確率が跳ね上がる。

下手に暴れて少年を巻き込んだら、きつと今以上の面倒事に巻き込まれるからな。

「へへへ、わかりましたよ…。ったく、トラブル体質はどこ行っても変わらねえなあ…」

俺はトランクを奪われ、後ろ手に親指を結束バンドで縛られて拘束されて、トランクに押し込められた少年と一緒に男たちに囲まれてト

イレから連れ出される。

：どうも、組織ぐるみの犯行みたいだな。

これだけ人が多いつてのに、俺が今歩いている通路には人っ子一人いない状態だ。

なんで、俺がそんな所に入り込めたのかは分からないが、兎も角：少年には絶体絶命の大ピンチにしか感じてないんだろうなあ…。

地下駐車場へと連れ込まれた俺は、促されるままに小型トラックの荷台に乗せられる。

少年はトランクごと助手席に乗せられている。

こちら辺、頭は良いらしい…。

一先ずは、潜伏先まで誘拐ドナドナされるつきやないみたいだな…。

「なあ、そのトランク仕事道具だから大切に扱ってくれよ?」

「黙つてろ…」

「へいへい…」

トラックが動きだす振動を身に感じつつ軽く肩を竦め、銃を突き付けてくる男の様子を見る。

銃を突き付けてこそいるが、どうやら命までは取る算段ではないらしい。

と、なると…こいつらは雲隠れに大層自信のある連中みたいだな。

ただ、俺自身も大人しく掴まっているつもりはないんだが。

時間にして2時間ほど…舗装されていないであろう道をガタゴトと揺れながら呆けていると、トラックがゆっくりと減速してドアの開く音がする。

どうやら、潜伏先に着いたようだ。

無言で降りる様に促されると、元は何かの家屋だったのかボロボロの廃墟が視界に入ってくる。

なんつーベタな…。

「とつとと歩け、時間が迫っているからな!」

「んなに怒鳴んな…漏れるだろうが」

茶化す様に言いながら前後を男に挟まれる形で家屋へと向かうと、まだ無事だった地下室へとトランクの中に押し込められていた少年

と一緒にケツを蹴り飛ばされて放り込まれる。

だから漏れるつってんだろーに…鬼か？

地下室の扉は何かの保管庫だったのか頑丈な作りで、錆びているとは言え分厚い鉄扉が備えられていて普通の人間では蹴破るのは無理な様に見える。

俺は横たわってグツタリしている少年の体を、軽くつま先で突いて様子を見る。

「応、生きてるか〜？」

「生きてるよ…くそっ…早く帰らないと…！」

「つっても、あんな頑丈な扉どうやって破壊する気だよ？」

「無茶でも無理でもやらなきゃダメなんだよ！」

少年はすぐに気が付いたのかモゾモゾと体を動かして上体を起こし、俺の事を睨み付けてくる。

その目にはなんで、あの時抵抗しなかったんだと言う恨み節の様な意思が感じられる。

俺は軽く肩を竦めて、指の結束バンドを引き千切りつつ少年の前にしやがみ込む。

「そういう気概は買ってやるだけどな？無茶でも無理でもやるってのはただの蛮勇つてやつでよ…死ぬぞ、ガキ」

「っ…!!」

「手慣れているところから見て、ありやダーティ・ワークのプロ…それもそれなりに力のある組織がやってんだろうさ」

「なんで、そんな風に言い切れるんだよ…」

少年は不満そうに唇を尖らせながらも、俺の事をジイツと見つめてくる。

俺は軽く溜息を吐きつつ、少年の拘束を優しく解いていく。

「単純な話だ…あんだけ人でごった返してんのに、あのトイレ近辺だけ人氣が無かっただろ？どうやってんのかは別として、普通じゃありえねえことをやってのけているからな…」

「で、でも、だからこそ俺は戻らなきゃ…！千冬姉の大事な試合を潰しちゃまう！」

「ん…お前、あのチフユってやつのだ弟なのか？」

少年の拘束を解いてやって、少しばかり思案に耽る。

どうも、この弟君を誘拐した理由はそのチフユってやつに勝たれると困る所がやったってどこか？

問題はこの弟に警備をつけなかったのかって事なんだが…キナ臭いな…。

今以上の厄介事が俺にふっかかりそうだな…おい。

「あ、ああ…織斑 千冬は俺の姉だけど…」

「なんつーか…トラブルに困らなさそうな立ち位置だな、お前…」

「ち、千冬姉は何も悪くない！」

「んなことどうでも良いわい…お前、連絡取る手段は？」

これくらい科学技術が発達していると、通信機器の普及ってのはどんな世界でも進んでる。

と、なれば携帯型の通信手段ってのがあつたりするもんなんだが…。

目の前の少年は服のポケットを弄って、その通信手段を探しているが一向に見つかる気配が無い。

「っ…携帯…あの時に落としてみたんだ…」

「しようがねえなあ…俺は見た通り持つてる訳もないし、少しばかり急いで脱出するかね？」

目の前の少年は連絡をとる手段が無いと知ると、希望が絶たれたとでも思ったのか座り込んでしまう。

俺はそんな少年を尻目に扉へと近づいて、優しく掌を押し当てる。

この世界に来て一つだけ伝えられた禁止事項がある。

それは御呪いを除いた魔法の使用禁止、だ。

このルールを破ったら非常に…非常に面倒な事になるので破るなと念押しされている。

そもそも、この世界は悪魔とか神とかが駆逐された人の世界…魔法なんて使える筈もないんだけどな。

ただ、この禁止事項…魔法を使うなど言うだけであって、ある一点においては問題がなかったりする。

それは…

「よっこらせ」

所謂中国拳法における発勁…それも密着状態から放つ寸剽を扉に軽く叩き込むと、凄まじい爆音が響き渡り、蝶番がねじ切れて重厚な鉄扉が外側へと大きく歪んで弾き飛ばされていく。

「え、ええええええええ!!?!」

「うら、行くぞガキンちよ。姉ちゃん試合を棄権しちまうかもしれねえんだろ?」

何てことは無い、『悪魔としての身体能力はルール適用外』である。

俺は懐から煙草を取りだしながら、オイルライターで火を点けて煙を吐きだしていく。

少年は、そんな俺の姿を崇敬と畏敬の混じりあつた目で見つめてくる。

「が、ガキじゃない…お、織斑 一夏って名前がある…」

「応、そうかい…なら俺も名乗らなきゃな…ガキンちよ」

俺はニイツと笑みを浮かべながら、少年…織斑 一夏へと背を向けて地下へと駆け下りてくる足音が響く階段へと目を向ける。

「アモン・ミュラー…なんてことねえ悪魔ってやつさ」

## #2 悪魔と戦乙女

「ガキ、壁の陰に隠れてろ…巻き込んだら守ってやれる自信がねえかな」

「ガキじゃなくて一夏だ!」

「なっ!!どうやって!?!」

一夏を壁の陰に隠して、地上から階段で降りてきた男達に相対する。

いずれも機械仕掛けのこん棒…所謂スタンスティックつてやつを手に武装している。

理由としては単純明快…閉所での銃撃戦は、跳弾などで味方に被害が出るかもしれないからだ。

鉛玉を喰らった所で体にめり込むわけではないが、当たれば俺でも痛い。

いや、本来の悪魔的な姿を晒せば、大した事はないんだが…それは今禁止されている。

体一つで戦わなくてはならない以上、武器である鋼糸を使うのも悪くはないんだが、生憎とガキにトラウマを植え付けてやるほどイカした性格をしているわけでもない。

と、言う事で俺は目の前で此方を威嚇する様に睨み付けている男達に、指をかかって来いと言わんばかりに動かす。

武器を持つていると言うアドバンテージがある男達は、互いに視線を交わした後には下卑た笑みを浮かべる。

「痛い目見ない内に降参した方が、利口つてもんだぞ?」

「ああ、そうかい…こっちはとつとと帰ってえんだよ。来ないならこっちから行くからな?」

「舐めやがって…!!」

比較的細身で長身の男は俺の言葉を挑発と受け取って、チンピラにしては中々良い踏み込みで俺の間合いより半歩後ろに踏み込み、スタンスティックを上段から思い切り叩きつけてくる。

俺は、此方に当たるよりも早く足りない半歩分を踏み込んで叩きつ

けてくる腕を掴み、肘に軽く拳を叩き込む。

肉が無理矢理叩き潰されるような音が室内に響くと、男の手からスタンステイックが零れ落ち、ひじ関節があり得ない方向に折れ曲がる。

ぎゃあぎゃああと喚かれると面倒なので、掴んだままのへし折った腕を思い切り引っ張って引き寄せつつ腹に思い切り膝蹴りを叩き込んで意識を落とす。

吐瀉物を浴びたくも無い俺は、腹にめり込んだままの足を思い切り振って気絶した男を右側の壁に叩き付ける。

ゆっくりとした動作で落ちたスタンステイックを拾い上げて、残る三人の男たちを見る。

「痛い目見ない内に…なんだっけか？」

スタンステイックの出力を最大にまで上げると、バチバチとした音が室内に響き渡る。

ほんの一瞬の内に腕をへし折られ、壁に叩きつけられた男を見た残りの人間は、思わず鼻白む。

恐らく、俺が此処まで戦闘能力を持っていない旅行者くらいにしか思っただけだったんだろう。

人を外見で判断するとロクな目に合わないっつー教訓が生まれた瞬間だな。

俺が一步踏み出すと、男たちは一步後退していく。

そのサマは袋小路に追い詰められた、哀れな小動物によく似ている。

一步、また一步と足を動かしていき壁際まで追い詰めると、短く刈りあげた金髪の筋肉達磨が雄叫びを上げて此方に突進してくる。

追い詰めている筈が、不気味な存在に追い詰められている状況を打破しようとするかの如く、猪突猛進と言わんばかりのそのシールド・タックルは、マタドールさながらに避けた俺が足を引っかける事で唐突に終わりを告げる。

我武者羅すぎるせいか受け身を取れなかった筋肉達磨は、床に無様に倒れ伏してしまう。

そんな隙を反省しろと言わんばかりに、最大出力のスタンスティックを筋肉達磨に押し当てて電流を一気に流し込む。

「ぎゃああああああ!!」

「聞くに堪えねえなあ…もっとお上品に鳴けっつーの」

「クソオツ!!」

三人目は長髪の優男：俺が背後を向いている隙に気絶させようと言う魂胆だったんだろうが、素早くソバットを膝に叩き込んで関節を蹴り潰し、バランスが崩れたところで掬い上げる様に足で蹴り上げて天井に叩き付けて意識を刈り取る。

四人目は…と思った所で遊び過ぎたと舌打ちする。

「逃げやがったか…おう、一夏、出てきていいぞ?」

最後の一人は、戦略撤退っつーか、敵前逃亡っつーか…敵わないと知って、俺が他の奴で遊んでいる隙に逃げ出したみたいだ。

利口っっちゃ利口だが…所詮はチンピラだったってことかねえ?

「だ、大丈夫なのか…?」

「まあ、青二才程度じゃ俺を止められねえよ。仕事道具回収したらとつとと引き上げるぞ」

一夏は野郎共の可愛げのない悲鳴に体をビクつかせながら、壁の陰からおっかなびっくり出てくる。

生々しい暴力の爪痕に生唾を飲み込んで、しかしもう大丈夫だと確信したのかホッと胸を撫で下ろしている。

「わ、わかった…その…ミユラーさんは…」

「アモンで良い。さん付けとか気持ちわりいからな」

「う、うん…」

ひらひらと手を振りながら呼称を改めさせる。

ファミリーネームにさん付けとか勘弁しろよ…むず痒い。

俺は続く質問が来る前に歩きだし、一夏の歩調に合わせて階段を上っていく。

一夏も置いて行かれるのは勘弁願いたいのか、慌てて俺の後をついてくる。

今居る家屋は頑丈な造りだった地下以外は、最早廃墟と言って差し



支えない状況になっていて、木造だった家屋はところどころが修復不可能な程ボロボロになっている。

一階部分に出た俺は、階段で一夏を待機させて物陰からこっそりと辺りを見渡す。

此奴の姉ちゃん織斑は、あのおつかない美人千冬だっつーからな。

怪我でもさせたら、あの光るブレードでそっ首叩き落とされそう  
だ。

屋内には人の気配はない：恐らく、最後の一人はヒイヒイ言いながらトラックの元に走ってるんだろう。

俺は階段に居る一夏に声をかけ、階段から連れ出す。

「人気はねえが、俺から離れんなよ？どこに潜んでるか分からねえからな」

「アモンは：：どういう仕事の人なんだ？」

「んだよ、藪から棒に：：？」

「いや、千冬姉みたいに強くてさ：：どういう仕事したらそんなに強くなるのかなって：：」

一夏の目にあるのは、尊敬の眼差し：：男の子だったら、まあ強い奴を見たら憧れたりするわな。

ただまあ、俺が規格外ってだけでこの世界基準の身体能力だったら、鉄扉を弾き飛ばす事すらできなかつただろうが：：。

俺は、廃屋の中を探索しながら、仕事道具のトランクを探し続ける。

あの中にはこの世界での活動資金も入ってるからな：：金がなければ、満足に国を出る事もできない。

「芸人だ芸人。いわゆる大道芸人ってやつだよ：：着の身着のまま、あっちへフラフラこっちへフラフラだ」

「やっぱり、旅行していると襲われたりするののか？」

「そらまあ、治安が悪けりやな。襟首掴んで顔面に2、3発叩き込んでやりや、すぐにごめんなきいしてくるけどな」

はっはっはと笑ってやると、一夏も顔を引きつらせながら笑う。

悪党に慈悲なんぞいるかよ：：襲うって事は自分も襲われるかもしれないって事だからな。

人を呪わばなんとやら…正義だけが存在しない様に悪だけと言うものも存在しないからな。

恐らくリビングであったろうその場所に辿り着くと、テーブルの残骸の上に無造作に置かれているトランクを見つける。

「つたく、人のモンくらい大切に扱えねえのかねえ…」

「見つかったのか、アモン？」

「中身も確認しとかねえとなく」

軽く溜息を吐きつつ、トランクの鍵を開けて中身を確認する。

桜花の方で用意したパスポートやらキャッシュカードが無事であることを確認し、ホツと胸を撫で下ろすと一夏が目を白黒させて後ずさる。

トランクの中に、バラバラになった少女の身体が入っていたからだ。

「な、なな…っ!？」

「この程度でビビってんじやねえよ…高々人形だろうに…」

軽く肩を竦めながら、トランクの蓋を閉めてしっかりと施錠する。

精巧に作り上げたマリオネットを動かしての芸…これが俺の主な収入源だ。

まあ、桜花の用意した金があれば仕事せずに暮らすのは訳無いんだが、生きてる以上は自分で稼いで食わなきゃダラけるからな。

楽できても、頼るのは限定的にしとかなきや個人の尊厳も守れやしない。

「に、人形…?」

「応よ…ま、帰って縁があれば見せてやるよ」

トランクを肩に担ぐようにして出入り口へと振り返ると、額に凄まじい衝撃が走る。

あまりの衝撃に俺は体を弾き飛ばされて、数少ない廃墟の壁をぶち破りながら外へと放り出される。

大口径の砲で狙撃されたみたいだな…俺じやなきや上半身が消し飛んでる威力だぞ…!？」

「あ、アモン!!」

「一夏ー!!!」

「千冬姉?」

軽い脳震盪を起こした俺は、中々体を起こすことが出来ずにボンヤリと晴天の空を見上げる。

…人助けして殺されかけるとかドンだけだよ…クソが…。

漸く、指先から動かせるようになって、体に喝を入れて跳ね起こして立ち上がる。

少しばかりダメージが残ってるのか、足元が若干覚束ない。

「ち、千冬姉!俺を助けてくれた人が!!」

「もう誘拐犯なら排除…一夏?」

「さつき外に飛ばされた人は、誘拐犯なんかじゃないんだよ!!」

「ったく…人助けの報酬が鉛玉とか勘弁しろよ…」

フラフラとした足取りで廃墟の中に戻り、桜色のブレスレットをした…なんつーの、スク水?みたいなスーツを着た女性と一夏の元まで向かう。

例の千冬ってやつだな…この場所に居るって事は、大会を手早く片付けて助けに来たか、それとも…。

「な…!? I S用のライフルで撃つたのに!」

「なあ、お前の姉ちゃん過激じゃね?」

「なんで無傷?」

どうも、あのインフィニット・ストラトス用の火器を、問答無用で撃ち込まれたみたいだな。

俺は額に付着している血を拭って壁に擦り付けながら、段々しつかりとした足取りで歩み寄る。

一夏にしろ千冬にしろ、まるで化け物を見たかのような顔で俺を見てくる。

「あー、あれだ…寸でのところで頭を傾けたんだけど、衝撃波で吹っ飛ばされてよ。つつーか、俺そんなに悪人面に見えるか?」

「見える」

「ヒデェ!!」

千冬は俺から一夏を隠す様に自身の背中へと押しやり、一夏は一夏

で抵抗する様に背中から顔を出しつつ悪人面だと肯定してくる。

まあ、確かに手入れしていない伸ばしっぱなしの髪の毛に、目つきの悪いアルビノの様な虹彩を放つ紅の瞳…や、分かっているけど、こう面と向かって肯定されると虚しくなるな…。

「まあ、なんだ…俺は行くぞ？用事は済んだからよ」

「いや、そう言う訳にも行かない。お前は誘拐事件の重要参考人だからな」

「見なかったフリはできないのか？」

「ああ、出来ないな」

チフユは、此方を射殺す様な視線を向けて睨み付けてくる。

相手するのは構わないが、これで出国が難しくなってしまうたら本末転倒…俺の本来の仕事が出来なくなってしまうかもしれない。

俺は深く溜息を吐いて、トランクを足元に置きつつ両手を上げる。

「まったく…お手柔らかに頼むぜ、お嬢ちゃん」

「どうなるかは、お前の態度次第だ」

「千冬姉、この人も被害者なんだぞ!？」

一夏は一応俺の肩を持ってくれる気なのか、千冬の腕を引っ張り引き留めようとするが、千冬はやんわりと一夏の手を離させて視線を合わせる。

顔つきは大切な家族に向ける優しいもので、さっきまでの鬼気迫るような顔ではない。

本当に、大切にしてんだらうなあ…。

「一夏…これは手続き上やらなければならない、大切な事だ。もし、事情聴取に来ないと言う事になればこの男も自由に歩くことができなくなるからな」

「で、でも!!」

一夏が反論しようとしたところで、軍の特殊部隊らしきスーツに身を包んだ目だし帽の連中が廃墟に踏み込んでくる。

姉ちゃんの方は、恐らくあのインフィニット・ストラトスって奴で突撃してきたんだろうが…警察も少しは頑張れよ…遅えよ…。

「ブリュンヒルデー…家族にケガは!？」

「私はもうブリュンヒルデではないよ。おかげで無事だ…情報提供感謝する」

ブリュンヒルデではない。

この一言を聞いた瞬間、一夏の顔は強張り、ギリツと歯を食いしばる音が俺の耳に届く。

あの時、決勝戦が始まる直前だったことを考えると、恐らく試合を棄権したんだろう。

名誉か家族かの天秤で、迷わず家族を取れる…そう言った感性はとも尊いものだと思う。

イイ女ってやつだろうな。

「この男は…?」

「一夏と一緒に誘拐されたそうだ…一応拘束すべきだろう」

兵士にライフルの銃口を向けられれば、無抵抗の証として手を上げ続ける。

此処まで来たら、もう後は成る様に成れと言うやつだ。

お尋ね者になるほど、面倒な事は無いから…。

常に何かしらに追われていると言う状態は、いずれ心身に重大な被害を及ぼす。

仕事の関係上、世界を見て回る事が重要なのだが、マイペースで諸国漫遊できなくなるのは非常に心許ないものがある。

「抵抗するな…両手を頭の後ろで組め!」

「へいへいっと…すぐに終わらせてくれよ?」

俺は兵士が言われるがままに、両手を後手に組み軍用車両へと歩き出す。

次は何処に向かったものか…なんて、能天気な事を考えながら。

### #3 厄介事はやってくる

「…すまなかった」

「…撃つ相手は選ぼうな、姉ちゃん」

ドイツ軍の基地の取調室に連行されてから始まった俺の事情聴取は、モンド・グロッソ会場内に備えられていた監視カメラの映像からすぐに被害者だと言う事が判明し、事なきを得る事となった。

最初は乱暴な物言いだった尋問官も直ぐに対応を軟化させ、終始和やか且つ同情的なムードで進んでいった。

人除けをしておいて、監視カメラは抑えなかった…この事から考えられるのは、敢えて誘拐されたと言う事実を見つけて欲しかったからなのか…それとも…。

色々と腑に落ちない事件ではあるが、無事に解決と言う事になってるので穿り返す必要も無いだろう。

今回の事件はドイツ、日本双方にとって明るみになると国際的な立場が危うくなる…と言う事で俺には緘口令が敷かれ、少なくとも一月の間はこのドイツ基地から出る事が叶わなくなってしまった。

身分証自体はあるものの、俺の身分保証人が居ないとなると今後の監視に関して非常に問題があると言う事で、ボーデヴィッツヒ大佐とか言う男が当面の保証人と言う事になるはずだったのだが、ここで今日の前にいる女が待ったをかけたのだ。

「しっかし身分保証人になった所で、厄介事しかねえんじゃねえか？」  
「ドイツ軍の方で常時監視されるような事態よりかはマシではないか？」

「や、それ言われるとぐうの音も出ねえんだけどよ…」

基地の方で用意された部屋のベッドの上で胡坐をかきながら、対面にて椅子に座っている『元』ブリュンヒルデ、織斑 千冬を見つめる。

化粧っ気は薄いものの、女性にしてはスラリとした長身、女性らしいしなやかな曲線は黒のスーツ姿の今でも良く分かる。

結論から言って美人だ…それもトップクラスの。

美人な姉ちゃん、一夏は幸せ者だねえ…。

「ま、まあなんだ…無事だったとはいえ、恩人に発砲してしまったんだ…その償いくらいはさせてもらえないか？」

「律儀なこつたな…拒否しても押し付けてくるんだろ？」

「ああ…どうあれ、定住地を持たないお前にとってはあるがたい話でもあるだろう？」

確かに、今後ドイツ軍の監視が付き纏うとなると、鬱陶しい事この上ない。

千冬は、名目上でもその監視役をやって野放しにしてくれると言っているんだから、これに食いつかない手は無い。

自由気ままに旅行してるのは、どんな世界であれ結構楽しいからな。

俺は腕を組んでジイツと千冬を見つめる。

そんな俺を千冬は回答を待つように真っ直ぐに見つめ続ける。

一切ブレる事のない弟とそっくりだが鋭いその目は、誰よりも実直でありたいと言う意志を感じる。

公私において厳しくあろうとしているんだろう…なんつー、不器用な女なんだかな…。

俺は観念したように片手で頭をかき、静かに頷く。

「分かった分かった…悪いけど、お前の世話になる」

「重ね重ね、すまなかつたな…話の方は私の方でつけておく。一か月の間辛抱していてくれ」

千冬は深く頭を下げると椅子から立ち上がり、部屋の出入口口へと歩いていき、ドアノブに手をかけたところで此方に顔だけ向ける。

懐から煙草を取りだし、一本口に啣えたところで見られている事に気付いて顔を向ける。

「ごっ、禁煙だったか？」

「いや…そうではない。どうも一夏がお前に懐いた様でな…もし、日本に来ることがあったら我が家を訪ねに来てやってくれ。一夏が喜ぶ」

「ハッ、喜ばれんなら千冬みたいな美人の方が、俺は嬉しいがな。まっ、行く機会があれば行ってやるさ」

千冬の言葉に鼻で笑いつつ、手に持ったオイルライターで煙草に火を点けて少しだけ空いている窓の方へと煙を吐きだす。

どうにも、ガキに好かれやすいな…そう言うのは、あの狼の専売特許だと思ってたんだが…どうも、そうでもないらしい。

芸人やつてる身としちゃ、有難く思うべきなんだろうか…？

「軽口を…まあ、いい。では、また」

「あいよ」

千冬は俺の言葉に肩を竦めて呆れつつ、部屋を出ていく。

ベッドに横になりながら煙草を吸い、口から輪っか状に吐き出してそれを眺める。

1本、2本と吸っていき、気分転換が済んだところで返却されたトランクをテーブルの上に置いて開き、中で眠り続ける人形をパーツごとに丁寧に取り出していく。

触れると人の肌の様な感触…贋作であろうと本物に限りなく近づけば、それは本物同然の存在になる。

一夏があの時ビビったのも、バラバラになった少女の遺体が入っていると見間違えたせいだ。

それだけ精巧に作り上げたし、人とそう変わらないと自負している。人形遣いを名乗っているなら、それくらいの事はやってのけなきや

な。

人形のパーツに傷が入っていないか確認し、傷が入っていれば丁寧に補修する。

芸をするための道具…と、言うより一人の娘の様なものだ。嫌でも愛着は湧くし、扱いても丁寧になる。

陽が傾きかけた頃になり、唐突に部屋の扉がノックされる。

「ん〜、ちつと待ってくれ」

テーブル一杯に広げていた道具を片付け、愛娘をテーブルの上に女の子座りで置いてから部屋の扉を開く。

部屋の前には、腰まで伸びた綺麗な銀髪の少女が背筋をピンと伸ばして立っている。



左目の医療用の眼帯がどこか痛々しい。

「…どちらさん？」

「…ラウラ・ボーデヴィツヒ伍長であります。一か月間、貴方の世話を任されました」

ラウラと名乗った少女の年の頃は…どうみても小学生。

こんな子供が軍に所属してるってえのか？

俺が訝しがめる様な顔で見ていると、ラウラは生気の無い赤い瞳で俺の事を見つめてくる。

「…何か、落ち度がありましたか？」

「お前じゃなくてここの軍隊がな…なんで娘っ子がこんな所に所属してるんだよ…？」

「はあ…」

ラウラは何とも気の抜けた声で返事をし、此方に敬礼をしてくる。

お目付け役にこんな少女をねえ…本当に何を考えてやがるんだか…？

一先ず気を取り直し、ラウラを部屋へと招き入れる。

ラウラは言われるままに部屋に入ればキョロキョロと辺りを見渡し、テーブルに座っている人形をジィツと見つめている。

「気になんのか、お嬢ちゃん」

「…お嬢ちゃんではない」

少しばかりからかう様に言うと、ラウラはムツとした顔で人形から顔を背けた後に顔を俯かせる。

さながら手負いの獣と言ったその雰囲気は、悲愴さすら感じてる。

自論っちゃ自論なんだが、子供は元気に笑って遊んでるのが一番だと思ってる。

罷り間違つてもこんな火薬臭い場所に居るべき存在では無いだろうよ。

「伍長さんは何時から軍に所属してるんだ？」

「…答えなくてはならない事でしょうか？」

「べつつに？言いたくないきや構わないし、軍の守秘義務があるってん

ならそれはそれでいい。後だ、俺に敬語は使うな」

ベッドに腰掛けて足を組みつつ、両手に革製の黒いグローブを嵌める。

指をゴキゴキと鳴らしながら解し、軽く握ったり開いたりしてから繊細に指を動かしていく。

指1本1本の関節を微妙に動かすことで、テーブルにチョコンと座っていた人形：『サニティ』に生命が吹き込まれていく。

サニティは転寝から目覚めたかのように両腕を上げて背伸びをし、キョロキョロと辺りを見渡す。

偶々、眼が合った——と、言うか合わせた——ラウラの顔を見れば、可憐な花の様な笑みを浮かべて立ち上がり、身に纏っていた空色のドレスの裾を両手で摘みお辞儀する。

その動きは人と何ら変わりなく、生命の躍動感にあふれている。

ラウラは戸惑ったようにサニティを見つめ、何処か恐れる様に後ずさった。

「俺の商売道具は気に入らないか？」

「商売…道具…？」

「応よ…なんてったって、俺は人形遣いだからな。こうして人形に生命を吹き込み、動かすのが生業ってやつだ」

サニティはドレスのスカートを抑えながら、ぴよんとテーブルから飛び降りて危なげなく床に着地し、トテトテとラウラの元まで歩み寄って握手をしようと手を差し出す。

一般的な人形では剥き出しにされている筈の関節は其処にはなく、人のそれと変わらない手をラウラはゆっくりと握り、握手をする。

「冷たい…」

「そりやまあ、冷たいだろうよ…。どこまでいっても、人間にはなりきれねえ。お嬢ちゃんとは違って人形だからなあ…」

「…随分と寂しそうな顔をするんですね」

「そうかい？」

少しばかり、センチメンタルな気分になってしまったのか…表情に出ってしまったらしい。

上官から俺の事をどの様に聞いていたのかは分からないが、ラウラは意外そうな顔で俺を見つめてくる。

魔法を使えば、確かに生きている様に人形がひとりでに動きだす様に作り出すことは可能だろう。

人と同じ心を持ち、言葉を交わす存在を作ることだって夢では無い。

けれども…果たして、人間はそれを人間と認めるのだろうか…？

「粗野な男だ、と父…いえ、ボーデヴィツヒ大佐から伺ってましたので」

「応、お前の父ちゃん喧嘩売ってるのが良く分かったぜ」

「そう言うところが粗野と言うのでは…？」

「ぐぬぬ…」

ラウラに反論も許さない切り返しをされて唸りながら歯噛みをするれば、そんな様子を見たサニティは両手で口許を隠す様にしてクスクスと笑うような動きをする。

サニティの動きを見て、ラウラも本気で言ってるわけでは無いと察したのか漸くクスリと口許を綻ばせる。

「やっとなったな」

「…笑っていません」

「いーんだよ、笑笑笑笑。ガキは笑ってなんぼだからな」

サニティを手元まで小走りで移動させて、片腕で抱きかかえる様にして持ち上げる。

ラウラは指摘されてすぐに能面の様な無表情に戻して、軍人として毅然としようとする。

10代になったばかりだろうに…本当に、どうなってるんだかな？

軽く肩を竦めつつ、サニティの体をバラバラに戻してトランクの中へとしまう。

「ところで、飯はどうすれば良いんだ？」

「…夕食は、私が部屋まで運びます。一応、此方がアモン・ミユラーの許可されている行動範囲になりますので…」

飯の話題を振れば、ラウラは思い出したかのように折り畳まれた基

地内の地図を差し出してくる。

目を通すと、俺が行動できる範囲は一般開放日に解放されている範囲に限定されている。

まあ、当たり前つちや当たり前…だが、部屋に閉じこもる必要が無いってのはありがたい。

引き籠つてると頭痛がしてくるからなあ…女相手にしてる時は違うけどな。

何をしてるのかつて？

そりゃあナニだよ。

「で、部屋から出るときは、お前が絶えず引っ付いてくると…」

「そうなります。そろそろ夕食の時間ですので私は失礼します」

ラウラは規律正しく回れ右をして部屋を出ていく。

だが、俺はその瞬間を見逃さなかった。

後ろを向く時に見せた憂鬱そうな顔を…。

人間、飯を食う時つてのを楽しむにしろものだと思うんだが…俺にはあの表情が酷く気になった。

夕食を終えて消灯時間。

俺はコツソリと部屋を抜け出して、俺の今居る兵舎の屋上へと出る。

明日怒られるだろうが、それはそれ…缶詰状態じゃ息が詰まるんで夜風に当たりに来たつて訳だ。

夕食後にラウラに貰つてきてもらった煙草——勿論お駄賃はあげた。嫌そうにされたが——を取りだし、屋上を照らす照明の下でゆっくりと煙草を味わう。

向こう側から持つてきた煙草は切らしてしまつたし、補充する手段が今のところ無い。

つてなわけで、一番安い煙草を買つてきてもらったんだが…俺にはお上品な味に感じる。

「で、何時まで俺の事を見てるつもりだい…軍人さんよ」

「ふむ、気付かれていたかね？」

「応よ…気付かれたくなかったらNINJAにでもなるこつた」

綺麗な三日月に雲がかかり始める頃、何時まで経っても監視し続けている男へと声をかける。

屋上出入り口付近の陰から出てきた男は…年の頃は30代半ばくらいか…短く刈りあげた金髪に狼の様に鋭い眼光の青い瞳、痩せすぎでもなくかと言って肥えているわけでは無いマツシヴなボディライン。

質実剛健と言うような顔つきが、男らしさを物語っている。

その男は階級章も身に着けず、ワイシャツにスラックスと言うラフな出で立ちで此方へと歩み寄ってくる。

「NINJAか…なるほど、参考にさせてもらおう。一本、貰えるかな？」

「あいよ」

「ありがとう」

冗談なのか何なのか、生真面目そうな顔で答えられて少しばかり毒気が抜かれちまう…。

言われるがままに男に煙草を差し出し、ライターで火を点けてやる。

男は煙をゆつくりと風下に吐きだし、此方を見つめてくる。

「ボーデヴィツヒ伍長は何か失礼をしなかったかな？」

「失礼つつーか…言いたいことはアンタでも分かるよな？」

男の言葉に眉を顰め、自然と声に棘が出る。

あんな子供が軍内に居る…その事実が俺にはどうしても腹立たしく思える。

鉄火場に行つて良い年齢じゃないだろうが…。

男は少しだけ悲しそうな顔をし、すぐに表情を改めて困ったような顔をする。

「ISが人を、国を、世界を変えてしまった…と言うのは卑怯な言い分かな？」

「インフィニット・ストラトス…ねえ…。生憎と金属の玩具には興味が無くってな」

「世の男性が皆、君の様に言いきれれば良かったのだらうがね…」

インフィニット・ストラトス：通称「IS」。

女性にしか動かすことが出来ない、究極の『兵器』。

戦闘機よりも小回りが利き、歩兵並みの小ささで戦車よりも火力を叩きだし、僅か数機があるだけで戦局を大幅に左右する機械。

しのののの：なんだっけか：まあ、天災とか何とかがつが開発した時は、そう言う目的じゃなかったらしいんだがな。

新しい玩具を武器にするのは人類の悪い癖：なんて言葉がある様に、現状ISは兵器の枠から抜け出せていない。

「職場に女性が増えるのは華やかで良い事なのだが、男たちは隅に追いやられてばかりで肩身が狭いものだよ。国はISに対する高い適正を持った子を集めて、優秀な操縦者にしようとする躍起になっていてね。なんせあれ程の戦力だ：ロートル兵器ではマトモには太刀打ちできない」

「だからってよ…」

「分かっている…僕もね」

溜息と共に肺に溜まっている煙草の煙を吐き出す。

この男：ボーデヴィツヒ大佐は、沈痛な顔で空を見上げている。

軍内の嫌な風向きを変えたくても変えられないもどかしさ：それを強く感じているのかもしれない。

根っこの部分が生真面目な分、そう言うところで損してそうだな…。

「ボーデヴィツヒ伍長：いや、ラウラは僕の養子でね。軍の上層部から押し付けられたものではあつたが、僕なりに愛情は注いでいたつもりなんだが：僕ではどうしようもない事態になってしまつてね」

「目の怪我か：？利き目じゃねえって言つても、片目なのは軍人としてちや問題だわな」

「…ああ、そのお蔭で酷い挫折を味わつてしまった様でね：そこで君に頼みたいことがあると言う訳さ」

この男：何を考えてやがる？

身分証持ちの住所不定自称大道芸人だつて言うのに、あからさまに

信賴しているみたいな目で俺を見つめてきやがる。

普通だったらこんな怪しい奴に頼み事なんざしない、誰だつてそーする、俺だつてそーする。

「君は大道芸人で子供を喜ばせるのが得意だと聞いている…そこでだ…」

「待つて、マジで待つて…普通、俺に任せるか!？」

「ラウラは軍内部でも孤立してしまつてね…立場的にも鼻眞にするわけにも行かない…だが、外部の人間である君ならば…。情けない父親だと罵つてくれても構わない。どうか…彼女の心を救つてはくれな  
いか?」

ボーデヴィツヒは此方に体を向け、深々と頭を下げる。

何処までも真つ直ぐにしか生きられず、現状に喘ぎ続けている…俺はその姿を旧友と重ねてしまい、深く溜息を吐く。

苛立たし気に携帯灰皿に煙草を押し付け、ボーデヴィツヒの頭を上げさせる。

「1か月…そこまでだ。それ以降は俺も旅を続けるから面倒は見えてやれねえからな!？」

「すまない、恩に着るよ…娘の事…よろしく頼むよ」

厄介事に首を突っ込むのは良くあるんだが…厄介事が向こうからやつてきやがる。

おまけにたった1か月…つたく、どうやってやりや良いんだか検討がつかない。

なんだか、これからもつと面倒な事が起きる気がして、俺はもう一本煙草を口に啜えた。

## #4 早い再会

ボーデヴィツヒ大佐と約定を交わしてから、早くも2週間が過ぎた。

その間も、俺はダラダラと部屋で過ごしたり、許可されている範囲で基地内を散策したりと適当に過ごしていた。

ラウラの件に関しては、相当難しい…ズカズカと心に土足で上がり込めば、それこそ拒絶されて手を打つことが出来なくなる。

かと言って『挫折』した原因を知らなければ改善してやることも出来ない…。

あのおっさんは、俺になんつゝ依頼をしてくれるんだかな…。

今日も今日とてやる事が無く、適当に基地内を散策していると、遠目からグラウンドでラウラ達が訓練しているのが見えてきた。

ランニングによる基礎体力向上訓練メニューをこなしているのか、グループごとに纏って訓練をこなしているのが分かる。

訓練場のフェンス脇に設置されているベンチに腰掛けて、煙草を取りだしながらその様子を見ていて一つ気が付いた事がある。

ラウラの班以外の連中は、ラウラの事を気にもかけていない様子なのだが、ラウラ班のメンバーは何処か気遣っているような節が見えるのだ。

…幼いながらに、その気遣いが屈辱に感じてしまってるんだろう。

軍人である、というプライドが余計にその気遣いを屈辱に感じてしまっている…と、言おう風に俺は受け取った。

「如何せん、不器用な娘っ子だあなあ…」

ゆっくりと煙を吐きだして、携帯灰皿に煙草の灰を落していく。

さて、どうしたものかな…と思案していると、俺の隣に誰かが腰掛けてくる。

ふわり、と女性特有の甘い香りができて其方に視線だけ向けると、此処には居ないはずの人間が腰掛けていた。

「随分と暇そうにしているじゃないか？」

「それでもねえよ…親御さんに娘っ子押し付けられて困ってるところ



さ」

何処か俺を揶揄うような声色で話しかけてきた女性：織斑 千冬は相変わらず黒のスーツに身を包み、毅然とした態度で足を組んで俺の横顔を見つめている。

俺は少しばかり懽然としつつ、ラウラの訓練風景を見つめ続ける。

少しの休憩時間を挟んでいるのか、どの班も自由に行っているがラウラだけ皆と少しだけ離れた位置で孤独に過ごしている。

「不器用な娘っ子みたいでなあ…プライドばかりが先行して、どうにも上手く行つてねえつてよ」

「お前はカウンセラーが本職だったのか？」

「馬鹿言え、俺は何処まで行つてもただの悪魔さ」

「ほう…」

フィルターギリギリまで吸いきった煙草の吸殻を携帯灰皿に捨てながら、空に向かって煙を吐きだす。

晴天に漂う煙が、まるでラウラとの距離にかかった靄の様に風に流されていく。

「で、一夏はどうしたんだよ？」

「…こつちでISの訓練教官をする事になってな。一夏を友人と離れ離れにする訳にも行かずに置いてくることになった」

「おいおい…何時誘拐事件が起きるか分からねえのにか？」

千冬は組んだ腕を強く握りしめ、硬く口を真一文字にする。

千冬とて、弟を一人にしたくないのは分かっている。

一人にしても平気なら、IS用のライフルで俺の頭を警告なしに撃ち込むなんて真似はしないだろう。

だが、そうせざるを得ないと言う事は…恐らくあの誘拐事件をリークしたのが、このドイツ国だったって事になるんだろう。

「分かつてはいる…日本とて安全とは言い切れない国だからな。だが、契約の関係上は…」

「ああ、言うな言うな…俺とて馬鹿じゃねえし、下手に首は突っ込まないでやるさ」

「そうか…。時々、私は何の為に頑張っていたのか分からなくなつて

しまう…弟の為に頑張っていた筈なのに、とな」

「世の中の歯車に巻き込まれちまえば、そうなっちまうさ…」

二人で訓練風景を眺めながら、俺は千冬から零れた愚痴を聞いていく。

毅然と公私ともに真つ直ぐであろうとすればする程、社会と言うのは生きづらい世界になっていく。

自分一人で生きているなら、まだ生きやすいだろう。

だが、友が、家族がいたら…そう上手く行かなくなるものだ。

必ず、何処かで妥協が必要になってくる。

「ISに乗って戦っていれば、弟を…一夏をキチンと守ってやれると思っていたんだが…それも潮時なのかもしれないな」

「世界最強の看板背負っていた割には、随分と弱気な発言じゃねえか」「フツ：確かにな。大して関わっても居ないお前にこんな話をするなんて、どうかしている」

「別に聞いただけならタダみてえなもんだから、構わねえがな」

さて、もう一本煙草を吸おうか…と、思った所で千冬が立ち上がった此方を見下ろしてくる。

その顔は何処か怪訝そうな表情をしている。

…俺、何かやったっけか？

「ところで、だ…アモン、お前は暑くないのか？」

「夏だから、まあ…暑いわな？」

「だったら、そのコートを脱げ！」

俺は季節を問わず、一張羅のコートを肌身離さず羽織っている。

もう、何百年単位で大切に着ているコートは、ところどころに補修の痕が残っていて、同じ色でも色合いが違っている場所がある。

だと言うのにも関わらず、新調せずに着ているのは単純に落ち着くからに他ならない。

いつも、このコートを着て旅を続けていたからこそその愛着…半身に近いそれは、異常な執着と言っても過言では無いだろう。

「暑いけど、風通し良いからなあ…脱いだところで大して変わらねえよ」

「私が！暑苦しく感じるんだ！」

「…しようがねえなあ…」

千冬は鬼の形相で俺を睨み付け、脱げとしつこく迫ってくる。

俺はあまりの剣幕に溜息をつきつつ、羽織っていたコートを脱いで丁寧折り畳んでいく。

コートを羽織っていたにも関わらず、汗をかくことは無かったのでじっとりとした湿っぽさは感じられない。

他人からすれば異常だが、悪魔としては大した問題じゃない。

なんせ、人間では無いからな。

「まったく…ところでだ、一夏から耳がタコになるくらい聞かされていた事があるんだが…」

「あいつ、お前に何を吹き込んでんだ…？」

千冬の目がスツと細められ、何処かしら敵意が発せられる。

少しばかり面倒事になるような気がして、かかない筈の汗…正確には冷や汗がダラダラと流れ始める。

千冬はニタアつとした笑みを浮かべて、拳を鳴らす様にして解し始める。

「いや、なに…一夏曰く、私と同じくらい強いと言う話じゃないか」「どうだかねえ…」

俺はソツポを向いて口笛を吹きながら、震える手で煙草を啜えてオイルライターを出そうとズボンのポケットの中に手を突っ込む。

千冬は変わらず笑みを浮かべたまま、俺を軽く指差す。

「アモン…煙草が逆さまになっているぞ…？」

「チツ…まさか、お前…手合わせしろなんて…」

「話が早くて助かる…なに、私も鬱憤を晴らす相手が欲しくてな？」

「サンドバックにするんじゃないやねーよ！バツティングセンターにでも行って来い！」

うっぶん晴らし目的で俺に喧嘩を売ってきた千冬に対して、俺は思わず怒鳴り声を上げて立ち上がってしまう。

この女、見た目に反してやたらと好戦的だったみたいだ。

御淑やかにしていれば、文句なしの美人だつていうのに…勿体ない

等と思案していると、脳天に思い切りチョップが直撃する。

「ぐうううおおお…」

「失礼な事を考えたな…貴様…?」

「なんで、分かったし…」

涙目で頭を抑えながらしやがみ込んで、痛みから思わずうめき声を上げる。

ライフルで頭に弾丸撃ち込まれた時より痛いつてどういう事なんだ!?

「勘だ。それよりも、サンドバックになってくれるんだろうな?」

「人の思考読むんじゃねえよ!!くっそ!やってやらあ!!」

「フフフ、丁度良い…挨拶がてら、あの訓練に混ぜてもらおうか」

先ほどの怒鳴り声が、ラウラ達にも聞こえてきたのか此方に無数の視線が向けられてきているのが分かる。

元とは言えブリュンヒルデ…名前も実力も知れ渡っているのか、ラウラとそう変わらない年齢の女子だけの部隊からは黄色い歓声上がり、教導役の黒のショートヘアの女性が諫めるような声を上げる。

俺は深く溜息を吐きつつ、千冬の後について教導役の人間の元へと向かう。

「キミが、訓練担当官か?」

「ハッ!クラリツサ・ハルフオーフ中尉であります。織斑 千冬殿に会えて光栄であります!」

クラリツサと呼ばれた女性は、千冬に敬礼をして良く通る声で挨拶をする。

その声色には若干の緊張も含まれている。

ISに関わっている人間からすれば、尊敬の対象である千冬と会話が出来る事自体が光栄なんだろうな…。

クラリツサは千冬の背後に居る俺に目を向けると、些か眉を顰める。

「織斑殿…一般人を此処に連れて来られては困るのですが…?」

「ボーデヴィツヒ大佐には許可をもらってある。この男は単身でテロリストを撃退した凄腕だ。私との組み手を見せる事で得るものもある。

るはずだが…」

「…わかりました。全員整列！」

あのおっさん、ちゃっかり根回しをしていたらしい。

千冬が俺に声をかけてきたのもこの状況に持ち込むためだったよ  
うだ。

大佐の許可があると聞くと、クラリツサ中尉はすぐに引き下がって  
訓練兵達を整列させ始める。

「皆はもう知っているだろうが、此方の女性は一先のブリュンヒルデ  
である織斑 千冬殿だ。明日から私達の教官役を一年間務める事に  
なっている」

「織斑 千冬だ。私の仕事は貴様達殻付きヒヨコを使えるヒヨコにす  
る事だ。私の言う事には絶対従ってもらおう！反論は許さん、いいな  
!?!」

「！！ハッ！！！！」

…海軍も真つ青の訓練が展開されるんじゃないかねえかと危惧するほど  
の覇気が、部隊全体に叩き付けられる様に千冬から発せられる。

俺はそんな様子を折り畳んだコート片手に持って、眺めていると千  
冬が此方を見つめてくる。

「さて、訓練を担当するのは明日からだ…一つ、私は徹底したいこと  
がある。私は、今の世情と言うものを嫌っている。女尊男卑等と言う  
思考は一切捨ててもらおう」

「なっ…!?!我々は男よりも優れていると言う理由で集められた精鋭で  
す！ISすら使えない男に後れを取るなんてことは…!!」

「では、聞くが…もし、ISが使えない状況で男に囲まれた時、君なら  
ばどうする？」

「そ、それは…」

訓練兵の中の一人が、千冬言葉にプライドを傷つけられたのか、  
声を上げて反論しようとする。

だが、千冬の切り返しには言いよどみ、明確な答えを出せずにいら  
れる。

女尊男卑…それはIS神話とも言えるISの戦闘力に裏打ちされ

た物に過ぎない。

いくらISが使えるからと言っても、手元にそのISが使えない限りは他の人間と変わりがない。

全員が全員そうとは言わないが、男と女とでは基本的な膂力と言うものに差が出てくる。

「もし、君が男をどうにかできると言うのなら、私の後ろに居るこの男と組み手をして打ち倒してみせろ」

「お、織斑殿…それは…」

「ハルフォーフ中尉…許可は取つてある。アモンも構わないな？」

「ガキをボコすのはちよつと…」

「ガキですつて…!？」

千冬は許可を取つてあるの一言でクラリツサの発言を潰しているが、俺自身の許可は取れていないんだが…？

しかも、俺にけしかけてきやがるし、俺は俺で墓穴は掘るしで溜息を深く吐くしかない。

「男の癖に、私の事を子ども扱いして…!」

「あく、はいはい、そう言うのは良いからな。ラウラー、コート持つてくれね?」

「なんで私なんだ…」

「お目付け役だから」

「…」

俺はラウラを手招きしてコートを手渡ししつつ、ゴキゴキと首の骨を鳴らしてズカズカと前に出てきた少女と相対する。

年の頃は十代半ば…少女の垢抜けなさが残るまだまだケツの青いガキだ。

それも安い挑発に乗せられちまうほどの。

「手加減してやるから、武器でもなんでも持つてこい」

「馬鹿にして…ハルフォーフ教官、ナイフを貸してください」

「…怪我はさせるな、絶対に」

「了解」

クラリツサは持っていたナイフを抜いて少女に渡す。

訓練用のそのナイフは刃が潰されていて刺さる事は無いが、それでも当たれば痛いものだ。

少女はそのナイフを逆手に構え、此方へとジリジリとすり足で間合いを測りながら距離を詰めてくる。

大して俺は、自然体：直情型では無かったようだが、それでも俺には遠く及ばないヒヨコ相手に本気になんてなれるわけがない。

弱い者イジメってのはつまらないからな。

「好きな様に振り回して来いよ…お嬢ちゃん？」

「っ…!!」

少女は俺の誘いに乗って、思い切りのいい踏み込みから思い切りナイフを突き立ててくるが、俺はそれを涼しい顔で半身だけ身体をずらして避ける。

すぐさま持ち手を変えて最小限の軌道でナイフを振り抜いてくるが、何れもその場で体を上半身をずらす様に動くことで避けていく。

二分も経たない内に、少女は焦りからか振り方が段々と雑になってくる。

理由は明白：何故ならば…。

「一歩も退かない、だど？」

「ほう…」

クラリツサからは驚きの声上がり、千冬からは感心したかのような声上がる。

確かに、そこら辺の男相手だったら何とかなるくらいのナイフ捌きではある。

だが、次にどの様に振ってくるのか読める程度には実戦経験の薄い少女では、俺相手には荷が重い。

どの様に振ってくるのか分かるのであれば退かずに軌道からズレた位置に立っていれば良いだけなのだから。

いい加減終らせたくなくなった俺は、ナイフの振られた腕を持って足払いを行いつつ仰向けに倒し、頭の横を思い切り踏み抜く。

余りにも無造作に踏み抜いてきたものだから少女は小さく『ヒッ』と言う声を上げて、俺を見上げてくる。

「はい、俺の勝ち〜」

「あ……くっ……」

すぐに足を退かした俺は、笑みを浮かべながら少女を起こしてやり、背中についた土埃を叩いて落としてやる。

「もうちつと、我慢強くならなきゃなあ……筋は悪くねえけど」  
「……」

少女は無然としながら、列に戻って顔を俯かせている。

絶対の自負があったからこそ、プライドが砕かれてしまったところか……まあ、その内自信を取り戻すだろうが。

千冬は、一回頷いて部隊を見渡す。

「この様に男だと卑下していると、足元を掬われると言う事をしっかりと認識する様に」

「……は、ハイッ！……」

「では、今のを踏まえて私とこの男の組み手を見てもらう。見る事もまた訓練へと繋がる……自身の糧とする様に」

そう言うなり千冬は皆と少し離れた位置まで歩き、此方へと向き直る。

鬱憤が溜まってるんだろうが……面倒な事に巻き込みやがって……

この組手、最悪引き分けになる様に持っていく必要がある。

決して、俺が勝つてはいけない。

俺が勝ってしまったら、千冬の立場が無くなってしまふからな。

千冬は恐らくそんな周囲の目なんてどうでも良いのだろう……一夏が憧れを持って話す相手がどれだけ強いのかと言う事を知りたいだけだ。

ある意味で戦闘狂……欲求に忠実なんだろう。

「……さつきみたいに手加減してくれるなよ？」

「……」

俺は千冬に対して拳を構えて、軽く足を開く。

所謂喧嘩殺法と呼ばれる我流の戦い方しかできない俺は、目の前で拳を構える千冬に対して些かの緊張感を持つ。

他の人間とも違う……絶対的な強さを感じずにはいられない。



強くある為に自己鍛錬を重ねてきたのだろう…女だてらとは言わない、此奴は間違いなく一級品の戦士だ。

千冬は俺の間合いにいきなり踏み込んできて、鞭のようになやかで鋭い回し蹴りを俺の体に叩き込んでくる。

俺は、素早く腕を曲げて回し蹴りを受け止めて、肘を跳ね上げて蹴りを弾き飛ばして

体勢を崩させる。

千冬は流れに逆らう事はせず、弾かれる方向に跳躍して間合いを取るが、遅い。

今度は俺が思い切り踏み込んで、脇腹目がけて強烈な——それでも手加減した——ボディブローを叩き込む。

「馬鹿力が！」

「ああ、そうかい!!」

千冬は脇腹にボディブローが叩き込まれるより早く密着し、脇腹と腕で俺の腕を挟み込んで見上げる様にして俺を睨みつけてくる。

俺はニヤリと笑みを浮かべれば、千冬の頭に頭突きをかまして腕の拘束を解いて逃れようとするが、千冬は体勢を崩しながらも俺の衣服の襟元を思い切り掴んで引き寄せて鼻っ柱に右のストレートを思い切り叩き込んでくる。

あまりの衝撃に脳震盪を起こしたのか軽くよろめき、少しばかり後退する。

鼻の穴を上から片側だけ抑えて、詰まった鼻血を噴き出させて通りを良くする。

「良い拳じゃねえか…効いたぜ、少しな」

「石頭め…こつちも効いた、少しな」

互いに拳を構えなおし、深く息を吸って吐き出す。

幾分か高揚しているのが分かる…ただの殴り合いをしてるだけだつてのに、女相手に楽しくなるなんざ中々無い。

いや、馬鹿にしているわけじゃない…此奴は本当に強くて…

「…良い女つてのはこうでなくつちやなあ！」

「つ…ふざけた事を！」

俺と千冬はほぼ同時に踏み込み、一步も退かずに壮絶な殴り合いを始める。

ボクシングなんてものじゃない、ただのストリートファイト染みたそれは、まるで童心に返ったかのように楽しく、互いに凄惨な笑みを浮かべている。

千冬の渾身のボディブローが鳩尾に叩き込まれれば、俺は思わず体をクの字に曲げる。

しかし、俺はすぐに体勢を整えて千冬の髪の毛を掴んで、膝蹴りを顔面に叩き込む。

膝蹴りを受けて仰け反った千冬は、仕返しとばかりに俺の腕を掴んで一本背負いの要領で地面に叩き付ける様にして投げ飛ばし、関節を締め上げる。

「ぐうううー！」

「いいか！私でも油断すればこの有様だ！戦いに男も女も無い！肝に銘じておけ!!」

「……は、ハイ!!」

一先ず、決着がついたと言う事にした俺は、抵抗を止めてそのまま千冬に締め上げられ続ける。

互いに体中を痣だらけにしているせいか、教導役のクラリツサまで完全に委縮しきってしまったっている。

…明日から大丈夫なんかねえ…こいつら…?

壮絶な殴り合いをしたその日の夜…俺はトランクの中から裁縫道具を取りだし、チクチクと裁縫に勤しんでいた。

夕食前にラウラに必要な材料を用意してもらってあるので、適当に裁ちばさみで切り出して、チクチクと縫うだけの作業だ。

ラウラは何か言いたそうにしていたが、やる事があるのかすぐに部屋を出て行ってしまったって会話らしい会話は交わしていない。

人形制作と同時に衣装のデザインから制作までも自分でやっている都合上、こうした裁縫は得意だ。

黙々と縫っていると、扉がノックされる。

「鍵なら開いてるぞ〜」

「アモン、今暇か？」

「まあ、暇だわな…で、どうした？」

裁縫の手を止めると、顔に湿布やら絆創膏やらを貼り付けた千冬が部屋に入ってくる。

俺は一旦縫っていた物をトランクの中に入れて、千冬へと向き直る。

「いや、昼間の詫びだ…一人酒よりも二人酒の方が美味いからな」

「つたく、ボコした俺が言う言葉じゃねえが、顔は大事にしとけよ？」

「ほうっておけ」

千冬は俺の対面まで椅子を引きずる様にして運び、どっかりと乱暴に座れば、ベッド脇の小さなテーブルにビールグラスと瓶ビールを置く。

まあ、確かに一人で晩酌するよりかは二人の方が美味しく感じる事もあるだろう。

俺はベッドに座りなおして瓶ビールを開封して、それぞれのグラスに注いでいく。

「じゃ、何に乾杯するかね？」

「何でもいいだろう？」

「だったら、俺たちの出会いに」

「軽口を言わなえれば、死ぬのか？」

千冬は俺の言葉に不満を漏らしつつも、クスリと笑ってビールの注がれたグラスを軽く掲げて打ち合わせる。

所謂黒ビールと呼ばれるそれを一気に飲み干し、深く息をつく。

酔わない身とは言え、疲れた体にアルコールと言うのは中々心地よい…。

「良い女口説く時くらいは、軽口叩いておかなきゃな」

「ふんっ…良く言う…」

「さて、どうだかね？…何か言いたいことがあったから、此処に来たんだろ？」

千冬の空いたグラスにビールを注ぎながら、真っ直ぐに千冬の顔を

見つめる。

千冬は少しばかり憂鬱そうな…言うべきか言わざるべきか悩むような素振りを見せてくる。

何を言いたいのか…それくらいは察しがついている。

だが、分かっている尚、本人から言われなければ請け負うつもりは無い。

千冬はグラスに注がれたビールを一気に飲み干し、テーブルに置けば深く頭を下げる。

「…お前に…アモンに一つ頼みたいことがある」

「…良いぜ、言ってみな？聞くだけならタダだ…請け負うかは別としてな」

ポケットから煙草を取りだして口に咥えれば、火を点けずに千冬を見つめる。

千冬は深く深呼吸をして、意識を切り替えて此方を真っ直ぐに見つめてくる。

「…私が日本に戻るまでの間、一夏の面倒を見てくれないか？」

「よくもまあ…見ず知らずの男に頼めるわな」

「私の友人が見守っているだろうが、アイツは性格が壊滅的に酷くてな…何をしでかすか分からない。だが、お前ならばと思っただけな」

千冬は、どこか継るような目で俺の事を見つめてくる。

一人残してきた弟の事が心配で、どうにかしたい。

だが、生半可な奴では守れないかもしれない…そこで今日手合わせした俺に白羽の矢が立ったわけだ。

「…アモン、お前が手加減していたのは分かっている。やろうと思えば、あのまま続けることもできたんだらう？」

「どうだかねえ…？よしんばそうだとして、俺が一夏に害意を持っていたらどうする？」

「それはないと断言できる」

千冬は俺の言葉に首を横に振り、笑みを浮かべる。

俺を信用できるとも言いたげな目でだ。

そんなに面倒見が良い様に見られているのかねえ…？

「害意があるなら、とうの昔に一夏にアクションを起こしている筈だ……あの誘拐事件の時にな。にも拘わらず何もせず、あまつさえ大佐の娘に目をかけている……お前はお人好しだよ、アモン」

「あく……つたく……何でそれだけで信用するんかねえ？」

「それにだ……私としても、家に縛つてあるとでも言えば色々と言いつても立たせやすい」

言うまでも無く、この基地を出た後の俺の身元保証人は目の前の美人だ。

どつちにしろ、俺が断りにくい状況は出来上がってしまったてるわけだ。

もうちよい性格が捻くれてたら、楽に生きられたのかもしれないけどなあ……。

……こんな性格じゃ、断るに断れないっつーの。

「はいはい、降参だよド畜生……お前が帰ってきたら、すぐに旅に出るからなー」

「それで良い……ありがとう、アモン」

やけ酒だと言わんばかりに俺は瓶を手にとって、残りのビールを飲み干す。

千冬はそんな俺を見て、見惚れるくらいの綺麗な笑みを浮かべていた。

## #5 別れと出会いは紙一重

基地内の軟禁生活の終わりを翌日に控え、俺は部屋で荷物の最終確認を行う。

と、言っても俺の荷物はトランクに詰め込める分だけでそう多い訳もなく、ものの10分もあれば確認自体は済んでしまう。

勿論、発信器や盗聴器の類が仕掛けられていないのも確認している。

プライベートの覗き見程、イラつかされるものはないからな…。

まあ、ついてはいいなかったんで、そこそこの国は良識があるって事なんだろう。

明日のチェックを昼までに終わらせた俺は、兵舎の屋上でボンヤリと間抜け面を晒しながら煙草を吸っている。

千冬がこの基地で訓練教官を始めてからと言うものの、ラウラはメキメキと頭角を現してきたらしい。

然るべき指導者が付いたことで自信が付き、訓練にも身が入るようになったのだろう。

この分だと、俺が居なくても何とかなっただかもしれない…。

俺は、そんなラウラの変化の兆しに少しだけ満足感を持っている。

男と女、おっさんとガキじゃ踏み込んで良い領域が測り辛いからな。

「よう、大佐。一本吸うかい？」

「まったく、君には敵わないな…君も訓練教官をやってみるかい？」

「ハッ、勘弁しろよ…俺には、根無し草がお似合いってもんだぜ」

隠れて俺を見張っていたボーデヴィツヒ大佐に、煙草を差し出しながら声をかける。

バレていたことに観念して出てきた大佐は、少しばかり肩を落としながら笑みを浮かべ、此方へと歩み寄ってきて俺から煙草を受け取る。

「良い身分の男が、こんな所でアブラを売っていて良いのかよ？」

「前に言っただろう？男たちは肩身が狭いってね。昼行燈は昼行燈ら

しく、適当にしていれば良いさ」

「随分とまあ…スれてるなあ」

軽く肩を竦めつつ、俺は大佐の煙草に火を点けてやる。

ISの登場による女尊男卑思想の社会的浸透…男女平等など謳いながらも結局男女不平等となってしまうのも、人間の業と言えるだろう。

いや、言葉は存在していても、現実には平等なんてものは存在しない…存在できない。

必ず、比較する心が存在するのだから…。

それが正義だと…悪だと言うつもりは毛頭ないけどな。

「仕事自体はこなしているんだ…文句は言わせないよ」

「優秀な父ちゃん、ラウラは嬉しかろうよ」

「だと、良いがね」

互いに忍び笑いをしながら、兵舎屋上から見える訓練場へと目を向ける。

今、ラウラ達は鬼教官千冬の下、ISを身に着けての地上走行訓練を行っている。

千冬の話によると、ISは所謂鎧…こっちの時代風に言えば、パワードスーツと呼ばれるもので、地上で自由に扱えなければ空中戦なんてできるわけがない…だ、そうだ。

基礎を疎かにすれば応用できないのと同じだな。

何事も基礎を習熟することで、上達していく。

実際、そんな隊員が居たのか、転んでいる姿も散見されている。

「日に日に、元気になってるみてえだな…まるで水を得た魚つてやつだぜ」

「ああ…無理難題を押し付けてしまってますまなかつたね…。このまま、元気になってくれれば良いのだが」

「どうしようと、本人次第だ。おっさんの俺たちがどうこうできる問題でもない。ガキつてのはデカくなるのは早いぞ…？いつの間にか彼氏作って結婚したいなんて言い出すかもしれないねえ」

「む…それは嫌だな…手早く始末しなければ…」

軽くからかってやると、大佐は冗談とも思えぬ顔で拳をゴキゴキと鳴らす。

…愛されてるなあ。

親バカの気が強すぎる気もするが、俺としては関係の無い話なん  
で、ラウラの未来の彼氏に同情くらいしかしてやれないが。

煙草の灰を携帯灰皿に落としつつ、煙を吐きだす。

「あんまり、干渉すつと嫌われちまうぞく？」

「ハハハ、そんなまさか…所謂ドイツジョークさ、ハハハ」

「胡散臭え…」

大佐は笑っていない笑顔をしながら乾いた笑い声を上げた後、すぐに顔を引き締め此方を見つめてくる。

俺はそんな態度の変化を素知らぬ態度でかわし、新しい煙草の封を開ける。

「…さっきの話の続きだが、やってみないか？」

「言っただろ…俺は根無し草の世捨て人…好き勝手に生きるだけだつてな」

「私としては、君の様なサツパリとした男を部下に迎え入れたい。君は思想に惑わされない…君の様な人間が居れば、この基地内だけでも考えを改める人間が出てくるだろう」

現状に喘ぎ続けるこの男は、使える手は何でも使いたいのだろう。

男尊女卑にしたいわけでは無い。

かと言って、現状のまま野放しにはしたくない。

現状を放置すれば組織の腐敗にも繋がる…それだけは防ぎたいんだらう。

だが、まあ…それをするのは俺ではなく、現場で必死に頑張っている人間がやるべきだろう。

俺はこの世界の弾かれ者なのだからな。

「旅に飽きたら考えといてやるよ」

「…嘘でも、そう言ってくれると嬉しい…おや？」

大佐は人を視る目があるのか、嘘を見透かされてしまった。

旅に飽きたら…つまり、旅が終わった時にはこの世界に俺の存在が



無くなっている。

あくまで、この世界に滞在しているのは仕事だからだ：そうでなければ、この世界に居る筈もない。

ため息交じりに煙を吐きだすと、大佐が何かに気付いたのか出入り口付近へと目を向ける。

俺もつられて其方へと目を向けると、千冬が此方へと歩み寄ってくる。

ああ、大佐に用事か…。

「ご苦労…訓練はどうか？」

「滞りなく…これから飛行訓練を行います、視察していただけますか？」

「ここから眺めていたのがバレていたかな？」

「ええ、煙草を呑気に吸っていると…」

ギロリ、と千冬に揶揄する様に睨まれるが、俺は口笛を吹きながら顔を背けて煙草を吸い続ける。

俺は悪くない…誘いに乗った大佐が悪い。

俺は、今暇人だからな…や、勿論此処で調べ物自体はしてたけどな。

この世界の歴史から、ISに纏わる事件まで…。

なんせ、上司が必要な情報を超越さないもんだから、こうして自分で調べなきゃならない。

なんで、情報超越さないんだか…？

「これは、手厳しい…アモン君もどうか？」

「俺か？そう言うのって見ちゃ不味いんじゃないか？」

「なに、構わないさ…何より、君は口が堅いみたいだからね」

…ドイツ軍の緩さに閉口していると、千冬は笑みを浮かべて肩を竦める。

まったく、なんでこんなに緩いんだ…？

軍隊ってのはもう少し規律がキツイもんだと思ってたんだが…どうもそうでもないらしい。

「それは良い。アモンはISに対して興味が無さすぎるからな。私の友人が作った物に興味を持たれないのはあまり面白くない」

「友人…？…しの…あーつと天災だったか？」

「篠ノ之 東…頭がメルヘンの住人だが、天才は天才だ。アイツとは小さいころから付き合いつがアツてな」

篠ノ之 束つて言うのか…あの玩具を作ったのは。

頭がメルヘンの住人と言うくらいだから、とんでもない変人なのだろう。

変人に良い思い出が無い俺としては、あまり関わりたくないってのが本音なんだが…。

「ま、明日にやここを発つんだ。見学して良いってんなら見学していかね」

「開始時刻は？」

「13時からです」

「了解した。ではアモン君、行こうか」

「あいよ…じゃ、また後でな、千冬」

大佐が歩きだせば、その後が続いて俺も歩き出す。

ISの飛行訓練は、専用のアリーナでやるそうさ。

全天をISに使われているシールドエネルギーによるシールドで閉鎖した空間で、仮に事故で暴走してしまってもアリーナ内から出る事ができない様になっている。

たしか、シールドの名称は絶対防御…だったか。

衝撃こそ通してしまうが、人体には一切影響を与えない優れたものだそうさ、国の重要な機関の幾つかには、自前でその絶対防御が張れるようになっているそうさ。

目立ったデメリットとして、凄まじい勢いでエネルギーを喰うらしく、連続展開はあまり好ましくない…なんて事が書いてあったか。

「時に、君は千冬教官に気があるのかな？」

「おう、いきなり学生みたいな話題振るんじやねえよ」

アリーナの観客席について席に座ると、始まるまでの話題にする気なのかいきなり千冬との関係を話題に振ってきた。

気がある…と、言う言い方はちよつとばかしアレだが、興味は確かにある。

美人で気が強くて腕っぷしもある…とくればな。

ガチの殴り合いでは無かったにせよ、俺から一本取っている…ただの人間がだ。

興味を持つなって方が無理ってもんだ。

「あんな美人口説がなかったら、股間にモノぶら下げてる意味ねえだろ?」

「君は随分とストレートに物を言うのだな…」

「言いたいことも言えねえんじや、生きてる意味ねえだろ? まあ、時と場合くらいは選べけどな」

ケツケツケとからかう様に笑って煙草を取りだそうとするが、この場所が禁煙エリアだったのを思い出して手を止める。

なんせ、訓練を間近で見ると…真剣に見てやらなきゃ、頑張ってる奴に申し訳ないってものだ。

さっきの屋上?

見えてなきや良いと思ってたんだがな…ISについての機能である『ハイパーセンサー』の事を失念してたぜ…。

他愛ない談笑をしていると、アリーナ内に黒いIS『ラファール』を台車に乗せた隊員がキビキビとした動作で入ってくる。

確かフランスのデュノア社が生産しているISだったな…部品調達がしやすい整備性の良さと、多数のオプションによる汎用性でトップクラスのシェアを誇ってるんだったな。

「…この訓練部隊は、そのままIS運用の特殊部隊にする事が決まってる。一年間の訓練でもっとも成績が高かった隊員が隊長となる」

「現状のまま行けば、あの黒髪の…クラリツサとか言ったか? アイツになんのかね?」

「一応、その予定だ。彼女は人望もあるからね…何より、責任感が強い」

「へえ…」

本音を言えば…義娘に頑張ってもらって成績の上位に来て欲しいと思ってるのだろう。

だが、それだけでは駄目なのは本人が痛い程分かっている。佐官ともなれば、それだけ命を預かる立場に居るって事の証だからな。

人望があると言う事は、それだけ部隊に命を預けられる人間が居るってことになる。

時に、戦場は残酷なものだからな。

千冬がアリーナに姿を現し、鋭い視線で隊員たちに指示を送り訓練を開始する。

1人1人がISを身に着け、航空機とは違った挙動でふわりと宙を浮き始める。

「重力の楔から解き放たれたみたいだな…ああ、慣性方向弄って無理矢理浮かせてんのか…」

「…やっぱり、来ないかい？」

「行かねえっての。しっかしまあ…ISだけ文明レベルを5つくらい飛び抜けてねえか？」

自動車は化石燃料と水素電池のハイブリット…しかもタイヤを使つての走行。

当然のことながら物質転送装置なんてものは無く、移動もその殆どが人力。

…天災つてのも伊達じゃねえんだろう。

誰だつて飛び抜けたものを見れば、魅了されてしまう。

欲深ければ欲深い程に…此奴の誕生は間違いなく現代に対する劇薬に等しい。

「コアの生産数を絞った天災殿には感謝しなくちやなあ…」

「…君としても同じ感想か…。こんなものが安易に生産できるようになったら、間違いなく人類は後退してしまうよ…自滅によってね」

慣性方向を弄る事で航空力学を無視したその飛行性能は、現代の主力兵器である戦闘機をそれだけで上回っている。

更にハイパーセンサーによる全天視界確保は、それだけで人の認識力を高める…こんなもの兵器にしないわけがない。

だと言うのにも関わらず、467個と言う何とも歯切れの悪い数の

ISの心臓部となるコアを配布したのは、それが作れないものだと思  
人が一番理解しているからか…。

絶対数が限られている以上、喪失は避けなくてはならない。

だが、武装しなければ国は守れないから武装をする…そうした微妙  
な軍事バランスを保つためだとしたら、なるほど…天災で天才と言  
うのも頷ける。

仮に、ISを無制限に生産できるようになって、戦争を起こすほど  
の武力を得られてしまえば…そら寒い事この上ない。

「開発者の束だったか…行方をくらませてるってのは正しい判断だわ  
な」

「ああ…コアを作れるのは篠ノ之博士だけ…我が国を含めて水面下  
は血眼になって探し回っているよ」

「お、娘っ子の出番じゃねえか。手でも振つてやったらどうだ？」

「ハハハ、できればそうしてやりたいけどね」

ラウラの出番になって、大佐をからかうように肘で脇腹をつつく。

立场上親子ごっこがしにくいからか困ったように笑っているが、そ  
の視線は真剣にラウラを見つめている。

ラウラはラファールを身に着けると、若干緊張したような面持ちで  
深呼吸する。

自信はつけてきたが、未だに心にしこりがあるようだ…慣性制御を  
行つてふわりと宙に浮き、背面に備えられているスラストで徐々に  
加速を行っていく。

慣性制御の時と違い明確な推進力を得たラファールは、徐々に加速  
をしていく。

ラファール風と名付けられたその機体は、加速性能も同世代の他機種よ  
りも高くグングンと加速していく。

「…ありや、拙いな」

「どうかしたかね？」

ラファールが風のように俺たちの目の前を通り過ぎた瞬間、ある異変  
に気付いて思わず立ち上がる。

ラウラの表情がやたらと強張っていたのだ。

恐らく機体トラブルか：それとも何かしらのトラウマなのかは分からないが、機体制御が上手くできていないみたいだ。

見た所、千冬達はまだ気付いていない。

ともすれば、胸中を不安が過るのは仕方がない。

「大佐、ありや一旦訓練止めねえと拙いぞ?」

「キチンと飛行している様に見えるが：整備不良か!」

「そりや分からねえが：止めなきや拙いのは確かだろうよ!」

観客席からアリーナ内部に入るには、大回りする必要がある。

俺はシールドエネルギーに触れて、軽くノックをして耐久力を確かめる。

振れた感じでは柔らかいビニールのような感触：だが、衝撃力に合わせて強度を変える様に設定されているようで、ノックをした瞬間石のような感触へと変化している。

「よくできてらあな：千冬も気付いたな。なら、ちっと手伝ってやりますかね?」

「アモン君！何をやる気だ!?!」

「おう、まあ：離れてな」

懐から黒の革手袋を取りだして身に付けければ、腰だめに拳を構えて大きく足を開く。

全力で拳を叩きつけてぶち破る：結界つてのはぶち破る為に存在してるんだからな!

「オラアアアッ!!!」

裂帛の気合と共にコンクリート製の床を砕きながら踏み込み、拳をシールドエネルギーに叩き込む。

まるで、ミサイルが直撃したかのような破碎音と共に、ガラスの様にシールドエネルギーが粉々に粉碎されて、キラキラと粉雪の様にアリーナ内に降り注ぎ消えていく。

アリーナ内のシールドエネルギーに過負荷がかかり、一時的に解除された所為かアラームが鳴り響くが、それを無視してアリーナへと降り立ちながら革手袋に仕込まれた両手合わせて10本の細く鋭い鋼糸を伸ばす。

「アモン！何をやる気だ!？」

「良いから千冬はISつけて助けに来い！少ししか保たねえぞ!!」

千冬は、声を張り上げて俺を制止しようとするが、今はそんな事どうでも良いだろう。

向かい側からスラストターの限界出力で突き進んでくるラファールを身に着けたラウラは、顔を蒼ざめさせてそれでも何とか意識を保っているようだ。

通り過ぎる瞬間にラファールの手足に鋼糸を絡ませ、アリーナの地面に思い切り踏ん張る。

「止まれええええ!!」

「つぐ…!?な…化け物か!？」

奥歯が砕けそうになるほど歯を食いしばり、全力で暴走するラファールと綱引き状態に持っていく。

急激な制止に思わずうめき声を上げたラウラは、止まった原因を見て驚きの声を上げる。

徐々に徐々にラファールに引きずられ、アリーナの地面に二筋の痕を刻み込んでいく。

どうしても身体能力だけでは限界がある。

これがただぶち壊すだけならば、こんなに苦労しなくて良い。

だが、その方法ではラウラは無事じゃすまないだろうし、何より俺がヤバイ。

千冬にも迷惑かけちまうしな。

だからこそその綱引き…時間稼ぎに徹する必要がある。

「いいから、早く停止させろ!」

「できたら、もうやってる!言う事を聞かないんだ!!」

「千冬!!早くしろおっ!!」

「お前は、無茶をするな…」

鋼糸を指に絡ませて思い切り引っ張っている所為で、指に思い切り喰い込んで血が滲み始めた頃、糸が1本…また1本と切れていく。

片手の鋼糸だけになった時、漸く千冬がISを身に纏って俺の頭上を通り過ぎてラウラのラファールへと取りつく。

「人間かと疑うが…その意気は好ましい。ラウラ伍長、手荒になるぞ!?!」

「は、はいー!」

千冬は此方にちらつと視線を向けた後、手に持った日本刀のような近接ブレードを振り上げてラウラのラファールのスラスターを全て斬り落とす。

暴走していたスラスターは遂に限界を迎えた為に爆発を起こし、破片が当たりに散らばっていく。

俺は両手をぶつきらばうにポケットへと突っ込み、安堵に溜め息を吐いた。

「で、大丈夫なのか?」

「むしろ、その言葉は私の台詞なんだが…その、手は…」

結局訓練はアリーナのシールドエネルギーの制御システムのパグと、ラウラの扱っていたラファールの暴走により中止となった。

念のためにとラウラは医務室に担ぎ込まれたが面会OKとなり、俺はラウラのベッド脇に足を組んで座っている。

「あ?あの程度で怪我するかよ…ナめんな」

「いやでも、血が…」

「怪我してねえだろ?見間違いだ見間違い」

俺は疑りかかる様に眼帯をつけていないラウラを見つめ、両手に傷がついていないことを見せる。

人とは違うからこそその、トンデモ治癒力のお陰で怪我をしてもすぐに治る。

旅をしている時に、不意に事故が起きても確実に生き残るくらいの…所謂ゴキブリ並みの生命力は持っている。

ラウラは露わになった金の左目の瞼を閉じて、顔を俯かせる。

「何故、助けに入った…ISを身に着けている以上、怪我をすることは…」

「ISのシールドエネルギーはIS本体を動かすエネルギーを使って



いる。もし、あのままエネルギー切れになるまで飛んでいて墜落したら…死んでたのはお前だぜ？」

「…私は…出来損ないだ…IS一つ満足に動かせず…これでは大佐に失望されてしまっても仕方ない」

ラウラは諦めきつた顔で顔を俯かせ、深く溜息を吐く。

ようやくでき始めた自信が、今回の事件でまた打ち砕かれた…偶々起きた事故だったのにも関わらずだ。

何とか奮起させてやりたいところだがな…。

「過ちつてのは大人でも犯すもんだ…ガキがそんなに気にしてんじやねえよ」

「だが、私は軍人だ。軍人となるべくして生を受け、その為に努力してきた。だと、言うのにこの体たらく…こんな…こんな目にならなければ…私は！」

ラウラは激情に身を任せるままに目を見開き、左目を抉りだそうと手を近付けるが、とっさに俺はラウラの腕を握りそれを制止する。

随分と、追い詰められてたんだな…やっぱり。

俺は首を横に振り、諭す様に口を開く。

「事故で失うんなら良い、他人に奪われるんなら良い…だけどな、カミサマから貰ったものは、大切にしなきゃ駄目だ。たった1つのお前の体、大事にできんのはお前自身だ」

「だとしても!!」

「だから！大切にしなきゃダメなんだよ…そう言うのは…無意味なだけだ」

「あ…」

随分と情けない顔をしている。

ラウラではなく、俺がだ。

ラウラの瞳に映る俺は、悔恨に蝕まれた様な嫌な顔をしている。

俺が産み出したわけでも、俺の庇護下にいるわけでもない…だが、命を、体を大事にしないのは悲しいものだ。

ラウラは冷静になったのか、体の力を緩める。

自傷に走らないのを確認して、ラウラの腕を離して席に座りなお

す。

「つたく、情けねえ…」

「ISと綱引きして拮抗するものが、情けないわけがない…」

「それどうも。ああ、そうだ…これをお前にくれてやろう」

コートのポケットに手を突っ込みラウラの手を掴めば、無理やりポケットの中の物を握らせる。

ラウラは不思議そうな顔をして、掌の中の物を見つめて首を傾げる。

「コレは…眼帯?」

「いつまでも医療用つてのも変だろ? 見えてるなら尚更な。ま、饞別つて事で…明日には俺は居なくなるし、命令とは言え世話になったからな」

ラウラに手渡したのは、黒に赤の縁取りをした眼帯だ。

実際、ラウラの左目が見えているのは分かっていた…医療用の眼帯をしてるって事は、眼に怪我を負ったって事になるが、ラウラには左側を庇う様な重心移動が見られなかった。

と、なると左目を隠すために眼帯をしているって事になる。

こいつ、まだまだガキな顔立ちだからな…少しはこれで箔がつくだろ。

「じゃ、そう言う事で…達者でな、ラウラ・ボーデヴィツヒ伍長殿」

「あ、ああ…そ、その!」

「あん?」

「あ、ありがとう…」

俺は背中越しにラウラに手を振って、医務室を出る。

後は適当に過ごして…等と思っていると、出入り口のすぐ傍にボーデヴィツヒ大佐が壁に背中を預けて立っている。

「…会うなら仕事抜きにしとけよ? まだまだガキなんだからよ」

「…アモン君、君はすぐにここを発ちたまえ、少しばかりやりすぎでしまっている」

「だろ? なあ…」

少しばかり…と言うより、かなりと言った方が正しいか。

人の身で I S と拮抗するだけの怪力…ましてやシールドエネルギーをぶち破るともなればな。

拘束されれば、俺は晴れて生きたまま解体される事になるだろう。ホルマリン漬けは勘弁願いたいもんだ。

「荷物はこれで全部だね?」

「応…だけど、こんな事したら立場悪くなるんじゃないやねえか?」

「なに、私も少しばかりは悪さをしなくてはね?悪くても左遷くらいだ…」

「行きたまえ」

大佐は予め用意しておいた俺のトランクを手渡しながら、子供の様な笑みを浮かべる。

男はいつまで経っても悪さを止められない…まあ、時と場合はあるが。

「悪いな、大佐」

「なに、気にしないでくれ…愛娘を救ってくれた心ばかりの謝礼さ」

「ハッ、次は酒でも用意しとけよ?」

「それは君が用意したまえ」

互いに笑みを浮かべながら握手を交わし、俺はそそくさとその場を後にする。

幸い、大佐が誤魔化してくれているお蔭ですんなりと基地を出た俺は、通り過ぎるトラックの積み荷にこっそりと乗り込んで一息つく。「つたく、もう少しお別れのドラマがあっても良かったんだがなあ…」  
「うんうん、それもいいね。けどさ、君には一仕事お願いしたいんだよねん」

「はあ?勘弁しろよ…明日にしろ、明日…に…?」

気を抜きすぎたのか、幻聴と会話してしまったと思っていたが、不意に背後から抱きしめられ、思い切り背中に柔らかいものが押し付けられる。

そう、女性特有のその甘い香りは俺を背後からプレス機さながらの凄まじい力で抱きしめている女性から発せられている。

前門の地獄、後門の天獄だ…おっぱい万歳。

「ねっ、アモン・ミユラー…いっくんの所まで連れてってあげるから、この束さんのお願いを聞いてよ」

どうやら、俺には疫病神が憑りついているらしい…。

何故だかこの女から逃げ切れる気がしなくて、俺は深く溜息を吐いた。

## #6 眠れ、地の底で

「ね〜ね〜、アモン・ミュラー?」

「何で名前を知ってるのかとかどうでも良いがな…何で天災様が此処にいるんだよ!」

「そりゃ、ずっと見張ってたからに決まってるじゃ〜ん」

ボーデヴィツヒ大佐の計らいで基地を逃げる様に飛び出し、通りがかったトラツクの荷台の中に潜り込んだままでは良いが、俺は何故か背後から天災にして天才の篠ノ之 束にハグと言う名の羽交い絞めを喰らっている。

顔こそまだ見えていないが、どことなく甘ったるい声に、やたらと背中に押し付けてくるデカイ胸が無駄に印象に残る。

束は非常にご機嫌な様で、鼻歌交じりに俺のコートの中身を弄っている。

「見張ってたって…何時からだよ?」

「ん、ちーちゃんか雑魚をバツタバツタとなぎ倒してた時からかな?」

「…ちーちゃ…ああ、千冬の事か。つつー事は…」

モンド・グロツソ会場内に居る頃から見ていたと言う事は、恐らく監視カメラの件はコイツの仕業か?

あそこまで手の込んだ誘拐犯が、監視カメラに細工しないのは可笑しな話だしな。

見張っていたと言う事は、俺が一夏に害を為そうとするか監視していたって事か…。

俺は深く溜息を吐いて、抱きしめている腕に触れて比較的優しく引きがそうとする。

女に無用な暴力振るうのは、男としての矜持が許さない…時と場合はあるけどな。

「ふっふ〜ん、君はこの束さんに借りがあると言う事さ〜さあさあ、この束さんの言う事を聞くんだよオツ!」

「だが、断る。俺が最も好むことは、自分が優位に立っていると思ってる奴にN.Oと突き付けてやる事なんだぜ?」

「ん〜？そんな事言っていないのかなあ…？」

グツと力を込めて束の腕を引き剥がそうとするが、束の腕はピクリとも動かず、寧ろギリギリと俺の事を締め上げてくる。

骨を折るには程遠く、しかし普通の成人男性程度の筋力では到底引き剥がせそうにないこの腕は、明らかに人間の範疇を越えていると思える。

第一だ、此奴の腕はどう見ても一般的な女性程度の筋力しかないんだぞ!?

束はそんな俺の困惑を見透かしているかのように忍び笑いを漏らしてくる。

「クツクツク…天才は規格オーバー・スペック外だから、天才と言われるのだよ」

「応、優しくしてやりやっつけ上がりやがって…折れたって知らねえぞ!?!」

束の腕を握りつぶすつもりで思い切り力を込め、今度こそ無理矢理腕を退かせば、束の体を荷台の床に押し倒して覆いかぶさり、その顔を間近に見つめる。

やや色素が抜けて紫がかった長い髪の毛は手入れをしていないのかとところどころ傷んでいて、目元は眠たげにトロンとしていて隈まである。

まともな栄養と睡眠をとっていない証拠だな…やや細めの体型だと言うのにたわわに実った禁断の果実は、胸元が大きく開いたエプロンドレスの中で少しばかり窮屈そうに存在を主張している。

美人は美人だが…目が濁ってる辺り、結構ハードな人生を送っている様にも見えるな…。

「へえ、この私を越える力か…君、人間？」

「お前の言葉を借りるなら、俺も天災ってやつなんでね。で、勝手に恩を押し付けて言う事聞けつてのは勘弁してもらおうか…お嬢ちゃん？」

束の眠たげな目は僅かに鋭くなり、俺と言う存在を値踏みするかのよう<sub>に</sub>に煌めく。

曰く、篠ノ之 束は物事に無関心である。

曰く、篠ノ之 束は興味がある事には強い関心を示す。

千冬がISの事を俺に語ってくれた時に、開発者である束の事に関して言ったのはこの二点だ。

基本的には他人や事象に無関心を決め込んでいるので、俺と言う存在には目も向けないだろうと千冬は言っていたが：結構な興味を惹かれてるらしい。

束はニタアつとしたヤらしい笑みを浮かべて、鼻歌を上機嫌に歌っている。

メロディーは『旧支配者のキャロル』：ああ、発狂してるから天才なのね…。

俺はゆつくりと束の上から退いて、荷台の壁に背中を預けて座り込む。

束は不思議そうに首を傾げながら、俺を見つめてくる。

「え〜、抱かないの〜？」

「抱くかよ…こう見えておカタい悪魔なんでね。好いてもいいなきや、見知ったばかりの女相手に勃つ訳ねえだろ」

「え〜…嘘くさ〜…」

束は、スカートの中身が見えるのも構わずに——と言っても中身はドロワーズなんで色気もクソもなかったが——体を跳ね起こして四つん這いになり、肉食獣さながらの動きで此方へと這ってくる。

俺はそんな束を無視する様に懐から煙草を取りだし、火を点けて煙を吐きだす。

「天才だか天災だか知らねえが、テメエ中心で世界が廻ってると思つてんじゃねえよ。お前が興味惹かれる事にしか動かねえ様に、俺は俺のやりたい事にしか動かねえ」

「ISを造った私が、今の世界の中心なんだよ？私がなんでも思い通りに出来るに決まってるじゃん」

「だったら、なんでISは宇宙を飛んでねえんだろうな？」

「……」

そもそもISは、大気圏外活動用に作られたパワードスーツだ…って言うのは千冬から聞いている。

だが、現在ISを一元管理している『IS委員会』は、宇宙開発の利用を禁止していて宇宙開発に関しては非常に消極的だ。

表向きの理由は宇宙を飛び交う放射線や、ISのエネルギー問題…更に活動拠点におつける各国の領有権主張などがあるが、俺はもつと別の理由があると睨んでいる。

例えば…ISコアを増産しないから、とかな。

「人間も神様も…悪魔でさえも世の中思い通りにできねえのさ。できたら、今頃この地上は干上がっている」

「知ったような口を聞くね、自称悪魔」

「悪魔だからな、知ってる事は知ってるのさ」

例えば…世界が減びゆく様とかな…。

何をやっても手をつけられず、傍観するしかないそれは…虚しいだけだ。

それが、自分の手で創り上げた物ならば尚更に。

いつの間にか、束はチェシヤ猫の様な愉悦の笑みを浮かべて、俺の体に手を伸ばして撫でてくる。

「いいね、君は…私を特別扱いたくないのもそうだけど」

「そりゃ、どうも…で、いつまで馴れ馴れしく撫でてんだテメエは」

「えゝ、減るもんじゃ無いし良いじゃん？で、話を戻すけど、束さんのお願ひ聞いてよ。お願ひ叶えてくれたら、いつくんの所まで送ってあげるからさー！」

束は俺の唇に指を這わせ、艶のある笑みを浮かべる。

どうあつても、俺を口説き落として利用しようつて言う魂胆が見え隠れしているな。

一体何をさせる気なのか気にならないわけでは無いが、無用に騒ぎを起こす様な真似もしたいくはない。

送り出してくれた大佐や、保証人の千冬に迷惑がかかるからな。

「行くだけなら手立ては色々あつからな…つと、俺は一足先に降りるぜゝ」

「ああん！つれないゝ!!」

トラックが街中に入ったのを見れば、束の体をやんわりと押しつけ



てひらりと飛び降りる。

通りに降り立つと同時に、両肩にずっしりとした重さが加わるが気にしない。

気にしないだったら気にしない……こんな所で突っ立っていられるか、俺は日本に行かせてもらおう!!

「ねー先っちょー！先っちょーだけだからさあー！」

「……」

「ちよつとだよ!?!本当に！ちよーつと暴れてもらうだけで良いんだからさあー！」

「……」

俺は背後でギャアギャアと喚くメルヒェンの住人を引きずりながら、往來を歩く。

通り過ぎる人間が訝しがる様な視線を送り、あまつさえ『痴話喧嘩か?』とまで囁き始める。

今、俺たちが話しているのは日本語なので、特に大きな問題にはなっていない……筈だ。

「東さんは目的を果たせる！アモン・ミュラーは無事に出国できる！ほら、win-win!!」

「あのな、何もしなくても今日中に出国できる手筈なんだよ……お前を手伝わなくてもな」

「ン〜フッフフ……それはどうかなあ？」

東は往來であるにも関わらず、俺の肩の上に飛び乗ってエプロンドレスのスカートで頭を覆い隠す。

さつきも言ったが、ドロワーズなんて色気もクソもないが、匂いだけは良い……不摂生の癖に。

スカートの中で空間投影型モニターが展開され、とあるコンピューターウイルスが準備されている。

内容は……

「さて、こんな手段はとりたくなかったけど仕方あんめえ〜！東さんがポチつとなしたら、国中に指名手配されるような犯罪歴を捏造しちゃうんだゾ☆」

「応、テメエー！ふざけんなゴルアっ!!」

俺は束の両足を掴んで、バックドロップの要領で路面に叩きつけようとするが、束は両手で地面について激突を防ぎつつ、体をバネの様にして俺の体を持ち上げてハンドスプリングの要領で一回転。

回転する最中に捻りを加えられ、俺の体は背中から無様に路面に叩きつけられて、首を4の字固めの要領で締め上げられる。

「グエー…」

「フウーハハハハー！これこそが束さんのオイコミジツだあく！貴様はもう束さんの手下になるしかないんだよあく！」

「大佐と千冬に迷惑かけちまうだろうが！」

「そこら辺はちゃんとしてあげるさ、君が言う事を聞いてくれるならね？」

俺は自分の首を絞める束の足を手で叩き、ギブアップの意思を知らせる。

こうなってしまった以上、此奴の手伝いをせざるを得ない…面倒見てもらってる義理があるにも拘らず、大佐と千冬に迷惑をかけてしまいかもしれないが…そこは、束の言葉を信じるしかない。

俺が観念したことに満足げに頷いた束は、漸く拘束を解いて俺から離れる。

「いや、アモン・ミュラー…君が強情でなければこんな手は使わなかったんだよ？」

「俺は、とつとと静かな旅に戻りたかったんだよ！バーカ！バーカ!!」  
「フツ…勝者に対する罵声と言うのはこんなにも心地よく響くものなのだね…」

束は勝ち誇ったような顔で、立ち上がった俺の事を見上げてくる。非常に満足そうな顔で腹立たしいが、負けは負け…一夏ん所まで送ってくれるって言うし、これは流れに身を任せるしかないか…。

「で、何しろって言うんだよ？」

「だから暴れてもらうだけだよ。暴れて暴れて暴れまくって、職員に避難してもらおうの」

「職員？」

束はまるで恋人か何かの様に俺の腕に抱き付き、指を絡ませる様に握り込んで歩き始める。

有無を言わさぬその歩みに、逆らうのも無駄だと悟った俺は、大人しく歩き続けるしかない。

俺たちを観察する様に取り囲んでいた野次馬達は、痴話喧嘩が終わったのかとつまらなそうな顔で俺たちに道を譲り、立ち去っていく。

「そ、ドイツ軍の秘匿研究所…まあ、行けば君も納得できるさ…アモン・ミュラー？」

束はニヤリと笑みを浮かべ、俺を逃がすまいと腕に力を込めた…。

ドイツ軍内部でもある階級以上の人間しか存在をしられていない、秘匿された機関が存在している。

それらは、軍とは独立した権限を持ちながらも表立って行動する事は無く、予算も国防費の内訳にある予備費…そこから来る資金と、その機関が立ち上げている製薬会社から流れてくる資金から捻出しているようだ。

秘匿研究所で行われている研究内容に関しては、口で説明するよりも目で見た方が良い…そう、束に言い切られ、聞き出すことは叶わなかった。

そこまで言い切るほどの内容…で、あれば下種の極みを地で行ってらるって事だろう。

時刻は深夜1時…月は雲に隠れ、山奥にある研究所は存在を秘匿する為か人工の洞窟内に建設されている。

俺と束は茂みの中から出入り口を確認している。

「別に、ついてこなくても良かったんじゃない？」

「え、いいじゃん。こんないい女が傍に居るんだから、もっと喜んでもいいんだよね？」

「外見良くて性格がなあ…」

「おつ、東さんに喧嘩売ってる?」

「漫才やってないでとつとと行くぞ」

俺は念のためにと渡された道化の仮面を身に着け、深く溜息を吐く。

篠ノ之 東は確かに美人なんだが、間違いなくトラブルメイカー：しかも自分の愉悦に対して非常に真っ直ぐだ。

しかし、本心は絶対に明かさない。

興味がある対象の中でもある程度のカテゴリーはしているようで、少なくとも俺は、本心から来る言葉らしきものは聞いていない：聞いていたとしても、俺の身体能力目当てだと言わんばかりの事だけだ。

「ん、それじゃこれをくくして」

東は空間投影型のスフィアキーボードを呼び出し、凄まじい速度でタイピングをしていく。

舌なめずりをして唇を湿らせ、チエシヤ猫のような笑みを浮かべれば深く息を吐きだす。

「そんでもって、こうじゃー!」

ツターン!と言う様な音が響きそうな勢いでキーボードのエンターキーを東が押すと、洞窟入り口に設置されている照明と警備用の赤外線センサーの動力が落ちる。

本来このような場所だと自家発電機があるはずだが、その供給も東はシステムをクラッキングして抑えた様だ。

今、夜闇に乗じてしまえば忍び込むなんて訳ない状況に陥り、彼方此方から怒号が響き渡る。

「行くか…」

「んっふっふっ…」

東は妖しい笑みを浮かべながらスタスタと歩き、俺もその後が続く。

大抵こう言った場所の警備と言うのは嚴重なのだが、まず侵入者は来ない。

出入り口は一つしかなく、その出入り口も警備の人間が厳しく守つ

ているからだ。

故に慢心、気の緩みが生じる…特に、長期にわたって侵入者が居なければ。

突如起きた停電は混乱をより一層に煽り、気の抜けていた警備員は慌てふためく。

そんな中、闇に紛れてどうどうと洞窟内に忍び込んだ俺たちは、俺が束を抱きかかえてからエレベーターシャフトから飛び降りて、地下へ地下へと下っていく。

「ここは全部で3つのエリアに分かれてる…中でも束さんたちが目指すのは最深部のラボエリア。到着と同時に電力を復旧させてシステムを掌握するから、アモン・ミュラーは此処にあるモノ全部壊してね？」

「よつぽど、お前の気に入らねえもんがあるんだな…それは良いとして、いい加減フルネームで呼ぶんじゃねえよ」

「はあ？名前呼んであげてるんだから感謝してほしいもんだね！」

束は不遜な態度で俺の首に抱き付いたまま、唇を尖らせて反論する。

あくまでも自分が中心、お前が下僕みたいな態度に辟易としてしまいが、現状逆らうに逆らえないので諦めるしかない。

最下層部まであと少しと言うタイミングで、エレベーターを支えるケーブルに手を伸ばして思い切り握って徐々に落下速度を削り、緩やかな速度で降りていく。

俺は平気でも、束が着地の衝撃に耐えられるとは思えないからな…地上から300メートルも下がった場所へと飛び降りてるわけだし。

ワイヤーとの摩擦で掌の肉がこそげ落ち、焦げたような匂いと共に血が潤滑油となってワイヤーを滑らせていくが、無事減速に成功した俺は最下層で止まっていたエレベーターの天井に降り立つ。

「さて、と…んじゃあ行きますかね」

「……」

「なんだよっ！」

到着と同時にワイヤーを手放した瞬間、肉が灼けるような音と共に

組織が急速に細胞分裂を起こして掌を元通りに戻す。

まるで、逆再生の早送りの様な光景は、暗闇の中で束には見えなかっただろうが、音で何が起きたのか察する事ができたのだろう。

「まっいいいから…お話は後でいくらでもできるしね!」

「する気ねえけどなあ…じゃ、先に降りるぜ」

エレベーターの天井に設えられた非常口の扉を開いて中に入り込み、懐から取り出した革手袋を手に嵌めて腕を一閃する。

指先から伸びた鋼糸は、鋼鉄製のエレベーターの扉をバターの様に切り裂き、俺はそれを蹴り飛ばして崩壊させる。

「あ、そうだ…はいこれ、耳につけてね?」

「あん? ああ、通信機ね…」

「事が終わったら、ここは爆破解体するからね!」

「あいよ〜」

束は忘れてたと言わんばかりにエレベーターの室内に降り立ち、何とも可愛らしい兎型のインカムを投げつけてくる。

この際、俺の趣味とかどうでも良いから一つ言いたい…野郎にこんな可愛らしいものつけさすな。

束が電力を復旧させると同時に各エリアの隔壁が降りた様で、けたたましい警報が鳴り響く。

俺は左右に伸びる通路を見渡して、未だに研究員が飛び出してこない事に首を傾げつつ、『培養槽』と書かれた表記を頼りに走り出す。

随分と広大なラボエリアではあるが、まるでぬけの殻の様になっていることが非常に不気味だ。

培養槽と書かれた巨大な鉄扉を鋼糸で細切れにし、派手な音と共に粉碎して中に入り込む。

その瞬間、薬品特有の刺激臭が広がり…一つの地獄を見た。

「…おいおい、マジか…」

人間と言うものは、欲の塊だ。

あれをしたい。

あれがほしい。

ああなりたい。

108つなんかじゃ足りないほどに欲望に際限は無い。

それは、悪い事ではない：俺もそれを許容している：だがな…。

俺の目の前に、無数のカプセルに人間だったモノが管に繋がれている光景が広がっている。

いずれも女性であることは分かる：首から上が無いが…。

どいつもこいつも妊婦の様に腹を大きくし、時折そのお腹が動いていることが分かる。

恐らく…恐らく、此処は…。

「おい…お前…こんなもんばつか潰してるのか…？」

『まあね…産まれてしまった責任と、産んでしまった責任くらいは取らなきゃだし？』

「ああ…そうかい…」

インカムを通して、束に声をかける。

その声色は恐ろしく冷たかっただろう…憤慨を通り越して呆れてしまう。

この人間生産工場は、恐らくIS操縦に最も適した人間を生産するための工場なんだろう。

俺の予想が正しければ、アルビノでもないのにも拘わらず、あの色をした髪の毛と瞳を持ったラウラは…。

「此処にいる奴ら、殺しちゃおうか」

『そうしたいのはヤマヤマなんだけどね…私はテロるならクリーンに行きたいし？此処で此奴ら殺しても仕方ないんだよ…イタチごっこすぎて』

「チツ…」

殺しても殺しても第二、第三の非人間が登場する。

だったら徹底的に施設に損害を与えて潰して、無駄になる事を悟らせるしかない：悟るかどうかは別として。

俺はやり場のない怒りをぶつける様に腕を薙ぎながら培養槽内を歩き、カプセルを丁寧に鋼糸で粉微塵にしていく。

せめて、産まれてしまう前に安らかに眠り続けられる様に祈りながら。

血と、薬品と、腐敗臭に吐き気を催しながら培養槽から出て、次のエリアへと向かう。

試験場と書かれた其処は、文字通りなんだろう…つまり、できた製品を弄繰り回す場所と言う事だ…。

苛立ちを鉄扉にぶつける様に幾度も足を叩きつけ、分厚い鉄扉を歪ませながら蹴り破ると無数の檻の中に一人だけ…ラウラにそっくりな少女がぼんやりとした顔で俺を見つめている。

その少女は、ラウラとは対照的に黒の眼球に金の瞳孔を持ち、全裸で諦めた様な顔をしている。

近づくにつれてオス特有の体液臭が広がり、俺は獣の様に鼻面に皺を寄せて苛立ちを隠すことができない。

「…今日の…試験はおわり、では？」

「出してやる…とつとと…はあ…とつとと、逃げるぞ」

努めて…努めて優しい声色を意識して声をかけ、鉄格子を両手で掴んで思い切り歪ませて手を伸ばす。

少女は戸惑ったように、怯えた様に身体を竦ませ檻の隅に移動するが、何もしてこない事に不思議そうな顔をする。

「…みな、死ぬのですから…放っておいて…」

「死ぬなら、死ぬで…その命を使い切ってからにしろ。無駄に死ぬんじゃないぞ」

道化師の仮面を外し、改めて少女と向き直る。

能面の様だったかもしれないし、憎しみに満ちた顔だったかもしれない…それとも、情けない泣き顔だったのかもしれない。

ともあれ、少女は恐る恐るではあるが俺の手を取り、俺はその手を優しく引いて檻から出してやり、コートを脱いで体を包んでやる。

深く深呼吸した後、少女を肩に担いで試験室内にある機材を探して悉くを鉄屑へと変えていく。

『こっちのノルマは終わったけど…？』

「…応」

『あれあれ…？堪えちゃったかな…？』

「その口閉じてろ、八つ当たりで縫い合わせちまうぞ」



『まあ、いいや…それじゃ、私達は優雅に退散しようか』

インカムから聞こえてきた東の声は、最初こそ俺を揶揄う様な声色だったが…空気を読むことはできたらしい。

すぐに意識を切り替えて、先ほどのエレベーターシャフトで合流する旨を告げてくる。

俺は東の指示に従い、担いでいる少女を労る様に試験室を後にした。

「研究所は無事爆破、データも全て破壊したし、繋がってるネットワークはウイルス流して大混乱。ん、上々上々♪」

「ああ、そうかい…で？」

「結論から言つて、あの子生きられないよ？」

現在高度260キロ…所謂大気圏外を俺とあの少女…東を乗せた巨大ニンジン型ロケットが周回している。

…エレベーターシャフト内パンパンにこのロケットが出て来た時は驚いたもんだが、ISの制作者ならこれくらいはやるんだろうなと流す事にした…つつーか、一々突っ込んでたらキリがない。

優雅に退散つてなんだつたんだろうな…？

窓の外に広がる地球の光景を眺めながら、東に話の続きを促させる。

「具体的には臓器がイっちゃってるんだよね…。熱した鉄棒とか色々突っ込まれてみたいだし？」

「あく、クソ…お前無視して皆殺しにしとけば良かった」

「今頃死んだ方がマシな目に合ってるんじゃないかなあ…クフフ」

東は俺から顔を背けて何やら呟いているが、詳しくは聞き取ることが出来なかった。

俺としては産まれた以上、その命を自分の為に使い切ってから死んでもらいたいと思っっている。

あんな、地獄の中で生まれて、弄繰り回される為に存在していたなんてのは許される事じゃない…断じて。

「で、お前ならどうこう出来るんだろ、自称天才の天災さんよ」

「自称じゃないし？東さんは本当に天災ですしおすし？」

「応、それ聞いて安心したわ…じゃ、責任取ってもらおうかね？」

「何さ…私は責任果たしたんだぜ」

東は口笛を吹きながら俺から顔を背けている。

暗に面倒を見るつもりはない、と言っているつもりだが、そうは行かない。

なんてったって、言質を既にとってるんだからな。

「産まれてしまった責任と、産んでしまった責任くらいは取らなきゃ

…なあ？」

「うぐ…!!」

「それとも自称天才は、責任取る事できねえのかな？」

「ぐぬぬぬ…」

俺はしたり顔で諭す様に…半ば追い詰める様に東へと近寄り、壁に手をつけて顔を間近に見つめる。

東は、悔しそうに顔を赤くして俺を睨みつけ唇を尖らせる。

「で、できるもん！責任とれるもん！」

「一気にガキ臭くなったな、おい…」

「でもね！あの子が本当に生きたいのかどうか決めてからだからだね  
!？」

東は苦し紛れに条件を付けて、真正面から俺の目を見つめ返す。

俺はその視線から逃れる様に離れ、室内を漂いはじめる。

濁ってはいいるがその目はあまりにも純粹で…希望を信じ続けている様に感じられたから…。

「それで構わねえ…死にてえならそれでも良いさ…無理して生かすのも酷だしな」

「随分と入れ込むじゃないか…まさか、ロリコ…」

「応、それ以上言ったら、お前の体に叩き込んでやってもいいんだぞ  
？」

「…はっ！貴重なDNAサンプルが取れるじゃないか！」

「マジにすんじゃねえよ…」

いきなり脱ぎだした束から視線を逸らし、俺は再び窓から見える地球を眺める。

眠れ、地の底で…安らかに。

## #7 悪魔と少年

澄み渡る青い空。

間もなく九月になるとは言え、まだまだ照りつける夏の日差し。眼下に広がる青い海と白い雲と陸地。

俺はそれらを眺めながら、今後の行動方針について思案していた。雇い主が求める事は、兎に角この世界に居座り続けること。

それも事件が起きるような場所の近くに居れば、尚良し。

と、なると篠ノ之 束の傍に居るのが一番いいように思えるが、あんなトラブルメーカーの傍に居たら胃が牛並みに存在していても足りない。

天災なんて二つ名も、強ち間違いじゃないんだなと思わされたからな…。

あのクズの掃溜めで拾った少女は、俺の言葉を実行するために束からの処置を受ける事になった。

束程のマッドサイエンティスト…もとい科学者であれば、多少不完全でも一般生活を送れるくらいには回復させることもできるだろう。

その後の身の振り方まで、とやかく口出しはしなかった…あの娘の人生だしな。

まあ、精々生き抜いて…そんなもって生きていて良かったと思えれば、俺としちゃ嬉しい限りだ。

さて…束からの依頼の報酬である、『日本に無事送り届ける』と言う報酬は、俺の中で反故されたことになっている。

確かに今居る場所は日本だろう。

それは間違いない…日本列島も見えたし。

問題は…

「ぶっ殺されてえのかゴルァ!!」

『えく、だつて束さん追われる身ですしおすし、こうするしか無かつたんだつてばく。謀殺しようなんてそんなそんな』

「おう、殺す、次顔見せたらマジで殺すぞー!」

『きやく、こわくい(棒)』

身に着けたままだった兎型インカムから罵声を浴びせると、束は実に愉快そうな声で返信してくる。

現在高度4000メートル：絶賛スカイダイビング中なのだ。

流石に束も情くらいはあったのか、パラシュートの入ったバックパックと一緒に放り出してくれた。

身に付けさせてくれなかったけど。

余談ではあるが、スカイダイビングにおける自由落下速度って言うのは、空気抵抗の受け方によって多少変化する。

俯せ状態では、平均時速200キロ、頭を下にした場合は平均時速300キロまで跳ね上がる。

また、空には比較対象となる物体が無いから、一体どの程度の速さで落下してるのかがまるで分からなかったりする。

そんな訳で、ニンジン型ロケットから放り出された瞬間に俺が最初にとった行動は、バックパックの空中装着と荷物の回収である。

其処からは俯せ姿勢で空気抵抗を増やしての減速を行いつつ、日本へと落下していた訳である。

…密入国って言うんじゃないか…これ？

『まあ、それは置いておいて』

「いや、置くなよ…」

『キミの事はそれなりに気に入ったからね、近いうちにまた会いに行くよ〜ん』

「来ないでくださいお願いします」

『わかったら、すぐに会いに行くね！』

それにしてもこの天才、話を聞かない。

まあ、会いに来てくれるのは言葉と裏腹に好都合ではあるんだがな…。

なんせ、この女が世界の中心に近いと言うのは間違いじゃないからな。

問題は、そんな女と関わるとロクな目に合わないって事なんだが…  
まあ、死ななきや何とかなるし、その都度問題を解決しつつ性格を調  
ky:改めさせてやればいい。

無理だろうがな！

ガタガタと漫才をしていれば何だかんだで地表が近くなつたため、開かなくても死なないとは言え、パラシュートを開いて減速を行う。住宅街が足元に広がり、とてもじゃないが着地できそうな場所が無かつたため、パラシュートを操作して移動して着地できる場所を探す。

減速しているとは言え、徐々に落下自体はしている…学校の校庭に降りる事も考慮すべきかとは思うが、日本に来て面倒事を起こしたら千冬の顔に泥を塗りつけることになる。

いや、もう騒ぎになつてるかもしれないが…。

ふと、小さいがなんともノスタルジックな雰囲気溢れる空き地を見つけ、俺は降下地点をそこに見定める。

パラシュートは…適当にポイ捨てしちまおう、そうしよう。

「よつと…」

受け身をとり無事に空き地に着地できた俺は、手早くパラシュートを畳み始める。

なるべくコンパクトに畳んでバックパックの中に放り込もうとした時、バックパックの中にメモの切れ端が入っている事に気付く。

何が描いているのやらと思ひ、メモ用紙を取りだして中身を見ると、其処には適当な地図と住所が書かれている。

アイツが変な意地悪をしてなければ、恐らく織斑宅の住所だろう…地図は土地勘も無ければ適当すぎる子供みたいな絵なので参考にならないことにする。

バックパックを空き地の傍に会ったゴミ集積場にそつと置けば、電柱に書いてある地区名を見て現在地を確認する。

恐ろしい事に、今居る街に織斑宅があるらしい…ここまで計算して俺を放り出したとしたら、規格外と自称するだけの事はあるな。

『ふふくん、もつと褒めたまえよあつくん』

「心を読むなっつーか、これ処分するの忘れてたな」

俺は未だ身に着けたままだったインカムを取り外して、束の抗議を聞く前にへし折って破壊する。

しばらく此処に根を張るとは言え、漸く静けさが俺の元に戻ってきた気がする。

気がするだけかもしれないが。

つーか、あつくんて：いきなり馴れ馴れしくなったな。

どうも、妙な生物に懷かれてしまった感が拭えない：もうちよい、身だしなみに気を使わせればいい感じにもっと輝ける気がするんだがなあ：。

織斑宅を指して住宅街を彷徨っている時に、ある事に気付く。

最初に言ったように土地勘が無い：なので、人に聞きながら目指そうと思ったのだが、織斑の名前を出した瞬間、皆逃げる様に立ち去っていく。

その目には若干の敵意：どうにも不安に駆り立てられる。

兎に角、千冬の約束を果たさなくてはならないので、俺は住所を頼りに急ぎ足で織斑宅へと向かう。

「：随分と：まあ：」

漸く織斑宅へたどり着くことができた俺は、その惨状に思わず眉を顰める。

一般的な一軒家とそう変わらない織斑宅は、酷い有様だった。

植木はどこどころ放火されたのか焦げていて、ブロック塀は千冬への酷い罵声がスプレーで落書きされている。

カーテンは閉め切れ窓は所々割れていて、ガムテープで応急処置した跡も見受けられる。

門を開いて玄関へ向かう途中に見える庭には生ごみが散乱していて、見るに堪えない。

：千冬の棄権がこんな事態を引き起こしてるなんてな。

千冬自身はこの状況を知らないんだろう：で、なければ日本に置いてくるなんて選択肢は最初から存在しないはずだ。

俺はゆっくりとインターホンのボタンを押すが、音が鳴らない事に気付く。

おそらく、鳴らない様にしたんだろう：。

気を取り直して、ドアを何度かノックして声をかける。

「アモンおじさんが遊びに来たぞ、いるんだろ？」

声をかけてから数分後、ドアからチェーンと鍵が外される音がして重々しい感じでドアがゆっくりと開く。

俺はドアが開き始めれば、すぐに手をかけて開き中に入り込んで施錠する。

押し込み強盗みたいだが、出入りを誰かに見られたら面倒になりそうだからな…。

「っ…！」

「随分とヒゲエ顔だな…飯、食ってるのか？」

薄暗い玄関、其処には東の様に目元に隈を作り、少しやつれた様子の一夏が立っていた。

恐らく、恐くて夜をまともに過ごす事が出来なかったんだろう…男とは言え多感な中学生…此奴はキツイ。

「一夏、とりあえず上がるぜ」

「う、うん…」

玄関から織斑宅に上がり込んで、まず向かったのは台所…冷蔵庫の中身の確認だ。

人間、兎に角美味しいものを喰わなくちゃ元気なんて出る訳がない。ましてや、今みたいな状況…負のスパイラル一直線になるからな。

一夏が声を上げる間もなく、俺は冷蔵庫の中に入っていた固形スープの素とご飯を取り出して調理を始める。

一夏は黙ってそれを見るだけだ。

「遅くなって悪かったな…千冬から聞いてるだろうが、しばらくお前の面倒を見る事になってよ」

「…俺は、大丈夫だよ…アモンは、旅をしてるん、だよな？」

「大丈夫ってのは、そんな顔をしている奴が言う台詞じゃねえよ」

鍋に水を入れて火にかけ、ぐつぐつと煮立ったら固形スープを入れてゆっくりと溶かしていく。

顔色から見ると、まともな食事をとれていないみたいだから…まずは御粥で胃を馴らしてやるのが良いだろう。

幸いな事に梅干しが見つかったので、丁寧に種を取り出して果肉を



叩いてミンチ上にする。

兎に角、飯を食わせてから今後の事を決めていかなきゃな…。

「学校は明後日からか…行けるか？」

「行かなきゃ、千冬姉に心配、かける…」

「無理だけはすんなよ？」

喉に通らないと言って中々食事に手をつけなかった一夏に、無理矢理御粥を食わせながら今迄起きていた事を聞く事にした。

今は夏休みの終了間際…千冬が出て行ってから少しずつ嫌がらせが増えていったらしい。

一夏も最初は我慢できたとは言っていたが、夜中に引つ切り無しにかかってくる無言電話に始まり、落書き、投石、果ては放火と起きて段々と追い詰められて来たそう。

今からでも遅くは無いからドイツに行ったらどうだと提案をしてみたが、千冬にこれ以上心配と迷惑をかけさせたくないと言って首を横に振られた。

誘拐事件が起きたばかりで、そのことで迷惑をかけたことがしこりになってるんだろう。

聞けば姉との二人暮らし…ずっと世話になって来たと言う負い目が一夏を今の状況に追い込んでるってのもあると思える。

「弾と鈴は良い奴だし…きつと大丈夫だよ…」

「…お前がそう決めたって言うんなら、それで構わねえさ。けどな、弱音くらいは吐いておけよ。でなきゃ、一夏が潰れちまうからな」

「うん…」

「家の事は俺がやってやる…ガキはガキらしく学業に励んでろよ」

嫌がらせに関してやれることって言えば、警察に相談してパトロールを強化してもらうってことか…日本を代表する選手だった千冬の家族が棄権にさらされているって解れば、国の方でも何かしら動く可能性はある。

なんせ、女尊男卑…その権利は上手く利用するに限る。

あんなおつかない美女を敵に回そうなんざ思わないだろうしな。

「アモンは…いつまで、此処にいるんだ？」

「千冬がドイツでの仕事を終わらせて帰宅したら、だな。それまではここで家政婦暮らしだ。あつ、生活費の心配か？」

「いや、すぐに居なくなっちゃうのかなって思ったからさ…ははは、はあ…」

一夏は笑う元気もないのか、深い溜息を吐きだす。

だが、一人で居なくて良いと言う安心感からか、来たばかりの時よりは元気が戻ってきている様に見える。

「千冬から頼まれたしな…まあ、概ね暇人ではあるし」

「アモンの収入って…どうなってるんだ？」

「そいつあ、企業秘密ってな…まあ、2、3年は楽しんで暮らせるだけの蓄えはある」

「…出奔した御曹司…？」

「さってねえ…？」

テーブルに頬杖を突きながら煙草を啜えて火を点ける。

良い所から出奔したつてのは強ち間違いつてわけでもないんだよなあ…中々鋭いもんだ。

金の出所は言うまでもなく、雇い主から提供されている活動資金だ。

実際の所、2、3年と言わずに一生遊んで暮らそうと思えばできるだけの資金はある。

どうやって調達してるのかは分からないけどな…。

出所が分かりにくいから意識的にあまり使いたくないつてのはある…使うけど。

「ま、しがらみないのは気楽でいいけどな」

「その…ごめん、俺の…せいで…」

「言ってるだろ、ガキはガキらしくしてろつて。俺に気い使いてえつてんなら、もう一回リデカくなってからにしな」

「…ありがとう」

兎も角、今求められている事は何よりも家の安全だろう…落書きは

置いておいて、投石やら放火が頻繁にあったんじやおちおち寝てもいられない。

その結果が目の前で憔悴しきった一夏だし、この家の現状だ。で、あれば家政夫役は改善してやる使命ができるわけだ。

「あ、一夏…お前今日はダチ公の所に泊まりに行つて来いよ」

「へあ!? な、なんで急に…」

「夜通しで家を片付けるからだよ…お前引き籠つてたみたいだし、ダチ公の所行つて気分転換してこい」

一夏はいきなり、家を追い出されるとは思っていなかったらしく目を白黒させているが、困ったように顔を俯かせる。

大方、自分が泊まりに行つて相手方に迷惑をかけるんじゃないかとか、そんな事を考えているんだろう。

…一夏は人に甘える事を覚えなきや駄目だな。

「向こうの都合もあるだろうが、お前の現状を知らねえ訳でもねえだろうし…大丈夫だろ」

「そんな、適当な…」

「良いから、連絡してみろって」

俺はシツシツと一夏を追い払う様に手で払い、友人と連絡を取る様に促す。

後から聞いた話なんだが、その時の俺の顔は悪役顔負けの凄まじい笑みだったらしい。

まあ、ほら…『お掃除』は愉しいもんだからなあ…。

## #8 腐海ファイト

俺が織斑家に転がり込んでから早三か月…秋なんてとうの昔に通り越し、世間はクリスマスモード一色となっている。

お掃除が功を奏したお蔭で、嫌がらせや不法投棄はめつきり無くなり、一夏も学校では何かを言われる事も無く元気に過ごしているそうだ。

これは、あいつのダチ公である五反田 弾と凰 鈴音の尽力もあるんだと思う。

弾は中学生だと言うにも関わらず髪の毛を赤く染めている、所謂チャラ男と言う外見をしているが、性根は良く気遣いも中々できる…ただまあ、ベビーフェイスが傍に居るせいで女にモテず、常日頃女に餓えている点がマイナスポイントか…アイツの良さが分かる女が出てくることを祈るばかりだ。

鈴音：鈴は、ツインテールがトレードマークの小学生みたいな体型をした少女だ。

歯に布着せぬ物言いをするものの、快活な少女でそう言った言動も気にならない。

むしろ、変に気遣わない所為かガキだつて言うのにとつつきやすい…が、此奴は一夏にホレている…盲目的に。

その恋が一夏の所為で、当面報われない物になっている辺りが何とも涙を誘う。<sup>愉快</sup>

一夏もなー…もうちよい女心に気が付けばなー…無理だろうが。

弾から聞いた話なんだが、裏で朴念仁ならぬ朴念神とか言われてるくらいの鈍感だつて話だし。

さて、長つたらしい近況はここまでにして…俺は今、とある部屋の前で重武装をして立っている。

エプロン、クイ○クル○イパー、雑巾、バケツ、ゴム手袋、ゴミ袋  
etc. etc. …。

千冬と一夏から硬く入るなど言われたが、流石にいい加減掃除しないと不味い状況になっているのが扉越しに分かってしまっている。

所謂、腐海の気配ってやつだ。

「お、入っちゃうのかあ〜？」

「…もう驚かねえぞ、これは幻聴だからな」

「え〜、あつくん、ひ〜ど〜い〜。あの時あんなに滅茶苦茶にしてくれたのにいつ〜！」

…隣のメカニカルウサ耳付けた女性とは何もありませんでした。

兎に角、俺は気合を入れ直し、腐海の…千冬の部屋の扉をゆつくりと開けていく。

新築の様に綺麗な扉なものにも関わらず、何故か蝶番がさび付いたかのような嫌な音を上げている。

まず、俺の鼻孔を刺激臭が襲い掛かってきた。

ツンと突き刺さるその匂いは、人の汗やら酒やらが作り出し醜酔した何かの様に思える。

次いで目が沁みる様な刺激が走った所で、俺はギブアップと言わんばかりに扉を思い切り閉め直す。

「ハーツ！ハーツ！なんだこれ…!？」

「うつひや…流石に束さんでもドン引きだよ…ちーちゃん…」

何故か俺の隣に居た束も、俺と同じ症状が出たのか軽く嘔吐きながら目をごしごしと擦っている。

一夏がとんでもない状況に陥って家事が出来なかったことが、この部屋が出来上がった原因ではあるもの…ちよっと、女として問題ありませんかねえ、ブリュンヒルデさんよおっ!?

「おう、束…ここまで来たら一蓮托生…地獄まで付き合ってもらおうぞ？」

「束さん、用事思い出したから帰って良い？」

「用事があるから此処に来たんだろーが…良いから、掃除するぞー！」  
「ヒエツ…」

俺は逃げようとした束の首根っこを掴まえて確保し、思い切り扉を開ければすぐさま腐海へと突入する。

間髪入れずに行ったのは閉め切られたカーテンを開いて、窓を開ける作業からである。

兎に角、淀みに淀んで魔界の墓場みたいな空気を新鮮な物と入れ替える必要がある。

「束、カーテン外して部屋の外に出しとけ」

「え〜、なんでさ〜」

「黙って、やれ」

「アツハイ」

汚れた衣服が山の様に置かれたベッドを暇そうに観察している束に殺意の籠った視線で射抜きながら、床に散乱している一升瓶やら酒の空き缶、果ては食べ残しのツマミ類やらを片付けていく。

：弟である一夏が家事全般を完璧にこなせる事を考えると、どうも千冬は家の事を一夏に任せっきりにしてやってこなかったのかもしれない。

それにしたって最低限の事すらできてないのは非常に：ひっじょうに拙いけども。

せつせつせつと部屋に散乱したゴミや、ダメになってしまった衣類をゴミ袋に突っ込みながら素直に片づけを手伝ってくれている束に声をかける。

「で、あの娘っ子は元気なのかよ？」

「ん〜、クーちゃんのことかな!?聞きたい!?聞きたいんだね!」

「クー：う〜なんでえ、乗り気じゃ無かったのに名前まで付けたのかよ？」

あのドクサレ外道の住処から連れ出した少女は、内臓の殆どが機能不全を起こしていて、生きているのが奇跡だったとか言っていたが：俺の睨んだ通り、目の前の一人不思議の国のアリスは何とかしてくれたらしい。

束は喜色満面の笑みを浮かべて、鼻歌交じりに俺から手渡した雑巾で窓を拭き始める。

「まだまだ、体に馴染んでないから走ったりとかはできないけど、クーちゃんは元気だよ!」

「馴染：まあ、いいやそこは：任せたのは俺だし：元気だっぺんなら言う事はねえな」

「え、パパの聞きたい事ってそれだけえ？」

「誰がパパだ、誰が」

東はニヤニヤとしながら俺の方を見て此方を指してくる。

この世界じゃ、身寄りのない子供に手を差し伸ばした瞬間身内になるのか…？

訝しがりながら東を見ていると、今度は自分の事を指差して笑みを浮かべる。

「もちろん、ママは東さんだよ！」

「もうちよつと、大人しい御淑やかな女性が伴侶だと嬉しい」

「東さんみたいなら超優良物件を拒否するなんて！クーちゃんもママって呼んでくれないし！」

俺はまるで家探しするように隅から隅まで…具体的にはクロ―ゼットの中身とかベッドの下を探りながら掃除を続ける。

東がママねえ…：こんな人格破綻者が親ってのは何だか不憫だが、任せた俺が言つて良い言葉じゃないな。

大まかなゴミを取り除いたら、埃と言う埃を落して部屋を綺麗にしていく。

千冬には最低限の家事を叩き込んでやってから、旅に出るかな…：なんて考えながらふと東を見ると真剣な表情で手に下着を持って見つめている。

「ちーちゃん…使用済み…ゴクリ」

「ゴクリ、じゃねえよ！変態か!？」

「失敬な！ちーちゃんと愛し合えるくらいには淑女だよ！」

「ねーよ」

東は手に持った下着をエプロンドレスのポケットにねじ込みながら、キリツとした顔で此方を見つめてくる。

少なくとも淑女は使用済みの下着を持ち帰ろうとは思わないと思う。

「ただの変態じゃねえかよ！」

「変態じゃないよ！変態だとしても淑女と言う名の変態だよ！」

「いいから、そこに置いてある洗濯籠に入れろ…」

深いため息を吐きだしながら、部屋の外に置いてある洗濯籠を指差

して入れる様に促す。

束は渋々、と言った様子で俺に従って籠の中に洗濯物を入れていく。

他人に興味が無ければ言う事も聞かない…なんて聞いてたんだが、随分と従順に聞くな…。

不思議っちゃ不思議だが、変に引つ掻き回されるよりかはマシなんので、このまま言う事聞いてくれてればなあ…なんて思っているながら掃除機をかけていると、玄関からドタバタとした音がしてくる。

一夏が帰ってきたのか…？

荷物を放り投げる様な物音に引き続き、階段を駆け上ってくる音がしてくる。

「…一夏の足音じゃねえな」

「あつ、束さんもう帰るね！」

束は何か気付いたかのように逃げ帰ろうとするが時すでに遅し…出入り口に黒づくめの女性が息を切らせながら立ちふさがっていた。

そうだね、織斑 千冬だね！

「こ、こ、これ、は…どういふことか…!？」

「どうって…掃除に決まってるだろうが…」

「ち、ちーちゃん、どうどう、どうどう…」

「貴様らー!!!」

千冬は気恥ずかしさからなのか、怒りなのか、それとも両方なのか…顔を真っ赤にして怒鳴り散らしながら踏み込み、宥めようとした束の側頭部に手刀による水平切りを叩き込んで弾き飛ばし、流れる様な動きで宙に浮いた束に思い切り踵落としを叩き込んで一気に床に沈める。

あまりの衝撃に規格外の天災もビクビクと痙攣しながら頬を赤らめ…あ、これ興奮してるだけだわ。

兎も角、一瞬の動作で束を沈めた千冬は、俺に標的を定めて一気に踏み込んでくる。

ドイツで手合わせした時が温く見える程の本気の踏み込み…あの



時は此奴も手を抜いてたんだっけかな…？

ともあれ、鋭い眼光は俺の急所目がけて拳を叩き込んでくるが、そんなものは御見通しだ。

真つ直ぐに伸びてくる腕を紙一重で脇腹を通す様にして避け、一歩踏み込む。

それに対して千冬は舌打ちをしながら後退しようとするが、時既に遅し…逃がさない様に腕と脇腹で千冬の腕を締め上げて捕縛し、膝蹴りを腹に叩き込む。

「グハッ…!!」

あまりの衝撃に千冬は体をくの字に曲げ、絞り出される様に息を吐きだす。

勿論、このままじゃ千冬が止まらないのは百も承知…俺は、動きが止まった瞬間に締め上げていた腕を解放してしつかりと両手で腕を掴み、一本背負いの要領でベッドに投げ飛ばす。

「頭に血い昇りすぎだ…ったく。第一な、なんで部屋片付けてからドイツに来なかつたんだよ？」

「っ、うるさい！わ、私は片づけられないんだ！」

「えく、ちーちゃん、限度つてあると思うよ？」

「煩いぞ、束」

俺は埃をはたくように両手を打ち鳴らしながら、若干頭の冷えた千冬を呆れた様に見下ろす。

千冬は気恥ずかしさから俺の視線から目を逸らし、体を起こして背を向ける。

束はニヤニヤとしたチェシャ猫の様な笑みを浮かべながら千冬の背中から抱き付いて頬をつつくも、顎にアッパーを喰らって吹き飛ばされる。

「で、なんでまたいきなり帰ってきたんだよ？」

「お上の気遣いでな…明後日には出立するが休暇を頂いてきた」

「ふうん…？」

休暇、ねえ…訓練訓練の訓練漬けじゃ部隊内に不満が出るだろうしつてところか？

どうにもウラがある気がするが、それはそれ：一夏も喜ぶだろうしヨシとしておくべきだろう。

「ラウラは元気にしてつか？」

「ボーデヴィツヒか？アイツは中々筋が良い。向上心もあるし、今では部隊の中でも1、2を争う実力者だ」

「そらまあ：教官が良けりや伸びも良くなるってもんか：」

落ちこぼれて不貞腐れてた娘っ子が元気にしてるのは、中々良いニュースと言えるだろう。

二度と会う事も無いだろうが：。

フローリングの床をクイ○クルワ○パーで掃除しながら、束を足で小突いて起こす。

「いい加減、起きろつつの。大したダメージじゃねえだろ？」

「んっ：ちよつと下着が拙い事に：」

「千冬、ダチは選べ、マジで：」

「これでもまだマシになったんだ：」

千冬は両手で顔を覆い隠して深いため息を吐き、束は束で漸く体を起こしてモジモジとしている。

：これより酷かったって：どんだけだよ：。

掃除と洗濯が一段落し、近況を報告し合う。

千冬は普段から基地内に缶詰状態にされている為、中々連絡を取る事ができなかつた。

それでも合間を見ては、一夏と連絡を取ってくれてたみたいだな。な。

束からは特に言う事も無く、クーの存在を伏せたままだ。

恐らく、あの基地での出来事と結び付けられるのを嫌った為だろう。

千冬なら漏らす事はないだろうが、普段からそんな事をやってると思われて心配をかけさせたくないと言うのがあるみたいだ。

俺は紅茶を丁寧に淹れて、あらかじめ作っておいた焼き菓子テー

ブルに並べていく。

「それで：箒とは連絡をとったのか？」

「んん、箒ちゃんかあ…」

「箒？」

聞き覚えの無い名前が千冬の口から発せられ、俺は首を傾げる。

反応から見ると親族みたいだが：俺は二人に目配せして、口を開くの待つ。

「箒と言うのは、その馬鹿の妹だ。此奴がISを開発した折、離れ離れになることになってな」

「私だけが行方くらまされれば良かった筈なんだけどねえ…：凡人の行動ってホント不可解だわー、しょうもないわー」

「いやいやいや、お前の思い通りに世界が回ったら堪らんわ。で、その箒つてのに会いに行つてねえのか？」

束は驚掴みするようにスコーンを手に取り、行儀悪く齧りつきながら悪態をつく。

その妹は国の保護下…：つつーか、体の良い人質として秘匿状態らしい。

束は既に見つけて、時折様子を覗いているとの事だが…。

「ちーちゃん、いくら束さんでも箒ちゃんから嫌われてる事くらいは分かつてるんだよ？」

「とは言え、そのままにしておくものでもないだろうが…」

束はいつも浮かべているような笑みを浮かべずに、どこか憂鬱そうな顔をしている。

妹の存在と言うのは、束にとって非常に大切な存在だったんだろう。

そんな相手から嫌われていると言うのは、神経が大樹クラスの凶太さを誇る束でも堪えるらしい。

「あの人たちも箒ちゃんから離れちゃってさ！何考えてんだか分からないよー！」

「政府の取り決めでは親であろうと逆らえん…」

「聞くだけなら、束が好き放題したツケだろ…。物事つてのはバラ

ス取る様にできてんだからな？」

紅茶をゆつくりと飲みながら、束を横目で見る。

本人も今までの事で十分に理解しているのか、黙したままだ。

誰も彼もがお手手繋いで仲良くしましよなんて、洗脳でもない限り無理だろ…そんな事ができるんなら、今頃国なんて粹組み自体が無くなってる。

「束よう…妹に会ってボツコボコに言われて来たらどうだ？」

「うえ…箒ちゃんに悪口言われたら生きていけないよ…」

「仲直りしてえんなら、それくらいは腹括れってこった」

「ぐぬぬ…」

さながら、パンドラの箱だな。

今、箒と会うと言う事は束にとってはその箱を開ける作業に等しい。

ただまあ、パンドラの箱の中身は…。

「会わず仕舞いで平行線になるよりは、マシだと思うがな…。束、どうだ？」

千冬は提案する様に…一夏と接している時の様な声色で束に声をかける。

友人だからこそその思い…しかし、束は首を横に振る。

「駄目だよ、まだ…今は会っちゃ駄目だと思う。会いたくない訳じゃないからね…具体的に監視が緩んでからかなくみたいなく」

「…なら、良いがな」

千冬と束のティーカップにお代わりの紅茶を注ぎながら、俺は口を噤む。

会わないとは言っていない訳だし、本人たちでどうこうすべき問題だ…。

それに、恐らくお上は箒を餌に束が接触してくるのを待っているんだろう。

束は世界で唯一ISSコアを生産できる人間だ。

そんな人間を手元に置かないとか馬鹿でもない限りやらないだろうし、な。

「あれあれ〜？なんだかしんみりしちゃってる〜？」

「テメエは気性の乱高下が激しいな、おい」

「へっへっへ〜、あつくんに言われると照れるぜえ」

東は両手を頬に当てながらクネクネと体をくねらせながら、俺に熱い視線を送り込んでくる。

別に褒めたわけじゃないんだが…突っ込むのもなんだか疲れて来た…。

「そういえば…お前達、やたらと仲が良いな」

「なんだか知らねえが懐かれたんだよ…」

「え〜、だってあつくん面白いじゃん！ちーちゃんより強い人間なんか初めて見たよ！」

「…まさか、軽くあしらわれるとは思ひもしなかったからな…」

東は俺の事を完全に興味の対象と捉え、千冬は千冬でやはり興味…と言うより好敵手と言う様な目で俺の事を見つめてくる。

とんでもない女に目をつけられた気がするな…女難の相でも出るのか…？

「あく、まく、なんだ…俺明後日まで家空けるから」

「…なら、東さんと一緒に行動しようぜえ〜」

「ほう…よもや、勝ち逃げと…？」

「む…」

話題を切り替えようとしたが、どうにも地雷を踏み抜いたらしい。千冬と東は互いに視線を交わし、なにやらテレパシーで会話をしている様に思える。

俺としては東と行動するつもりは無いし、かといって姉弟の団欒を邪魔するつもりもないってだけなんだが…。

「アモン、私と一夏に気兼ねする必要はないんだが？」

「ちーちゃん、久々にいつくんと会うんだから、姉弟同士気兼ねなく居ればいいんじゃないかな〜？」

「ぐぬぬ…」

「いや、少しばかり羽根伸ばすだけだからな？気兼ねとかそんなんじゃないねえしな？」

俺は二人を宥める様に言いつつ、席を立ちそそくさと家を出ようとする。

このまま此処に居ると拙い気がするからだ。

つつーか、なんでこの二人に行動を制限されなきゃならないんだと、小一時間問い詰めたい気がする。

マトモな返答が無い気がするが。

「友情とは脆いものだったな、束…」

「やれやれ…本気になった束さんにちーちゃんが敵うとでも…!?!」

俺はこれから起こる惨状から目を背け、無事に家を出る事に成功した。

この二時間後、しっちやかめつちやかになつた上にダブルノックダウンしている和一夏に泣きつかれて織斑宅に戻る羽目になった。

どうも、この家に厄介になっている間は、自由行動も許されないらしい…はあ…。

## #9 動きだす歯車

「……」

「……」

麗らかな春の陽気の中、篠ノ之道場の空気は張りつめて、まるで冬の様な寒さと肌を刺す様な緊張感に包まれている。

織斑家に来てから一年半程…なんだかんだと居心地が良くて長居をしてしまったが、それも今日で終わりを向かえる。

一夏と千冬の共同生活は楽しかったし、根を下ろしても良いとは思った。

だが、俺はそんなことをする為にこの世界に来たわけでは無い。

この世界の全てを観測する…その願いを叶える為にやってきたんだ。

こんな所で足踏みはしてられない。

旅に出る旨を千冬に伝えると、千冬から一つだけ頼みたい事があると言われた。

『一度でいいから本気で相對してもらいたい』

この一言が、今俺と千冬がこの篠ノ之道場に居る理由だった。

黒の道着に木刀を構えた千冬が間合いを測る様に、攻めあぐねている様にじりじりと摺足で自然体で居る俺の前を移動している。

俺は拳を構える訳でもなく、ただ静かに千冬の敵意の籠った視線を真っ向から見つめ返している。

大胆不敵に映るか…それとも侮られていると取られているかは分からない。

ただ、それでも…千冬に一切の油断は無い。

開け放された道場の窓から風に運ばれて、桜の花弁が吹雪の様に入り込んでくる。

ひら、ひら、ひら、と舞い落ちる可憐な桜の花弁は、それでも道場の空気を壊すことはできなかった。

しん、と静まり返った道場の中、最初に動き出したのは千冬。

元より俺は、待ち構えるつもりで立っていただけだし、千冬から動

くのは分かりきっていたつことなんだが。

「はあああつー！」

神速の踏み込みから繰り出されるのは、最速最短で喉を狙った渾身の突き。

俺は木刀の腹を裏拳で軽く押し出す様にして軌道をずらし、薄皮一枚犠牲にする様にして避ける。

…木刀だって言うのに、あまりに鋭い突きで皮膚が裂けるのか…。

俺は何気なしに上体を思い切り逸らし後方宙返りを行って距離を開ける。

体を逸らした瞬間、鼻先すれすれに木刀が通り過ぎていく…千冬が突きだした腕をそのまま横に薙いだのだ。

「中々良い斬り込みだが、届きやしねえなあ…準備運動はまだかい？」

「…言ってくれるな、悪魔め」

「悪魔だから仕方なねえわな」

互いに不敵な笑みを交わした後、千冬は木刀を下段に構えて再び踏み込んでくる。

通常、刀を振るう時よりも更に深く踏み込まれる…体当たりで体勢を崩してから一気に斬り伏せる魂胆だろう。

俺は半歩体をずらして闘牛士さながらに千冬をやりすごし、腰を軽く回し蹴りで蹴り飛ばす。

「鬼さんこちらってな…もうちよいギア上げなきや欠伸が出ちまうつつの」

「ちいつ…」

蹴られた衝撃で前につんのめった千冬は、素早く体勢を元に戻して大ぶりの横薙ぎを叩き込んでくる。

間合いを離すよりも近づいた方が得策と見た俺は、一気に千冬に肉薄して左から薙ぎ払おうとする腕を掴んで止めて、挟り込むようなボディブローを千冬の腹に叩き込む。

インパクトの瞬間、千冬は腹筋に力を入れて拳を受け止めて耐え、下から俺の顎目がけて頭突きを叩き込もうとする。

流石に距離が近すぎたと言う事もあって、強かに顎を打ち付けられ



た俺は体を仰け反らせてしまい、よろめく。

その隙に拘束を解いた千冬は勝機と見たのか神速の袈裟斬りで斬り込みを仕掛けるも、無様に転がる様にしてその一撃を避け、拳を床にたたきつける様にして身体を跳ね上げて立ち上がり、千冬と向き合う。

「石頭が…もちつと御淑やかにやれつつの!」

「ふん、そんなものは随分前に捨てているんでな…それよりも…いい加減本気で来い!」

「…あからさま過ぎたかねえ…?」

千冬は確かに強い。

俺の目から見ても明らかだ。

並みの人間を超える反応に女性の細腕とは思えない膂力、そして類まれな戦闘センスは人類全体で見てもトップクラスだろう。

だが、届かない。

人は所詮人でしかなく、限界があるからだ。

人は怪物にも神にも悪魔にも勝てるかもしれない、可能性にあふれた存在だ。

だが、それでも…しれないと言う不確かなものでしかない。

俺はゆつくりと一步踏み込んだ瞬間に千冬の背後へと回り込む。

最早瞬間移動にしか見えないであろうそれは、遅れて俺が歩いた軌跡の通りに床板が砕け散っていく事で瞬間移動でないことを千冬に知らせる。

「じゃ、そろそろ終わりにしようか」

「ぐっ…!!」

後頭部目がけて拳を叩き込もうとするが、一瞬で何が起きたか把握した千冬は大げさに倒れ込む様にして首の薄皮を一枚犠牲に何とか俺の拳を避ける。

だが、千冬ではそれが限界だ…俺は無様に床に倒れ込んだ千冬の顔面に拳を叩き込もうとして…

「じゃあ、俺の勝ちで良いな?」

「っ…!!」

顔面すれすれに拳を寸止めして、額を軽く指先で弾く。

千冬はそれなりの衝撃を覚悟していたのかビクツと体を震わせるものの、結果としてデコピンで終わってしまった、羞恥に顔を真っ赤にする。

…中々可愛い所あるんじゃないかと思ってしまったのは内緒だ。

「っ…ば、馬鹿にして！」

「してねえよ、顔は女の命だろうが…。痣なんか作ってみろ、折角の美人が台無しじゃねえかよ」

「〜ツ」

千冬は声にならない声を上げて俺の胸を思い切り殴りつけてくるが、大して力が入っていない。

俺は千冬から離れて、道場の隅に置いてあった荷物を取りに向かう。

千冬はそれから暫くして、漸く平静を取り戻したのかムクリと起き上って俺の方を睨み付けてくる。

「軽口が無いと生きていけないのか、貴様は…」

「軽口だろうが何だろうが、口にするのは本心だけだぜ…千冬？」

「ガサツな女が美人なものか…」

「だったら、少なくとも部屋を片付ける努力くらいしろっての」

自身が男勝りである事を多少なりとも気にしているようで、千冬は少しばかり落ち込んでいるような声色だ。

片付ける努力をしろ…とは言ったものの、千冬はそれなりに努力はしてきた。

具体的には、ゴミをキッチンと片付けるくらいにはなっている。

一夏には伏せられているものの、IS学園の勤務となってから色々と気遣う事が増えてきた様で、自分を変えようと言う努力はしてきた様だ。

…異臭を放つ部屋から散らかしっぱなしの部屋にランクアップしたのは素直に嬉しい、うん。

「…これから、お前は何処に行くんだ？」

「どうすつかねえ…まあ、少なくとも日本からは離れるだろうな」

「そうか…一夏も寂しくなる」

「ハッ、アイツだつていつまでもガキじゃねえんだ…俺の事なんざ、すぐ忘れるだろうよ」

実際いつまでもこの世界に留まっているわけでもない…で、あれば高々野郎の一人が居なくなつたところでどうってことないだろうさ。それなりに鍛えてもやつたしな。

「…私とて、寂しくもなる」

「おいおい…千冬までガキみたいなこと言いなさんな」

「少しの間とは言え、一緒に暮らしていたからな」

そう言うなり、千冬は立ち上がって置いてあつた自分の荷物から携帯デバイスを取り出して此方に放り投げてくる。

危なげなく受け取つたそれは、ストラップも何もついてない為飾りっ気が無い。

家でよく見かけていた、千冬が愛用していた物と同型の物だ。

「機種を乗り換えて余つたからな…偶にでいい、連絡を超越せ」

「そこらへん、ズボラだからなあ」

「よこせ」

「アツハイ」

半ば脅迫染みた笑つてない笑顔を向けられて、俺は素直に頷くしかない。

…友情か、それとも別の感情なのかは分からない…ただ、その想いに応えてやれるのかどうかって言う…わからないってのが正直なところだ。

悪い気はしないんだけどな。

「付き合わせて悪かつたな…いずれ、倒す」

「ハッ、死んでも倒せねえよ…女だろうが男だろうが、負けるのだけはもう嫌だからな」

「…？」

俺はコートを羽織つてトランクを担ぐ様にして持ち、篠ノ之道場を出ていく。

道場から出ると、春特有の暖かな風が俺の体に吹きつけてくる。

旅立ちには持って来いの陽気だ。

「一先ず…そうさな…太陽が顔を覗かせる方向にでも向かうか…」  
別れと出会いと言うのは常に起きる。

望むと望まざるとに関わらず…だが、それが常に悪い事ではないと言  
う事を知っている。

俺はこうして千冬達から離れ、再び根無し草の放浪者となった。

「で、歩けるところは歩いたけど…まだ、お仕事は続くんですかね？」



「もう、別の奴に任せろよ…二年以上こっちで過ごしてるっつーのに  
何も起こらねえじゃ…あっおいつ…はあ…」

旅に出て、冬真つ只中…世界中の国を歩き回ったが——といつても  
ヨーロッパ諸国はドイツの絡みがあるので寄り付いていない——特  
に大きな事件とかそう言う事は何もなく、至って平和な状況が続いて  
いた。

もちろん、世界全体が平和と言う訳ではない…テロリストによる攻  
撃に対する報復やあらなんやらで、ISが戦場に駆り出されている  
姿つてのも見てきたし、貧困にあえいで満足に物を喰う事ができない  
子供たちつてのも見てきた。

光りある所に影はできる…表面化していないだけで、地獄はすぐそ  
こに存在しているし、それを知らない人間も勿論多かれ少なかれ居  
る。

あくまでも芸人である俺は、戦場に介入する事も無く、かといつて  
子供たちに手を差し伸べる事もしなかった。

前者はもちろんの事だが、後者は…最後まで面倒を見てやる事が  
出来ないからだ。

一時は飢えを凌げるだろう…だが、俺が別の国に旅を続けて居なく  
なったら？

また、餓えるだけだ…夢を見させて絶望に落とすくらいなら、最初  
から見せない方が良い。

そう言うのは、最後までケツを持てる責任者だけがやれば良い。  
…良い気がする訳ないけどな。

そんな旅の最中であっても、束は何故か此方の居場所を敏感に察知して会いに来ていた。

一番面食らったのは、ホテルに宿泊したその翌朝に素っ裸でベツトに潜り込んでいたことか。

勿論、何も無かった…ああ、男として期待できるような事なんて微塵もな！

「どうしたもんかなあ…」

ぼんやりと雪の降る都会の雑踏を眺めながら、コンビニで買った温かい紅茶を飲む。

正月シーズンを乗り越し、既に世間は受験戦争真っ只中…道行く学生たちは、志望する学校の受験会場に向かうべく緊張した面持ちで歩いている。

懐から携帯デバイスを取り出して電源を入れてみるが、ウンともスンとも言わない…過酷な旅に耐えきれず、故障してしまったのだ。

「見つかったら、俺、ぶっ殺されるな」

乾いた笑い声を上げながら深く溜息をつく。

偶に、とは言うものの月一で連絡をとっていたのだが、それも彼頃四か月程ダンマリを決め込んでいる。

直すのが面倒くさかったのと、束がちよくちよく会いにきてたから、そっち経由で俺の動向が知れ渡っていると思っただけからだ。

「でも、よくよく考えてみたらアイツ、日本にあまり寄り付かねえんだったな…」

よっこらせと公園のベンチから立ち上がり、街を歩き始める。

ぼんやりと街を歩く…よくよく見慣れた風景だ。

なんてったって此処は日本…それも千冬達が住んでいる街だからな。

最後に連絡を取った時、壮絶な——姉による一方的な——姉弟喧嘩が勃発して、なんとか高校に通わせる方向に持って行ったとか何とか言っていたな。

一夏は未だに誘拐事件の事を気にしていて、姉に対して遠慮しているところがある。

小さいガキの頃から育ててもらった恩があるからってのもあるんだろうがな。

そう言うのは、成人して立派に働いてから恩を返すもんだと思うんだがな。

「一先ず、電話ボックスでも使つて…っ…!?!」

兎に角、一度顔を出そうと思い、電話ボックスを探していると目の前を走っていた『倉持総合技術研究所』と書かれたバカでかい輸送トラックが、雪に足を取られたのか派手にスリップを起こして横転する。大事故を起こす。

横転した衝撃でトラックの荷台が壊れて、積まれていた荷物がたまたま近くを走っていた車に直撃する二次災害まで発生する始末だ。

「大丈夫か!!」

俺は荷物：見た事のないISに押し潰された車の元へと向かい、事故の衝撃で助手席側の割れた窓から車内を見る。

IS自体の装甲の組み付けが終わっていないことが幸いしてか運転席部分が大きく潰れる事も無く、運転手の女性に命の別状はない様だ。

助手席に乗っていた運転手の娘も奇跡的に怪我も無く、俺は胸を撫で下ろす。

「お、お母さんを…」

「分かつてる、今ISを退かすから出てろ！」

運転席側はISが邪魔をしまして面倒な事になってしまっている…素手で車体を強引に引き裂いてしまうのが手っ取り早い、事故の所為で野次馬が集まってきている。

変に馬鹿力見せたら面倒な事になりそうだからな…仕方なく壊れたドアをこじ開け、助手席に座っていた娘を避難させて邪魔なISに手を伸ばす。

その瞬間、俺の脳裏に凄まじい量の情報が流れ込んでくる。

主だった内容はISの使用方法、更に現在自機が置かれている状

況、使える機能と使えない機能…最後に『当機は貴方の搭乗を歓迎します』の一文。

突如起きたISの発光に目が眩んで瞼を閉じると、周囲の野次馬から息を呑む様な雰囲気伝わってくる。

閉じている瞼をゆつくりと開くと、俺はいつもより視点が高い事に気付くものの、それよりも人命救助と言う気持ちが大きかったこともあって、自身が置かれている状況から目を逸らして足元の車の天井を引っぺがし、車から傷つけない様に運転手の女性を引きずり出す。

『あー、あー、聞こえるあつくーん!?!』

『おう、バカウサギ…連絡手段ねえつてのに、なんでお前の声が聞こえるんだ?』

『あの一、その一…なんとも一しますかですね』

東は非常に歯切れが悪そうな感じで、俺の脳内に直接声を送り込んでくる。

…  
そもそも、この世界にテレパシーなんて通信手段は無かったような

俺は、ゆつくりと片膝を付く様にしてしゃがみ込み、運転手の女性をその娘に引き渡す。

『あ、あり、がとうございます…!』

『いいから、救急車来たらすぐに病院つれてけ』

『あ、あの一!』

『んだよ…こっちはバカウサギの相手して…んん?』

周囲の野次馬たちから、ひそひそとした声が鮮明に俺の耳に届いてくる。

内容はどれもこれも同じもの…男がISを使っているだ。

女性にしか扱えない筈のIS…それを今、身に纏っている事実には漸く目を向けた。

『いつくんに悪戯で触れさせたら起動するし、あつくんはあつくんで起動するし…これは東さんが解剖しなきゃだね!』

『うるせえ!何が解剖だこの野郎!!』

『ヒツ!!?!』

束が不穏な言葉を口にした為、拳を振り上げながら抗議の怒鳴り声を上げると、救出したばかりの娘っ子が怯えて体を竦ませる。

俺は慌てて弁解してなんとか宥めつつ、束の言葉に耳を傾ける。

『なんていうか、良い感じに規格外だよね〜。今からそっち向かうから動かないでね☆』

「つつーか、もう近くに居るだろ〜？」

『何故バレたし〜』

よもや、この男性IS操縦事件が事の発端になるんじゃないかなろうな…。

何とも嫌な予感がして、俺は軽い眩暈を覚えた…。

シーサイド・ツインタワー・ホテル。

今滞在しているこの街で、最も有名なこのホテルは、60階建て超高層ホテルだ。

立地の関係上IS学園から近いと言う事もあり、学園を訪れる多数のVIPが泊まる事でも有名なホテルだ。

現在地はこのホテルの最上階スイート・ルーム…何故か俺は政府の皆様に向けて下げられ…というか土下座されて、この部屋に監禁される事になった。

とは言え何故か束も一緒に滞在しており、千冬も今此方に訪ねてきている。

「一夏と言い、お前と言い…束、これはどういうことだ…？」

「え〜、天才である束さんに言われても分からないかな〜？ いくつかは悪戯で触らせたなら起動しちやっただけだし、あつくんは事故だよ？」

「束、後で折檻」

「ちーちゃん酷い！」

俺と束、千冬はそれぞれソファアームに座り込んで近況を報告し合う。

俺の思った通り、最近までの俺の動向と言うのは束からは伝わってなかったらしい。



まあ、追われてる身の人間がちよくちよく織斑家に顔を出してるともなれば、マークされちまうからな…。

「まったく、お前もお前で連絡手段は他にあっただろうが」

「いや、面倒くさくてだな…」

「お前も折檻だ」

「ひでえ…。で、これから俺は研究所送りにでもされんのかね？」

懐から煙草を取りだして口に啞えながら、冗談交じりに研究所送りと言うワードを口にする。

半ば冗談とも言えないのがこの世界の実情だ。

女性にしか動かせないIS：それを操る男が2人も現れた。

1人は元世界最強の織斑 千冬の実弟である織斑 一夏。

1人は自由国籍持ちの放浪者、アモン・ミユラー。

どうこうするのなら、俺が一番適任だわな…一夏に手を出したら、千冬が大暴れするのは必至だし。

「はあ？凡俗共にあつくん触れさせるとか、ぶっちゃけあり得ないよ？」

「恩人をむぎむぎモルモット送り？冗談もそこまで来ると滑稽だな」

「なんだろう、俺が責められてる様に聞こえるんだが…」

口に啞えた煙草に火を点けて、ゆっくりと煙を吐きだす。

千冬も束もあり得ないと言う顔で首を横に振り、俺の事をじいつと見つめてくる。

俺は何だか居心地が悪くなってしまつて、大きな灰皿に煙草を押し付ける。

「アモン、お前スーツは…」

「持つてる訳ないだろ…」

「仕方ない…仕立ててもらうしかないか…」

千冬は神妙な顔でぶつぶつと呟きながら何か考え事をし、束はニタアツと良い事思いついたみたい顔をしている。

どう考えてもトラブルです、本当にありがとうございます。

「アモン、四月までにこの本に書いてある知識を速攻で叩き込め」

「電話番号でも覚えろつて言うのかよ…？」

千冬は持つてきた紙袋の中から、数冊の六法全書とか電話帳紛いの厚みを持つ本を取り出してテーブルの上に置く。

表紙に書いてあるタイトルはIS工学参考書と誰でもなれる教員参考書…。

ISは兎も角としてだ…教員？

「お前をIS学園にぶち込む。年齢的に学生は無理があるが…な」

「マジかよ…夢なら醒め…!?!」

「んふふ、ISに関してなら束さんが骨の髄まで叩き込んであげる」

「嬉しくねえ…」

千冬は、フツと笑って立ち上がり、俺を見下ろす様にして見つめる。

「できなければ、お前は学生として私に指導される事になる」

「マンツーマンなら言う事ねえんだがなあ…つたく、やるつきやねえか…。どうなっても知らねえぞ!!」

こうして、実質二か月…地獄の勉強漬けが始まる事が確定したのだった…。

## #10 ウサギと悪魔と戦闘狂

IS：インフィニット・ストラトス。

篠ノ之 束が開発したそれは、宇宙空間活動用のパワードスーツとして世に放たれた。

今まで人類が足を踏み出せなかった領域へと押しやるその力は：まあ、確かに世界を魅了しただろう。

束の願いと祈りとを無視する形で。

世界最強の戦略兵器として有名を馳せる事になったISは、各国代表が集まって作りあげられたIS委員会にて一元管理され、国力と言う名の国家間のバランスの元に467個のISコアが均等に配布されている。

皆、兵器としての側面とコアのその特殊な在り方にしか興味が無く、その存在は日夜兵器開発とコアのブラックボックス解析に費やされている。

新しい玩具を武器にしたがるのは人類の悪い癖：そう宣った奴がいたが、なるほどその通りだと納得させられる。

そもそも：『白騎士事件』と呼ばれるISのお披露目会がこの認識の際たる原因だとは思うけどな。

こればかりは、今俺の背中に抱き付いて首元に顔を埋めている女が、子供の様な純粹さを持っていたのがいけなかったんだろう。

天才は、ズレすぎていたんだろう。

「束、邪魔」

「えく、ちゃんとレクチャー…スー…ハー…してるんだからあく」

「うぜえ…」

今日何度目かのやり取りをしながら、俺は急速にこの世界の知識を蓄え続ける。

まあ、今メインで蓄えているのは日本における教育に関する事なんだが…。

20代半ばくらいのオッサンが、学生服来てガキ共に混ざる訳にはいかない…あまりにも羞恥プレイ過ぎる。

通常、教員免許：というのが教師になるにあたって必要になるわけだが、当然のことながら俺はそれを持ち合わせていない。

では、どうやって俺にその免許を取得させるのか：と言う問題が出てくるわけだが、そこは背面パラサイトである束の存在を上手くダシにしたらしい。

篠ノ之 束はやたらと俺に懐いているから、上手く俺を飼いならせることができれば、暫くは俺の傍に篠ノ之 束がいるかもね：なくんてな。

束はISの開発者にして、ISコアのレシピを知る唯一の存在だ。現状コアの再配布がなされていない以上、束と言う存在はどの国も我先にとコンタクトを取りたくて仕方がない。

束を御するものが世界の覇権を握ると言わんばかりだ。

：俺？

こんなヤンチャ娘の手綱なんて握りたくありません。

「クーはどうしたんだよ：放置してんじやねえだろうな？」

「まつさかく、これでもちよくちよく帰ってはいるんだよ？」

手に持ったペンをクルクルと回しながら、常に貼り付いている束を諫める様に言う。

この一か月：寝ても醒めても束が居る状態が続いている。

日本としちや、居てくれるのは助かるだろうがな：。

束は漸く俺から離れて、隣の席に座って寄りかかってくる。

「あつくくんが寝てる間に、きちんと帰ってバイタルの確認くらいはちよちよいのちよいき！」

「：此奴に任せたの失敗だったな」

「なにおう!？」

物は作れても飯は作れなさそうなんだよな：なんか、物作りながら軍用レーション食ってるイメージが強い。

最低限活動できるだけの栄養が確保できてれば、研究していたっていうタイプの性格みたいだな。

：テーブルマナーがなっていないのは非常にいただけないが。

「クーちゃんに関しては、バイタルも安定してるし元気に歩き回れる

し問題は無いさ。後は、ISの訓練だけだしね」

「実際にや、コアの数は468個つてどこか」

「んっふっふ、それはナ・イ・ショ」

束は上機嫌と言わんばかりの口調で俺に擦り寄ってくる。

心なしか、頭にあるメカニカルなウサ耳が嬉しそうにパタパタ動いてる気がする。

俺はそんな束の事をとりあえず無視して、参考書との睨めっこをしている。

：雇い主からの連絡は、俺が初めてISを動かしてから一切来ていない。

情報を寄越さない、依頼内容を言わないの二重苦はいつもの事なんだがな…。

言うまでも無くISはこの世界における中心に位置する存在だ。

そのISに関する知識を集約した機関に潜り込めるなら、それはそれで良しと言う事なのか：それとも、単純に俺が酷い目に合うのを見越してほくそ笑んでるのか：はたまた両方か…。

思わず、ため息が出てしまうが：まあ、何かどうこう出来るわけでは無いし、下手に脱走でもしてみろ…全世界相手に面倒臭い鬼ごっこが始まるからな。

「帰りにえ…」

「…何処に帰る気だ？」

「やっほー、ちーちゃんー愛を、一心不乱に愛を語ろうぜ！」

絞り出す様な声で独り言を言うと、何時の間に現れたのか千冬が俺の頭にハリセンの様に叩き落としてくる。

束は束で千冬に発情したみたいな顔を向けて、ハアハア言うが、一切合切無視されている。

こいつら本当に友人関係を築いているんだろうか？

「外出手続きの書類だ。学園まで来てもらうぞ…？」

「え、あれやるの？あつくんSランク判定だし良いじゃん、やらなくてさ」

「学園側でもデータを正確に取っておきたいそうだ」

束は千冬の言葉にあからさまに不満げにするものの、千冬は小さく溜息をついて片手で頭痛を抑える様に頭を抱える。

ISの操縦に関して、性別の他に適性が求められる。

下はC判定から始まり順番にB、Aとランクが上がり、最高ランクが束の言っていたSランクと言う事になる。

ISを操縦するにあたって、適正が高ければ高い程動かしやすくなると言う事だ。

Sランクに至っては、千冬を含めて世界でも数人しか確認されていないそうだ。

ランクの高さが操縦者の腕前に直結するわけではないが、それでも高いに越したことはないって事なんだが…聞けば聞くほど、ISって欠陥だらけな気がしてくるな…。

「あー、面倒くせえ…実際に動かしているところもしつかり見ておきたいってのが本音か」

「すまないな…サインしたらすぐに準備してくれ」

ブーブー文句言っている束を無視して、俺はさつさと書類にサインをしてコートを羽織る。

久しぶりの外出と言う事もあって、気分的には大分楽だ。

これが晴れて自由の身って言うんだったら、尚更言う事は無かったんだが。

「つたく、高々ISに乗るだけだろうが…いつまで文句言ってるんだ？」

「えー、べつにつく、凡愚共にく、あつくん見られるのく、嫌なだけだししく？」

「ガキか？」

「ガキだから放っておけ」

束は床の上に寝そべって、ゴロゴロと駄々っ子さながらに転がりながらぶつくさと文句を垂れ流し続ける。

千冬はそんな束を過去に嫌と言うほど見て来たのか、ガキと断定してさつさかホテルの部屋を出ていく。

此処で放っておくのも良いんだが、まあ…帰ってきた後のご機嫌取

りが非常に面倒なので少しばかり声をかける事とする。

そもそも、なんで俺が此奴の面倒を見てるのは考えない…考えるだけで頭痛がする…。

「今日はそれなりに時間かかるだろうから、とりあえず帰れ」

「え、なんでさ？東さんが何処に居ようと勝手に勝手じゃないか」

東は転がるのを止めて、俯せのままボソボソと恨み節のように声を出してくる。

幼児退行でもしているのかと思ってしまうが、他人を雑草程度にしか思っていないコイツは、認めている相手に対しては必要以上に素を曝け出す。

息苦しい仮面をかぶっているから身内には甘えていたい…けど、人付き合いのさじ加減が分からないので全力投球…と、まあこんな具合か？

「俺は、ガキの面倒キチンと見れる奴の方が好きなんだけどなあ」

東は、好きと言う単語にピクリと反応を示し、身体をバネの様にして跳ね上げて立ち上がる。

幾分キリつとした顔なのが、なんだか腹立つ。

とは言え、やる気に満ち溢れているのは良いことだ…多分。

「フフー！なら、東さんは用事を思い出したから帰るとするよ！」

「おく帰れ帰れ、あと出来れば暫く来るな…マジで」

東は俺の言葉も聞かずに、バルコニーに出る窓を開けて手すりに上る。

完全にテンションが上がっていて、こっちの言葉なんて全然耳に届いていない感じだ。

「ぼっはは〜い！」

「…躊躇なく飛び降りるあたり、度胸あるな…」

東は俺に向かってブンブンと手を大きく振ってそのまま、バルコニーから飛び降りて姿を消す。

微かにジェットエンジンの様な音したので、何処かへと飛び去ったんだろう…そのまま地上に着地しても無傷な気がする。

何処ぞのデビルオンターさながらに。

俺は最後に一つ溜息をついて、バルコニーに続く窓を閉める。  
早く千冬と合流しないと、あつちはあつちでブツクサと文句を垂れ流しそうだからな…。

IS学園側で用意された車に乗り込んで三十分：沖合に作られた人工島に繋がる長い橋を走り抜けると、すぐにIS学園が見えてきた。

態々、人工島を沖合に作り、そこにIS学園を建設したのにはそれなりの理由がある。

まず、IS操縦者と言うのは国の明日を担う存在となる。

と、なると各国軍隊や企業から熱烈なアプローチ：要はスカウト合戦が繰り広げられることになる。

そうなる学生は勉学どころの話ではなくなるので、そういった余計な雑音から遠ざける為に学園は全寮制となっている。

洋上に作られたのも、訪問者を把握しやすくするためだ：…なんせ、今しがた渡ってきた橋でしか渡る手段が無いからな。

そして、ここが一番の問題：IS学園は各国が制作した最新鋭機の実験場となっている。

現状、戦争なんてものは起きず比較的平和なこの世界は、起きてもテロ程度でIS同士での戦闘と言うものが殆ど起こらない。

IS同士の戦闘と言うと、強いて言えば国際IS委員会主催の大会くらいだが、それも頻繁に起こるわけでは無い。

と、なるとこう言った学園で次世代機の兵器試験を行う方が、様々なデータを取りつつ、他国に自国の技術をアピールする事が出来て一石二鳥で旨味が大きいわけだ。

去年から第三世代型試作機のロールアウトが相次いだって話なので、今年の新生：とりわけ、国家代表候補生と呼ばれるガキ共はその新型機を引っ提げて学園に現れる事になるだろう。

さて：そんな最新鋭機だが、もちろん国家機密の塊だ。

そんなものをおいそれと外部の野次馬：所謂スパイとかの目に触



れさせるわけにはいかない。

機体の盗難なんて以ての外だ。

IS 運用法において、スパイ行為やそれに準ずる行為に対しては厳正に処罰される事になっている。

と、なると外部の干渉が難しくなる洋上に建設する事になるのは、火を見るよりも明らかだ。

また、外部からの攻撃に対してもそれなりの装備があるそうで、結果的に IS 学園は外部から干渉されない1つの国の様な存在となっている。

俺と千冬を乗せた車は学園の地下へと続く通路へと入っていき、ある区画まで来たところで停止する。

どうやら、目的地に着いた様だ。

「随分とまあ…金かけてんな」

「扱っているものが扱っているものだからな…こっちだ」

千冬は此方の歩調に合わせる様に通路を歩きはじめ、俺は千冬の隣を歩いてついていく。

学園だと言うのに、職員の姿が殆ど見受けられない…少しばかり不振には思うものの、今更此処まで来てやっぱり帰りますとはいかないので黙って歩くしかない。

「一夏は元気か？」

「ああ…お前が居なくなっただ後も、元気にトレーニングしていたよ。まったく、変な事は吹き込んでいないだろうな？」

一夏の話題を軽く振ってやると、千冬は幾分か声のトーンを優しくして笑みを浮かべながら話します。

聞いてる限りじゃ、会ったばかりよりかは遅しくなっているようで、俺としても嬉しい限りだ。

一夏との共同生活の中で、一夏に土下座までされて鍛えてくれと頼まれていた。

モンド・グロツソの時の様にはなりたくない、千冬の迷惑になりたくない…なんて言ってな。

最初の内は一方的にボコボコにしてたもんだが…。

「あの癖は相変わらずかねえ？」

「アレだけは中々な…性格もあるし、一度痛い目をみなければ変わらないだろう。さて、お前は此処でスーツに着替えてくれ」

「スーツ…着なきや駄目か？」

ISを身に纏うにあたってISスーツと呼ばれるボディスーツの着用が推奨されている。

耐刃、耐弾だけではなく、耐熱耐寒性能に優れていて、生命維持機能まである優れたものなんだが…とにかくピッチリしている。

俺がそれを着るわけでは無いと思うが、デザインも旧スク水的な物からハイグレオタードまで…羞恥を煽るデザインばかりだ。

女尊男卑社会とは言え、情熱的な野郎共の熱い拘りを感じずにいられない。

「安心しろ、男性用の特注品だ。…流星に私としてもお前にあの恰好をさせる訳には…な」

「どっちにしてもピチピチスーツなんだろう？」

「それは諦めろ」

「はあ…」

俺は渋々諦め、ため息を漏らしながら更衣室へと入っていく。

更衣室に入ると、ビニールに包装されている新品のISスーツが畳んでおいてあるのが見える。

色は灰色…スキューバダイビングなどで使われる、ウェット・スーツの様なデザインだが、背中と腹部、太ももの一部は穴が開いていて素肌を露出する構造になっている。

…露出部分の安全が守られてないと思うんだが。

ぴっちりとした全身スーツは、全裸で着用されるのが普通だ。

股間部分に関しては、キチンとサポーターが入っているので万が一に關しては考慮されているらしい…。

だったら、穴も塞げって話だが。

手早く着ている物を脱いで、スーツを身に纏う。

材質はゴムっぽい感じがする…妙に肌に吸い付く様に引っ付いて、着るのにも一苦労だ。

髪の毛は適当にポニーテールにして纏めておき、IS装着の際に邪魔にならないようにしておく。

着替えを更衣室のロッカーに入れて部屋を出れば、部屋の前で待っていた千冬と目が合う。

「大道芸人…と、言う割には最低限鍛えている感じか？」

「腕つぶしがなきや、痛い目見るのが一人旅つてな。で、検査会場は？」

「ああ、この通路を真っ直ぐ行つた先の突き当りにある扉の奥だ。私は私で準備があるから、また後でな」

「あいよく」

千冬とはその場で別れて、暫く通路を真っ直ぐに歩いていると突き当りに扉が見えてくる。

ISの搬入口でもあるのか中々大きいその鉄扉は、俺が近づくと左右にスライドして扉が開く。

扉の奥は、所謂アリーナのようになっていて、中心にケーブルに繋がれている純日本製IS、『打鉄』が鎮座している。

どうやら、あれに乗れつてことらしい。

以前搭乗した時に、ISの基本的なマニュアルは強制的に頭に叩き込まれている。

叩き込まれている、と言うよりかは本能的に知っているって感じなんだけどな。

打鉄に近づき、その日本の鎧武者の様な装甲に触れて声をかける。

「ま、少しばかり付き合ってくれや…」

打鉄に背を預ける様にして寄りかかると、微かな発光と共に全身を打鉄の装甲が覆っていく。

それと同時にハイパーセンサーから送られる情報がダイレクトに俺に反映され、脳裏に360°の情報が共有されていく。

機体整備に不備はなく、整備班が一生懸命整備していることも十分理解できた。

言うまでも無く、ISは精密機械の塊だ…それを常に万全の状態に保っていると言う事は、それなりに優秀なスタッフを抱え込んでい

るってことか。

打鉄に装備されているのは、近接用の日本刀『葵』、アサルトライフル『焰備』の二種。

拡張領域に格納されている装備を実体化させて、軽く振り回して感覚を確かめる。

パワードスーツ：と、言う事だけあって生身で振り回しているような感覚だな…。

『なんだ、説明もしていないのに装備の呼び出しも熟したのか？』

「頭ん中に叩き込んできたし、叩き込まれてるからな。理論が分かりや、何とかならあな」

『ふむ…では、どれだけやれるのか見せてもらおうか』

千冬から連絡が入ると、些か興奮しているような声で話しかけられる。

努めて気付いていないフリを装いつつ、両手に持ったそれぞれの武器を量子化して格納し、徒手空拳の状態で地上に立ち続ける。

前方に見える扉が開くと同時に爆発音、俺は素早く地を蹴って横に飛び、突撃してくる物体による攻撃を紙一重で避ける。

「今のを反応して見せるか！」

「あからさまだっただよ！やっぱり相手はお前か千冬!!」

突撃してくる物体…それは薄紅色で鮮やかなカラーリングが施された打鉄を身に纏った、織斑 千冬だ。

千冬は何時になく眼光を鋭くさせて、手に持った葵を振り下ろしたまま俺を睨みつけている。

俺は格納した焰備を手早く呼び出して、ハイパーセンサーの伝えてくる予測位置から少しだけずらして、三点バーストによる射撃で牽制を入れていく。

千冬は忌々し気に舌打ちして俺から距離を開け、様子見をする様に地面を滑る様に移動して、必殺の瞬間を待つ。

モンド・グロツソの液晶でチラツとだけ見た、千冬の戦闘スタイル…そのまんまな『一撃必殺』。

凄まじい速度での踏み込みからの振り下ろしは、速度が乗ってる事

もあつて脅威に尽きる。

だが…。

一定の距離を保つての射撃で、データが取れるまで付き合うのも悪くはないが、売られた喧嘩をそのまままっつてのも面白くない。

だから、前に出る。

千冬が回避動作に入った瞬間に、思い切り地を蹴ってスラスターの出力を全開にして前進。

焰備を三点バースト射撃からフルオート射撃に切り換えて弾丸を雨あられの様に吐きださせる。

「猪武者戦法で勝てると思うなよ？」

「まさかなー！」

千冬は俺の突撃戦法を見切っていたのか、爆発音と共に凄まじい速度で俺の背後へと回りこみ、慣性に沿った薙ぎ払いを叩き込もうとする。

俺はその瞬間にスラスターを下方向に向けて無理矢理跳躍し、背面宙返りを行って薙ぎ払いを避ければ千冬の顔面に焰備の銃口を向ける。

「Jackpot!!」

「遅いー！」

引き金を引き絞る瞬間、千冬はその場で超高速で回転。

二度目の薙ぎ払いを焰備に叩き込んで銃口を逸らし、そのまま分断しようとする。

唯一の射撃兵装を潰されたら堪ったもんじゃない俺は、インパクトの瞬間に無理矢理量子化して焰備を格納。

同時に左手に葵を呼び出して逆手に持ち、着地しようとした瞬間に機体が強制的に天地を正そうとしたためにバランスを崩しそうになる。

イチかバチか、PICの制御を行って千冬から離れる様に後方に急加速しつつ一気に上昇する。

こいつ、何か機能が働いてやがるな？

「千冬く、天地正そうとして動かしくいぞコレ」

「初心者用にP I C制御をオートにしてあるからな…と、言うよりだ…お前、本当に初心者か？」

「I Sの一般常識知ってるだろうが…これで二回目だよ…」

溜息を吐きつつ、ハイパーセンサーによる視界内に浮かぶコマンドでP I Cの項目を選択し、オート制御をカットする。

宙に浮いている間、常に感じている強制力から解き放たれて少しばかりバランスを崩してしまふものの、すぐに体勢を整える。

感覚的には魔法で空を飛んでいる時と大した差がないな…これなら十分にやれるだろ。

「初手で叩き潰すはずだったんだがな…」

「叩き潰すって言ったか、おい!？」

「聞き流せ…では、第2ラウンド開始だ」

「つたく、本当に戦闘狂だなテメエはよっ!!」

千冬は真正面から俺に向かって突撃し、刀を下段から逆袈裟で斬り上げてくる。

俺も突進に負けない様にスラストの出力を限界まで引き上げて突撃し、両手に持ち直した葵を袈裟で振り下ろして鏝迫り合いに持っていく。

金属同士がぶつかり合う音がアリーナ全体に響き渡り、衝撃波が床の砂埃を撒き上げていく。

ギリギリと刃同士が擦れ合い、互いに一步も退かない力の押し合いは徐々に熱を帯び、赤熱化しはじめる。

「随分と嬉しそうじゃねえか！」

「中々、張り合う奴が居なければな!っ！」

ピシツと言う音が葵から響き始める。

葵の刀身が力に耐えきれずに亀裂が入り始めた為だ。

このまま続ければどちらかの武器が無くなる形になるし、いつまでも押し相撲をしていては決着が着くわけがない。

なので、俺はあっさりとう葵を量子化する。

押しして駄目なら引いてみる、だ。

力の押し合いがいきなり終わった為に、千冬は無様に体勢を崩す。

俺はその瞬間を見逃さずに素早く葵を再度呼び出し、思い切り振りかぶる。

「間抜け…こいつで終わりだ!!」

「まだだ!!」

「くそっ!!」

千冬は悪あがきとも言えるような無謀な突進を俺に敢行し、俺の打鉄の肩にある二枚の盾を掴んで組み付き、凄まじい速度で俺を床に叩きつけようとする。

俺とて黙って見ているわけにも行かないので、スラスターが焼き付いてしまうのも構わずにエネルギーを全開にして対抗、結果として互いが互いの行きたい方向に行こうとして凄まじい軌道を描いて飛行する事になる。

「テメツ！離せってんだよ!!」

「離すか！ただで負けてやるわけにはいかないからな!!」

「往生せいやあっ?!?!」

千冬の打鉄のスラスターを破壊しようとするものの、自身の機体制御でまだ手一杯な状況で、中々破壊できない。

分の悪い賭けになるが、激突してダブルノックダウンは御免こうむりたい…これでも負けず嫌いなんですね。

なので、俺はISを部分解除して、空中に放り出される道を選んだ。凄まじい速度で落下するものの、絶対防御が働いて怪我することなく床をごろごろと転がっていくと、遙か前方で衝突する音が響き渡る。

「あつたたた…どうだ!?!」

「クツ…馬鹿か貴様は！怪我をしたらどうするつもりだ!!」

腰をさすりながら体を起こすと、粉塵の中からボロボロになった打鉄を引きずるように歩きながら、千冬が鬼の形相で俺に向かってくる。

どうやら、相当ご立腹の様だ。

「お前が往生際悪いからだろうが！」

「なにおう!?!」

俺も起き上げればゆっくりと歩きだし、徐々に徐々に走り出して互いに真っ向からストレートパンチを繰り出してクロスカウンターを決める。

「ぐっー」

「げうっー」

互いに後ろによるめけば、素早く体勢を整えて二度目のストレートを叩き込み、真正面から拳と拳がぶつかり合い、打鉄のマニピレーターが粉々に砕け散る。

こうなると互いに止まる事はできず、打鉄のエネルギーが切れるまで殴り合いが続くのだった。

「うわあ…」

「た、たははは…どうしましよ…?」

「はっはっは、いいんじゃないですかね?」

地下アリーナ管制室…そこに三人の影があつた。

一人はこの学園の制服を着ている為、生徒であることが分かる。

その少女は眼前で繰り広げられる泥仕合に若干引きつつ、曲がりなりに世界最強と張り合っている男を注意深く観察している事が、視線の鋭さから分かる。

一人は席に座ってコンソールを操作してデータをとっている女性…少々幼い顔つきではあるものの、その豊満な胸は目を見張るものがある。

その女性は、泥仕合を繰り広げている先輩とその知人男性に恐れを感じており、微妙に涙目になっている。

そして、最後の一人は温和な好々爺然とした初老の男性…しかし、その柔和な顔からは感じさせない老獪な雰囲気が一筋縄でいかない事を感じさせている。

「まあ、彼自身は大人しいようですし、もう一人の子同様学園で保護する形で構わないでしょう。彼の場合は篠ノ之博士くらいしか後ろ盾がいませんし、好き勝手されてしまうのも面白くありませんからねえ



…」

「年上の後輩って相手しにくいのよねえ、大丈夫かしら？」

「こ、恐い人でなければいいんですけどね…」

初老の男性は、パンパンと手を叩いて二人の気を引き締めさせる。

「はいはい、私達には私達にしか出来ない事でバツクアツプする事に  
しましょう。織斑 一夏くんだけではなく、彼の事もね」

「了解了解♪」

「はい…わかりました」

## 悪魔と少年と女の園

### #11 華のIS学園

針の筵と言う言葉がある。

要約すると、居心地が悪いと言う意味なのだが、俺は今その状況に立たされている。

腰まで伸びていた髪の毛は千冬に肩甲骨辺りまで切り落とされて、後ろにゴムで纏めている。

前髪も整えてオールバックにし、目つきが悪いと千冬に言われたので仕方なく伊達メガネを着用。

衣服もいつもの一張羅ではなく、パリッと糊の利いた新品のスーツを着用している。

色は好みの問題で黒…ネクタイは流石に赤にしたけども。

兎も角、どこに出ても恥ずかしくない社会人らしい恰好で、俺は今教壇に立たされている。

では何故居心地が悪いのか…それはこの場所が他ならぬIS学園であるからだ。

言うまでも無くIS学園は女性しかない、一部の…いや、殆どの男性垂涎の環境だ。

しかも右を見ても左を見ても、なんだつたら後ろを見ても将来有望な美少女ばかりだ。

IS乗りは必然的に顔を晒し、体型も晒しとなるので自分に自信のない奴は積極的に関わろうとは思わないのかもな。

それでも特権だけは振りかざしてくるんだけども。

話を戻して…ISに関わる分野において、女性の比率が大きくなるのは避けられない問題であり、俺なんか教壇に立つなんてことは本来はあり得ない訳だ。

痛む筈のない胃がジクジクと痛んできている気がするぜ…。

「あ、あのう…とりあえず自己紹介だけでも…」

「そだな…まあ、うん…」

隣に立っているこの教室……1年1組の副担任である、山田 真耶は物凄く申し訳なきように両手を胸の前で組み合わせて見上げる様にして此方を見上げてくる。

両手を胸の前で組んでいる所為で、あのオツパイお化けの束を越えるサイズの胸が腕に押し潰されて形を変えている。

うーん、でかい……

至ってポーカーク・フェイスを気取っているので、そんな思考は読み取られていないだろう……つつーか、読み取られたら俺は社会的に……死ぬ……ツ。

「あー、アモン・ミユラーだ。まかり間違つて大道芸人から学園勤務の教師見習いになった。安心しろ、ISは教えない。教えるのは一般教科の方だ」

「……」

「え、えつとお、皆さんご存知の通り此方のアモン先生は世界で二人目の男性適性者です。ISに関する座学、及び実技は皆さんと混ぜて学んでもらう形になりますのでよろしくお願いしますね」

真耶が補足する様に俺の立場を説明すると、教室に居る生徒からは好奇の視線、敵意の視線、安堵の視線——最後のは言うまでも無く教団の真ん前に居る一夏からの視線——……様々な視線が俺に突き刺さる様に注がれる。

真耶が言った様にISに関してズブの素人である俺は、この1組の教室でISに関する授業を受ける事になっている。

流石に、ISに関わっていない人間が教鞭を取るなんてことは許されないからな……妥当っちゃ妥当だろ。

とは言え、そう言った座学や実技の合間に少ないとは言え、給料分のお仕事はきっちり熟さなきやならないんで、非常に忙しい生活になりそうなんだが。

IS学園において一般教科ってのは、あまり重要視されていない。あくまでも、ISに関わる人材を育成する事がメインとなっているからだ。

ぶつちやけ、いらぬ子扱いされるのが目に見えている。

「何か質問あったら答えるが…あるか？」

「二はい!!」

「お、おう…じゅ、順番にな…?」

痛いほどの沈黙を打破するために教室全体を見渡して質問を募ってみると、まるで餌が仕掛けられた釣り針に食いつく熊…いや、魚の様に一斉に手が上がる。

ほぼ教室内に居る人間全員の手が上がり、それだけ男性と言う存在が珍しいんだと言う事を認識させられる。

ただまあ、一夏まで手を上げているのはどうなんだろうか？

「じゃ、まあ…自己紹介ついでに質問してみろよ、一夏」

「お、おう。と、とりあえず自己紹介から…」

一夏を指名すると、女子からはガツカリした様な溜息と同時に、親し気な雰囲気を見抜かれたのか少しだけざわついた空気が漂ってくる。

俺は手で一夏に立つように促し、様子を見守る。

さて、一夏はある意味俺より特殊な立場の人間だ。

織斑 千冬の実弟、篠ノ之 東が心を許している数少ない人間、そして…世界で最初に確認された男性IS適正者だ。

ほぼ同時期に俺も動かしているとは言え、人間関係から考えて何かしらの因果関係を推測されている一夏は、世界でも注目の的になっている。

なんせ、テレビでも勝手に特番を組まれて紹介されるくらいだからな。

まあ、それは俺にも言える事なんだが、交友関係が謎に包まれている俺は番組で好き勝手言われてたなあ…大富豪の放蕩息子とか、元ヤクザのチンピラとか。

ああ、でも芸人として公園で芸を披露していた時の映像を何処からか拾ってきて流してくれたのは嬉しかったか。

CGだとか何だと言われた時は憤慨したが。

「織斑 一夏です！」

「二……」

一夏は力強く名前を名乗り、背筋をピンと伸ばしている。皆生唾を飲む様に神妙な面持ちで一夏の自己紹介を待ち続けるが、一夏も一夏で何を言うべきなのか迷っているのか中々続きを切り出せないでいる。

色々と言うべきことはあると思うんだよな…姉ちゃんの世話をする過程で異様に家事が得意になった事とか、中学時代モテすぎて男に恨まれ…は無自覚だから無理か。

…鈴の奴に何度相談されたかわからないな…今日も女をたらし込まれたとか、どうすれば女らしくなるだとか…。

元気にしてるかねえ…なんて思いながら無意識に懐に忍ばせていた煙草を取りだそうとして、頭に凄まじい衝撃が走る。

あまりの衝撃に前につんのめって痛みに悶えると、俺の耳に鋭いナイフのような声色が飛び込んでくる。

「貴様、SHR中に煙草を吸おうとするんじゃない」

「つったー!!千冬…叩くことねえじゃねえか!」

涙目で俺の背後に立っていた人物、織斑 千冬は手に持った出席簿の背表紙で自分の肩を叩きながら、俺の事を見下す様に見つめてくる。

…出席簿から煙がでてるんだが…。

俺は頭をさすりながら体勢を整え、千冬の背後の黒板に手を突きながら詰め寄る。

「お前な…せめて口頭注意にしろってんだよ!俺だから良いもの、他の奴らにやったら首が消し飛ぶっつーの!」

「フン、貴様だから加減無しでやってやってただけだ…それとも、貴様はその程度で音を上げるのか?」

「ち、千冬姉!それにアモンも落ち着いて!!」

千冬の脅力は人間の範疇を軽く超えている。

あれは、IS適性検査の片づけを手伝わされていた時だったか…ISのクソ重い装甲版を片手で軽々と持ち上げて運んでいたのを見ました。

ゴリラなんてもんじゃ断じてない…もつと恐ろしいものの片鱗を

見てしまった気分だ。

千冬ならISに乗らなくても、ISを打倒できる気がする…。

互いに一步も退かずに睨み合っていると、背後の生徒達から凄まじい視線を感じて思わず顔を向ける。

「「き…」」

「…き…」

「「キヤーーツ!!」」

衝撃波もかくやと言わんばかりの大音量の悲鳴が教室を駆け巡り、俺と一夏の体に叩き付けられる。

あまりの音量に思わず両手で耳を塞いでしまうほどだ。

喜びや悲哀その他諸々が混ざった悲鳴は、びりびりと窓を振動させる。

ちら、と横目で真耶を見ると顔を真っ赤にして悲鳴を上げていやがる…。

「ち、ちちち千冬様！生千冬様よ!!」

「壁ドン！壁ドン!!」

「千冬様！そこにいるどこの馬の骨とも知れないヤクザ崩れと付き合っているのですか!？」

「誰がヤクザだコラ」

千冬はこの業界において、引退しているにもかかわらずトップの人氣を誇る女傑だ。

ISにおいて一番有名なのは誰かと問われれば、間違いなく千冬とされる。

それだけ、千冬の選手としてのスター性は凄まじいものがある。

強く、美しく、なによりも実直なその性格が、男性だけでなく女性のハートを射止めたんだろう。

「まったく…毎年毎年似たような輩ばかり集めて…」

「いや、IS業界の人間としちゃ当然の反応じゃねえかなって…」

「織斑、貴様もまともな自己紹介くらいしてみせろ！」

「無視かよ!？」

千冬の言葉に反論してやると、それを無視して一夏をキツめに睨ん

で叱責する。

一夏は普段とは違う千冬のその様子に体を少しだけビクつかせ、しかし疑問を解消するべく口を開く。

「な、何でこんな所に居るんだよ、千冬ねっえっ!？」

「ここでは織斑先生だ」

「ま、ママ・イエス・ママ…」

しかし、千冬は聞く耳持たないと言わんばかりに手に持っていた出席簿を一夏の頭に叩き落として強制的に座らせる。

音を聞く限り、確かに俺よりは加減している辺り区別はつけてるのか…なんて思っている俺の足を千冬が思い切り踏みつけてくる。

こいつ、俺が頑丈なのを良い事にサンドバックにするつもりじゃないだろうな!？」

「千冬姉…って…本当に姉弟なんですね!？」

「羨ましい…千冬様の傍に居られるなんて…」

…あの汚部屋を見ても同じことが言えるのか知ってみたい気はするものの、俺とて命は惜しいので黙っておくことにする。

それに夢見る少女の夢を壊しちゃならねえ…やっちゃいけないんだ…。

俺が家を出るまでにある程度は改善出来ていたんだが…何処まで片付けられる様になったのやら？

「さて…SHRは終わりだ。諸君らには半月でISの基礎知識を骨の髄まで叩き込んでもらう。代表候補生であつても例外は無い。皆等しく扱わせてもらう。文句がある者は前に出て反論して見せる」

「「……」」

辛辣、ともいえる様なその言葉には、決して落ちこぼれは出させないと言う意志の顕れ。

ISと言うものを熟知しているからこそ、ISに関わるものをしつかりと育て上げようと言う矜持なのかもしれないな。

いい加減踏んでる足をどけてもらいたいが。

「ないな?…私の言う事には必ずハイ、もしくはイエスで答える。反論は許さん。基礎知識習得後に実習となるが、コレも半月で身に着けて

もらうう…いいな!？」

「「ハイ!!」」

千冬からあふれ出る鬼教官のオーラ…恐らくドイツでの経験を活かしてのそれは、あつという間に教室内の生徒の心を掌握していく。

あの一夏でさえ、条件反射で返事をするくらいだからな。

千冬は全員の反応に満足したのか、小さく頷いてから俺の方へと目を向けて踏んでいた足を退ける。

「では、これよりIS基礎理論に関する授業を始める。アモン、貴様は後ろにある席について受けろ」

「お、おう…」

千冬に指示されるまま、後ろに一つだけ空いていた席に向かって教壇から歩いていく。

基礎理論や何やらに関しては、束からあの手この手で叩き込まれたので問題は無いと思う。

問題は、この女子特有の雰囲気になれるかどうかなんだが…無理そうだな…。

「もうダメだあ…おしまいだあ…」

「諦めんのはええよ…ちったあ、気合入れてやれつつーに」

一時間目終了後、俺は質問責めに合う事を避けて一夏の元まで向かう。

色々詮索され過ぎるのもウザったいからな…変に想像されるのも御免こうむりたいが。

一夏は事前に知識を蓄えていなかったのか、最早頭から煙を出して突っ伏している。

俺はそんな一夏の頭をくしゃつと撫でて労う。

「しっかしまあ、束の悪戯とは言え面倒な事になっちゃったなあ」

「あれ、束さんの悪戯だったのか…そんな事より!今まで何処ほつき歩いてたんだよ!？」

一夏は俺に頭を撫でられていると、勢いよく立ち上がって俺の事を



睨み付けてくる。

「どうも、定期的に連絡をしてこなかった事に腹を立てているらしい。」

「俺は手で一夏を宥めて落ち着かせる。」

「南半球をぐるっと回ってきた感じか…文化圏が違うと食い物も変わるから、旅つてのは飽きねえよなあ」

「連絡くらいいいてくれたっていいじゃないか！野垂れ死んだのかと思ってたんだぜ？」

「ハッ、俺が強えのはお前も知ってるだろうが」

一夏の背を一度強く叩いて気合を入れなおさせる。

ガキに心配してもらおうほど落ちぶれてもいないしな…一夏は背中の痛みに軽く唸りながら、もう一度机に突っ伏して恨み節の様に俺を睨みつけながら文句を垂れてくる。

「連絡なくなった辺りから千冬姉は挙動不審だし、俺だって寂しかったし…心配だつてするじゃないか」

「千冬がねえ…ま、こうして再会したんだし、手が空いてたらまた鍛えてやんよ」

千冬が挙動不審…すごく興味があるな。

その時の映像があるのなら、是非とも拝見してみたいものだ。

一夏は俺が鍛えてやると言う言葉に、不満たらたらだった顔を改めて物凄く嬉しそうな顔になる。

「アモン先生の課外授業…」

「これは…アリね…」

「漫研あるつて言うし、依頼しようかしら…」

非常に不穏な声が聞こえてくるが、俺はそれらを努めて無視をする。

「この年齢の少女の妄想はまず止められない…放置しておくのが良い…具体的には黒歴史になるまで。」

「なつたら、逆にイジれるからなあ…ククツ…」

「で、お前の方はどうなんだよ？」

「変な研究機関の人とか宗教家とか色々家に押し寄せて来たよ…千冬

姉が千切っては投げ、千切っては投げて追い払ってたけど」

「つたく、面倒な肩書持ちちまったなあ…」

「お互い様だろ?」

一夏と他愛ない世間話をしていても感じる好奇の視線に混じった軽蔑の眼差し…何処からかは把握しているものの、あえて触れない様にしている。

こう言った手合いは、まず面倒くさい…女尊男卑そのままの性格をしている場合が多いからな。

何かを言えば自身の自尊心を傷つけられたと思い、強く反発してしまふ。

恐らく、ISに乗れると言う特殊能力を持つ俺や一夏に食ってかかってくるだろう。

できれば…穏やかに行きたいもんだがな。

ふ、とまた違った視線を感じてそちらを見る。

…どうやら、俺はおじやま虫な様だ。

俺と一夏に視線を投げかけるポニーテールの凜とした雰囲気少女は、一夏に話しかけたいのに親し気に話してるところを邪魔したくなくて話しかけられない…そんな感じの戸惑った顔をしているからだ。

「おっと、わりい…ちよつと用事あるから教室出るわ。クラスメイトと仲良くするんだぜ?」

「え、ちよ……そんないきなり!」

俺はそそくさと教室を退散しようと思えばと扉へと早歩きで立ち去る。

アモンのおっさんはクールに去るんだぜ…。

一夏の制止を振り切って廊下に出ると、真耶と恐らく二年生の生徒が何やら神妙な面持ちで会話している場面に遭遇する。

「あら、噂をすれば何とやらね♪」

「あ、アモン先生…」

「先生っつーか生徒っつーか…はあ…で、俺の事で何か気になるのかよ?」

その女生徒は猫の様な雰囲気纏っていて、完成された彫刻の様に

綺麗なプロポーションをしている。

短めの水色の髪の毛は外に跳ねていて、活発な雰囲気醸し出している。

「いえいえ、まさかまさか…ほら、アモン先生は大道芸人だったって話をテレビで耳にしていたので色々調べてたんですよ♪」

「え、ええ…とてもきれいな人形を使っているって聞いていたので。今もお持ちなんですか？」

「なんか寮暮らしになるってんで、荷物送ってあるから教員用の寮の部屋に届いてんじやねえかな？」

露骨な話題の切り替え…の様に思えるが、此方を様子見しているって事だろう。

経歴とかは雇い主の方で色々と改竄してくれてるはずだろうが、それにしたって限界ってものがある。

「ん、それじゃ今度披露してくれるのかしら？」

「俺の芸はタダじゃあ見せらんねえなあ」

「ええ、見てみたいのにい。山田先生もそう思いますよね♪」

「へあつ!?え、ええ!ネットの動画だと凄さがわかりにくいですしっ!」

…基本的に人が良くて微妙に抜けてるんだろうな…真耶は。

驚いた拍子にズレた眼鏡を慌てて直しながら、真耶も女生徒の言葉に頷いて同調する。

この学園の近くに公園があるって話だし、休日にはそこに出かけて芸を披露するのも悪くはないだろうな。

「まあ、金くれるんなら見せてやるさ」

「あら、銭ゲバ」

「じゃかしいわい!」

「きゃ、先生に怒られるう」

女性とは俺を揶揄う様にしながらスキップで逃げて階段を上っていく。

…マジで猫か、ありや…。

姿が消えた所のため息をつき、ジト目で真耶の事を見つめる。

「真耶よう…もちつとしつかりしろよ？俺の事を勘繰ってるのはバレバレだったの」

「い、いえそんなことは!？」

「隠すな隠すな…ま、良いんだけどな」

真耶を茶化す様に言いながら背中を向けて、元来た道に戻る。

休憩時間は有限だからな…千冬のアレは喰らいたくねえし…。

どうやって信頼を勝ち得ていくのか…これからの勤務態度にかかってくるんだろうなあ…。

この女の園での学園生活…思っているよりも厳しくなりそうで、辟易としてしまうのだった。

## #12 お嬢と少年、悪魔と暴君

IS学園における教育は、一般教科と言うものを基本的には軽視している。

当たり前前の話なのだが、この学園はあくまでもIS操縦者育成のための機関であって勉強に励むための場所ではないからだ。

そもそもこの学園設立の経緯は、篠ノ之 束が開発したISで世界が迷惑を被ったから日本で育成機関用意しろ…というのが事の発端だ。

言うだけ言って金は出さないって辺りが、日本の低姿勢っぷりを如実に表している。

日本もある意味では被害者なんだけどな…。

そんなこんなで作られたこのIS学園…設立当初は一般科目なんでものは無かったらしい。

しかし、この学園の理事長が『いざ社会に出た時に高校課程の知識が無いのは非常に拙いのではないのか?』という鶴の一声を上げた事により、事態は一変する。

このIS学園に来た時にとれる進路と言うものは、非常に限られる。

即ち、軍に入隊するか、ISスポーツ選手として活躍するか、それとも研究者として企業に就職するか…というものだ。

一般的な教育課程を経ていない為、もし大学に進学となった場合は独学で高校課程を修める必要があったし、何よりも世間の目は幾ばくか冷たいものもあった。

そんな訳で少ない時間ではあるものの、一般教科を学ぶための時間と言うものが設けられ、この学園の教育方針は『文武両道』と言う事になった。

勿論、一般教科を教える担当教諭も女性で統一されているので、俺の存在は果てしなく浮いてるって言うか、獲物を見る様な目で時折見られている。

女性しかない環境に現れた俺は、さながら腹をすかせた猛獣の檻

に入れられた草食動物のソレだ。

とはいえ、そんな環境でも俺に手を出してこないのは、千冬と東の存在が怖いと言うのがデカいのだろう。

前者は言うまでも無く睨みを聞かせ、後者は後者で機嫌を損ねる様な真似はするなどと言う話が伝わってるそうだ。

あのバカに気に入られたお蔭で、変に気を張らなくていいのは本当に助かる。

…二時間目とは言え、未だに何のアプローチも仕掛けて来ないのは何か恐ろしいものを感じる。

篠ノ之 箒：あの、一夏に話しかけようかどうか戸惑っていた少女の存在のお陰かもしれないが。

「——であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

一時間目の授業は千冬が行っていたが、今は副担任である山田 真耶が教鞭をとっている。

山田はおっとり且つうっかりな印象のある少女の様な女性ではあるが、流石に授業中は確りとした通る声で話をしていて、非常に分かりやすい。

手帳にメモ出来る事を適当に書いていると、隣から視線を感じる。

「…どしたよ？」

「いや、案外真面目なものだと思ってな…」

言うまでも無く担任の千冬である。

千冬は俺の座っている席の隣に腕を組んで立ち、見下ろす様に俺の事を見ている。

俺はそれをちら、と見るだけに留めて授業に専念する。

「良い大人の俺が、遅れをとる訳にやいかねえだろ？あのウサギがレクチャーしたのもISの動かし方くらいなものだったし」

「あのバカが其処まで懐くなんて初めてだぞ…一体、何をしたんだ？」

「さつてなあ…」

互いに小声で会話を交わし、授業の邪魔にならない様にする。

俺の情報を欲しているのか、真耶も此方の会話を咎めようと言う雰囲気は見受けられない。

不信感を露わにして此方を様子見しているのは、金髪のお嬢様と言った感じの少女だ。

確か名前は：セシリア・オルコットだったか。

イギリスの国家代表候補生だったはずだ。

「まあ、あのバカに聞けばイイだけのことなんだが：まったく、お前は変わった男だよ」

「褒め言葉か？」

「まあ、な」

千冬の方へとしっかりと視線を向けると、千冬はその視線から逃れる様に顔を背ける。

若干、頬に朱が差している様に見えるのは気のせいだろうか？

直ぐに顔を黒板へと向けると、視線の先に居る一夏が頭を抱えたように挙動不審にしている。

場の空気に飲まれているのか：それとも予備知識が無い所為で意味が理解できないのか…？

今やっている授業内容はIS運用における法的規則に関する内容なんで、基本的には板書していれば問題無い筈なんだけどな。

「織斑君、此処までで何か分からない事はありますか？」

「……」

そんな挙動不審の一夏を見咎めたのか、真耶はニコニコとした人当たりの良い笑みを一夏に向けて問いかける。

そんな真耶を見て、一夏はギクリと体を強張らせた後にまるで油を指していない機械人形のようにゆっくりと頸を横に振る。

「殆ど、全部：わかりません…」

「え…全部、ですか？」

真耶はそんな一夏の言葉に顔を引きつらせ、困惑した表情になる。彼女は可能な限り分かりやすく教科書の内容を掻い摘んで説明していたし、必要な個所は黒板に書き示してくれている。

これはあれだ…考える事を放棄しやがったな…？

「あ、あの…今の時点で分からない人はいますか？」

真耶はそんな一夏の内情を知らずに自信を無くしてしまい、教室内に挙手を求める。

しかしここはIS学園…ISに関わるべく励んできた少女達には初歩中の初歩の内容である為、俺含めて誰一人手を挙げるものはいない。

そんな教室内の反応に真耶は胸を撫で下ろしつつ、千冬に目配せする。

千冬は深い溜息と共に一夏に向けて歩きだす。

「織斑、入学前に渡した参考書はどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「うゝわゝ…ねえよ…それは…」

一夏のあり得ない言葉に千冬の姿は一瞬かすみ、次の瞬間スパァンツと言う凄まじい音と共に一夏の頭に思い切り出席簿が叩き落とされる。

…教室の床に若干の輝が見受けられるが無視しておこう…俺は、何も見ていない。

一夏はあまりの痛みに頭を抱えて悶絶し、声にならない叫びをあげている。

「馬鹿か貴様！必読とデカデカと書いてあっただろうが！」

「あのなあ、一夏…分からないのは仕方ねえだろうが、少なくとも理解しようとする事は放棄すんなよ。まだ運用規定に関する項目しかやってねえだろ？」

俺も席から立ち上がって一夏へと歩み寄り、一夏の開いている教科書の必要な文面にカラーペンで印しておく。

カラーペンの色を変えて関連性を示し、理解しやすくなる様にしていく。

とりあえず、今の授業の範囲ではこんなものか…？

俺は一通りなぞった後にカラーペンを一夏の手握り込ませる。

「一先ず、真耶が言っていたのはその範囲…あとで読み返しておけ」

「織斑、後で参考書を発行するから一週間で頭に叩き込め」



「…はい」

一夏は渋々と言った感じで頷き、席に座りなおす。その姿を見た千冬は苛立ちを隠しつつ言葉をにつづける。

「いいか、ISの持つ攻撃力、機動力、制圧力は過去の兵器を遙かに凌ぐ。扱える者の理性と知識が伴っていないければ最悪のモノになり得る。誰かを死なせないために、自分を死なせないために基礎知識と訓練を行うんだ。理解できなくても良い、そう言うものだと思って頭に叩き込め。そして、守れ…それが規則だからな」

「…わかったよ、千冬姉」

「織斑先生だ、馬鹿者」

再び、一夏の頭に出席簿が叩き込まれる。

こいつも学習しないねえ…。

俺もそうなんだが、一夏も望んでこの場に居るわけでは無い。

望んでISに乗ろうとも思っていないし、ましてや関わろうとも思っていない。頭に入る訳がない。

だがISと言う存在は、一夏がなろうとしている存在に近づくための近道の一つだ。

だからこそ、一夏は覚悟を決めて今出来る事を必死にこなさなければならぬ。

本当に、その存在になりたいのであれば。

「えっと、織斑くん。分からない所は授業が終わった後、放課後教えてあげますから頑張って？ね？ねっ？」

真耶はうるうるとした瞳で一夏を見つめながら、両手をしっかりと握り込む。

さながら恋する少女の様なその振る舞いは、本当に千冬と同年代なのか疑わしいレベルだ。

千冬は千冬で現実を直視し続けたが故の成熟さを身に付けていて、歳相応とは言い難い所はある。

俺が席に戻って座ると同時に、千冬も定位置である俺の隣に戻ってきた。

「まったく…まだまだまだ子供だな」

「いや、ガキだろ…誰だつて望まなきや此処に来ようとは思わねえさ」  
千冬は呆れた様に溜息をつきながら、一夏と真耶のやり取りを眺めている。

先ほどは一夏に欠片も見せなかった優し気な眼差しは、教師と生徒と言う立場の上では見せる訳にも行かないのだろう。

公私を区別し、律している姿を見せる事で生徒達に規律を分からせようとしているのかは分からない。

「お前は…逃げようと思えば逃げられただろうに」

「鬼ごっこは嫌いなんでね…。それに、見知った人間がいるなら別に嫌って訳でもねえし…」

「そ、そうか…んんっ！山田先生、授業の続きを！」

「は、はひー！」

どうやら真耶は一夏との会話で何かしらのスイッチが入ってしまい、妄想の旅人となってしまっていた様子だ。

千冬が咳ばらいをして意識を戻すと、真耶は我に帰って慌てて教壇に戻ろうとするが足を纏れさせて盛大に転んでしまう。

「あいたたた…」

「…あれ、大丈夫なんか？」

「…出来る女ではあるんだ…彼女は…」

千冬は再び溜息を吐きだし、呆れた様に真耶を見つめる。

本当にしっかりしろよ…山田 真耶…。

二時間目の授業が滞りなく(?) 終わり、休憩時間。

一先ず、軽くおさらいをしてやる為に一夏の席へと向かう。

一夏はやる気を出したのか真剣な表情で教科書を見つめている。

「で、ちったあ分かったのか？」

「少し、ナメてたんだろうな…今のところは大丈夫だよ、アモン」

「なら、良いけどな」

一夏と二、三言葉を交わしていると、ポニーテールが特徴的な少女…篠ノ之 箒が此方へとやってくる。

最初は戸惑うような表情ではあったが、意を決したのか目つきを鋭くさせて話しかけて来た。

「い、一夏、ミユラー先生と親しげだが…知り合いなのか？」

「ああ、一時期面倒見てもらってき。一緒に暮らしてたんだよ」

「こいつの姉ちゃんドイツに行ってたのは知ってるだろ？あの時期にちつと関りがあってなあ」

ケラケラと笑い、一夏の頭をポスポスと叩く様に撫でながら答えると、一瞬にして教室内の女子たちが聞き耳を立てはじめた。

一つ屋根の下に一夏と二人暮らし…そこで繰り広げられた生活を少しでも知りたいんだろう。

期待している事は何一つないんだけどな。

「アモンは口調こそ乱暴だけど、家事全般得意でさ。色々助かったよ」  
「家主に面倒見てくれって頼まれてたからな。そら、キチンとやんなきゃならねえだろ？」

「そ、そうだったのか…その、篠ノ之博士と仲が良いとも…」

「ありや、勝手に懐かれたんだ…やる事なす事実飛過ぎてついに行くのがやつとだつてんだよ」

箒は複雑な表情で俺の言葉を聞き、顔を俯かせる。

この様子だと、束は未だに箒と顔を合わせていないみたいだな…こんなんじや何時まで経つても仲直りできないし、余計に話が拗れる。

これは何かしら一計講じないと箒の…束の為にならないだろう。

かと言ってこっちから連絡する手段がないんで、向こうから接触するのを待つしかないんだが。

「ちよつと、よろしくって？」

「へ？」

「あん？」

「む…」

箒を交えて一夏のあれやこれやと話していると、後ろからいかにもなお嬢様然とした口調の声がかけられる。

俺に向けられる視線の質からして、声をかけてきたのはセシリアだろう。

美しい金の色の髪に透き通るようなブルーの瞳は、同年代の少女とは思えぬ美しさを持っている。

振り返ってセシリアの様子を見ると、どうやら俺たちの反応が気に召さないらしく、目尻がやや吊り上がっている。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ…聞いてるけど、俺に何か用か？」

一夏は、女尊男卑と言う世情を嫌っている事もあってか、威圧的な女性が苦手だ。

そう言った手合いには態度が冷たくなるし、言葉もどこか素っ気無くなる。

そんな態度の一夏の頭に拳骨を軽く叩き込みながら、セシリアを見る。

「セシリア・オルコットだったな…国家代表候補生の」

「教師をする…と、言うからにはその程度の情報はキチンと把握している様ですわね？」

「まあなあ…。で、男性操縦者が気になったか？」

セシリアは、俺の言葉に満足したのか表情を若干和らげ…しかし高圧的な態度は崩さないまま、此方を観察する様に見続ける。

俺には、その姿が虚勢を張って背伸びをしているようにしか見えな

い。

「ええ、どのような粗野な男なのかと思えば、一人は右も左もわからな

い子供、もう一人はただただ粗野なだけでガツカリですわ」

「生憎、お上品なのはどっかに置いてきちまったからなあ…」

「つて…なにすんだよ、アモン!？」

俺が拳骨を落したことに抗議する様に一夏は俺の事を睨み付け、箒もまた同調する様にコクコクと頷いている。

…はっはーん、この娘つ子…一夏にホの字か？

「一夏、どんなに嫌だと思っても態度で示すなよ。外面だけで判断してたら人間の事好きになれねえだろ？」

「別に…俺はそんなこと…」

「出てるんだよ…。まあ、お前の気持ちがわからねえ訳じゃねえけど

な」

確かに、誰だつて高圧的な態度を取られれば嫌な思いをするし、良い印象を持たない。

だが、初対面の人間をその最初の印象だけで嫌つてしまうとするのは非常に勿体ない。

徐々にで良い：他人の事を理解してやれることができれば…。

「わたくしを無視して…わたくしは貴族にして国家代表候補生。こうしてクラスを共にし、話しかけられるだけでも光栄で幸運な事なのですから、それ相応の対応と言うものが…」

「なあ、気になってただけだよ…」

「あら、わたくしに質問ですか…下々の民に応えるのも貴族の務め、よろしくてよ」

一夏はセシリアの事を真つ直ぐに見つめ、セシリアもセシリアで余裕のある貴族らしい態度で一夏の言葉を待つ。

貴族、貴族ねえ…こんな近代化された社会でもそう言うの残ってるんだなあ…。

まあ、英国つてのは伝統を重んじる傾向があるつてのは、旅していて分かつていた事ではあるんだが…。

でも確かオルコットつて名前の貴族は…

『『国家代表候補生』つてなんだ？』

「応、一夏…：テメエ放課後校舎裏な」

「い、一夏…：それはあまりにもあんまりではないか…？」

理解することを放棄するなど言つたばかりなのに、これである。

事もあるうに、字面から言葉の意味を理解する事ができなかつたようだ。

これには箒もガクツと肩を落とし、セシリアはセシリアで驚愕の表情で一夏を見つめている。

「なつ、分からない事は素直に聞いた方が受け入れられるんだぜ!」

「お前は何も分からん赤ん坊じゃねえだろう？読んで字の如くだろうが…」

「信じられない。信じられませんわ…極東の島国と言うのは、こうま

で未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら…」

両拳を握り込み、米神をぐりぐりと擦り付けて一夏に折檻する。

こいつぁ重傷だ…医者も匙投げるレベルの。

俺の弟子だってえのに…腑抜けてんのか!?

「あだだだだ!!ごめん!ごめんってば!ジョーク!ジョークだからあつ!!」

「応、俺には本気の言葉にしか聞こえなかったけどなあ…」

「せ、先生そのくらいに…」

「え、ええ、いくら極東の未開人とは言えやり過ぎですわ…」

あまりにも一夏が痛そうにする所為か、箒とセシリアはドン引きの表情で俺を静止してくる。

俺は一先ず怒りの矛を収めて、手を離しズレた伊達メガネを指で押え直す。

「いくらなんでも千冬姉が国家代表やってたから分かるってば…」

「冗談を言うタイミングくらいは、考えろ馬鹿」

「ごめんってば…」

「まったく…どうしたらこんな男が、この学園に入れるのかしら…?」  
セシリアは呆れた眼差しで一夏を見つめ、深い溜息を吐きだす。

どうしたらと言われればそれは『男だから』と答えるしかないんだが…。

「俺、試験なかったぞ?適正検査でここの教師とは試合させられたけど…何て言うか向こうの自爆で終わったし…」

「な、な…試験を、していない?教師を、倒したですって?」

「いや、だから向こうの自爆なんだってば」

「わたくしだけではないなんてありえませんか!?!」

「まあ、俺は引き分けだったしなあ…千冬の野郎加減無しでブッコミ入れやがったからな…」

今思い出しても悔しい戦いだ…。

ただ、ISのクセは分かったし次は負けない自信はある。

ただ、俺は此処で失言してしまったことを口にしてから気付いてし

まい、思わずソツポを向く。

「ち、千冬姉と…」

「引き分け…」

「ですって…!?!」

「ん、い、言っていない、言っていないぞ、H A H A H A !」

追及する様な眼差しが教室中から集まるが、俺は誤魔化す様にスタスタと歩いて教室の端にある自分の席に戻る。

やらかしちまったな…まあ、千冬が引き分けに持ち込まれるなんて思っている奴らは居ないだろうし、俺の強がりか何かだと思うだろう…と、言うかそう思ってくれると色々と助かる。

「ちよつ、待ちなさいアモン・ミユラー!」

「おう、授業始まるから席に戻れ」

「くつ…真相をキツチリキツカリ聞かせていただきますわよ!」

授業開始の予鈴が鳴り響き、皆渋々と言った様子で席に着いて授業の準備をすると、千冬が教室に入ってくる。

千冬が教壇に立つと、日直が号令をかけて授業を開始…というところまで千冬が口を開いた。

「授業開始前に決める事がある。これから再来週に行われるクラス対抗戦に出場するクラス代表を決める」

さて、このIS学園…実は授業の他にイベントがカツカツってレベルじゃないくらい頻繁に起きる。

原因はこの閉鎖空間と扱っているISだ。

基本的にIS学園は全寮制であり、休日の外出も前日までに外出届を出すことが絶対となっている。

つまり、息抜きがしにくい環境だ…これは年頃の少女にとって非常に痛手だろう。

勿論、生真面目な生徒には関係が無いだろうが、それでも息抜きは大事だ。

そして、ISの仕上がり具合や操縦者の習熟度を見る為に各国の機関から視察に来る為のイベントも必要となる…。

この二つの難題をクリアする為に、まず五月の頭に食堂のスイーツ

パスを賭けたクラス対抗戦が催される。

更に六月に各国の視察団の為にトーナメントが開催され、七月の頭には一年、二年の修学旅行、九月に学園祭 e t c . e t c . . . 兎に角 spans が短い。

基本的な運営は生徒会が行っているもので、教師陣は警備面でのフォローをすれば良いそうなんだが、それでもこの学園は人手不足。

あれもこれもと教師が手伝わなきゃいけないのが実情なんだそう  
だ。

さて：このクラス対抗戦：最初の息抜きのお祭り的な見方がされているものの、本質は各クラスの代表がどれほど IS 操縦技術に長けているのかを見る為のものだ。

基本的に代表に選ばれる人間と言うものは入試試験で優秀な成績を修めた人間になるんだが：。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。一般的な学校で言うクラス委員長と言うやつだな。クラス代表は先ほど述べたクラス対抗戦の他に生徒会の会議や、クラス内における議長などもやってもらうことになる。自薦他薦は問わない。一度決まったら一年間は変更無しなのでそのつもりで」

千冬がある程度説明してクラス全体を見渡すと、一斉に女子から挙手が上がる。

もちろん、女子達は自薦等ではなく他薦をするために、だ。

「こりゃ、一混乱あるかねえ：？」

「何か、あつたんですか？」

ボソリと呟くと、俺の言葉に気付いたのか真耶が此方に顔を向けて首を傾げる。

俺は小さく頷くだけに留めて、見守っていれば分かるという風に顎で指し示し、事の成り行きを真耶と見守る。

やはりと言うか何と言うか、他薦に上がるのは一夏の名前ばかりだった。

「候補者は織斑 一夏：ほかに居ないか？」

「候補者って、俺エ!？」



「うるさい、邪魔だ。居なければ、クラス代表は織斑となるが…」

「お、俺はそんなあのやらないってばうんっ!？」

一夏は今の今まで現実を直視していなかったのか、話をよく聞いていなかったようだ。

自分が選ばれそうになって慌てて立ち上がり抗議するものの、千冬の容赦ない出席簿による一撃——それも背表紙で——を頭頂部に受けて席に倒れ込む様に座る。

ピクピクと痙攣しているところをみるに、結構本気でぶち込んだな…？

「自薦他薦は問わないと言った。他薦で選ばれたならば覚悟をしろ織斑。拒否権は無い」

「い、いやでも——」

どうも、一夏はただでさえ目立っていると言う状況で更に目立つような立場になるのを回避しようとしているな。

人間、時には諦めも肝心ってな…男なんだからいい加減、腹を括ればいいのに…。

一夏が必死に反論しようとした瞬間、突如甲高い声が教室に響き渡る。

「待ってください！納得がいきませんわ!!」

そんな甲高い声を上げ、机を思い切り叩きながら立ち上がったのは言うまでも無く、セシリア・オルコットの嬢ちゃんだ。

あのプライドが高そうな性格から言って、確実に声を上げるとは思ったが…。

チラ、と真耶を見るとピクピクと怯えたような表情で事の成り行きを見守っている。

そのサマはあれだ…完全に小動物的な物にしか見えない…よく、教師やってこれたな…。

「このような選出は認められません！大体男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにこのような屈辱を一年間味わえと言うのですか!？」

「セシリア・オルコット嬢、落ち着けて。千冬は自薦他薦は問わな

いって言ってたろ？選ばれなかったのはそういう事だし、お前は自薦すんのか？」

「ホラ吹きはだまらっしゃい!!」

「お、応…若いってえのはすげえな…」

セシリアはプライドが傷つけられたことが非常に腹立たしい様で、怒りの矛先を彼方此方に向けながらヒステリックに語気を荒げる。

つか、ホラ吹きなんて日本語知ってる辺り、この学園に来るために日本語をみっちり学んできたんだな…。

ただ、俺に向かつて暴言を吐いたのが癪に障ったのか、千冬が目がスツと細められる。

勿論、セシリアはその事に気付いていない…まあ、此処で痛い目を見るのもいい経験になるだろうから、俺は黙っている事にする。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然！にも関わらず物珍しいからと言う理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはISの技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気なんて毛頭ありませんわ」

「絶好調だなあ…」

「あ、アモン先生、何を呑気な」

流石にセシリアの言動が拙いものだと言う事を理解し始めた教室内の人間は、ザワザワ騒めき始める。

俺は煙草でも一服したい気分でその様子を眺めているが、止めましょうよと言う真耶を一瞥するだけで黙らせ、欠伸をする。

言うまでも無く、IS学園の生徒と言うのは多国籍…だが、ここに日本人が居ない訳じゃない。

極東の猿なんて言われて良い思いをする奴はいないだろう。

貴族がこれでは、イギリスって国も底が知れると言うものだ。

とりあえず、なんだ…一度ぶつかり合うのが良いだろう。

そうでなければセシリアももう止まらない。

なんせ国家代表候補生とは言え、その実力を知るものなんてこの場には誰一人居ないのだから。

「大体ですね、文化としても後進的なこの国で暮らすこと自体、わたく

しには耐えがたい苦痛で——」

「英国だって大差ないだろ…世界一不味い料理で何年覇者なんだよ？」

「応、一夏、安い挑発に乗るなっつに…」

「だから、呑気な事言わないでくださいってば！」

流星に自国を馬鹿にされてカチンと来ない人間は居ないだろう…一夏もその例に漏れず声を荒げてぼそつと呟いてしまった。

セシリアの耳にもその言葉が届いてしまったようで、顔を茹蛸の様に赤らめて怒りを顕わにする。

「なっ…!!祖国を侮辱するのですね!!」

「応、ここでストップだお嬢ちゃん…最初に殴ったのはアンタの方だぜ？」

流星にこれ以上はセシリアの立場が最悪なレベルに堕ちてしまうので、俺が割って入る事にする。

俺はセシリアの頭をポンと撫でる様にして『無理矢理』座らせ、鋭い視線を浴びせる。

「お前、日本人の事を…日本の事を侮辱する差別言葉を吐いたことに気付け。『国家代表』になろうって人間が、簡単に喧嘩吹っ掛ける言葉を吐くんじゃねえよ。第一だ…ISを作った人間の祖国が何処だか忘れたとは言わせねえぞ？」

「っ…」

セシリアは俺の指摘を経て、漸く自分が口走った事に気付いたのか顔を蒼ざめさせて俯かせる。

とは言え、セシリアが言ってる事ももつともな所はある。

クラス代表に相応しい者を選出するには、必要な儀式になるだろう。

「とは言え、実力も何も無いであろう一夏を面白半分ですいーツパス獲得の為に選出するのも怖いだろ？」

俺は大仰に両腕を…それこそ演劇でもするかのようなオーバーリアクションで、広げてクラス全員を見渡す。

千冬は何を俺が言い出すのか気になるのか、腕を組んで見守って

る。

「だからな、一夏、セシリア：お前らISで決闘しろ。勝った方が実力があるんだから、そいつをクラス代表に据えるんだ。サンプルで分かりやすいだろ？」

「確かに：セシリアの実力分らないしね：」

「うん、安易に選んで泣きを見るのもね：」

千冬の言う自薦他薦って言う趣旨とはかけ離れてしまうものの、今後の此奴らの学園生活の事を考えれば、この形で決着させる方が一番禍根が残らない。

他薦で一夏を選出した生徒達も頭が冷えたのか、俺の言葉に同意し始める。

「女に全力出すってのもな：」

「一夏：何、ナメた事言ってるんだ：テメエ：」

「っ：!!」

一夏は基本的には所謂日本男児：弱きを助け、強きを挫くと言う性格をしている。

そんなもんだから、男尊女卑とは行かないまでもそれに近い思考をしてしまっている。

つまり、女性は男性が守るべきだと言うフェミニズムだ。

だが、これは勝負事：一度戦場に出れば男も女も無いのだ。

俺は殺気に近い気配を一夏にぶつけ、ゆっくりと歩み寄る。

「ガキが：俺が何教えたか忘れたとは言わせねえぞ：？」

「っあ：っ、ごめん：何事も、全力で、だった：」

「応、分かっつてりや良い：それに免じて次の扱きメニューは地獄の二丁目で勘弁してやる」

「ひい：い：」

俺はニツコリと笑みを浮かべながら一夏の頭を撫でてやるものの、一夏は完全に委縮してしまいガタガタと震えている。

短期間で強くなりたいうて言うから組んだメニューってだけなのに：ったく。

「まったく、勝手に話を進めて：だが、まあ良いだろう。男性操縦者の

データは学園としても多めに越したことはない。アモン先生の協力があるとは言え、な…。決闘は一週間後の月曜日、放課後第3アリーナで行う事とする。織斑、オルコット両名はそれまでに準備をするのと良いな?」

「ええ、完膚なきまでにその男を叩きのめしてみせましょう」

「アモンや千冬ね…織斑先生が見てるんだ、負けられるかよ!」

一夏とセシリアは互いに手袋を投げつける様に睨み合いを行い、席に座る。

まさしく一触即発…そんな雰囲気の中、千冬が更に言葉を続ける。

「勝者には特別にアモン先生との模擬戦闘を組ませてやる。…私と張り合ったその実力を直に味わうと良い」

「!!?!」

「おう、千冬…どういうことだ?」

黙ってれば余計な混乱を生まずに済むものを、千冬はケロツとした顔で首を傾げる。

美人がそう言う動作をするのはそれなりに萌えるが、そうじゃないだろ…。

「なに、お前がナメられると言う事は私がナメられると言う事に等しいからな…構わないだろう?」

「いや、その理屈は可笑しい」

「ふん、最早決定事項だ。貴様はただ戦えば良い…本気でな?では、授業を始める!」

暴君ここに極まれり…もちつと静かに学園生活を送りたかったと言うのに、やはり面倒事に巻き込まれたらしい。

俺はワザとらしく溜息を吐いてトボトボと自分の席に戻るのだった。

## #13 初日の終わりに

「さて、これで今日の授業は最後になる訳だが：世界史つてのは人類が歩んできた膨大な記録の一端に触れる事ができるものだ。オカルト的な話になるが、お前たちの前世が生きていた時代に触れる事にもなる：1つ1つの時代に興味を持って接してもらいたい。今、こうして安穩としていられるのも、そうした時代の積み重ねの上に成り立っているんだからな」

授業の締めくくり：午後に一時間だけ設けられた一般教科の時間が終わりを告げる。

皆、あまり興味が無いように見えるがそれも仕方ない：なんてったって、此処はIS学園。

ISの技術を学ぶための物であって、一般的な学業と言うものはどうでも良いと考えている連中の方が圧倒的多数だ。

ましてや女尊男卑社会：俺の言葉なんて更に通りづらくなる。

分からない様に溜息を漏らすと、小さい声ながらも『ハイ』と言う返事が返ってきて少しばかり嬉しくなってしまった。

うゝむ：案外、俺もちよろいもんだ。

日直が号令をすれば、そのままSHRの流れになる。

俺は一旦教壇から降りて黒板の脇に真耶と共に控える。

「教師は：初めてでしたよね？」

「んあ：う？そだよ。なんせ、今まで浮浪者やってたもんで」

「それにしても、簡単なながらも分かりやすく伝えてましたよね：まるで見て来たみたいに」

「そうかねえ：う？」

俺は真耶とは視線を合わせずに、生徒達をぼんやりと眺めながら受け答えをする。

幾度か世界を巡ってきたお蔭かは分からないが、ここ最近まで似通った歴史を持つ世界に行った事があるお蔭で色々と教えるのが容易かった。

ちよつと興味を惹きそうな、それでいて専門家しか知らないような

話を交えつつだっただが…まあ、まだ興味を惹くような話題には至らなかったみたいだ。

こちら辺は仕方ない…やれる事やってダメならダメで分かりきっていた結果な訳だし、飼い殺す為に俺を学園に雇っているんだ…教師としての力量は期待しちやいないだろう。

…この世界の中心であるISに触れるにはピッタリの場所ではあるが、本当に此処に居るだけでアイツは満足するのだろうか？

此処の所連絡が来ない所を見ると、そこまで大それた事はしていないみたいなので、問題は無いようにも思えるんだが。

「では、連絡事項は以上だ。部活動の入部申請は今日から受け付けているので、各部部长に今配った申請書を提出する様に。織斑、貴様は補習があるので教室に残る様に」

「ハイ！」

「では、解散！」

千冬が手を叩くと、一夏を残して一斉に生徒達が教室を出ていき、残るのは俺を含めた教師三人と一夏だけになる。

黄昏時の教室は現代的な内装だと言うのにも関わらず、少しばかりノスタルジックな気分させられる。

人が居なくなつたのを見計らって伊達メガネを外して背伸びをすると、千冬達にじいっと見つめられる。

「な、なんだよ…」

「…いや、眼鏡はやはり違和感があるな、と」

「そうでしょうか？」

「えつと、ちふ…織斑先生と俺はアモンと一緒に暮らしてたからさ」

「ああ…そうそうでした」

千冬にしろ一夏にしろ共同生活を長く送っていたと言う事もあって、俺が眼鏡をかけていると非常に違和感を感じる様だ。

一応インテリっぽく見えると千冬から押し付けられた、フチなしスクエア眼鏡なんだが…千冬の趣味なんだろうな…以外にも眼鏡萌か？

「でも、ミユラー先生…髪形もあいまって、なんだかその筋の人に見える

ますね…」

「ああ、インテリヤクザ…」

「あのなあ…」

真耶が頬を指でなぞる様にしながら揶揄う様に言うと、一夏が便乗して頷いてくる。

俺は思わず仏頂面で髪の毛を掻くようにして乱し、いつもの野暮ったいヘアースタイルに戻す。

ピシツとしていると、どうにも堅苦しい生活を送っていた頃を思い出してゲンナリとしてしまう。

あの頃が悪かったわけでは無いし、良い思い出も苦い思い出もある…今の俺を形作る重要な物だ。

決して、いらぬ思い出ではない。

「さて、お話は此処までだ。山田先生、後は頼むぞ」

「はい、お任せください！」

「一夏、補習終わったら…そうだな、グラウンドにジャージに着替えて出て来い。揉んでやるよ」

「お、おう！」

千冬と共に教室を出る前に、一夏と約束を取り付ける。

補習も大事だが、周囲の目に晒され続けた鬱憤も晴らしてやる必要がある。

ただでさえ、ストレスで思考を放棄しがちだから…体を動かせば少しは発散できるはずだ。

一夏は俺が相手をするのが余程嬉しいのか、満面の笑みを浮かべながらノートを広げ始める。

まるで、ご褒美を前に喜ぶガキみたいな顔だ…いや、まだガキなんだが。

千冬と一緒に教室を出て、廊下を歩く。

生徒達は俺と千冬の組み合わせを見て、ヒソヒソとした声で何やら話し込んでいる。

「で…なんで煽る様な事を言ったんだ？」

「なんだ…オルコットの暴走の時の話か？」



黙々と歩いている事に耐えられず、階段を降りる最中に思わず声をかける。

すると、千冬は立ち止まって俺の方へと振り返り見上げてくる。

何処か、不敵な笑みを浮かべながら。

俺はそんな千冬を真っ直ぐに見つめ、静かに頷く。

「俺の実力云々なんて言うのはどうでも良い事だったろ？此処にはお前目当てで来てる奴らも居るし、失望させるようなことを——」

「アモン、それでは駄目だ。私に憧れているからと言う理由でこの学園に入っているのであれば、早急に退学した方が良い。この学校は実力だけが物を言う。実戦然り、座学然りだ。憧れ等と言う少女染みた幻想を持つ者はついて来れなくなる」

「…それとこれとは関係あるのか？」

「…私は弱い人間だ。弟一人守れなかった…お前が居なければ…一夏だっけどうなっていたか…」

千冬は齒を強く食いしぼり、視線を俺から逸らしながら俯かせる。

千冬の根っこに根付いてしまっている部分…たつた一人の家族を守れなかったと言う悔恨。

無事だったから良かった、では済まされないそのプライドが千冬を苦しめているんだろう。

純粹に憧れを向けられれば向けられるほどに、『世界最強とは呼べない弟すら守れなかった女』と言うギャップに苦しめられる。

不器用なものだな…ただ単に間が悪かったっただけなのによ。

「なつちまっただもんは仕方ねえし、今回は次がある。ましてや、アイツはIS乗りになれるんだ。いつまでも過保護でいると、アイツも成長できねえぞ?」

「本音を言うとな…ISになんぞ、関わってほしくなかったよ。アイツは…一夏だけは普通に暮らし、普通に結婚し、普通に死んでいく…そんな人生であれば良かった」

「願うのは勝手だが、世界はそれを聞き入れはしねえ。どうあつたつて巻き込まれる時は巻き込まれる。束が如何こうしなくても何れ、IS乗りになつてたろうよ」

一段一段ゆっくりと階段を降りて、すれ違いざまに千冬の頭に手を乗せ撫でる。

すぐに手を離して通り過ぎ、振り返らずに俺は階段を降りていく。「何が最善なのかどうかなんて俺も、お前も、束にだって分かりやしねえんだ。その遠きその時の最善の選択をしていくしかねえ。だからよ、いつまでも凹むんじゃねえ…イイ女が台無しつてもんだらうよ」

「アモン…それでも…私は…」

「俺をダシにして、自分を示すんじゃねえ。自分を示すんなら、自分でやりな。そう言うのは、卑怯だろ？」

階段の踊り場まで降りて立ち止まり、顔だけ振り向いて千冬を睨む。

確かに、千冬は強いだろう。

ことISにおいて右に出る者は、イタリアの国家代表くらいだって話も聞いている。

そんな中、打倒し得る可能性を持つ人間が目の前に現れれば…自己証明の為に利用したくもなるか？

ダシにされる方は、堪ったもんじゃねえけどな。

「弱音なら聞いてやる…いくらでも、何度でも、キチンと聞いてやる。だからせめて、気高く居ろよ。一夏の頼れる姉ちゃんだからな」

「…すまない、アモン」

「じゃ、ま…会議頑張れよ。俺あ煙草吸ってくらあ〜」

再び歩きだし、千冬を置いて玄関口まで向かう。

放課後と言う事もあつて皆部活動の方にご執心の様で、何処からかブラスバンドの音やトレーニングに励む運動部の声が響いてくる。

青春やつてんなあ…なんて、おっさん臭い思考を巡らせながら喫煙所のある方悪へと歩いていくと、ベンチに用務員と思しき初老の男性が腰掛けていた。

視線の先には綺麗に整備された花壇があり、色とりどりのチューリップが咲き誇っている。

「おや…貴方も一服ですか？」

「生憎とドップリ浸かっててなあ…こればかりは止められねえんだわ」

俺の存在に気付いた男性は、柔和な笑みを浮かべながら懐から煙草を出して見せてくる。

どうやら肩身の狭い喫煙仲間らしく、数少ない男性と言う事もあつて自然と笑みが零れる。

男性の隣にどっかりと座つて足を組めば、煙草を一本口に啜えてオイルライターで火を点ける。

一般的なガスライターでは潮風の強い学園では火を点けにくい…こんな環境でも吸おうつて言うんだから、俺も相当な酔狂だな。

「ふー…で、あれはアンタが？」

「ええ…昔から土いじりが好きでして。少しでも学園に華やかさをと少しずつ整備してるんですよ」

まあ、見向きされないんですけどね、と朗らかに笑いながら男性は静かに煙草を吸う。

華の女子高生…風情云々よりも身近な話題の方が興味を惹かれるのかもしれないな。

とは言え、その内こうした花の良さと言うのにも気付くんだろうが。

「学園中のつてなると、人手が足りなくなるんじゃないやねえの？」

「まあ、あくまでも趣味の範疇ですし、基本的には暇ですからね。そんなに苦でもないんですよ」

「あ…俺は無理だな…」

「おやおや、教師がそんな事を言つてはいけませんよ？」  
「痛いところ突くなあ…おっさん」

何て言うか、得意分野であればチマチマした作業も苦ではないんだが、そうでない場合は異様に飽きっぽい。

性格と言われれば、それまでなんだけどな。

「花も生徒もそう大した差はありません…愛情をもって接してあげれば、キチンと応えてくれるのですから」

「俺なんかよりもよっぽど教師向いてる気がするな…」

「はっはっは、何事も経験ですし全力でぶつかるのが一番ですよ。碎け散つても泣けません」

二人揃って煙を吐きだすと、潮風に乗ってすぐに流れていく。

おっさんは俺の事をどうも良く知っているらしく、日本に滞在していた時に俺の芸を見たことがあったらしい。

こんな所で観客に出会う事になろうとはな…世界つてのは案外狭いものだ。

「いやはや、あの人形劇は素晴らしかったですよ。人形とは思えない精緻さ…すべてその手で行っているのでしょうか？」

「たまたま向いてたてっただけだな。下手でも上手くなれるくらいの時間はあったし、俺の手で人らしく振舞えさせるってのも面白かった」

指を滑らかに舞う様に動かし、掌を夕日に透かす。

こんな手でも楽しみがあるってんだから、生きるってのは面白いもんだ。

「さて、そろそろ終業時間ですしお先に失礼しますね」

「応、またなおっさん」

「はい、それでは」

男性は吸殻を灰皿に捨てて立ち上がれば、スタスタと歩き始める。学園中の花壇を世話していると言うだけあって、その歩みは見た目の年齢に反して非常にしっかりしている。

案外、結構鍛えていることだっと思って考えられる。

それを感じさせない老獪さは、何処か恐ろしくも思える。

ああ言うおっさんは、総じて相手がしにくいものだからな。

暫くこの喫煙所で煙草を吸っていると、一夏が小走りで此方にやってくる。

キッチンとジャージに着替えているな…。

「もう、補習はバッチリか？」

「おう、山田先生に褒められたよ。覚えるのが早いって」

一夏は両手を腰に当てて胸を張り、良い笑顔を浮かべる。

…参考書を廃棄しなきゃ補習自体無かったんだけどな。

一夏は昔から煽てると調子づく事がある。  
悪い事では無いが、それが原因で空回りを起こして失敗する事がよくある。

勝負事において、ちよくちよくそう言う性格が災いして勝てるものも勝てなかつたなんて事があつたな。

何度か本当に痛い目見ないと、この性格は治らないだろう。

「それより、煙草…まだ止めてないんだな」

「これが俺の命の水ってな…早々止められるもんじゃねえよ」

「水って言うより空気だろ…体に悪いから止めればいいのに」

「はっはっは、ガキに心配されるほどヤワな身体してねえよ。それじゃ、ちつとグラウンドの端使わせてもらうか」

ベンチから立ち上がって、軽く肩をストレッチしながら一夏を伴って部活動の邪魔にならないようにグラウンドの隅っこへと向かう。

一定の距離を保って立ち止まれば、一夏へと振り向いてネクタイを軽く緩める。

「じゃ、いつも通りの何でもありだ。またボコボコにしてやつから、かかってきな？」

「今度こそ吠え面かかせてやるぜ、アモン！」

一夏はゆつくりと拳を構え、呼吸を整える様に大きく深呼吸する。  
対して俺は、特に構えもせずスラックスのポケットに左手を突っ込んで一夏が来るのを待ち構えている。

俺が旅に出る前までやっていた組手…ルールは単純で、俺が膝を付くか一夏が諦めるまで続く。

自分の限界を知ると言う事は何よりも大事だ。

出来る事と出来ない事の見分けが付かなければ、仮に力を持ったとしても犬死するだけだからな。

勿論、人間には限界を超えた力を発揮するときだってある。

それが毎回起きるわけでは無いからこそ…自身の限界を知る必要がある訳だ。

一夏はゆつくりと拳を開いて緩く握り込み、一足飛びで此方へと踏み込んでくる。

千冬と似通ったその踏み込みは、やっぱり血が繋がっているんだなあとと言う場違いな感想が脳裏を過つていく。

素早く俺の間合いに潜り込むことができた一夏は、息つく暇もないままに脇腹目がけて抉り込む様に拳を振り抜いてくる。

散歩にでも行くような軽やかさで俺も一歩だけ一夏の懐に踏み込み、一撃が当たる前に右手で一夏の顔面を掴んで押し込む事で仰向けに体勢を崩させる。

勢いが乗っていた一夏は為す術なく空中で仰向けになるものの、素早く思考を変えて腕に足を絡ませて関節を極めようとする。

「応、宙に浮いてつからあんま意味ねえぞ……！」

「ぐあつー！」

俺は容赦なく地面に一夏を背中から叩きつけ拘束を解除し、倒れ込んだ一夏の背中の下に足を刺しこんで、ボールの様に優しくではあるものの蹴り飛ばす。

距離にして5メートル程の所で地面に落ちた一夏は、素早く立ち上がり再び突撃してくる。

「おおお!!！」

「策も無しに突っ込むんじゃねえ……つと!?」

一夏に向かって再び右手で掴みかかろうとすると、スライディングの要領で俺の足の間に滑り込まれて後ろへと回られる。

掴みかかる為に少しばかり重心を前にしていた俺は、地面を蹴って前方宙返りの要領で体を前に投げ出す。

一夏はスライディングで回り込んだ直後に足払いで俺の転倒を狙っていた様だが、既に跳躍されてしまっていた為に虚しく空を切る事になる。

「くっそー！まだ遅いのか!?!」

「や、ガキにしちゃ充分だろ……俺には届かねえってだけで。まあ、今は良い感じに不意をつけてたな」

無理矢理体を投げ出したお蔭で着地でよろめいたものの、危なげなく立ち上がって振り返る。

まるで曲芸師だな……踏みつけられる覚悟がなきや、足の間通り抜け

ようなんざ思わないだろう。

「毎日喧嘩にでも明け暮れたのか？」

「まさか…そんなことしたら千冬姉に迷惑かけちゃうよ。暇な時に稽古つけてもらってたくらいで、後は中学時代に部活をちよつとな」

「まあ、それなりに努力はしてきたみたいだな。それじゃ、食堂も閉まっちゃうし、ルール切り替えてそろそろ終わりにするかあ…」

「まだ始まったばかりだ…いつ!？」

ゆつくりと左手をポケットから抜き、一瞬…ISによる瞬時加速染みた速度で踏み込んで拳を顔面に寸止めで叩き込む。

半ば本気に近い速度だった為か、風圧で一夏の髪の毛が暴風に晒されたかの様に乱れる。

一夏は目を見開いて口をパクパクさせて、声にならない声を上げる。

「——!？」

「と、まあ…ISはこの程度の速度で動く。ハイパーセンサーがあれば目で追う事ができるが、人間で動きを見切るのは至難だ。覚えておけ」

一夏は尻もちをついて倒れ込み、驚愕の表情を浮かべたまま俺の事を見上げてくる。

まあ、いきなり人間(らしきもの)がとんでもない速度で突っ込んで来れば驚きもするか…？

ただまあ、この踏み込み…やろうと思えばお前の姉ちゃんもできるんだけどな！

俺は千冬に人外つぷりを口には出さずにぐつと飲み込んで、一夏に手を差し出す。

「うら、腹減ったから飯にしようぜ」

「お、おう…」

一夏は、おそろおそると言った感じで俺の手を掴んでくる。

俺はただただ肩を竦めて引き上げてやると、勢いが良すぎたのか一夏がよろめいてしまう。

「つとと…なんだか、アモンに追いつけるのかどうか分からなくなっ

てくるなあ…」

「ハッ、ガキに早々追いつかれちゃったら悪魔の面目丸つぶれだぜ？」

「また、それか…確かに悪魔染みた強さだけどさ…」

一夏は呆れたような顔で俺を見上げてスタスタと歩きだす。

良い歳したおっさんが悪魔悪魔なんて言ってるからか…？

事実だつて言うのにな…。

「待ってって、一緒に飯食おうぜ飯〜」

「だったら、アモンの驕りな？」

「しようがねえなあ…つたく」

どこからか黄色い声が上がったような気がするが気のせいだと言  
い聞かせ、一夏を連れ立って食堂へと向かうのだった。

楽しい食事を終えて教員用の寮へと向かおうとすると、千冬に呼び  
止められて手を引かれる。

一体何事だと思いをかけるものの、千冬は一切無言で一年生用の  
寮へと俺を連れ込もうとする。

流石に説明が必要だと思つた俺は、千冬の腕をやや乱暴に振り払い  
じつと睨み付ける。

「だから、話を聞けつーに…何で、1年寮に連れ込もうとしてんだお  
前は？」

「…それは、だな…色々と協議した結果、私がお前のお目付け役になつ  
たからだ」

千冬はどうにもシドロモドロといった感じで話し、視線もどこか宙  
を彷徨っている。

…ああ、そういう…。

「…つまり、お前と共同生活しろと…そう言う事か？」

「そういう、事だ」

「今更気恥ずかしくなるような仲でもねえだろうに…」

「そ、それとこれとは別問題だ！」

千冬は珍しく両手で頭を抱え、後ろを向いて何やら独り言をぶつぶ



つと呟いている。

何で、あそこでムキになってしまったのかとか何とか…。

難儀な性格してんなあ…。

「で、部屋は何処だ?」

「…1階にある寮長室だ。一応ベッドも2台手配して設置してあるから問題は無い筈だ」

「いや、色々問題あるとは思うけどな?」

「い、良いから来い!」

千冬は何処か慌てた様子で1年寮に入って行ってしまふ。

此処に取り残されてしまつて行き場が目の前の1年寮にしかない俺は、渋々1年寮へと入って行く。

寮の外観、内装はまさしく洋館と言つても差し支えの無いとても豪華な物で、高級ホテルのそれと見分けが付かない。

玄関に貼られている館内マップを見て寮長室を把握し、廊下を歩き始めると何ともあられもない姿の女生徒たちで溢れかえっている。

ああ…リラックスして尚且つ女性だけならばそこまで気を使わないと言う事なんだろうか?

「えっ!?!ミユラー先生もこの寮なの!?!」

「くっは…大人の男性…滾る!」

「この寮は、この寮こそ勝ち組だったんだよ!」

「な、なんだってー!?!」

きやいきやいと何処か可愛らしく女子達が固まって、俺の事をチラチラと見ながら話している。

完全に見世物小屋のパンダの様な気分を味わいながらだっ広い廊下を歩いていくと、寮長室と書かれた表札の下に眉間に皺を寄せた千冬が腕を組んで立っていた。

「遅いぞ、アモン」

「いや、千冬がスタスタ行くからだろうが…で、此処が?」

「ああ、そうだ…んんっ!その…なんだ…これからは此処がお前の家になるんだ…だから…」

「だから…?」

千冬は咳ばらいをして視線を彷徨わせ、深呼吸をした後に此方を真っ直ぐに見上げて綺麗な笑みを浮かべ、こう口にした。「お、おかえり」

## #14 夜明けと姉妹と煙草の味と

「んあ…」

妙に寝心地の良いベッドで寝ていると言う違和感に気付き、浅い眠りから目を覚ます。

ゆっくりと目を開くと、そこは見知らぬ天井…なのは当たり前だな。

第一、屋根のある所で寝ている事自体が稀だ。

なんせ、基本的に海で隔てられていない陸路であれば、徒歩での移動ばかりだったからな。

その土地その土地の気候変化や文化の違いを肌に味わうには、何よりも自身の足で動き回るのが一番だ。

ふと、世界を歩き回っていた事を思い出して、思わず口元に笑みが浮かぶ。

悪い奴がいる様に、良い奴らも確かにいた。

喉が渴きすぎて困っていたら水をくれ、泊まる所が無ければ家に泊めてくれたり、とかな。

人と人のつながり、情と言うものの暖かさと言うのは確かに俺の胸の内を強く叩いていたかもしれない。

まだ日の出前なのか、薄暗い室内には静かな寝息だけが聞こえてくる。

…昨日は大変だった。

これからの生活に関するルールを千冬と話し合い、さあ寝るぞ…と言うタイミングで一夏がやってきたのだ。

壊れたドアを抱えて。

何故かそのドアには何かが突き立てられた跡が残っており、鋭利な刃物が使われている様にも見受けられた。

話を聞いてみれば、どうも一夏は一人部屋ではなく二人部屋…もちろん男子なんてものは存在していないので、相手は女子となる。

どうもその女子と言うのが束の妹…筈だったらしい。

部屋割りの都合上一人部屋に出来なかった…と言う事だったらしい。

いんだが、実情は女子共が大挙して押しかけてしまうと云う事態を防ぐ為だろう。

ハニートラップなんてことも考えられる訳だし。

まあ、仕掛けた所でアイツはヘタレなんで、女を抱くとは思えないが…。

ともあれ、同室が箒と言うのも単純にして明快：知己だからの一点に尽きる。

幼馴染だったって話だし、そう言う関係であるならばハニートラップとは違った意味での交友関係も期待できると云う学園側の——主に千冬の——判断だったんだろうが、そうは問屋が卸さない。

なんと、この一夏…：一人部屋なんだと勝手に思い込んで部屋に突撃し、風呂上がりで一糸纏わぬ姿の箒をマジマジと見てしまったそうだ。

それだけに飽き足らず、偶然とはいえ箒の荷物を物色してしまい、下着を見てしまう…：なんて、エロゲーの主人公張りにフラグを積み立ててしまったとき。

これに激昂した箒が暴れに暴れて部屋だけに飽き足らず、扉まで破壊してしまったと言う事だ。

ハッキリ言って、凄いと思う。

部屋を破壊した乙女の怒りもそうだが、ケロリとした顔で事態を説明した一夏がだ。

流星に箒の件の時は顔を多少赤らめてはいたものの、それ以外動じていないのだ。

あまつさえ、暴れた理由が分からないとか抜かすもんだから、頭に拳骨叩き込んでおいた。

千冬は千冬でこの一夏の鈍感っぷりに呆れ果てて顔を覆う始末…：最早手の施しようが無い末期癌レベルの重症患者だ。

ああ、そーいや弾の奴が言ってたな…：朴念仁ならぬ朴念神だ…。

女性の機微に疎い癖に、人一倍器量が良いんで女に好かれる。

弾の妹も此奴のこと好きだったな…：気付いてないだろうが。

まあ、それからすったもんだがあつて、手先の器用な俺がドアの応

急修理をする事になり、結局寝たのが日付が変わった後となった。

つまり何が言いたいかと言うと、寝不足なのだ。

三徹くらいなら何とでもなるが、その後から急激に身体のパフォーマンスが悪くなる。

悪魔と言えど、睡眠は大切ってことだ。

そんな状況下で二度寝すべきかどうか悩んでいると、身体が妙に温かいと言う事に気付く。

こう、なんていうか…人肌を感じる…。

「んんん?」

流石に可笑しいと思つた俺は、自分の体にかけていた掛布団を剥ぎ取り、自身の体の状態に目を丸くする。

丸くするって言うか呆れ果てたと言うか…ともかく言葉に言い表せない何とも微妙な気分させられる。

あらかじめ教えておくと、俺の屋内における就寝スタイルは上半身のみ裸で下はスウェットだ。

裸族つちや裸族なんだが、流石に下は何か履いていないと今の環境では大問題になりかねない。

その点を踏まえて今の状況を伝えると…束が全裸で俺にひつついて眠っていたのだ…グツスリと。

うつとりとした顔で眠っているものだから、完全に事後の様な雰囲気になつている。

非常に拙い。

美人で良いスタイルした女がひつついて眠っている状況つてのは非常に役得だし、まあ?多少は?可愛がつてやっても?とか思つてしまふのは男の性として、当然なのだが…此処はIS学園。

女性ばかりのこの異常空間において、これ程のゴシップはないだろう。

完全に俺の立場無いですありがとうございます。

ゆっくり、慎重に慎重を重ねて束を俺の体から引き剥がしていく。

なるべく、ソソる様な体を見ない様にしつつかんとかかんとか引き剥がすことに成功してベッドに腰掛ける様に足を降ろす。

悟られない様に慎重に立ち上がりとした瞬間、腰を万力の様な力で思い切り抱きしめられて動きを止めてしまう。

「へっへっ…逃がさないよぉ…」

「マジ カンベン シテ クダサイ」

「ちーちゃんグツスリだし、この束さんで愉しみなよ」

「イエ ケツコウ デス」

俺は束の腕をしっかりと掴んで引き剥がそうともがくが、束も束で今回は退く気も無いらしく必死に俺にしがみついて離れようとはしない。

暫く、必死に格闘をしていると不意に千冬が身動きをして、互いに動きが固まる。

流石に千冬にこの状況を見られるのは拙い…何だかヤバい気がする…。

束も同意見なのか俺からもそもそと離れて、俺が着ていたYシャツを身に纏う。

…胸元がやたらパツツンパツツンな上に、下履いてないんでアレ過ぎる…。

俺は小さく溜息を吐きだした後、小さな声で束に話しかける。

「で、何でお前此処にいるんだよ？」

「え？夜這い？」

何を呆けた事と言わんばかりのドヤ顔で束は胸を張り、お蔭でYシャツのボタンが弾け飛んだ。

っーか、夜這いつて…。

俺は呆れた顔を隠しもせずに溜息をつきながら弾け飛んだボタンを一つ一つ拾っていく。

「夜這いかける暇があるんなら、妹と仲直りでも何でもして来いよ…」

「うーん、今はいつくんと感動の再会を果たしてるからね」

「感動、ねえ…」

俺は束から顔を背けて盛大に溜息を吐きだす。

妹からしちや、嬉しく思うべきか悲しく思うべきか悩ましい所だろう。

「お、なんか意味深じゃ〜ん?」

「あ、妹から直接聞けば良いんじゃないやね?俺は知らん…っつーか、俺の服返せよ…」

「え、あつくんの匂いするからや〜だ〜」

東は袖の部分を口許に寄せて、スンスンと匂いを嗅いでご満悦と言った感じだ。

もう、どうにでもなれ…なんて思っていると、背後で千冬がムクリと体を起こす。

「……」

「おっはよく、ちーちゃん!」

「おはようさん…」

起き上った千冬へと目を向けると、心底不機嫌そうな顔で俺…と言うより何食わぬ顔で挨拶をする東を睨み付けている。

そんな千冬を見ていて何も言えなくなってしまった俺は、黙って事の成り行きを見守る事にする。

何て言うか…何言っても聞かなそうな雰囲気、ひしひしと感じてしまったからだ。

「何故…馬鹿がいる?」

「はい、あつくんに夜這いをかけに来たからです!」

「何もしてねえからな?そんな目で睨むなっつーに」

千冬は俺の事をギロリと睨み付けるが、俺は力なく首を横に振るだけだ。

なんで、こう…浮気現場を目撃された様な雰囲気なんだ…?

「…東、貴様どういうつもりだ?」

「え、べつつにく?気に入った人間はとことん調べたくなるじゃん。ましてや一番のお気に入りならね?」

「ほう…?」

千冬はこめかみをピクピクとヒクつかせながら腕を組み、ますます不機嫌な顔になる。

対する東はどこか、余裕の表情とすら言える。

…なんで、俺こんな修羅場に立ち会ってるんだ…?

頭を抱えたくなくなるような空気の中で、俺はゆっくりと立ち上がる。

「あのな…なんで、千冬は束に目くじら立ててるんだ？」

「…それは…寝室に勝手に侵入…それも自分が気付かない内に入られたら嫌な気分にもなる」

「束は束で煽る様な態度取ってるんじゃないやねえよ…良いから服着て帰れ…」

「ええ、ちーちゃんも交えて愛を育もうよ」

「処女の言う台詞じゃねえよ…」

…  
どうにも頭が冴えていないらしく、束のペースに飲まれっぱなしだ…。

それは千冬も同様だったらしく、漸く眠気が覚めたのか頭を横に振っている。

「で…ただ単にベッドに潜り込むのが目的って訳でもねえんだろ？話せ、んで

帰れ」

「ひどい…こんなにもあつくんのことすきなのに」

「棒読みで言われても実感湧かねえよ…」

「…IS絡みなんだろう？」

千冬も何か察したのか、束を見つめる目が少しばかり弱まる。

このタイミングでIS絡みつてなると、ほぼ間違いなく一夏の専用機絡みって事になる。

専用機は選ばれた人間のみが許される特別機だ。

なんせ、限られた個数のコアを一人だけの為に使うんだからな。

そんなエリートのためだけに用意される専用機が一夏に用意される…これは単純に男性操縦者によるISの稼働データを取ると言う意味合いでしかない。

俺を含めて二人だけしかない貴重なサンプル…専用機であれば『不測の事態』に対処しやすくもなる。

…不測って名前の予定調和な気もするけどな。

「ほら、あの金ドリルといっくんやり合うんでしょ？直接手を貸す訳じゃないけど、凡人経由で作らせてるよ。まあ、あの調子なら搬入ギ



リギリかもね!」

「日本の企業でお前のお眼鏡に適うとなると…倉持技術研究所か」

「あつくんのはく、別の所で鋭意制作中デス!」

「アモンの分もか…飽き性のお前にしては良く働く」

千冬はどこか感心したかのように一度だけ頷けば、ベッドから立ち上がり綺麗な笑みを浮かべて東へと近寄る。

東は東でハグでもしてくれるのかと勘違いしたのか、両腕を広げて千冬を迎え入れようとしている。

違う…それは違うぞ東…顔を良く見てみる…『目が笑っていない』。

「あだっ!? あだだだだだだ!!!」

「そんな事を言う為だけだったら電話にしろ馬鹿者!!」

「南無…」

千冬は神速で右手で東の頭を掴み、ミシリと骨の軋む音が部屋に響くレベルの膂力でアイアンクローを敢行する。

全力なのか右腕に左手を添えながらだ…あ、東の体が浮かんだ。

俺はその光景を眺めて、ただただ合掌して黙禱を捧げるのみだ。

あれは、俺でも痛いやつだ…間違いない。

「そのYシャツはくれてやる…」

「いや、それ俺んだろ…?」

「やかましいぞ、アモン! 私は今からこの馬鹿とHANASHIがある! 出ていけ!!」

「アツハイ」

千冬は鬼神もかくやと言わんばかりの形相で俺の事を睨み付け、凄まじい殺気を放っている。

…東の真意はどうあれ、千冬のこの反応は自惚れでなければ…まあ、そう言う事なんだろう。

昨日の雰囲気からも、そう言う風に邪推してしまう。

ただ、俺の中で思うのは何があつてそんな風に思ってしまったのかって事なんだがなあ…?

そんなに多く接点がある訳でも無し…何なんだ?

ともあれ、そんな思考を張り巡らせる暇もないままコートだけ引つ

掴んで羽織、部屋の出口へと向かう。

「あくん、あつくん助けて!!」

「千冬く、談話室に居るから終わったら呼んでくれ」

「酷い!見捨てるのね!?!」

扉を閉める瞬間、束の悲痛な叫びがこだました:気がする。

時刻にして、午前6時:1年寮は目を覚ます生徒も増え、俄かに活気づいてくる。

そんな最中、俺は談話室のソファーにもたれかかる様にして座り、転寝をしていた。

束の来訪の所為で、なんだかとても疲れてしまっていたのが原因だ。

人と一緒にいるのは良い、それがガキであれなんであれ構わない。ただ、教師なんて職はやったことが無いし、俺自身モノを教えるのは苦手な部類だ。

たった1日でこんなに疲弊してしまって、これから先大丈夫なのか不安でしかない。

転寝なので眠り自体は浅かったので、環境の変化に気付いて目を覚ます。

具体的には連続して起こった、カメラのシャッター音の所為で。ひそひそとした声で痴話喧嘩があったのだ、良い体してるだの、ペロペロしたいだの:言いたい放題だな:。

誰かが俺へと近づいてくる気配を感じて、何となく千冬かと思っ  
て口を開く。

「束の奴は帰ったのかよ?」

「え:姉さん:が:?:?」

:どうにも感じていた気配は違っていた様だ:酷いザマだな、おい。

耳に届いた声が千冬とは違う事に気付いて目を開いて、相手へと目を向ける。

其処には黒の剣道着を身に付けた、ポニーテールが特徴的な少女：束の妹である箒が立っていた。

「姉さんが居た、とはどういうことですか!？」

「あゝ、そんなに殺気立つな。可愛い顔が台無しだろうが」

「茶化さないでください!!」

箒は困惑していた顔を怒りに歪め、ギリギリと手に持っていた鞘に納めてある日本刀を握りしめている。

…相当闇が深いな。

怒りを越えて、どす黒い憎しみに成り代わろうとしている。

其処には近くに居るにも関わらず、自分に会いに来てくれないと言う寂しき、何故姿をくらませてしまったのかと言う弁解が聞きたいと言う欲求…根っこの部分では、姉ちゃんの事が好きなんだろう。

「落ち着けてーの…皆、見てるぞ?」

「っ…!…すみ、ません…」

凄い剣幕だったのを肌で感じていたのか、談話室にいた他の1年生達は固唾を飲んで見守っている。

俺が大して動じていない所を見て、其処まで大事では無いと判断して幾ばくか緊張感が解けている。

「お前の姉ちゃんなら来てる。アイツとは変な縁があつて行動を共にしてた期間があつて、何か知らねえけど気に入られてんだよ…」

「何故…私ではなく、先生なんですか…」

「俺だって、お前と仲直りして来いって促してんだよ…。あのバカ、お前とは仲直りできねえと思ってるのか諦めちまつてるし」

深い溜息をついて頭を抱える。

この姉妹、互いの想いが一方通行過ぎて伝わっていない。

まあ、束は連絡とろうとせず、箒も箒で連絡先を知らないんだろう…伝えようと思っても伝えられるものじゃない。

結果として、すれ違いは束が失踪した時から今に至るまで…まるで呪いの様に続いている。

…なら、おじさんが終わらせてやるのもまた一興つてもんだらう。

「千冬が俺を呼びに来ねえって事はまだ、部屋に居る筈だ…来るか?」

「えっ?」

「姉ちゃんに会って、一発ぶん殴ってやりてえんだろ?」

俺は体に反動をつけてソファから立ち上がり、箒の横を通り過ぎて談話室を出ていく。

部屋に招くと言う言葉だけしか聞きとっていないのか、談話室は一瞬騒然となる。

「ちよ、ちよ!?!」

「せんせいが生徒を部屋に!?!禁断の課外授業!?!」

「きゃー! 私も呼んでほしい!!」

…お前ら呼んだら千冬が凄いい形相になりそうだ…。

俺は先行する様にスタスタと歩くと、我に返った箒が慌てる様に俺の後をついてくる。

このチャンス逃すと、次のチャンスが何時になるか分からない。いい加減束にしろ箒にしろ、現実と向き合って話し合うくらいはしないと駄目だろう。

それで決定的な軋轢が生まれるとしてもだ。

こんな鬼ごっこは、大人になるまで引きずって良いものじゃない。

「本当に…居るのですか?」

「多分な…ただ、アイツ逃げ足だけは早いから、居なくなつてつかもしれねえ」

「…会えるチャンスがあるのだと言うならば」

この会話を最後に互いに口を開くことなく歩を進める。

異様な空気を醸し出してしまっているのは誰の目で見ても明らかで、通り過ぎる生徒達は挨拶しようとして声をかけようとしては口を噤んで通り過ぎていく。

それだけ、箒の表情が複雑なものなのだろう。

いわゆる、灰色の表情…怒って良いのか泣いて良いのか笑って良いのか分からないというその表情は、本人にも複雑怪奇なものだろうよ。

そう大した距離でもないと言うのに長い時間がかかったようにも感じる…漸く寮長室に辿り着いた俺たちは、箒の心の準備が出来る前

に扉を開ける。

躊躇していれば、それだけ束が逃げるだけの余暇を生んでしまうからな。

「千冬ー、ちよつと良いか？」

「なんだ？まだ私は此奴に話がだな…」

「そりゃ、切り上げろ…それよりも話さなきやいけない奴が居るだろうが」

千冬は不機嫌さを隠しもせず、声を荒げるが、俺はそれをぴしゃりと言って止めて箒の手を引いて無理矢理招き入れる。

今更ながら躊躇したのか、箒が入ろうとしなかったからだ。

俺は、千冬とエプロンドレスに着替えた束の前に箒を突き出す。

「千冬よか、こつちと話し合う事の方があるだろ…家族なんだからよ」

「アモン…」

「ほ、箒…ちゃん…」

「姉さん…」

俺を含めた4人の視線が交差しするが、俺は束と箒を無視して千冬の体を肩に担ぐように——巷ではお米様抱つことか言うやつだ——して抱えて部屋を出ていく。

余りにも鮮やかな手際だったのか、千冬はポカンとした顔で俺にされるがままだ。

部屋を出てその足で屋上まで行き、そこで漸く千冬の体を降ろす。

「な、何をする!？」

「ちつたあ、頭を冷やせつて…お前がアイツを教育的指導するのも良いけどよ、束と箒が言葉を交わす方が先決だろ」

「それは…だが…箒には酷ではないか？」

千冬は胸の下で腕を組み、フェンスに背を預ける。

俺は千冬の隣で同じようにフェンスに背中を預ければ、懐から煙草を取りだして口に啣えて火を点ける。

「ふー…生きている以上酷な事からは逃げられねえ…。だったらとつとと清算して楽になつちまった方が良いさ」

「それが、常に正しいとは限らないだろう？」

「ハッ！それこそ笑い話だぜ千冬……この世に正しい事なんて一つもない。正しさはあってもない」

皆、自分が思う正しさを実行しているだけに過ぎない。同時にこの世に悪い事なんて一つも無い。

正義の敵は、また別の正義であるように……な。

で、あれば常に直面し、真っ向から立ち向かうしか真っ直ぐには生きられない。

燻って生きているなんて、ただ苦しいだけだろう？

「……皆、お前の様には強くないぞ、アモン」

「強く無ければ生きられない、矜持が無ければ生きていく意味が無い、だ。何、それで駄目ならそれまでだったと言うだけだ」

時間を無為に過ごすなんて言うのは許されない。

皆、何かを残すために生きている筈なんだ……あの束でさえもな。

で、あれば束にしても筈にしても思いの内を吐き出してしまった方が良い筈だ。

……自己満足だと言う事はハッキリと理解している。

千冬は呆れた様な顔で俺に何かを寄越せと言わんばかりに手を差しだしてくる。

「煙草」

「は？」

「煙草を吸わせろと言っている！」

「お前なあ……」

四の五の言わずに出せと言わんばかりに千冬は俺の懐から煙草の箱を奪い取り、一本取り出すと俺に箱を返す。

……最後の一本……まあ、買えばいいんだけど。

少しばかり、意地悪してやるか……？

俺は千冬が煙草を啜えた瞬間に肩を掴んで抱き寄せて、煙草の先端と先端を合わせて火を点けてやる。

所謂シガレット・キスだ。

「……っ!？」

「はっはっは、人のもん奪い取るからだ」

千冬は顔を真っ赤にして顔を背け、ゆっくりと煙草を吸って煙を吐きだす。

中々良いものが見れて、俺としては満足だ。

俺たちはこのまま特に会話する事も無く、煙草を一本吸いきるまで時間を潰すのだった。

## #15 アリスとウサギと悪魔の溜息

朝食の時間はとうに過ぎ、今は授業の二時間目：ISの基本機能の授業を行っている。

ISの授業なので、勿論俺は教室の後ろで生徒に混じって勉強に励んでいる。

一時間目、二時間目共に真耶が教壇に立ち、俺の隣には昨日と同じく千冬が立っている。

今朝のシガレット・キスが効いているのか、俺とは目を合わせようとしない。

鉄の女だのなんだのと言われてはいるが、千冬とて案外乙女な所があるもんだな。

ラッキースケベ朴念神の一夏は、授業に真面目に向かっているものの、時間が進むにつれて段々と顔を青褪めさせていき、気付けば話を聞いているのか聞いていないのか良く分からない状態に陥っている。

一方、姉と感動(?)の再会を果たした箒はと言うと：

「はあ…」

「篠ノ之さん、具合が悪いんですか?」

「あつ!いい、いえ…大丈夫です…」

「具合が悪かったらすぐに言ってくださいね!」

と、まあこんな調子で窓の外を眺めては溜息を吐き、物思いに耽っている。

学校の準備があつたとは言え、話すべきことは束に話すことが出来たはずだ。

束にしたってそれらを受け止める事はできただろう…明確な答えが口に出来なかつたとしても。

今はそれでいい…俺も心の準備つてのをさせてやらなかつたしな。

ただまあ、これは…束のツケみたいなものだ。

今まで箒を待たせ、放置してきたことに対するツケ…それを支払う事で、漸く姉妹は対等になる。

まだまだ支払いには時間がかかりそうだけどな。



「では、授業に戻りますね？先の授業でも説明した通り、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。織斑くんに此処で質問ですが、このエネルギーバリアーを一般的に何と言いましたか？」

「えつと…シールドエネルギー…でしたよね？」

「はい、その通りです。このシールドエネルギーの出力を上げる事により堅固になります。この時『絶対防御』と呼ばれる現象が発生し、例え核攻撃であっても操縦者を無傷で守りきることが出来ます」

何度聞いてもかなり出鱈目な性能であると思う。

確かに魔法であれば似たような現象を引き起こすことが出来るが、科学の…それも純粋なエネルギーでそれらの現象を引き起こすことが出来ると言うのは異常だ。

ましてや、引き換えにするものが無いともなればな…。

人の身で魔法でこれだけ強固なものを再現しようとした場合、何かしらの供物か協力者——悪魔だったり天使だったり——が必要になつたりするもんなんだが…なんつーか俺の立場無いな。

「話を戻して、ISには生体補助機能が搭載されています。これは、操縦者の肉体を安定した状態で保つ為のもので、心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ、その時その時の場面に合わせて生体機能を調整していきます」

「せんせー、それって大丈夫なんですか？何だか体を弄られてるみたいで恐いんですけど…」

生徒の一人が真耶の言葉に不安を覚えたのか、おずおずと手を挙げて質問をぶつけてくる。

ISを身に纏った時の一体感…恐らくその一端を担っているのが、この生体補助機能だろう。

人と繋がる事で一体感が劇的に跳ね上がる…着ている服が自分の体の一部になるようなものだ。

仮にISがダメージを受けたとしても操縦者にフィードバックされない辺り、神経系と直接繋がっているわけじゃないらしい。

仮にその類いだったとしたら、今みたいに普及する事は無いだろう

う。

それこそ、人体改造してるみたいだって言われてな。

「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言う事はないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを——」

「あれだ、一夏：ヒー○テックとかそういう身の身に付けてると思え、俺らにや分からん世界だ」

真耶の言葉を遮る様にして、俺は慌てて口を開く。

いや、俺は分かるんだが…。

人形を初めて作るにあたって、人体構造の隅の隅まで調べつくしたからな：そういう事情は理解しているものの、同意してやれないし、しちやいけない。

そんなことをしたら吊し上げも良い所だ。

一夏も同じことを考えていたのか、俺の言葉に顔を赤くしながら必死に頷いて同意を示す。

ここに来て真耶も自分が言った言葉の意味を理解したのか、顔を真っ赤にして誤魔化し笑いをしてお茶を濁そうとする。

チラ、と千冬の方を見ると、何故か腕組をして俺の方をチラチラと見ている。

：東や真耶程でないにしろ千冬も大層立派な果実をお持ちだ。

興味が無いわけでは無いが、そんなに意識されるとなんだ…困る。

と、言うか此奴のISスーツ姿も拝んでいるわけだし、今更な気もするんだよなあ…。

ラッキースケベ的なハプニングには気を付けねば…。

教室中に変に気まずい雰囲気が充満し始めた頃になって、千冬は咳ばらいをして気を取り直す。

「んんっ!!山田先生、授業の続きを」

「は、はひっ…ふう…授業を続けますよ」

真耶は千冬 of 言葉に体をビクつかせ、手に持っていた教科書を取り落としそうになりながら我に返る。

少しだけ深呼吸をして、表情を改めると再び講義を始める。

…あの狼の保護欲を刺激しそうな女だな…。

「ISの取り扱いについて大事な所があります。ISにも意識に似たようなものがあり、操縦時間：つまり共に過ごした時間に比例してIS側も操縦者の特性を理解しようとしみます。それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せるようになります。この時、IS側の理解や経験が一心同体と言える程にまで高まった時に、より操縦者が有利に動けるように進化：形態移行現象が起こります」

付け加えて言うならば、ISには自己修復機能が搭載されている。重大な欠損が無い限りは、時間を掛ければ元通りに修復するなんともチート臭い能力を備えている。

勿論短期間で修復するのであればパーツを交換する事も重要だし、定期的なメンテナンスでISの手が届かない——この場合気付かない部分と言った方が適切か——細かい損耗をチェックする必要がある。

自己修復するとは言え、日々のケアがISを最適な状態にする。何にせよ、ISが究極の兵器と呼ばれる理由が良く分かる。

自己修復、自己学習、自己進化…これ以上ない程手間が掛からない物もないだろう。

普段は…いや、常時イかれているが、ISを開発した篠ノ之 束と  
言う人物の異常さが良く分かる。

…その異常さを理解した上で姿をくらませる辺り、理性ある獣のようにも思えるか…。

「と、言う訳でISは道具としてではなく…そうですねえ…仕事の相棒とか、お友達のように接してあげると良いかもしれませんね」

確かに、此処まで来ると無機物で出来た一種の生命体の様な所があるだろう。

真耶の言葉にも一理あるので俺は素直に感心して頷くと、真耶と目があつて顔を赤くされる。

…男に免疫がないのか？

まあ、こんな環境だしそれも仕方がないかもしれないな。

真耶が綺麗にまとめると同時に、授業終了を知らせるチャイムの音が響く。

「それでは、次の授業ではISの空中制御における基本制動についての授業になります。重要な部分ですのでしっかりと授業に向き合ってくださいね」

「はいー！」

日直の号令と共に授業は終わりを告げ、15分の休憩時間が始まる。

千冬と真耶は次の準備の為に教室を出ていくが、千冬は出ていく前にチラッと俺の方に視線を向け、俺は俺で軽く手を挙げてその視線に応える。

『すっかりフォローしておけよ』

と言うその視線は、もちろん箒に対しての物だ。

あそこまで授業に支障をきたす様では問題っちゃ問題だからな。

女子達に群がられている一夏を無視して、俺は箒の近くまで歩み寄れば、脳天に優しくチョップを叩き落とす。

「っ?!?!」

「応、ちいっと顔貸せや」

「えっ、あ、はい…」

一斉にクラス中の視線が俺と箒に降り注ぐが、努めてそれらを見無視する。

充分ゴシップな内容を妄想しているだろうし、気にしたところで彼女たちの妄想を止める手段なんて俺には無い。

暴走する子供は事故るまで止められないものだからな。

俺はさっさと教室を出て、屋上に続く階段を上って踊り場で立ち止まれば壁に背を預ける様にして寄りかかり、腕を組んでついてきた箒を見つめる。

「あの…なにか…?」

「姉ちゃんとは話せたか…?」

「…それは…」

箒は片腕を掴む様にして胸の下で腕を組み、視線を俺から逃げる様

にして逸らし、顔を俯ける。

そこには負い目、ふがいなさが含まれている様に思える。

少しの沈黙の後箒は漸く口を開くが、どこかその声は弱々しい。

「あれを…会話と呼べるなら、会話は…できたと思います」

「腹の底に溜まつてるヘドロは出せたなら良いじゃねえか」

「わ、私は…いえ、きつと…ぶつけることしか…」

反応から見ると、束にありつたけの暴言を吐きだしたんだろう。

箒は…まあ、なんだ…ある意味時代錯誤的な実直な性格をした少女

なのか、冷静に言葉を紡ぎたかったようだ。

しかし、溜まりに溜まつたヘドロはそれを許さず、噴火した火山の

様に思いの丈を吐き出させたみたいだな。

それを間違っているとも、正しいとも俺は言わんが。

「姉さんに、あんな顔をさせたかったわけじゃない。私はただ…！」

「束に今までのツケが回ってきたってだけだろ…ガキがな、言いたい

事も言えないなんて辛いだけだろ？次に会った時にキチンと握手し

て仲直りして、ハイお終い。それで良いじゃねえか」

どうあれ割り切る、と言う事も必要な事だろう。

それが子供から大人になると言う事の一つだし、そうしなければ潰

れてしまうことだつて充分に考えられる。

それでも真面目なこの少女は、納得できないでいるようだ。

「つたく、生真面目も程が過ぎるとあつという間に老けつちまうぞ？」

「茶化さないでください。私は真剣に——」

「茶化してねえよ…正しい事も悪い事も楽しめなきや生きるのが辛い

だけだ。頑張れよ若人、あのバカはまた簡単にお前を置いていつちま

うからな」

「…っ！もう、いいです！」

箒は馬鹿にされたのかと思つたのか、顔を真っ赤にして階段を駆け

下りて教室へと戻つていく。

俺は箒が教室に戻つたのを見計らつて、屋上に行く階段へと目を向

ける。

「つたく、お前の妹も大概融通きかねえな」

「箒ちゃんは真面目な娘だからね」

階段の一角に靄がかかったような景色が広がったかと思えば、居なかった筈の人物が其処に現れる。

メカニカルなウサ耳をつけたエプロンドレスの女性：言うまでも無く篠ノ之 東だ。

一体どういう技術使ったら光学迷彩みたいな真似ができるのやらな：流石は天才と言った所か？

「まったく、あつく人も人が悪いよ！準備も無しに箒ちゃん連れてくるんだもん！」

「お前が逃げ足だけは一級品の3月兎だからだろうが：んで、お話した感想をどうぞ」

軽く頭を抱えつつ東の方をニヤリとした笑みで見つめると、東も負い目はあったようでトロンとしている垂れ目を伏せさせる。

…この姉妹、本質的にはソックリさんかもな。

「ん、あそこまで言われちゃうとね：反省はしなきゃなって」

「今更だろ：つつーか、マッチポンプ仕掛けてる時点で反省すべきだろ」

「え、なんのことか、東さんわっからないな、♪」

マッチポンプ：全世界の軍事基地が一斉にハッキングされ、日本に向けてミサイルが一斉に発射されると言う事件があった。

これを解決したのが1機の純白のIS：後に白騎士と呼ばれるISだ。

俗に言う『白騎士事件』は、篠ノ之 東がISのお披露目をするために引き起こされたと言われている。

軍事施設の一斉ハッキングができるかできないかは別に、ただねどな。

「まあ、良いけどな：これに懲りたら堂々と連絡してやれよ？どうせ、お上は俺とお前が親密になってるからって箒の方には見向きもしてねえだろうしな」

「：箒ちゃんがね、利用されなければ良いかなって思ってるんだよね」  
東は階段から立ち上がれば1段1段ゆっくりと降りてきて俺の元

まで歩み寄り、しがみ付く様にして抱き付いてくる。

兎つてのは、人間でも寂しがり屋なのかね…？

「ほら、人質つて嫌じゃん」

「まあ、お前が立場を多少は弁えてるのは分かってるけどな…姉妹く  
らいはもうちよい構つてやれよ。千冬だつてやつてる事だろうが」

「ちーちゃんはちーちゃん、うちはうちデス！」

「そりゃ、ごもつともで…」

東は抱き付いたままプクーツと頬を膨らませて、俺の事を恨みがま  
しそうに睨み付けてくる。

とても不満そうなその顔は、ご褒美を強請る子供の様だ。

「あつくんは、東さんに対してよしよしと慰めるべきです！」

「はあ？」

「無理矢理東さんにあんなことをした責任を取るべきです！」

「応、人間きの悪い事言うのはよせや…」

少しばかりカチンと来た俺は、東の顔面を思い切り掴んで持ち上げ  
てブラブラと揺らす。

勿論徐々に徐々に顔を掴む手の力を込めていき、ミシミシと言う音  
が踊り場に広がっていく。

「いだだだだだ!!!」

「テメエのツケを(強制的に)徴収しただけだろうが!ご褒美もクソも  
あるかい!」

「あつあつ、脳みそ出ちやう!東さんのスペシヤルでオーバースペツ  
クな脳みそ出ちや…あつ、段々気持ちよく…んっ…!」

「うわあ…」

痛めつけてやってると思つたら、何故か悦ばれている事に気付いて  
思わず手を離してしまう。

…変なスイツチが入つたのか、床にどざりと落とされて座り込んで  
いる東は、俺の事をトロンとした目で見上げている。

「んも、あつくんたら、だ・い・た・ん…なんだからあ」

「応、服脱ごうとすんのやめくや」

「誘つたのはあつくんからじゃくん」

「処女の台詞じゃねえつつつてんだろうが！」

箒の時とは違って容赦の無い空手チョップを束の脳天に叩き込んで、脱ごうとする束を制止する。

…こんなのを毎日相手してたのか…千冬は。

日々の苦勞を思つて眉間を軽く揉んで千冬に同情していると、授業開始の予鈴が校舎に鳴り響く。

「あつ、やべ…千冬に殺される！」

「え、束さんとデート行こうぜ〜！」

「そりゃ、今度な！」

「えっ…ほんと!？」

俺は適当に相槌を打つて、踊り場から跳躍して階段を一気に降り切る。

まだ教室には来てない筈なので、まだ間に合う筈…!

束の心の底から嬉しそうな声が聞こえた気がするが無視だ無視!

風の様に教室へと走り、勢いよく扉を開くと顔面に強烈な右ストレートが叩き込まれて廊下の壁に衝突する。

「ガアツ!？」

「教師が廊下を走るんじゃない!!」

「全力で殴ることあねえだろうが!？」

あまりの激痛の鼻を抑えながら蹲り、下から千冬の事を見上げて睨み付ける。

凄まじい物音だったのか、各教室から教師たちが顔を覗かせて此方の様子を伺っている。

…結果的に凄く恥ずかしいんだが…。

「お前は、もう少し教師としての自覚を持て」

「お、おう。あ、くそ…鼻の骨がイかれたかと思つたぜ…」

俺はよろよろと立ち上がって、服についた埃を払いながら教室へと入る。

何とも言えない微妙な気分させられていると、教室中から視線が集まっている事に気付く。

「やっぱり、千冬様はあの男に気があるのかしら…?」



「え、でもあの殴り方って…」

「でも…無傷だよ…?」

一部の千冬シンパはヒソヒソとした声で話し合い、俺に対して訝しがる様な視線を送ってくる。

寮長室での共同生活、そこに箒を連れ込んだりなんなりなんて話は既に出回っているだろうし、俺と言う存在が本気で信用ならないのだろう。

そんな嫌な空気を千冬が両手を叩き、一変させる。

「静まれ、授業を始めるぞー!」

「二は、はいー!」

あふれ出る圧倒的なカリスマ性故なのか一瞬で教室内は静まり返り、授業に対する姿勢ができあがる。

俺も大人しく座って手帳を開いて、教壇へと目を向ける。

どうやら次の授業は千冬が行う様だ。

「さて、授業の前に…織斑、お前に回す予備機が無いので、ISを使用した訓練ができない。専用機が用意されるが、納入も決闘の当日となる…待てるな?」

「ちよ、ちよっと待ってくれ!流石に馴らし無しなんて聞いてない!」

「こればかりは仕方がない…それとも、オルコットに頭を下げて決闘を延期するか?」

千冬は腕を組んで声を上げる一夏を見下ろし、ぴしやりと黙らせる。

一夏にも男としてのプライドがある…ここに来て、モノがないので延期してくださいなんて言えるわけがないだろう。

千冬、ファースト・シフト「一次移行はどうする気だ?」

「ぶっつけ本番でやるしかないだろう」

「応、それはフェアじゃねえだろ…なあ、オルコット?」

千冬のあんまりな物言いに問題があると感じた俺は、セシリアへと話題を振る。

話を振られたセシリアは、懽然とした顔を俺に向けた後に立ち上がり、優雅に胸元に手を添えながら千冬に意見を申し立てる。

「わたくしに振らないでくださいませんか？…まあ、専用機を持っているわたくしと対等の舞台上で戦うのであれば、ファースト・シフトくらいは必要かと思えますが？」

ファースト・シフト…フィッティング初期化と最適化パーソナライズを行う事で、専用機は真の意味で操縦者専用の機体として機能し始める。

このファースト・シフトを行わない場合、機体の想定スペックを満たしているとは言えず、本来の力が発揮できているとは口が裂けても言えない。

「仮にも代表者を決める決闘だ…同世代の機体であつても強制ハンデを喰らった状態で実力もクソもないだろうが」

「…一理あるがな。アーリーナの使用時間も限られているんだぞ？」

「そんなもん、男性操縦者のデータ取りにご協力ください、で黙らせちまえよ。喉から手が出る程欲しいんだろ？俺たちのデータがよ」

そう、男性操縦者としてのデータ取りも兼ねている今回の決闘は、学園としても絶対に外せないイベントとなっている。

で、あれば…自らを餌に時間稼ぎをする事が出来る。

「…この件に関しては理事長と管理者を交えて協議する、いいな？」

「まあ、妥当な所だろうな…万人がお前の様に上手く使える訳じゃねえんだ、ぶっつけ本番だけは止めろ、いいな？」

「まったく、お前に言われると形無しだな…。授業を始めるぞ」

千冬は、俺に困ったような笑みを向けた後に肩を竦め、表情を改めれば授業を開始する。

ISの訓練ができない…っていうのは問題だが、ハンデ自体はこれで潰せた。

上手くやれるかは一夏次第だな…。

俺はそんな事を思いながら手帳を開き、必要な事を書き込みを始めるのだった。

## #16 暗月の舞踏

「わりいな、千冬。面倒かけさせちまってよ」

「お前の言う事ももつともだからな…：気にするな」

### 第2アリーナIS整備室。

IS学園には第1から第5までISバトル及び訓練用のアリーナが建設されている。

第1が最大規模のアリーナとなっていて、IS高速レースであるキャノン・ボール・ファストの訓練にも使われる。

またその規模から入学式等の式典もこのアリーナで行われている。第2から第4アリーナは、基本的にはISの実技訓練などで使われる事が多い。

訓練用の大量のISはアリーナごとに配備されているわけではなく、地下にある格納庫からハンガーに架かった状態で機械が持つてくる形になっている。

各アリーナごとに配備していたら、それだけで施設がでかくなってしまうからな…：人工島に建設されていると言う都合上、可能な限りスペースを節約したいと言う設計者の努力を感じてしまう。

で、放課後の今、俺は何をやっているのかと言うと、来週のお披露目の準備である。

訓練用のIS——この学園では日本の倉持技研の打鉄とフランスのデュノア社のラファールを採用している——を弄っている。

一夏にしろ、セシリアにしろ専用機持ちが相手になる事は確定している。

で、あれば多少は使う機体を選んで、『好み』に合わせたチューニングをしておきたいってものだろう。

「…本当に器用だな」

「ありがとよ。まあ、知り合いに機械いじりが得意な奴が居てな。そいつ手伝ってたら嫌でも覚えるし、ましてや俺は人形遣い…：人型の取り扱いは手慣れたもんさ」

千冬が差し出してきたラチュエットを受け取り、作業を進めていく。

俺がチョイスしたのはデユノア社のラファールだ。

フランス語で『風』を意味するこの機体は打鉄よりも脆い分、速度が出る。

どこぞの狼みたいに速度馬鹿って訳でも無いが、足が速いに越したことはない。

「そういうものか…?」

「そういうもんだ。で、一夏の方は待ってやれんのか?」

「ああ…お前の言葉が効いたのか、理事長から承認は降りている」

「なら、良い。つたく、訓練機じゃねえんだからフィッティングくらいはしてやらなきゃ駄目だろうが」

俺は一旦ISを弄る手を止めて、千冬をジト目で睨む。

千冬は、そんな俺の目から逃れる様に俺から視線を逸らして逃げようとする。

結構スパルタが過ぎるからな…こいつ。

一夏が未だ腑抜けた状態である以上、過酷な状況に叩き込んで引き締めさせるのは良いが、これは決闘。

対等な立場でなければお話になりもしない。

「千冬が考えていたことも分かるけどな…コレがいくら安全だっていつてもダメーじ自体は通る。一方的に嬲られる方が一夏の為になるか?」

「それは…」

「ただ優しいだけの優しさは温さだがな、厳しだけの厳しさは優しさじゃねえ…自己満足だ。飽がなきや、人間はやる気出さねえからなあ」

「言いたい事は分かる…だがな、お前は兎も角、一夏はただの子供なんだ。少しでも強くなって身を守れるようにならなければ…」

千冬は片腕を掴む様にして腕を組み、爪が白くなるほど強く握り込む。

千冬の胸中に過るのは、言うまでも無くモンド・グロツソにて起きたあの事件。

姉弟揃ってトラウマ化してる辺り、本当にそっくりだな…。

「千冬、そう言うのは付け焼刃って言うのさ…鈍ら以下だぞそんなもん」

「分かっている！分かっているんだ。だが…たった一人の家族なんだ…」

「ブラコンシスコンで本当にそっくりだな teme 等は…」

「返す言葉も無い…」

千冬は授業中一夏に対して厳しく接しているが、社会の枠組みから外れた家族と言う立場に戻った時、なんだかんだで甘くなる。

で、なければ日頃の激務で疲れている体を休めるべき時に一夏と組手をしようとはしないだろう。

大事に大事にしすぎて、逆に焦っている…ってところだな。

「ISに触れて扱っていけば、自ずと覚悟が決まってくるはずだ。殺し合いをした事が無い人間が、玩具を持って遊んだところでなあ…」

「ISを玩具と言うか…」

「束にや、悪いけどな。現状、物事の本質を見据えないで地上で遊んでるんなら、此奴らは玩具以外の何物でもないさ」

ISは宇宙空間での使用を想定して開発されている。

これは真耶の授業でも取り上げられた一文なんだが、宇宙開発に利用されているのかと思って調べてみれば、そんな情報は一切なかった。

ちまちまと宇宙ステーションを作って観測や研究をしているだけだ。

では、ISはどこに使われているのかと言えば、軍事力と言うその一点だけだ。

究極の兵器と言う謳い文句が宇宙開発と言う未来を閉ざし、一人の人間の夢を踏みにじった。

俺は、そう読み取ったんだ。

「世に出すべきではなかったのかもな」

「ハッ、いずれ出る。遅かれ早かれな。そして、仮に遠い未来に出たとしてもやる事は現状と変わらないさ」

「随分と悲観的だな」

「リアリストって言って欲しいもんだねえ。まあ、夢見るのを悪く言うつもりはねえさ。強いて言えば、欲が悪い」

課程はどうあれ、善意から出た欲望と言うのは質が悪い。

国を守りたい、豊かにしたい、結果的にそこに住む人々を幸せにしたい：その結果が今の世情つてのも悲しいもんだが。

「欲、か：到底打ち倒せそうにないな」

「そういうもんじゃねえだろ：欲あつての人間だからな。それに？欲がなきや悪魔は生きられねえからなあ」

けっつけ、と意地の悪い笑い声を上げながら、手に持ってたラチエットを片手でジャグリングする様にして弄ぶ。

欲が無ければそれは人間とは言わない：ただの機械だ。

そんなものを愛せる程、俺は酔狂では無い。

「どうしたつて、地上であれこれやるには『此処』は狭すぎる。その内ソラに目を向けるさ」

「動機が些か不純では無いか？」

「人間なんて、そんなもんさ：不純だろうがなんだろうが、最後に成し遂げた奴が勝ちだ」

俺は再びラファールと向き直つて会話を切る。

余裕がないと言う訳ではないが、無駄話をするほど暇と言う訳でもない。

アリーナは、基本的に寮の門限である20時には閉まる様になっている。

つまり、この整備室も使用時間が限られてくる。

日中は勉強に仕事にと時間を割くことができない。

放課後のSHRは17時30分に終わるので、移動時間を考慮すると実質2時間しか使えない計算となるわけだ。

これが小さな人形なら話は変わるが、生憎と触れた事のないIS。突貫作業故の整備不良なんて目も当てられないので、慎重にならざるを得ない。

まあ、それでも常人よりは手早くやれてるって自負はあるけどな。

「千冬、手え借りても良いか？」

「構わないが…何をさせる気だ？」

「ん、それはだな——」

結局、実質二時間しか使えない所為もあつて、機体のチューニングを終える事は出来なかつた。

それでも全体の4割程は終わらせているので、なんとか決闘後のご褒美には間に合いそうだ…機体はな。

意地悪…と言う訳ではないが、今回千冬に頼んだ内容と言うのは、IS関連で保管されている、所謂試作兵装と呼ばれる火器の調達だ。いずれも稼働テストを行っていないとの事だが、一夏が勝つてもセシリアが勝つても良いように使える兵装を選んでおく必要があつた。何れも第二世代で使える、と言う触れ込みだが、あくまで机上の空論の産物であり、その動作は保証されているものではない。

しかし、打鉄同様に幅広い拡張性をもつたラファールであれば積むこと自体は可能なので、千冬に無理を言つてリストを渡しておいた。

…あの、目を丸くさせた千冬つてのは中々面白かつたが。夕食を無事に済ませれば、寮長室には戻らず玄関を出て、石段を椅子代わりに腰掛ける。

ぼんやりとした顔で空を見上げながら取り出すのは煙草…寮長室が俺一人で使うと言うのなら、気兼ねなく吸うんだが、今は千冬が一緒だ。

で、あれば誰にも迷惑が掛からないであろう場所で煙草を吸う他ない。

喫煙者つてのは何でこんなに肩身が狭いのやら…。

寮から漏れる光や、玄関を照らす灯り、そして街灯があるとは言え視界は暗い。

煙草を口に咥えて懐からオイルライターを取り出し、火を点けた瞬間に手から取りあげられる。

「……、禁煙ですよ…せ・ん・せ」

「あ…：食後の一服は命の水より大事なんでね…：変な小細工しないで

返せ、小娘」

音もなく俺の背後から近付いてきたのは、この学園の生徒会長…赤い瞳に水色の髪は跳ねっ毛の猫…と言うより雌豹と言った印象を受ける女、更識 楯無だ。

楯無は大仰な演技でよよよ、と体勢を崩し、下手つくそな演技で泣き真似をする。

…馬鹿にしてるんだろうか？

「え〜ん、先生の健康を思つてライターを取り上げただけなのに〜」

「あーそーかい、だったらもう手遅れだから返せ。そいつはお気に入りなんだからよ」

「ひどーい、こんなに美人で可愛い女の子が泣いてるのに、フォローもしてくれないのかしら？」

楯無はクスクスと笑いながら俺の隣に座り、手早くオイルライターを俺に放り投げてくる。

奪つておいて返し方が雑すぎる…頑丈だから良いんだけどな。

「そんな仏頂面にならないでくださいよ。それともこんな美女が相手じゃ不服？」

「ハッ、もう一回り歳食つてから色仕掛けするこつた…つたく、余計なものつけるなつて言つたら？」

俺は煙草に火を点けた後にライターのケースからオイルタンクを抜き取り、仕込まれていた盗聴器を抜き取つて握りつぶす。

楯無は不満げに唇を尖らせて、パンストに覆われた美しい脚をバタバタと振る。

「ぶ〜ぶ〜、なんで分かつたのかしら？」

「あのな、手品とかその類いは俺のお家芸なんだよ…ガキんちよとは培つてる年季が違うのさ」

「おじさん臭いわ…」

「…ガキからすりゃ、俺なんておっさんみたいなもんだろ」

懐から取り出した携帯灰皿に灰を落しつつ、ゆっくりと口から煙を風下へと吐き出していく。

風下に座らなかつた辺り、おめでたい頭をしてるってわけでもない



らしい。

「んで、俺に何か用か？」

「あら、用が無ければ近づいちゃいけないのかしら？」

「そうは言ってねえよ…。年頃の娘っ子がおっさんに興味持つもんか  
なっつてな」

「あら、持つわよ。目つきは悪いけど充分顔は良い方だもの。それになにより…」

楯無は一度言葉を切ると、にんまりとした笑みを浮かべ、俺の顔を覗き込む様にして近付けてくる。

俺は慌てて煙草を消せば、顔を背けて煙を吐きだす。

煙草吸ってるっつーのに顔を近付けるんじゃない…と言おうとする前に先に口を開かれる。

「同型機…ブリュンヒルデは専用でチューニングして拮抗するだけの腕前を持っている。どういう経緯があったのかは分からないけども、天賦の才と言う感じでもないし…興味を持たないと言う方が無理な話よ」

「それは学園最強だからか？」

「それもあるわね…だって、私は生徒を代表する学園の頂点だもの」

楯無は勢いよく扇子を開いて口元を隠し、不敵な笑みを隠す。

敵意、ではなく、戦意を滾らせるその瞳は、今すぐにも戦ってみたいと言う様に訴えかけてくる。

IS乗ってるのは血気盛んなのが普通なのかねえ…セシリア然り千冬然り…。

俺は楯無の額を指で軽く弾いて顔を遠ざけさせ、新しい煙草を取り出す。

「一本じゃ足りないのかしら…？」

「ヘビースモーカーなんで…」

此方を観察する様な視線にうんざりとしながら、再び煙草を口に啜えて首を軽く傾げ、楯無を突き飛ばす。

「ちよっ!？」

「ったく、おちおち煙草も吸えないわな…」

「吸ってるじゃない！」

楯無が突き飛ばされたことを抗議しようとするが、背後の扉を見て意識を切り替える。

理由は簡単：扉に弾痕が出来ているからだ。

俺は楯無を突き飛ばした瞬間に煙草に火を点けつつ立ち上がり、弾道から狙撃犯の居る方へと目を向けてコメカミを指先で軽くつついて嗤う。

「楯無、適当に逃げてるから狙撃犯に気取られない様に始末しろ。どうせ、海上だろうからお手の物だろ？」

「あら、情報早いよね？」

「教師だからなっ！」

狙撃犯から目立つように煙草をふかしつつ寮から離れる様に駆け出し、当たったところで大したことは無いが当たれば痛いので、木々の多い雑木林を逃走先に選ぶ。

IS学園の寮はあらゆるテロに対応できるように、窓から壁に至るまで薄くではあるがシールドエネルギーが張り巡らされている。

停電でも起こらない限り、外部からの衝撃は基本的には通用しない。

出入り口である扉には、あの時シールドエネルギーが張り巡らされてなかった。

理由は単純にして明快、寮の住人である俺が扉の前で居座っていたからだ。

流石に出入りする際にシールドエネルギーを張り巡らせたままでは、人が通れない。

：風は通すんだけどな：：どういう技術なんだか…。

ハンドスプリングの要領で前方に体を投げ出し、弾丸を紙一重で避ける。

向こうも大分苛立ってきたのか狙撃の精度が甘くなってきた。

その代わりに連射速度が上がってる気がするんだけどな！

「つたく、食後の運動はベッドの上だけで良いっつーに！楯無はまだかねえ？」

走り始めてから既に十分：楯無が足止めを食らっているのか、それとも：俺が誘導されているのか？

漠然とした勘でしかないが、弾丸に込められた殺意は本物であることは間違いないって言うか、煽った結果余計に殺意がこもったと言うか…。

とりあえず、スコープ越しに見える様に中指立てつつ舌を出して狙撃犯を煽り、太い桜の木の幹を盾にして隠れる。

「つたく、煙草くらいゆっくり味わわせろっつーに…」

木の幹からフィルター近くまで吸った煙草をそつと出すと、正確に煙草を撃ち抜き鎮火してくれる。

便利便利：俺はニヤニヤとした笑みを浮かべながら携帯灰皿に吸殻を捨て、新しい煙草を啜えて火を点ける。

さて、そろそろ続きを始めようと立ち上がると、此方へと歩いてくる足音が響いてくる。

「あら、こんなところで一服かしら？」

「関係者以外立ち入り禁止だぜ、お嬢ちゃん」

現れた人物は豊かなブロンドと千冬顔負けのバストを持った、所謂セレブと言った風貌の美人だ。

まあ、その殆どが造り物なんだがな。

見た目は20代後半…実年齢は40代って所かね？

この世界にも随分と綺麗な義肢を作る奴が居たもんだ…。

「海上に居るお嬢ちゃんは、あんたの子飼いかい？」

「さあ…どうかしらね？」

ブロンド美女は艶やかな笑みを浮かべながら、しやなり、しやなり、と歩み寄ってくる。

まるで獲物を見定めた肉食獣のソレだな。

俺は辟易としながらため息をつきながら、煙草の煙を一気に吐き出す。

「まあ、なんでもいいけど…ナンパなら他所をあたるこつた。これでも身持ちは固い方なんでね」

「そんなつれないこと言わないの…私はそそらないのかしら？」

「見る目は鍛えてるんでね…」  
軽く肩を竦めて鼻で笑う。

こいつの中身は炎だ…それもドス黒い怨嗟の炎が渦巻いている。  
その為には手段を選ばない覚悟もあるようだ。

俺のこの反応に、少しばかり目の前の美女は頬をひくつかせるがすぐに表情を改める。

「これでも、自信はあったのだけれど？」

「人は人として老いさらばえるからこそ、美しい」

「あら、どういう意味かしら？」

「なんだ、口で言っただけかい？」

不敵な笑みを俺が浮かべると同時に、美女は能面の様な無表情になる。

おそらく秘密にしている部分なのだろう…それと同時に触れてはならない部分でもある。

それが、望むと望まずとに関わらずできた秘め事であったとしても。

まあ、俺には関係が無い。

「単刀直入に言うわ、貴方モルモットになってもらうわ」

「はいそうですかって言うと思うか？」

「思わないわ、だから…」

「そこで何をしている!!」

美女から発せられる気配に殺気が混じった瞬間、暗闇の奥から複数人の足音と大声が響き渡る。

援軍にしちや遅いが…まあ、俺も逃げ回ってたし文句は言えないか。

声から察するにやってきたのは、千冬だ。

「もう、仕方ないから今日は此処で手を退くわ。また会いましょう、Mr. ミュラー」

「会いたかねえよ、物騒な女にはな」

「女に危険はつき物よ」

殺気を消した美女は、自身の名を名乗ることなく踵を返し、悠然と

した歩調で夜闇に紛れて姿を消す。

海上で俺を狙撃したやつ、今回の女、それと侵入と脱出を手引きした馬鹿：最低でも三人、何れも女と言った所か。

狙撃にしろ侵入にしろ最低限の装備が必要になってくるし、その最低限をコンパクトな形に納める事ができるとなるとISしかない。

現状男性で使えるのは俺と一夏だけしかいない事を考えると、女性だけで構成されたチームであると考えるのが妥当だろう。

IS学園の要塞は対軍隊なら如何なくその防衛力を発揮できるんだろうが、こういうネズミが入る隙間と言うのは防ぎきれないんだろう。

人員も、技術も限界がある。

カバーできるとしたらあの三月兎くらいだろうが…。

「アモン！無事か!？」

「おー、ピンピンしてらあ」

「そうか…まったく、どうして寮に逃げ込まなかつたんだ!!」

千冬は駆けつけるなりホツとしたような顔をするが、すぐに表情を怒りに染めて抗議の声をあげる。

千冬の連れてきた人員はすぐさま散開して、侵入者の追跡にあたっているが…恐らく無駄だろう。

つくづく、ISと言うのはチート染みているな。

「ガキ共巻き込むわけにはいかねえだろ？もし、集中して重火器を使われたらどうなるよ？」

「それでも、だ。あの寮だってそれなりに頑丈には造られている。反撃に出ることだって…」

「侵入を許してる時点で俺たちの負けだよ、千冬。俺を殺せば儲けもんと思っただんだらうな…あちらさんは」

生きたデータは一夏がとつてくれる。

で、あれば特に関係のない俺を解体解剖して仕組みを調べた方が有益になる、とでも考えた奴が居るんだろう。

物騒な世の中だな…男性に権利が無いからこそ、か？

そんな事は無いか…。

「これではおちおち外出も儘ならなくなるな…」

「おい」

「仕方ないだろう？お前を殺させるわけにはいかない」

「勘弁してくれよ…こんな辺鄙なところで缶詰とか息が詰まる」

「そう言うな…お前も自分の立場は理解しているだろう？」

俺ががつくりと肩を落とすと、千冬はフルフルと頸を横に振って俺の肩を叩いて慰める。

根無し草の放浪人が、自由に外出できないなんて苦行も良い所だろう。

俺はこれからの学園生活に大きな不安を抱えるのだった。

「見抜かれた…まさか、ね？」

「どうした、スコール？」

うすぼんやりと外からの明かりがカーテンの隙間から漏れる室内。

女性特有の甘ったるい香りが充満するこの部屋の中で、二人の女性がベッドを共にしている。

スコール、と呼ばれた女性は、アモンが出会ったあのセレブ然とした美女だ。

「いいえ、何でもないわ。一先ず、これで先方の依頼通り彼を学園内に釘付けにする事ができる。欲を言えば体の一部でも欲しかったところだけ…欲張りは身の破滅を招くわけだし…」

「んっ…なあ、だったらもっご褒美をくれよ…」

もう一人の女性はまるで恋する乙女のようにスコールの体にしがみ付き、キスを強請る様に顔を近付ける。

この、淫靡な空間を邪魔するものは誰も居ない。

スコールはすぐに仕事の事を頭の片隅に追いやり、少女の様に強請る女性の体を愉しむ事に注力した。

## #17 劍聖、魔刃、桜花嵐舞

「……ふー……」

油臭い機械だらけの部屋の中で、俺は静かに煙草を吸う事で自分の苛立ちを少しでも和らげようとしている。

結局、楯無と学園の警備部は侵入者たちを捕えることなく、逃がす結果となってしまった。

どうやら、組織の規模もでかいようで、完全に足取りを見失ってしまったと言う事で、此方からはアクションを起こすことが出来ないと言う事だ。

「みゆ、ミユラー先生！……禁煙ですよ！」

「んー、まあ、硬い事言いなさんな。どうせ、ガンパウダー臭くなるんだからよ？」

「だからですよ……織斑先生」

真耶は煙草を吸っている俺の姿を見咎めると、頬を膨らませて叱り付けるものの、のらりくらりとしている俺の態度にすぐ涙目になって千冬に助けを求める。

教師の威厳ってなんだろうな……？

千冬は軽く頭を抱えて溜息をつくど、俺の近くまで歩み寄って煙草を奪い取ろうとするが、

俺は軽く状態を逸らして千冬の魔の手から煙草を死守する。

「アモン、控えろ」

「やなこと」

時は流れて月曜日：第二アリーナの観客席は学園中の教師や生徒達で所狭しと溢れかえり、盛況なんて言う言葉が生易しく見える。

俺と千冬、真耶は第二アリーナにあるピットで、一夏の専用機が到着するのを彼是2時間近く待っている。

昨日の段階で倉持に連絡した際には、遅くとも4時までには送り届けると言う話だったんだが……。

時計の針を見ると、既に時刻は4時をまわってしまっている。

俺はピットの壁に備え付けられている通信機を手に取り、俺たちの

いるピットとは正反対のピットで待機しているセシリアへと連絡をとる。

「もしもし、聞こえるか？」

『漸く、専用機が届きました？』

アリーナの通信機器は、ISに備えられているデータ通信ネットワークシステムであるコア・ネットワークにプライベート回線で繋ぐことが出来る様になっている。

俺は直にセシリアの専用機であるブルー・ティアーズに通信を繋いでいる。

セシリアは待ちくたびれたと言わんばかりに、声色に苛立ちを乗せてくる。

俺は相手が目の前に居ないにも関わらず、力なく首を横に振って口を開く。

「んにゃ、まだ届かねえ…まだ待てるか？」

『ええ、待ちますとも。決闘となったからには、しっかりとどちらが上かはつきりさせてさしあげねばなりませんし』

「そら、良かった。つたく、倉持の奴ら何やってんだかな…」

倉持技術研究所…略して倉持技研は日本国内のISメーカーでもトップシェアを誇る、有数の大企業だ。

国産としては初の量産型ISとなる第二世代型IS打鉄の生産に始まり、千冬の専用機暮桜の開発…そして、一夏の専用機の『組み立て』とその企業としての力を見せつける様に、IS技術発展に寄与している…筈だった。

現在、世界は第三世代型ISの研究開発を加速させている。

第三世代型ISの最大の特徴は、思考することによって機体制御を可能にするイメージ・インターフェース・システムとセカンド・シフト以降に使えるようになるという単一仕様能力を再現した兵装…第三世代兵装を備えている事だ。

ワン・オフ・アビリティは文字通り各機体ごとに発現する魔法のような能力を発揮させる事が出来る。

例えば風を自在に操り、分身すら作り出す能力や、一番有名な所で



は千冬の暮桜が發揮したワン・オフ・アビリティ『零落白夜』によるエネルギー無効化能力だな。

こういった能力をファースト・シフトから使える様にしようと言う目論見を持つて作り上げられているのが第三代型なんだが、倉持は次期主力量産型として開発していた第三代型ISの開発の中止を正式に決定した。

理由は言わずもがな、篠ノ之 束が設計した第三代型ISの研究調査に重きを置いたためだ。

それだけならば良かった…企業の発展には必要な犠牲だよねで済んだんだが…。

問題は、中止された第三代型ISは1年の中にいる日本の代表候補生が受領する予定だった機体だと言う事だ。

専用機を持つ、と言う事は、IS乗りにとつて大きなステータスになるし、何よりそこに至るまでの道のりは非常に険しい。

代表候補生と言う立場自体が狭き門である上に、その中から専用機持ちになるなんて言うのは、ほぼ無理と言つても違いない。

代表候補生に専用機をあげるくらいならば、国家代表に専用機を渡した方が良くからな。

そんな茨で覆われた千尋の谷を這いあがってきた日本の代表候補生の心中は、察するに余りある…。

本来なら一夏が受領する予定の専用機は、その娘が乗るべきなのだ。

『…随分、苛ついてますわね?』

「んん? 大人は悪いものを直視して、受け止めなきゃならねえ事もあんのさ。八つ当たりの様に感じたのなら謝る」

『いいえ…何とも思っていないので』

セシリアは何処か俺の事を小馬鹿にしたような声色で言い、通信を切る。

セシリアのあの男嫌い…一体何が原因なのやらな?

大方、親父が腑抜けだったか何かで、嫌気がさしているとかそんな所なんだろうが…年頃の女の子ってのは扱いが難しい。

セシリアの父親には同情を禁じ得ない。

なんにせよ、一夏の専用機が来ない事にはお話にならないな…。

「アモン、お前が一番落ち着いていないな？」

「んなことあるかよ…苛つきはしてるけどな」

「倉持の件は把握しているが、あれは国の意向でもある…我々ではどうにもできないだろう？」

「だからって、努力を無下にする仕打ちをして良いって免罪符にはならねえだろうが」

千冬は呆れたような表情で言うが、俺の反論を聞くと目を伏せ口を噤む。

IS学園に入る前に代表候補生になる…つまり、この学園に入学した生徒の誰より知識と技術と経験とを体に叩き込むと言うのは、前にも言ったように並大抵の努力では実らない。

そんな努力を裏切られたと思えば、俺だって義憤に駆られると言うものだ。

「そ、それにしても！倉持技研さん遅いですねえ！渋滞に巻き込まれたんでしよつか？」

「んっ…まったく、納期守れないのは企業としては下の下なだけだな」

「そうだな…ふむ…すまない、少し席を外すぞ。山田先生、織斑の専用機が届き次第フィッティングを始めてくれ」

「え、あっはい！」

千冬は何か考え込んだ後に小さく頷き、真耶に仕事を頼んだ後に俺の事を見つめる。

俺はガシガシと頭を搔いて溜息をつき、付けていた伊達メガネを外して羽織っていたコートを脱ぐ。

千冬は俺の行動に満足げに頷けば、スタスタと歩いてピットを出て行ってしまふ。

「ミューラー先生？」

「適正検査の時の再戦だとよ…まったく、俺の相手はガキの筈だぞ…」

男性用にデザイン——二の腕、腹、太腿部分が露出した黒いウエツトスーツの様なデザイン——されたISスーツ姿になれば、ハンガー

に架けられた専用チューニングしたラファールを身に纏う。

真耶は、慌てた様子で通信機器に向かつて何処かに連絡しているが、時既に遅し…と、言うか元々そう言う段取りだったのか、進言は無視されたようでガツクリと肩を落とす。

…本来、千冬はISに乗る事を許されていない。

表向きはモンド・グロツソ棄権及び、千冬の専用機とは言え日本のISをドイツ国内にて無断使用してしまった為とされている。

だが、本音で言ってしまうえば、千冬を止められる人間が居ないと言うのが最たる理由となっている。

仮に、千冬がISに乗って暴走してしまった時…それこそ手が付けられなくなる。

だから、教師と言う形でIS学園内で飼育殺しにしていた。

千冬を教師として使うよりも、国家代表の専属コーチとして使用した方が遥かに有益な筈なんだが、な。

ラファール側からハンガーを操作してISのロックを外して地上に降りれば、ゆつくりとした動作でカタパルトまで歩き、ハッチを開ける。

「真耶、ラファール出すから下がってな」

「で、でも！」

「賽子振られてんだ…どっちが勝つにせよ、時間稼ぎくらいにはなるだろう？」

「…っ…分かりました。けど、あの検査の時みたいな殴り合いはダメですからね！」

「へいへい…じゃ、ラファール出すぞ〜」

俺は真耶の警告を適当に聞き流しつつ、カタパルトのハッチを閉めてカウントをスタートさせる。

まるで、ラファールが自分の着ている服の様に感じられる…どれだけ保つのかは分からないが、全力で動いても問題は無さそうだな。

ISはどうしても関節部に機械的な部品を使って動かしているの  
で、俺みたいに無駄に力が強いとついて来られない可能性がある。

そうならないためのチューニングではあるが、如何せん第二世代且

つ訓練機。

性能的に限界があるのは諦めるほかない。

とは言え、条件はほぼ千冬と対等……ISでの戦闘経験は雲泥の差があるものの、場数の多さだけならば、友人達以外に他の追隨を許さない自負はある。

感覚の違いは本番でどうこうするしかないだろう。

「んじゃまあ……行くかい」

カウントがゼロになった瞬間機体がふわりと浮かび上がり、電磁力の力でカタパルトレールに沿ってアリーナ内へと撃ち出される。

慣性に流されるままにそのまま飛行してアリーナの中央まで移動し停止すると、観客である生徒達から一斉に動揺のざわめきが響き渡る。

俺はそういった同様の声を無視して腕を組み、静かに決闘相手の登場を待つ。

『これは、どういうことなのでしょう？』

「さて、ね……世界最強の女にでも聞いてくれ」

『……まさか、貴方の相手と言うのは……っ!?!』

ラファールのコア・ネットワークのプライベートチャンネルに、セシリアからの通信が入る。

本来、俺はオマケとして今回の決闘の勝者と闘う事となっていた。

俺自身の実力を認識させるために。

だが、予定を繰り上げて出てきた俺にセシリアは抗議しようとしたのだ。

俺は機先を制する形で千冬の名前を出してセシリアを黙らせ、一方的に回線を切断する。

断じて意趣返しと言う訳ではない。

『え、えっ!?!これ、本当ですか!?!……コホン、織斑 一夏君の専用機の搬入に遅れが生じていると言う事で、これより予定を変更して教師陣によるエキシビジョン・マッチを開始します!!』

アリーナに響き渡る歓声は大きな動揺となり、俺に対して注目が集まる。

何せ、IS歴これで2日のド素人が国家代表や代表候補生だった教師とやりあうと言うのだから。

まず、間違いなく一方的なワンサイド・ゲームになると思われている。

誰だってそう思うだろう…俺だって普通だったらそう思う。

ましてや、相手が…

『あ、あれは…暮桜!?!』

「随分と、過大評価が過ぎやしねえか…千冬よう?」

「…手は抜いてくれるな…お前とは全力で死合を演じたい」

目の前に現れたのは、鮮やかな桜色の武者鎧を思わせるIS…暮桜を身に纏う千冬だった。

その顔は、全力で打倒すると言う覇気で満ち満ちている。

…だが、どうして暮桜があるんだ?

あれは、日本所有の国家代表用の専用機…千冬が引退した時に没収されたはずなんだが。

「…初心者に本気でやれとか無茶言いやがる」

「無茶な物か…もう感覚は掴んでいる癖にな」

千冬は量子化していた一振りの刀…雪片を呼び出して手に馴染ませるように持つ。

対する俺は、分厚い刃の付いた巨大な片刃大剣エンハウンス・ソードを右手に呼び出す。

これは千冬に搭載する様に頼んでいた、ドイツのIS企業が寄贈してきた『欠陥品』だ。

ゆっくりと右手だけで千冬に大剣を差し向けて、睨み付ける。

「千冬…何か焦ってるのか?」

「いや…ただ、お前との死闘を楽しみたい…それだけだ!!」

『ば、バトルスタート!!』

千冬は昂る自分を抑えきれないのか、試合開始のゴングが鳴ると同時に瞬時加速を使って一気に俺の間合いの内側へと潜り込んでくる。

速度にして1秒にも満たない…それ程の速度で肉薄した千冬は、先手必勝とばかりに雪片に光を纏わせての横薙ぎを叩きつけてくる。

『零落白夜』：エネルギー無効化による強制的な絶対防衛を発動させる事で、エネルギーを削り取る攻撃は当たれば確かに脅威だ。

だが、俺は素早く左手に切れ込みの入った短剣を呼び出して雪片を受け止め、拮抗状態に持ち込む。

零落白夜は確かに強力だ：エネルギーに対して天敵とも言えるほどの力を持っていると言える。

しかし、しかしだ：それはエネルギーに対して強いのであって、ただの鉄の塊には温かい光でしかないと言う事だ。

エネルギーに触れる事が無ければ、零落白夜はそこらの懐中電灯と変わらない。

「ちっ…い」

「さつと…：時間はかけてやれねえ…：ただのラファールだから」

俺は切れ込みの入った短剣：マインゴーシユを素早く振って雪片を弾き、右手に持った大剣を思い切り振りかぶる。

千冬は力に流されるままに素早く後退し、距離を開けようとするが一步遅い。

振り下ろす瞬間に、柄につけられたトリガーを引くと大剣の峰に備えられたロケットブースターが一斉に火を噴き、凄まじい速度で振り下ろされる。

：マインゴーシユは見たままの時代遅れの鈍ら…：そして、この片刃大剣はどうあがいても制御しきれない暴れ馬として欠陥品扱いきれた作品だ。

そもそも、ISバトルは射撃戦が基本となる事が多い。

つまり、こんな近接兵装で戦う機会と言うのは相当上手く接近するか、互いに近接武器が決め手でも無ければ発生しないのだ。

よって、マインゴーシユは時代遅れと揶揄され、片刃大剣は暴れ馬として倉庫で腐る事となってしまった。

「くっ!!」

「オルア!!!」

ぶつきらぼうに叩き込まれる片刃大剣を、千冬は両手で構えた雪片の刃で受け止める。

臂力と重量、速度から成る衝撃は千冬を以ってしても受け流し切れず、凶らずとも暮桜をボールか何かの様に地面に叩き付ける形となる。

俺は素早くトリガーから指を離して火を消しつつ片刃剣を肩に担ぎ、左手のマインゴーシユを手放しながら量子化し、新たに単発式のピストルを呼び出す。

：アメリカの某銃会社が作り上げたこの銃は、弾丸の装填こそパスロットから行えるものの、一々薬室から薬莖を排莖しなくてはならないと言う、やっぱり欠陥品と言わざるを得ない銃器だ。

たしか日本語で『競技者』だったか…？

俺は粉塵で見えなくなつた千冬目がけて引き金を引き、『競技者』から弾丸を吐き出させる。

貫通力に特化した弾丸は、ラファールのパワーアシストを以つてしても凄まじい反動が腕に走るが、俺は構わずに排莖を行つて次弾を装填。

すぐさま、千冬が飛び出してくるであろう方角に弾丸を撃ち込んでいく。

しかし、千冬は俺の予想に反して動かず、あろうことか初弾を切り飛ばして真つ直ぐに此方へと突っ込んでくる。

「欠陥品ばかり、よくも使う！」

「刀一本しか積めないお前に言われたかねえわ!!」

排莖作業は間に合わない…この銃は単発しか撃てないために、零落白夜同様に『一撃必殺』で当てる必要がある。

相手が千冬で無ければ十分に時間を稼ぐことも出来るだろうが、生憎と万全の状態の暮桜に乗っている状態の千冬だ…時間稼ぎは許されない。

俺は肩に担いでいた片刃大剣をしっかりと両手で握りしめ、千冬と切り結んでいく。

鋭い金属音がそれこそマシンガンの様に響き渡り、雪片と片刃大剣が巻き起こす旋風は、まるで俺と千冬の闘志のぶつかり合いの如く荒れ狂い、さながら台風の中で戦っているかの様だ。

「シイッ!!」

「ちっ!!」

大剣と言う重量物を扱う都合上、刀相手にはどうしても防戦一方になつてしまう。

かと言つて、ラピッド・スイッチ高速切替じや遅すぎるくらいの猛攻を受け流し続けている。

確かに、世界最強なんて肩書は伊達じゃない…だが、俺はこれでも負けず嫌いなんでね。

だから、俺はあつさりと片刃大剣を弾かれる事にした。

「貰つたぞ、アモン!!」

「そうかい!!」

宙高く舞う片刃大剣、がら空きになる胴体、会心を確信し笑みを深める千冬…。

全てがスローモーションに感じる中、俺は両手に武器を呼び出せば瞬時加速を行つて千冬に向かつて体当たりを行い体勢を崩させる。

「ぐっ！往生際が…！」

「勝利に貪欲でなければ勝てねえからなあっ!!」

俺の両手に呼び出されたのは黒塗りのオートマチックタイプのハンドガン…ただし、銃身に銃剣が付いたもの。

この銃剣、溶断させるために高熱になる仕組みになつているのだが、如何せん高熱が災いして長時間稼働させると銃身が歪む。

よつて使うならば短時間…しかも使つた後の銃弾の発射は保証しませんよと言う代物だつたりする。

なんで、俺こんなの乗せたんだろう…。

ともあれ、ナイフと同じ感覚で使えるのはありがたい。

素早く腕を振り下ろすと、千冬は雪片で銃剣を受け止めようとするが、素早く身を振つて受け止める事を止める。

事実として、その判断は正しかった。

この武器、元々はハンドガン…つまり、斬りながら銃弾を放つ事ができる。

…熱展開できないけど。



「このっ！」

「そろそろそろあつ!!」

所謂ガン・カタの様に腕を大仰に振りながら銃弾を撒き散らし、俺は千冬の行動を阻害しながら責め立てる。

銃剣を受け止める事はできず、弾丸は絶えず吐き出され続けて防戦に徹するしかない。

だが、千冬はまだ諦めていない…強引に攻め込んでも良いが、無用な被弾は避けたいと言った所だろう。

なんせ、この武器ではISのシールドエネルギーを削りきるには足りない。

そして、突然の弾切れである。

「弾数少なっ!?!」

「今度こそ…っ!!」

あっけない幕切れ…とは行かずに、俺がハンドガンを捨てると同時に千冬は素早く後退する。

タイミングよく片刃大剣が落つこちてきたからだ。

「つと…流石によく見てるな」

「…バツサリやられるのはつまらないからな」

ISには生体補助機能がある…にも関わらず、千冬は額を汗で濡らし、俺は逆に涼しい顔だ。

…本気でこっちに突っ込んできてくれるのは純粹に嬉しいもんだ。

俺は視界のハイパーセンサー越しに表示されるアラートを無視して、片刃大剣をゆつくりと構える。

「さて…つつこんだ武器のデータも取り終わったし、心行くまで切り結ぶか」

「ふん、その機体でよくもまあ…だが、次で決める。暮桜は大喰いだからな」

千冬もゆつくりと雪片を構えると、長いにらみ合いが続く。

凄まじいプレッシャーに気圧されたのか、観客も実況も静かに黙りこくり、アリーナ内は物音ひとつしない状況だ。

1分か…それとも1時間か…永遠に続くと思われたこの静寂は、誰

かが落とした容器の音で打ち破られる。

「はああああっ!!!」

「おおおおおっ!!!」

瞬時加速：互いにゼロからトップスピードに乗り、景色を置き去りにしながら前進。

千冬は零落白夜を展開した雪片を逆袈裟から斬り込むために体を捻り、俺は片刃大剣に残された推進剤を全てつぎ込んだ大上段を叩き込もうと思いい切り振りかぶる。

裂帛の気合と共に叩き込まれる互いの斬撃：しかし、どちらも攻撃が当たる事は無かった。

千冬は俺の脇腹に当たる直前で腕を止め、俺は、千冬の額をかち割る直前で動きを止める形になる。

「ば、ばかな…!?どうした、暮桜!」

「ちっ…!!」

俺は両手の片刃大剣を量子化すれば、勢いあまって千冬に衝突した様に見せかけて俺の飛び出してきた方のピットへと突撃し、アリーナから身を隠す。

とてもじゃないが、見せられるものじゃない。

理由は、暮桜のコア反応が突如消えた為だ。

東の作ったコアに限ってそんな事はあり得ないだろうが：一体：？

「織斑先生、ミユラー先生!!」

ピットに不時着する様にして侵入した俺と千冬を心配する様に、真耶が此方へと駆け寄ってくる。

俺は両腕の中に居る千冬と暮桜を見て眉を顰める事となった。

「おい、千冬…こんな事はあるのか?」

「し、知らん…なんなんだ、これは…?」

端的に言うと、暮桜が石化している。

ラファールが掴んでいる部分の装甲は風化したように脆くなり、少しでも乱暴に扱えば崩壊してしまうような危うささえ感じる。

「と、兎に角お二人ともISをハンガーに！暮桜は整備班に至急回し

ます！」

真耶はいつも以上にテキパキとした動作で機材の準備に入る。

暮桜の突然の石化現象…：どうにも不吉な前触れに感じて仕方がない…。

とりあえず考えても仕方がない事なので、俺と千冬は身に纏っているISをハンガーに架けて真耶に運搬を任せる。

静かに溜息をつくくと、見慣れない人物が大型のコンテナと共にピットへと入ってくる。

「お待ちせしました、織斑 一夏さんの専用機をお持ちしました」

## #18 白と青の輪舞

戦場を優美な青と鮮烈な白が行き交う。

片や獲物を狙いすました猟師が如く、片や猪突猛進の若武者が如く。

試合開始から早10分…一夏とセシリアは互いに決定打を与える事ができないまま、膠着状態に陥ってしまったている。

一夏の専用機：白式は、西洋騎士を思わせる甲冑の様なデザインに千冬の専用機が装備していた刀の後継モデル『雪片式型』を装備している。

一夏には銃器を扱った経験が無い…どころか、白式には雪片式型以外の装備が搭載されていない。

フィッティングの際に見せられた仕様書を見る限り、白式には他に装備を積むだけの余裕が無いそうだ。

仕様としては、奇しくも暮桜と同じとなっている。

もつとも、彼方は千冬が銃器を嫌って積んでないだけなんだがな…。

俺はアリーナの管制室で、不機嫌さを隠すことも無く椅子にふんぞり返ってモニターの試合内容を眺めている。

セシリアの専用機、ブルー・ティアーズは『Blue tears Innovation Trial』、通称ビット兵器を搭載した第三世代型ISだ。

ビットは、親機であるブルー・ティアーズからフィン状の攻撃端末を射出、自在に操ることであらゆる角度、方向からの攻撃を可能とするオールレンジ兵器だ。

故に、ブルー・ティアーズの特性は高機動射撃型。

一夏の白式とは非常に相性が悪い。

「…まあ、すぐ気付くだろう」

「オルコットさんの弱点、ですか？」

「ああ、どうにもポーズを付ける癖があるからなあ…」

テーブルに足を乗せて組み、椅子をシーソーの様にユラユラと揺ら

しながら真耶の言葉に答える。

試合開始直後の武器呼び出しの時の動き、ビット射出時の動き、ビット制御時の動き：何れも動きが止まっている。

1つ目と2つ目は単なる恰好付け、3つ目は技術的な問題だろう。

第三代型ISの持つ第三代兵装：これは第三代型から搭載されているマン・マシーン・インターフェース・システムであるイメージ・インターフェース・システムを用いて制御している。

つまり、機体のコントロールと並行して、ビットのコントロールを行う必要があるのだ。

自身の機体コントロール、そして展開しているビットの制御及び攻撃指示：研究及び開発がつい最近だったことを考えると、頭でっかちの小娘には少しばかり荷が重いと言うものだ。

「だが、それをカバーするだけの動きはしている：オルコットは間違いなく一線級だ」

「千冬にしちゃ、評価が高いな」

「なに、優秀だと思えるものは優秀だと素直に褒めるさ。無論、劣っているのであれば厳しく指摘するがな」

千冬は真耶の隣で珈琲を啜りながら、一夏の一挙手一投足に舌打ちをする。

：初心者に何を期待してるんだかな：ともあれ、一夏は圧倒的不利な状況下で未だ撃破される事なく戦場を忙しなく駆け巡っている。

冷静に自分が今出来る事を探りながら。

対するセシリアは、試合開始当初にあった慢心が少しずつ薄れ始めている。

セシリアは常にビットを一夏の死角に配置して、隙を見つけては攻撃し、或いは牽制を行ってきた。

展開当初、ビットによる攻撃に翻弄されてきた一夏が動じなくなってきたところか、被弾を抑えはじめた為だ。

：普段が普段だから心配ではあったものの、闘う者の心構え自体は出来上がっていたみたいだ。

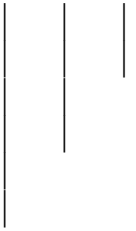
一夏がISに慣れるまで：この膠着状態は続く事だろう。

「…チツ」

安定した試合展開に安堵しつつ、思考に余裕が出来てしまった所為か嫌な事を思い出す。

無意識に舌打ちをすると、千冬は目を伏せ、真耶は困ったように俺と千冬を見る。

何故、こうも苛ついてしまっているのか…話は30分ほど前まで遡る事になる。



「お待たせしました。織斑 一夏さんの専用機をお持ちしました」

ピットへと入ってきた男は、黒のスーツを着こなした如何にもインテリと言ったような風貌の男だった。

口許は何処か小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、見下しているような雰囲気も見受けられる。

ハッキリ言つて、クズの匂いがプンプンしやがる。

「お待たせしましたじゃねえよ…あんたらは約束も護れねえのか？」

「遅れてしまう連絡を怠ってしまったのは、此方の責任…ですが、欠陥品を大事な大事な男性操縦者モルトモットに引き渡す訳にもいきません。なんせ、試験運転も無しのおぶっつけ本番ですから。それとも、事故を起こしたかったですか？」

「そう言う問題じゃねえだろ…」

「無駄話はそこまでだ…貴様等は充分な対価を得ているだろう？」

流石に俺も堪忍袋の緒が切れたのか、目の前のサラリーマンに対して一歩踏み出そうとすると、それを制する様に千冬が前に出る。

千冬の言葉にサラリーマンは満足げに頷き、笑みを深める。

蛇野郎が…。

「ええ、充分な見世物でしたし、必要なデータも手に入れる事ができました。ああ、勿論継続的に彼のデータはいただきますが…熟練操縦者

のデータは大変貴重ですからね」

サラリーマンもとい蛇野郎はニヤニヤとした笑みを浮かべたまま、千冬の姿を舐めまわす様に見つめ続ける。

言うまでも無く、俺と千冬はISスーツ姿：男としちゃ、千冬の美しい肢体をマジマジと見る機会はそうないだろうし、見てしまう気持ちも分からないでもない。

同意はしてやれるが理解はできない：どうにも、こいつは神経を逆なでするのが上手な様だ。

千冬もそんな視線が気に入らないのか、蛇野郎につかつかと歩み寄って襟元を掴み持ち上げる。

「黙って仕事をしろ：その舌を切り取られたいか？」

「滅相もございませぬ！早速起動準備を始めます！」

千冬の機嫌が最高に悪い事を漸く察する事ができたのか、蛇野郎は顔を青褪めさせて首を横に振り、

俺は千冬の肩を掴んで首を横に振り、指で通路を指し示せば先歩き始める。

聞かなくちゃならないことがあるからな…。

「真耶、一夏に連絡してピットに来るように伝えてくれ。ちつとばかり千冬借りるぞ」

「えっ、あつはいー！」

去り際に真耶に頼みごとをして通路へと出て、出入り口の横の壁に寄りかかって腕を組む。

慣れないIS：しかも機体を壊さない様に気を使つての戦闘と言うのは、肉体的にも精神的にも負荷がかかる。

なまじ、いつも手加減無しで動いていると尚更だ。

無意識の内に煙草を取り出そうとして、いつも羽織っているコートを羽織っていない事に気付いて舌打ちをする。

「…それで、なんだ？」

千冬が通路へと出てくると、俺の前に立ち止まり見上げてくる。

どうにも不完全燃焼：そして、暮桜のあの反応が気になって仕方がないようだ。

俺は少しだけ深呼吸をして、千冬を真っ向から見つめる。

「お前…自分を質に出したな？」

「…ああ、それが何か問題か？」

千冬は素直に頷けば、向かい側の壁に俺と同じように背を預けて胸の下に腕を通す様にして腕を組む。

声には若干の苛立ちが込められている。

「倉持は一刻も早くお前の戦闘データが欲しかったようだ。遅れてきたのは、態とだよ…恐らくな」

「随分と貪欲な企業だな…それにしたって遅刻なんぞ言語道断だろ？」

「そう言う訳にも行かん…この学園にあるISは大半が倉持とデュノア社製の機体だ。出資者のご機嫌は取らなくてはならない」

…IS学園は本来、国家や企業と言ったあらゆる組織に対して中立の立場を貫いている。

これは保有しているISの機体数が日本やその他の国家よりもずば抜けて多く、その気になれば国に対して戦争を吹っ掛ける事ができるからだ。

よって、スイスの様に基本的には干渉を受けず、干渉せずに学園が持つ独自の権利を以って運営がなされている。

だが、IS学園自体にはISを整備する能力はあっても、独自に開発するだけの能力は与えられていないし、運営費に関しても日本が独自に捻出している。

基本的に、学園の授業費だけではどうしたって運営費を賄う事はできず、仮に機体を購入するとすると、それだけで学園の経営が傾きかねない。

そこで、日本とは別にIS開発会社が善意で出資、あるいは物資の提供をする事でこの学園は何事もなく運営されている。

学園の持つ立場はまるで薄氷の様だ…。

もし、企業の機嫌を損ねる事があれば、扱っている機体の部品に何をされるか分かった物ではない。

無論、そうならない様に生徒会が、ひいては学園上層部が日夜暗躍



しているわけなんだが。

「腹立たしい話だがな…言ってしまったえば常に子供たちを人質に取られているようなものだ」

「中立公平なんて、やっぱ言葉だけって事かよ…」

「このままでは終わらせん…どこの生徒会長が酷くやる気を出して  
るからな」

「？」

千冬の顔にはザマアミロと言った顔と、同情の顔とが入り乱れた複雑なものになる。

生徒会長つてことは楯無の奴か…なんでまた、あの猫娘がやる気を出してるんだ？

不思議そうに首を傾げていると、呼び出された一夏が慌てた様子で此方へと走ってくる。

「遅いぞ、織斑！」

「す、すみません!!」

「時間がおしているから、早くフィッティングを済ませろ！5分以内に終わらせなければそのまま放り出すからな！」

「うわあ…鬼かよ…」

千冬は、鬼教官もかくやと言わんばかりの鋭い声で一夏に声をかけ叱咤する

勿論その言葉は腑抜けていれば、お前は負けるぞ…と言う意味なんだがな。

どうにも、公を気にしすぎて姉弟らしく振舞えないでいる辺り、千冬は不器用な気がする。

「アモン…何かコツつてあるか？」

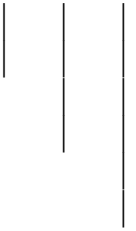
「ああ？んなもん、ねえよ…。そうだなあ…強いて言えばいつも通りか？飛びたい方向に意識を向けりゃ勝手に飛ぶしな。ああ、でも空中じゃ踏ん張りがきかねえから、殴り合いには気を付けろよ」

「わかった。勝ってくるよ、アモン、千冬姉！」

一夏は拳と拳を打ち合わせれば、不敵な笑みを浮かべてピットへと入っていく。

出会ったばかりの頃はガキだガキだと思ってたもんだが、知らない内にデカくなつていくもんだな…なんて思っていると、千冬は軽く頭を抱えて溜息を吐く。

「織斑先生だ、馬鹿者め…」



「いつまでもそう、むくれているな」

「わかつてら…ガキじゃねえしな」

「あはは…それよりも暮桜は、地下施設に移動させておきました。今、解析班がデータを取っています」

あの一瞬…恐らく、俺の方が速かったであろうあの剣戟は、視界の端に映った暮桜の異変によって止められた。

ISはその特性もあいまって、装甲の材質に特殊な合金を用いている。

だが所詮は金属…あんな風化したかのような鉱物になるとは、とてもではないが思えない。

仮に進化した、と言うのであれば領くしかないが、進化とはその状況に適応するための力だ…劣化するなんてことは進化とは言わない。

ISコアがブラックボックス化されている以上、何が起こるか判明している事は少ない…と、言うより皆無だろう。

シフトに関してだって、これだけの事をしたらこうなりましたと言う記録が数件あるだけで、推測の域を出ていない。

そんなものを国防の要にしているってんだから、割かしこの世界はトチ狂つていると言える。

「手間をかせさせたな…試合が終わり次第、私も地下へと向かおう」

「いえ…気にしないでください！でも…暮桜の使用…良かったんですか？」

「ああ…国…いや、委員会側の認証があつさり通つたくらいだ…こん

な事になるとは思わなかったが」

千冬はそこで会話を切り、試合へと意識を集中させる。

なんだかんだ言ってブラコンの類だ…一夏の事で気が気でないんだらう。

俺と真耶も千冬に倣って事の推移を見守る事にする。

暫くして、余裕が出てきてしまったのか、一夏の悪い癖が出始める。

一夏は調子に乗り始めると、左手を握っては開いてと言うのを繰り返す。

まるで運命を手繰り寄せるとかのように。

だが、調子に乗るのも仕方がないだろう…恐らくはセシリア攻略の糸口を見つけたのだらうから。

一夏は回避運動を常に最適化させ、最小限の動きでビットによるオールレンジ攻撃を簡単に避ける様になった。

ISに搭載されているハイパーセンサーは、人間の視界だけではなく、360°。全天を脳内に映像として認識させる。

人間の能力的限界もあるのだが、人間は常に物を目で見ようとする…しかし、このハイパーセンサーさえあれば、例えば目を瞑っていても物を認識する事が可能となる。

…全盲の人にも使わせるべきではないだろうか？

兎に角、人間の視野的には死角があっても、ISには死角がないのだ。

あるとすれば、それは意識的な死角だけだらう。

「随分、器用に避ける…」

「初心者動きじゃないですよ…ミユラー先生にも言える事ですが」  
「だが、誘い込まれたな…」

一夏は、セシリアが動きを止めるタイミングで死角に配置されているビットを確認して避けている。

セシリアも自身の弱点をキチンと把握はしているようで、当たらなくなつた辺りから見破られたのを悟つたのだらう…意識を改め、覚悟を決めたかのような面構えになる。

セシリアは四基のビットを操ることで四方八方から断続的に射撃

をするが、右側面への弾幕だけが妙に薄い。

言ってしまうえばあからさまなくらいだ。

「あいつ、試験の時は近接戦闘やってんのか？」

「いえ、その前に射撃戦で教師を沈めていますね……」

「爪を隠してるのか、それとも……まあ、奥の手は隠しているだろうな」  
「あの顔は畏をしかけた人間の顔だ……もう少し、ポーカーフェイスを  
覚えなくては」

一夏はニヤリと笑みを浮かべて開いた拳をグツと握り込み、雪片式型を盾のように構えればウイング・スラスターの推力を全開にして右側面から回り込み、ビットの猛攻を物ともせず、セシリアへと肉薄する。

遂に有効打が入るかと思われた瞬間、ブルー・ティアーズの腰部スカートアーマーが外れて新たなビット兵器となる。

至近距離……絶対に避ける事ができないと思われた瞬間、セシリアの攻撃は空を切る事となる。

「あ、あれは!？」

「千冬……お前、アレ教えたのか？」

「い、いや……恐らく偶然ではないだろうか……」

一夏の姿が残像を残して消え、セシリアの背後へと雪片式型から光を迸らせながら現れたのだ。

……なんてことはない、PICをカットしてからの不完全な瞬時加速で旋回しながらセシリアの背後へと回り込んだだけだ。

もつとも、あの白式……高機動近接格闘を主眼に設計されているようなので、不完全と言え度相当な速度が出る。

生体補助機能があるとは言え、後で検査を受けさせなくちゃなあ……。

一夏は何かを叫びながら横薙ぎで雪片式型を一閃、セシリアのウイング・スラスターを一刀両断にし、返す刀で唐竹割りを叩き込もうとして……試合終了を告げるブザーが鳴り響く。

スクリーンにはセシリアの勝利がデカデカと表示されている。

「はっ。」

「え？」

「はあ…馬鹿者…」

三者三様…気の抜けた吐息が管制室に響いた。

「ワンオフ・アビリティ：同じものが発現する確率なんてあんのか？」  
「さあな…そもそもワンオフ・アビリティを使える操縦者自体が一握りしかない。何とも言えないだろう」

試合終了後の夜：俺と千冬は学園の地下エリアに降りて、丁重に保管されている暮桜及び、俺が使用したラファールを眺めている。

一夏が試合に負けてしまった理由…それはワンオフ・アビリティである『零落白夜』による自滅だった。

白式の第三世代兵装は、ファースト・シフト時点でセカンド・シフト後のワンオフ・アビリティを引き出すと言うものだったらしく、それが偶々零落白夜だったと言う訳だ。

データ取りの件があるので、偶然とは言いにくいかな。

そつと暮桜に触れると、ひんやりとしている…その肌触りは金属と言うよりも、道端に落ちている石に近い。

軽くノックするだけで、まるで砂の像の様に輝が入るが、すぐにその輝は修復して元に戻る。

「装甲の一部を切り取ろうとしても、切断する先からくつついて再生しているそうさ。部品を外そうにも完全にくつついてしまつて外せない…お手上げだと言われたよ」

「ISで同じ現象が起きたって記録はあるのか？」

「それは今委員会の方に問い合わせ、調べてもらっているが…今回が初めてのケースだろう」

千冬は恐る恐ると言つた様子で暮桜に手を伸ばし、装甲を愛おしそうに撫でる。

二人三脚で戦ってきた大事な相棒だ…愛着だつて湧くものだろう。

その相棒は、今もダンマリを決め込んでいるようだが。

「しかし、お前のラファール…相当に酷い事になっているそうさぞ？」

「だろうなあ…あのままやり続けていたら、自壊してたら…」

俺が扱っていたラファールは、データ吸出し用のケーブルが幾つも繋がれ、装甲と言う装甲が外されている。

関節部をよく見ると、駆動用のモーターの表面が焦げていて、相当な負荷がかかっている事を思わせる。

恐らく、片刃大剣を派手に振り回したことが原因だろう。

爆発的な推進力そのままに自在に振り回したツケと言う訳だ。

むしろ、良くもった方だとラファールの事を褒めてやるべきだろう。

「このデータ…兎の奴が見てるんだろうな…」

「お前と私の戦いだ…覗き見しない訳が無い。大方、今回のデータをお前の専用機に反映させるだろうさ」

そう簡単に専用機が壊れたらお話にならないからな…負荷のかかり方から何から全て調べ上げて設計に反映させる気だろう。

千冬との戦いも全てが無駄と言う訳ではなさそうだ。

暫くラファールを眺めていると、不意に背中から千冬が抱き付いてくる。

「…いきなりどうしたよ?」

「抱き付いては迷惑か?」

「いや、別嬪に抱き付かれるなら大歓迎だけどな…らしくないだろ?」

茶化す様に言うと、ハンギングベアー張りに腹に回った腕を締め付けられる。

言うまでも無く千冬は怪力の類に片足突っ込んでる人間なので、俺でも結構痛い。

「あだだだ!!」

「茶化すな…私とて、女なんだ…良いだろう、別に」

「そらな、茶化してねえと勘違いしちゃうだろうが…」

腕が緩むと軽く溜息を吐いて千冬の腕に触れ、優しく撫でてやる。

鉄の女も人の目が無ければ子供みたいなもんだ。

俺に対して心を開いてくれている…と、言う事なのかもしれないが。

「…すまない、忘れてくれ」

「…あいよ」

暫くすると、千冬から離れて少しだけ距離を開けられる。

千冬の方へと振り返ると、顔を真っ赤にして背けている。

…こういうところ、本当に乙女だと思つて、思わず笑みが浮かぶ。

「なっ！わ、笑う事か!？」

「いやいや、普段が普段だからよ…可愛いなあつてな」

「あ、頭を撫でるなあっ！」

千冬の頭を撫でれば、俺は逃げる様に部屋を後にする。

…この後、寮長室でシコタマ関節技をかけられたが…。

まあ、可愛いもの見れた対価としては上出来、か？

## #19 夜明けにて、雨上がり

——君はいつだって1人で居ようとする。

——僕にはそれが、少しだけ心苦しくってね。

——もちろん、これが僕の手前勝手なお節介だと言う事は理解しているよ。

——けれど、君はもう前を見るべきだろう。

——君の仕事はまだ続く…そうさね、きつと君が満足できるまで、ね。

「うっせ…」

朝焼けに染まる室内で、ゆっくりと目を覚ます。

時刻は午前5時…目を覚ますには丁度良い時間帯だろう。

気だるげな動作でベットから上半身を起こし、すぐ隣で背中を向けて眠っている千冬を見つめる。

愛機の拒絶にも似た反応は、長らく使っていた千冬からするとかなりショックだったようで、今夜だけは…とせがまれて同衾する事となった。

抱き枕にされたりしたり、あんな事やこんな事が起きた訳ではない。

単純に一緒のベッドで眠りについたと言うだけだ。

俺は、千冬を起こさない様にベッドから抜け出して、朝食と昼の弁当の準備を並行して行っていく。

朝から下拵えとなると非常に忙しくなる為、昨夜眠る前に下拵えは済ませてある。

朝食はフレンチトーストにサラダ、オニオンスープとハムエッグ。

弁当の方のメインは特製の味噌だれに漬け込んだ豚のロース、少し甘めに焼いた卵焼きときんぴらをちよちよいと作って二人分の弁当箱に詰め込んでいく。

昨今の弁当箱の進化は目覚ましいものがあり、保温機能を活かしてスープも作ることができる。



真空断熱万歳。

口笛を吹きながら弁当の用意を終えれば、すぐさま朝食の調理に取り掛かる。

と、言ってもちよつと焼いたり、スープを温めたりするだけなんだけどな。

時刻にして6時：千冬はまるで幽鬼の様にゆつくりと体を起こし、欠伸を噛み殺す。

「アモン…？」

「おはようさん、顔洗ってさっぱりしてこい。もうすぐ朝飯できるぞ」千冬は小さく唸りながら頷き、ベッドから落ちる様にして這い出れば、フラフラとした足取りで洗面台のある部屋に消えていく。

千冬はあれでスロースターターだ…と、言っても顔を洗えばすぐに元通りなんだが。

なまじ、同棲している相手がいるんで、気が抜けている部分もあるんだろう。

去年までの寮生活がどんなものだったのか、少しだけ気になったりする。

少なくとも、部屋が腐海化する事態に陥る事は無くなったようなので、少しばかり安心はしている。

あのまんまだったら、嫁の貰い手が居なかつただろうしな…。

綺麗に皿に朝食を盛り付ければ、テーブルまで運んで並べていく。ついでに、学食に併設されている売店で調達してきた紅茶とティーセットも用意する。

朝はコーヒーって奴が多いんだろうが、俺は紅茶党だ。

どうにもあの苦味と酸味がな…。

「準備させてすまないな。無ければ無いで食堂で済ませたんだぞ？」  
「ついでだついで…食堂じゃハイエナに監視されてるみたいで、ゆつくり飯も食えやしねえ」

「粗野かと思えば繊細だな…気にしなければ良いものを…」

「飯を食う時はな…なんつーか…満たされてなきやいけねえんだよ…」

基本的に、I S学園での食事は朝、昼、晩と開く学生食堂か、自炊するかに分かれる。

学生食堂内に教師用のスペースは確保されているものの、やはり生徒も一緒なので何かと視線が凄い。

俺と一夏は、この学園で注目を集めている事が原因だろう。

片や世界最強の弟、片や謎の浮浪者…どちらもI Sに乗れると来たもんだ。

一夏の方は生徒だけなのでまだマシだろうが、俺はそうはいかない。

男日照りが続いているI S学園教師陣…いずれもI S乗りの為、平均年齢は30歳を切っている。

勿論、教師達は常に学園に拘束されているわけでは無いので、男漁りに出かける事もあるのだろうが、それでも出合いに繋がるのかと言うと…そうでもない様だ。

ときおり、職員室で愚痴大会が開かれていて肩身が狭く感じてしまう事がある。

なんでも、I S学園の教師だと打ち明けると、敬遠するかがつついてくるかの二手に分かれるらしい。

前者は言うまでも無く、劣等感を感じて身を引くか、或いは尻に敷かれたくないと言う想いからか。

後者に至ってはATM化を狙ったものだろう。

I S学園の教員は、元国家代表ないし、代表候補生と腕利きが集まっている。

したがって月の給料と言うものは、相当な額になる。

と、なればヒモになりたくなる連中も出てくるわけで…同僚達には変な男に引つかからない様に祈るばかりだ。

と、話が逸れてしまったが、そんな最中に彼女たちの前に俺が現れた。

変に畏まらず、かといってがつつかず、しかも良い所のボンボン——と、思われている——と、餓えた彼女たちに美味そうな餌が…。

こうなると、アプローチ合戦も激しいものになるのだが、互いに互

いが足を引つ張ってしまっている、まだ大きな動き自体は起きていないのが現状だったりする。

「なんつーか、ノリが学生みたいなところあるよな？」

「…否定はせん。だが、皆優秀は優秀なんだ…」

何故男にあそこまで執着するのか良く分からんと言った様子で、千冬は溜息を吐きつつフレンチトーストを上品な所作で食べていく。

千冬程になると、様々な立場の人間と会食なりなんなりする事も多かったのだろう…テーブルマナーを骨の髄まで叩き込んでいるようだ。

「外面だけで判断されんのは、つまらねえんだよなあ…」

「…確かにな」

食事が終わる頃合いを見計らって、紅茶を丁寧に淹れていく。

こういったものは基本的に忠実に淹れる事で、安定して美味しいものを淹れることができる。

変な色気出すと台無しになるのは、何も人間関係だけではないのだ。

俺は千冬と自分の分のティーカップに紅茶を注ぎ、食後の一服を楽しむ。

口に含んだ時に鼻に抜ける紅茶の香りに、煙草とは違った心地よさを感じる。

「随分と淹れるのが上手いんだな」

「そりやもう何年も紅茶飲んでればな…。話変わるが、クラス代表はセシリアで決まりかね？」

「そうなるとは思うんだがな…オルコットからすれば、あれは負けと言う感覚だろう。代表候補生が、IS歴1日にも満たない素人に追い詰められる形になったんだからな」

「…ん…：なんか、嫌な感じがするな」

ぼやく様に呟くと、千冬は何処か不思議そうに俺の顔を見つめて首を傾げる。

言うまでも無く、織斑 一夏は天然且つ無自覚なたらしだ。

落して泣かせた女の数は、相当な数だ…そのうち織斑 一夏被害者

の会が出来上がるかもしれない。

一面<sup>白</sup>夏の為になるので、出来た所で止めはしないが。

いや、でもセシリアじゃありえないか…男嫌いだし。

「一悶着起きるとでも言うのか？」

「ドウダロウネー、オレニハワカラナイナー」

「その棒読みは止め…誰だ…？」

千冬を茶化す様に棒読みで答えると、扉をノックする音が響く。

俺が出ようと立ち上がると、千冬は手で制する様にして俺の動きを止める。

「待て、スウェットを履いてるとは言え、上半身裸にエプロン姿で出ようとするな」

「あゝ、着替えるの忘れてたわ…」

なんならば 裸エプロンでも もんだいなし

朝起きて、すぐに朝と昼の用意を始めていた為着替えると言う事を忘れてしまっていた。

とぼけた顔で千冬に答えると、千冬は呆れ切った顔でため息を吐いて立ち上がる。

「お前はもう少し着るものを意識しろ…野人でもないだろうに」

「返す言葉ありませんってな。後片付けするから、応対頼むわ」

手早く食器を重ねてキッチンまで運び、洗いはじめる。

こういったものは残しておくと後が面倒になる…幸いしつこい油汚れがつくようなものは食べていないので、漬け置き洗いをしなくて済む。

流石に、こつてここの油は漬けておかないと落とすに…時間が無い時は意地でも落とすが。

口笛を吹きながら主婦業に専念していると、寮長室の玄関から聞き覚えのある声が響いてくる。

あの声は…

『オルコット…どういいう心変わりだ？』

『心変わり…と、言うよりも冷静になったと言うところです。あの時は教師である織斑先生に無礼を働いてしまいました…』

セシリア・オルコット嬢は、申し訳なさを含んだ声色で千冬と会話をしている。

「どうも、昨日一夏とやり合ったのが功を奏したらしい…。  
プライドを傷つけられれば誰だって怒るし、周りが見えなくなる。  
冷静になって周りを見た時に、取り返しがつかなくなった場合…。こ  
うやって謝罪できるか、そのまま突っ走るかで人間関係も大きく変  
わってくるだろう。」

後者の場合、最後に待つのは孤独だ。

「成る様に成るわな…」

洗い物を終えた俺は、いそいそとスーツに着替えて身だしなみを整え、伊達メガネをかける。

時間もそろそろ良い塩梅…千冬とセシリアの会話も終わっているだろう。

自分の分と、千冬の荷物をもって寮長室の玄関へと向かう。

「千冬ー、そろそろ行かねえと会議に出遅れるぞ」

「む…もうそんな時間か。オルコット、先の件は了解した…SHRの時に時間を設ける」

「ありがとうございます」

丁度話が決まったのか、セシリアは丁寧な所作で千冬に頭を下げた後、此方をジイツと見つめてくる。

…居心地悪いなおい。

「…貴方、何者なのです？」

「藪から棒になんだよ…大体の事は報道されてんだろ？あの中のどれかが真実だし、どれもが虚偽だ」

セシリアは俺の顔をジイツと見つめ、軽く溜息を吐いた後に意識を切り替える。

「どうやら聞き出すだけ無駄だと悟ったらしい。」

「貴方はそうやって煙に巻くのですのね…。一般教科だけでなく、I  
Sの授業も受け持ったらいかがですか、ミユラー先生？」

「素人が教師やるとか…無いな」

「誰よりも上手く扱ってにおいて、よく言いますわね…」

セシリアはジト目で俺を睨みつけた後、踵を返してつかつかと立ち去っていく。

その姿は心なしか軽やかであり、憑き物が落ちた様にも見受けられる。

横目で見ると、千冬は穏やかな眼差しでオルコツトを見送っていた。

「代表を降りるそうだ」

「やりたくねえって言ってた一夏がやる事になる訳だ。ご愁傷さん。さて、今日も頑張りますかね…」

千冬に荷物を渡して、俺は一足先に歩き始める。

俺の後を追いかける様に、千冬もまた歩き出して寮を出ていく。

さあ、一日の始まりだ。

「さて、1年1組のクラス代表は織斑 一夏君に決定しましたー」

わー、はくしゅー」

「課程もクソもねえなあ…」

「ドウイウコトデスカー、ボクキノウマケマシタヨネー?!?!」

朝のSHR…真耶は開口一番に一夏のクラス代表就任を生徒全員に伝える。

負けたとは言え、IS歴ほぼ無しの実績でセシリア相手にギリギリまで喰らい付いた手腕は皆の認めるところであり、皆納得している様子だった。

まあ、なにより男子をリーダーに据える事ができて満足…と言う雰囲気ではあるのだが。

「はい、勿論その件に関してキチンと説明しますよ。ではオルコツトさん…良いですか?」

「はい」

真耶がセシリアの事を名指しすると、セシリアは席から立ち上がって教壇まで歩いていく。

あくまでも優雅に、それでいて堂々と…貴族の名に恥じぬその歩み

は、同性をして感嘆の吐息が漏れる程だ。

余裕があるからこそその優雅さ…とでも言うのだろうか？

セシリアは教壇に立つと、事の経緯を説明し始める。

最初こそ、油断も手加減もしていたこと、段々と侮れない相手であると認識し始めた事…なにより、撃墜判定ギリギリまで追い込まれたと言う事実が、一夏のポテンシャルを感じさせることになったと言う事。

「——また、わたくしは未熟さゆえに皆様に暴言を吐いてしまうと言う、あつてはならない事をしてしまいました。そんな人物はクラス代表と言う任に相応しくありません。ですので、クラス代表を辞退し、一夏さんに譲る事といたしました。この度はご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

最後にセシリアは深々と頭を下げ、クラスメイト全員に対して謝罪する。

嘘偽りのない気持ちから出た言葉だ。

自身とキチンと向き合う覚悟がなければ、こんな言葉は出ないだろう。

「オルコツトの言葉で手打ちにしてやれ。慣れない学校生活で気が立ってたってのもあるだろうしな」

「そうそう、気にしてって仕方ないしね。まだまだオルコツトさんのこと知らないし」

「だね、これからまた仲良くやっていこうよ！」

俺の言葉を皮切りに、続々とクラスメイト達からセシリアに優しい言葉がかけられる。

この分ならば、そんなに心配していた事態に陥るってのも考えられないだろう。

よくも悪くも純粋な心根を持った娘達が集まっている様だ…今のご時世、結構珍しい気がする。

俺は微笑ましくその光景を眺め、真耶は目に貯まった涙を拭いながら笑みを浮かべて教室を見渡す。

「ぐす…青春っていいですね…！」

「…涙脆すぎだろ…」

真耶の目指していると言う威厳のある教師への道のりは、まだまだ遠そうである。

「それで、ですね…確かに一夏さんの腕は確かなものですが、如何せん経験不足。そこで、補佐としてわたくしが一夏さんについてビシバシと鍛えて——」

「一夏の教官は間に合っている！私が、直接頼まれたからな」  
「おっと…これは…」

セシリアは自ら一夏の教官役をかって出ようとするが、セシリアの言葉を遮る様に箒が立ち上がり鋭い眼差しでセシリアを睨み付ける。

セシリアは言葉を遮られたことに動揺することなく、真っ向から箒の視線を受け止めて笑みを浮かべる。

すでに勝っていると言わんばかりの笑みを。

…やっぱり、一夏のやつたらし込んでいたか…無自覚なんだろうけど。

いやあ、修羅場って良いものだな…傍から見てる分には。

「あら…あなたは篠ノ之 箒さんでしたわね…？確かランクCの」

「ランクは関係ないだろう?! い、一夏がどうしても懇願するから…！」

「織斑君の強さは篠ノ之さんとの秘密の特訓!？」

「ゴクリ…是非とも詳しく聞かせて欲しいなあ…?」

…どもったところを見ると、あれは嘘だな。

恋の駆け引きもまだまだ青くていいねえ…なんて思っていると唐突に俺の脳天に出席簿が叩き込まれ、続く形でセシリアと箒の頭にも出席簿が叩き込まれる。

その速度、電光石火の如し…。

「だから加減しろって言ってるだろうが！」

「やかましいぞ、アモン！オルコットと篠ノ之は席に着け！」

「はい…」

一夏は一夏で、姉の活躍に得意げな顔になって笑みを浮かべている。



おそらく、クラス代表に関して考える事を止めたのだろう…なつてしまったものは仕方がないし、肅々とその任をこなしていくしかない。

とは言え、クラス代表は必然的に矢面に立って、ISバトルに積極的に参加する事になる。

セシリアの言う通り、一夏には圧倒的に経験と知識が足りていない。

荒療治に近くなるものの、一夏の成長の糧にするには充分な役職と言える。

セシリアがすごすごと席に戻る姿は、最初の優雅さはなんだつたのかと思わずにいられないほど、何処か情けない雰囲気漂っている。

現状、このクラスのヒエラルキートップに立っている人物の言葉なので、逆らう事が出来ようはずもないのだが。

「ランクなんぞ、ただの目安だ。私から言わせれば、ゴミみたいなものだからな。殻も破れていないひよつこが、団栗の背比べをするな」

「千冬の言葉を補足するとだな…俺のランクは計測不能扱いだつた…」

「「え…？」」

ISランク計測不能…理論上ありえないと言われる事が、起きてしまっている。

ISを動かすことができると言う事は、そういった適正値を計測する事ができるはずなんだが、結果として千冬との殴り合いの最中ピクリとも動かなかつたそうだ。

最初は計器の異常として片付けられたものの、計測器自体になんら不具合は起きておらず、結局計測はできないままに終わるのだった。

考えられるのは、根本的な部分で人間と違うからだろう。

で、なければ計測器が反応を示さない理由が分からなくなってしまう。

「ISランク無しで乗り回したんだよ…俺は」

「残念ながら、この男の言っている言葉は事実だ。計器がぴくりとも反応を示さなくてな」

「「えー!?」」

ランク無しと診断されても、正面から千冬と殴り合いができるのであれば、ランクなんて言うのは直接的には関係ないと言う証明になる。

結局、そんな数値化された物よりも、ISを操縦したと言う経験の方が何よりも尊いように思える。

「織斑、その勝ち誇ったような顔を止めろ」

「ママ・イエス・ママ」

一夏は千冬と俺が誇らしく感じたのか、何故かドヤ顔で胸を張っていたものの、すぐに出席簿が叩き込まれて机に沈む結果となった。

南無三…骨は…拾う必要が無いか。

「それにだ…代表候補生だろうと国家代表だろうと、この学園の生徒となったからにはイチから勉強をしてもらおうと宣言したはずだ。若さゆえの過ちで揉め事も結構だが、今は私の管轄の時間だ…自重しろ」

「「は、はい…」」

容赦の無い出席簿攻撃に恐れをなしたのか、クラスメイトの連中は一斉にコクコクと頷いている。

誰だって痛いのは、嫌な物だからな…。

だっていうのに、俺には手加減無しで突っ込んでくる辺り、信頼されているのかなんなのか…。

そんな最中、一夏はぼうつとした顔で千冬の顔を見つめ続ける。

ありや、ろくでもない事を考えているな…。

言うまでも無く、織斑 一夏は主婦スキルをマスターしている。

大方、実家での千冬の姿とを見比べているのだろう。

「織斑…今、何か失礼な事を考えていなかったか…?」

「いえ、滅相もございませぬ!」

「ほう…」

千冬は静かに出席簿を一夏の頭に2回叩き込む。

疑わしきは罰せよ…?

「すみませんでした…」

「分かればよろしい。では、話を戻すが…クラス代表は織斑　一夏で  
異論はないな？」

「はい!!」

クラス全員が一致団結で返事を返し、こうして織斑　一夏はクラス  
代表に就任するのだった。

## 悪魔と少女と恋物語

### #20 日常にて

四月も既に後半戦：学園に咲き乱れた桜は全て散り終え、青々とした緑の葉桜が目に見えやかに映る。

俺はグラウンドのベンチに腰掛け、千冬が指導している授業風景を眺める。

一夏とセシリア両名の専用機を用いて、専用機の待機状態からのISの展開、及び機動訓練と搭載兵装の実体化のデモンストラーションだ。

ISの待機形態は基本的に実用的なアクセサリーの形になる。

例えば、セシリアのブルー・ティアーズは機体色と同様のイヤークラスとなる。

他にも指輪や腕輪、髪留めだったりと様々な形態をとるんだが：何故か一夏の白式の待機形態はガントレットだった。

そう、騎士鎧の様な武骨さはないものの、あのガントレットである。防具じゃん…。

俺は、ぼんやりとした面持ちで訓練風景を眺めている。

一夏は初めてと言う事もあって、待機状態からの展開に戸惑っている。

中々上手く展開はできなかったものの、気を取り直しての再チャレンジで無事に白式を展開する事が出来た様だ。

「…お前さ、暇なの？」

「えー、だって傍に居たいんだもん」

「さよけ…」

どういう原理かは分からないのだが、今俺の背中に束がしがみついている：上手く千冬や箒達からは見えない様になっているらしく、まだ気付かれてはいないんだが…。

俺は隣に座る銀髪の少女にも目を向けて、優しく頭を撫でてやる。

「でっかい子供のお守り、ご苦労さん…」

「…いえ。東様とアモン様には救われた恩義がありますので」

「…かてえな、どういう教育してんだ？」

「え、一緒に極道映画見たり時代劇見てただけだよ？」

「染まりやす…」

恐らく、東と御揃いであろう黒のエプロンドレスに、子供が持つのは少々装飾が華美な杖を握りしめている少女であるクーは、眼を閉じたまま一夏達の様子を見守っている。

自身の目が他人とは違う事を気にしての事だろうか、なんとも背中にしがみ付いている子供と違って大人な雰囲気を感じてしまう。

千冬が此方に顔を向けるのと同時に頭を撫でるのを止め、俺はメモを取っている風に見せかける。

「んもー、クーちゃんってばあ…ママとパパでしょ？」

「応、誰がママとパパなのか言ってみろ？」

「ママが東さんで、パパがあつくん！」

「所持持ちになった覚えはねーよ」

「いえ…私は…」

東はどうやら、外堀を埋めるためにクーを連れて俺に会いに来たらしい。

俺、一応仕事中心なんですがね…。

クーは静かに首を横に振った後に顔を俯かせ、口を嚙む。

東には何を言っても無駄だと、悟っているかのような顔だ。

「東、お前俺に絡んでばっかいるけど、何が良いんだ？」

「え、そんなの全部に決まってるじゃん。適当なのにこうして、構ってくれるしく、優しいしく、そこらの人間が裸足で逃げ出すくらい強いしね！」

「お、おう…」

東は臆面もなくはつきりと好意を述べてくる。

まるで、その好意を踏みにじられる事は無いと言わんばかりだ。

好きだとか愛しているだとか…そう言った言葉は、一方通行であることが多い。

互いに好きだと感じ、想い、伝わった時に一方通行ではなくなる。

では、拒否されたら？

そう思うと足が竦むのが人間だし、それが悪いとは思わない。寧ろ、そう言った奥ゆかしさと言うのは見ていて飽きない。

だが、束は：珍しく、ドストレートに物事を言う。

人間関係が破滅的だったからこそその在り方、と言えるだろう。

「箒とかセシリアも多少は強気に出るべきなんだろうがなあ…」

「箒ちゃんがどうかしたの？」

「まだまだケツの青いガキってこつた」

箒と言う名前を聞いた瞬間、束は興味津々と言わんばかりに背後から首を出して俺の顔を見つめてくる。

千冬が一夏に対してブラコンである様に、束は箒に対してシスコン気味だ。

心から大切にしていると言う気持ちは分かるし、事実そう思っていたから距離を開ける様な事もしていた。

無論、加減を知らないが故に関係は悪化、未だに仲直りが出来ていない様だ。

「ねえ、あつくん…箒ちゃんは私を頼ってくれるかな？」

「どうだろうなあ…ニツチもサツチも行かなければ頼るんじゃね？」

束は、消え入るような不安そうな声で俺に聞いてくる。

一応、連絡先の交換くらいは先日の一件で行っていたようで、来る日も来る日も箒からの電話を待っている様だ。

ただ…箒の中に蟠りが残っている以上、ある一点以外において頼ると言う事はしない様に思える。

「束、一つ頼まれてくれねえか？」

「えっ！あつくんからお願ひ!? 珍しい!!」

「耳元で喚くなっつーに…。もし、箒が力を欲する事があれば…遠慮なく力を与えてやれ」

「…それは、どうしてかな？」

束は、俺が力を…専用機を与えるなどと言うと思っていたらしく、急にふざけた雰囲気消す。

グラウンドで白式が墜落する様を眺めながら、ゆつくりと口を開

く。

「大抵な、力を欲するやつってのは勘違いしている。力があれば、なんでも思い通りにできるってな。それは束…お前も経験あるだろ？」

「……」

『白騎士事件』…自身の能力を、知識を世界に知らしめ、夢を叶えようとした天才が起こした事件は、果たして夢を叶えるには遠かった。

寧ろ、遠ざけられ、望んでも居ない事に費やされる事になる。

束がI S コアの生産方法明かさず、生産を止めて姿を消したのも、夢破れてしまったからに他ならない。

星を夢見た少女は…血みどろの未来を描くためにI S を作ったわけでは無い。

「二度、箒は痛い目を見るべきだ。家族がバラバラになったのはお前の所為…なんて言っている様じゃな。そろそろ、束だつて離れたくて離れてる訳じゃないことを知るべきだ」

「あつくくんは…アモンは…」

「まつ！一手目でお前が間違えたのも事実なんだがよ。でもだ、まだまだ齡15のガキとは言え、そろそろ大人になって行かなきゃやらねえ。夢はいつか覚めちゃうからな」

そう…いつまでも夢は見られない。

俺の様に。

「夢を見るなつて…アモンはそう言うの？」

「少なくとも、色恋沙汰に夢はねえよ。恋愛は戦争で、想いは先手必勝だ。いつかは振り向いてもらえると思つてたら、大間違いなのさ」

一夏は、確かにクソ鈍感のクソ朴念仁だが、人の心が分からない程莫迦と言うわけでは無い。

真つ直ぐな右ストレートでも叩き込めば、きつと思ひ悩むだろう…つつーか、そろそろ青少年らしく思ひ悩んでもらいたい。

まあ、なんだ…被害者増える前に身持ちを固めろつてこつたな。

「…まあ、良いけどね。箒ちゃんに専用機は渡すしさ…でも、その時の相手は」

「俺がする…甘えたをお仕置きするのは、汚く大人のお仕事だから

な」

けっけっけ、と笑いながら授業風景に視線を移すと、千冬からハンドサインが送られてくる。

内容は、此方に来い…なんだが、今はしがみ付かれているので動くことができない。

手早くハンドサインで動けない事を伝えたと、千冬は深く溜息を吐きながら此方へと歩み寄ってくる。

「で、こないだの千冬との戦闘は為になつたか？」

「開発元から専用機ぶんどつて、データ反映してるとこだよ！凡人が造った旧世代機じゃ、あつくんの反応とか力とかには対応しきれないのは分かってたからねえ。でもでも、束さんも色々忙しいから、もうちょい時間かかるかな！」

「何でもいいがな…手加減してても壊れかけるくらいだ、頑丈にしてくれよ？」

「モチのロンさー！」

合点！と言わんばかりに片手で束がガッツポーズをした瞬間、千冬が凄まじい速度の踏み込みを見せて俺の目の前で急停止し、束の頭をがっちり片手で掴んで持ち上げる。

「なんで!!」

千冬は、そのまま束の体を天高く掲げる様にして持ち上げ、流れる様な動作で地面に思い切り叩き付ける。

「貴様が此処に居る!!!」

「ちーtyぶべらばあつ!!!」

「た、束様!?!」

「束、安らかに眠る…と…」

「勝手に殺さないでくれるかな!?かな!?」

突然の凶行に、クーは驚いて目を見開いて黒い瞳を晒す。

背後から女生徒たちの黄色い悲鳴があがり、箒は箒で束が居た事に目を丸くして驚いている。

どうやら、謎のステルス現象は解除されている様だ。

だが、千冬には最初から見えていた様に思える…どうやら、このス



テルス能力は改善の余地あり、か？

「ちーちゃん！いきなり叩き付けるなんてひどいよ！」

「やかましい！授業中だ！アモンも、束と乳繰りあつてる暇があるなら知識を頭に叩き込め！」

「乳繰りあつてたわけじゃねえよ…束がひつついてきただけだ…」

千冬は顔を真っ赤にして怒声を上げ、俺は俺でげんりとした顔でため息を吐く。

煙草の1本でも吸いたいところだが、生憎と在庫が無いので吸うことが出来ない。

煙草は学園の売店で購入する事が出来ないのです、ネット通販頼りだ。

最近お気に入りの銘柄は、『明るい海』と言う銘柄だ。

マイナー過ぎて取り扱っている店舗が少ないし、不味い。

「まったく…」

「いだだだだ!!!」

「た、束様から足を退けてください！」

「アモン、この小娘は…？」

千冬は束の頭をスニーカーでグリグリと踏みつけながら、千冬の足に縋りつくクーを見つめた後、俺の事を睨む様に見つめる。

まさかと思うが、俺の隠し子だと思つてないだろうな…勘弁してくれ…。

「言わなきゃ駄目か？」

「隠さなければならぬ事か？」

さて、どうしたものか…クーは、外道の住処で嬲られていた存在だ。おそらく、あの場所の事までは千冬は知らないだろう…。

適当にでっち上げておくか…。

「此奴はドイツを出る直前に知り合つてな、束の興味を惹いたんで預けてたんだよ」

「…束、本当か？」

「本当、本当だから足退けてっ！」

うむ、我ながら上手く誤魔化せたか…嘘は言つてないし。

千冬は漸く束の頭から足を退けて、深く溜息を吐く。

「束、私の邪魔をするな。アモン、行くぞ」

「うう…容赦ないよ…ちーちゃん…」

「…話なら、後で聞いてやる。いいな？」

千冬としても、束には聞きたいことがある…石化し、沈黙している暮桜の事を。

ISの髓の髓まで知り尽くしているのは、世界でも束だけだ。

そして、束の本来の目的も暮桜と千冬にあるようで、一度領くと立ち上がって体についた砂埃を手で払う。

「ん、たっぷりとお話しようね、ちーちゃん♪」

「そうだな、たっぷりとな」

「こえーよ…」

束はそのままベンチに座ると、クーを膝に座らせてご機嫌な様子で俺と千冬、箒、一夏を眺めている。

あの様子だと他の人間の事は眼中にないだろう…他の人間が目に映る瞬間だけ、深淵の様に闇が深くなる一瞬がある。

「束に関しては諦めろ、あれは死んでも治らん」

「だろうな…面倒くせえ奴だ」

「静かにしろ、馬鹿どもが見学しているだけだ！」

((ええ〜〜))

どう見てもVIP中のVIPが居ると言う状況下で、ISに携わる人間が浮足立つなと言う方が無理と言う話だ。

篠ノ之 束と言う人間の目に止まる事があれば…それはほぼ将来が約束されたと言っても過言では無い。

あのセシリアでさえ、鼻息荒くしてアピールしているくらいだ。

「おーい、セツシー…奴には関わるな」

「誰がセツシーですか、誰が!!」

「落ち着けて…酷い目見たくなきゃ絶対に関わるな…」

非常にフランクな感じでセシリアに話しかけてみるものの、どうやら渾名はお気に召さなかった様子…とは言え、俺の少し真面目な顔を見て、セシリアは息を呑む。

あの決闘騒ぎ以降、セシリアは多少俺の話を見聞かずに聞かされてきた。

一夏とは比べるべくもないが、そこは大人と子供…フランクに話せと言う方が無理である。

「セシリア、アモンの言う通りだ。あの人は余程の事が無いと他人をゴミとかそれ以下にしか見ない…」

「本当ですか？」

「本当だ」

一夏とハモる様に言うと、セシリアは神妙な面持ちで小さく頷く。恋する乙女と言うのは、惚れた相手には弱いもの…きちんと話だつて聞かされてものだろう。

それに対して仏頂面を緩めないのは、箒だ。

「…何故、あの人が居るんだ…」

ぽつりと零したその呟きは、とても重々しい呪いの様に聞こえた。

「さて、授業の続きを開始する。アモン、準備は良いか？」

「ママ・イエス・ママ」

「よろしい。では、開始してくれ」

俺、一夏、セシリア、そして箒が頭から煙を出す中、授業が再開される。

何故、煙を出しているかと言えば、全員授業に集中しなかったが為に、千冬から手痛い拳骨を頂いたからである。

…体罰、駄目、絶対。

さて、話を戻して…今の授業内容は拡張領域からの武装展開の見本、である。

俺は用意された打鉄を普通のスーツ姿のまま身に纏い、生徒たちの前に立っている。

「で、多少は遊んでも良いんだろうな？」

「ああ、構わない。曲芸師ばりの出し方と言うのをエリートたちに見せつけてやれ」

千冬のエリートと言う言葉に、セシリアが涙目で頭を抑えている。セシリアの弱点の1つに、武器を呼び出す際にポーズを付けないと呼び出すことができないと言うものがある。

拡張領域からの呼び出しには、ハイパーセンサー越しに視界でのカーソル選択から呼び出す方法と、イメージを固めて呼び出す方法の2つがある。

前者はフォルダ分けされた選択肢を一々選択していかなければならず、展開までに時間がかかる。

対して後者は明確なイメージさえできれば、コンマ5秒以内に呼び出すことができるものの、イメージが固まらなければ呼び出すことができない。

セシリアは後者の方法で武装を呼び出したのだが、イメージを固める際に『自分もつともカッコいいポーズで呼び出す』イメージを固めてしまっている為に、ポーズを取らなければ呼び出せなかった訳だ。

集団戦ならばまだしも、サシの戦いでは致命的な隙に繋がる。

一夏相手に其処を突かれなかったのは、単純に技量差があると言うだけだ。

「はいよー…んじゃ、始めますかね」

ゆつくりと右手を前にかざして近接用のナイフを呼び出す。

それを握り込んで感触を確かめた後に、ナイフを天高く投げ飛ばし、新たにナイフを呼び出す。

それを数回繰り返していき、ナイフジャグリングを開始。

生徒達から感心したかのような声上がり、少しだけ嬉しくなる。

「嬢ちゃんたち、これだけじゃあ終わらねえぞ?」

俺は右手でナイフジャグリングをしながら、舌打ちをしながら左手で指を振る。

生徒達の視線が左手の指に集中した所で、ナイフを一気に拡張領域に仕舞い込み、代わりに一振りの太刀を呼び出して右手でキャッチ。

素早く構えて大きく振りかぶって十文字に振り切る。

しかし、振り切った直後に持っているものは、薙刀に変化している。

ラピッド・スイッチ  
高速切替と呼ばれる技法だ。

ラピッド・スイッチは通常の呼び出しとは違って、あらゆる行動と同時に進行で武装を呼び出す技法だ。

俺の場合は、素早くイメージを固めることが出来るので、カーソル選択との並行使用は行っていない。

「そいやっ！」

ぐるんと一回転しながら思い切り薙刀を振り下ろすと同時に次の武装：狙撃用のライフルを呼び出して、上空に向けて一発弾丸を撃ち込む。

弾丸は上空に張られているシールド・エネルギーに阻まれて消滅する。

ライフルをクルクルと回して弄びながら肩に担いで、実演を終えると、生徒達から拍手が沸き起こる。

「と、まあこんな感じだ。練習すりゃ誰だってできる」

「遊び過ぎだ、アモン：だが、アモンの言う通り練習すれば誰にでも出来る技法だ。此奴を目標にしろとは言わんが、各自訓練を怠らない様に！」

「「はい!!」」

「では、授業をこれで終える。織斑はグラウンドに作ったクレーターを埋め立ててから昼休みに入る様に！解散!!」

千冬が手を叩くと、生徒達はありがとうございましたと頭を下げ、昼休みへと入って行く。

俺は白式を身に纏った一夏へと近づき、クレーターの埋め立て作業を手伝ってやる事にした。

「お前、派手に墜落してたなあ、おい」

「い、言うなよ…まさか、あんなに速く地面に墜落するとは…」

「白式は加速性が良いからな…変にスラスター吹かせばそうなるだろう？」

俺は白式の背後に浮かぶウィング・スラスターを見つめ、ニヤリと笑みを浮かべる。

まともな射撃装備を積んでいない白式にとって、このウィング・ス

ラストーは文字通りの生命線となる。

大胆に、かつ繊細に機体を制御することが、白式を乗りこなすための近道となるだろう。

「とは言え、良い経験になったろ？」

「何事も経験しなくちゃ分からない…って言ってたのは師匠のアモンだからな。次は墜落しないさ」

「衝突はしそうだけどなあ」

「しないってば!!」

一夏をからかう様に茶化しつつ、クレーターに盛られた土を丁寧に踏んで地均しをしていく。

機体の重量は優に1tを超える…適当に踏みつけているだけで簡単に慣らすことが出来るのは楽で良い。

「なあ、アモンってさ…千冬姉の事どう思う？」

「どうって…なんだよ、姉ちゃん取られるとか思ってたのか？」

「いや…その…アモンになら、千冬姉任せられるかなってさ」

一夏は埋め立ての手を止めて、真剣な顔で俺の事を見つめてくる。

…俺が千冬と…ねえ…？

「そりゃ、家事がキッチンとできないくらいで、良い女は良い女だからなあ…言い寄られれば悪い気はしねえけどさ」

「じゃ、じゃあ…」

「けど、だ…俺意外にもマトモな男なんざ、いくらでも居る。根無し草だぜ、俺」

もつと言えば、必ずギャップが起こる。

千冬達は老いていく…それは避けようのない宿命だ。

しかし、俺はもう老ける事が無い…老けたくてもな。

置いて行かれると分かっている、愛さずにいられないと言う気持ちには幾度も味わってきたが、果たして…千冬は置いていく事に耐える事ができるだろうか…？

「それでも、だよ。俺はアモンが義理の兄貴になってくれるの嬉しいしよ」

「んだよ、お前兄貴欲しいのか？」

俺は白式の腕部を打鉄の肘でつついてケラケラと笑う。

なんだかんだ言ってもまだ子供…まだまだ青いねえ…。

「ぼっ！違うって！だから、千冬姉の事はアモンなら任せられると思ってさ！」

「…ま、それは千冬が俺の事を好きなら成立する話だろ？だから、この話はお終いだ。だけど、俺は…なんだ、一夏の事は弟分みてえに思っているさ」

地面を丁寧に踏んで地均しを終えれば、俺は一夏に背を向けて歩き始める。

…そら、良い女に言い寄られれば悪い気はしない。

格別良い女であれば尚更に…。

俺は、千冬に言い寄られた時に拒むことが出来るのか…分からずにいた。

## #21 師弟再会

子供にしては鋭い斬撃を手早く左手に持った刀の鞘で受け止めれば、ゼロタイムで受け流し体勢が崩れたタイミングで強かに腹を蹴り飛ばし、距離を開けさせる。

背後からの奇襲を察知した俺は、軽く身を振る事での確に胴体の脇腹目にかけて照射されるレーザーを避ける。

「おおおおお!!」

「上等だが、奇襲で大声上げてるんじゃないぞ…一夏あつ!!」

純白を思わせるIS、白式を身に纏った一夏が、体勢の崩れた俺目にかけて大上段で振りかぶり突撃を行う。

俺は鞘に刀を納めてそつと柄を握り直し、一閃。

素早く鞘に納めて第二撃目を更に放つ。

一閃目は零落白夜を纏う雪片式型に直撃し弾き飛ばし、二閃目で一夏の脇腹に直撃させて先ほどから小賢しい牽制射撃を繰り返してくるセシリアの射線上に押し出す。

ギシツと腕が嫌な音を立ててバチバチと紫電が走るが、俺はそれを無視して次の標的を見定める。

「パワーアシスト解除、肘関節ニュートラル。チツ、脆すぎらあ…」  
スラストー内にエネルギーを溜め込み、一気に開放する事で瞬時加速を行った俺は、体勢を漸く整えた一夏に飛び蹴りの要領で蹴り飛ばし、そのままセシリアの元まで肉薄する。

セシリアは一夏が俺の近くに居る為に得意のビット兵器による攻撃も、狙撃すらも封じられて逃げ惑うしかない。

一夏が苦悶の表情を浮かべ、しかし勝機を見出したかのように俺の足を抱える様にして掴む。

「捕まえたぜ…兄貴いっ!!」

「ああ、そうかい!」

俺は機体に急制動をかければ、一夏ごと足を振り回して追いかけてきた筈に突きだす。

筈は、すでに手に持った刀を振り下ろし始めて反応が間に合わず、



白式のウイング・スラスターを切り裂いてしまう。

「があっ!?!」

「しまっ!?!」

「だから、ガキなのさ…落ちな!!」

最小限の機動で箒の背後に回りこんで、居合の要領で箒が身に纏っている打鉄のスラスターを切り裂き、行動不能にする。

箒は力なく項垂れながらアリーナの地面に着地し、依然戦闘の続く上空へと顔を上げる。

そう、まだ箒が落ちただけだからだ。

「ちいっ!しつけえぞ一夏!!」

「勝利に意地汚くなれって言ったのは、兄貴の方だろ!?!」

「いただきますよ、先生!」

脚にしがみつく一夏を幾度か蹴り飛ばして振りほどこうとすると、俺の囲む様にビットが配置される。

どうやら、一夏は自爆覚悟でトドメをセシリアに譲ったらしい。

だが、それでも俺にとっては避けるに十分なタイムラグが生じてしまっている。

手に持った刀と鞘を格納し、IS用のハンドガンを一挺呼び出し、前方に配置されているビット兵器目がけて銃弾を吐き出させる。

ハンドガンから撃ち出された銃弾は、真つ直ぐにビットの側面を掠る様に着弾して、ビットの射線をずらす。

いくらPICで制御されているとは言え、攻撃体勢を取った瞬間はどうしても無防備になる。

そこで射線がズレる様に弾丸を掠らせれば、容易に射線をずらすことが可能になる。

「あらよっとー!」

「人間業じゃありませんわよ!?!」

「いででで!!!」

射線がズレたおかげでできた穴を潜り抜ける様にビットの包囲網を突破し、当たりそうになった時は足にしがみ付いている一夏を盾替わりに使用する事で凌いだ。

未だ無傷なのは付かず離れずのセシリアだけ…箒は言わずもがな、一夏も最早満身創痍だ。

一夏は、右手に持った雪片式型から零落白夜を発生させて獰猛な笑みを浮かべる。

「うおおお！死なば諸共おっ!!」

「あっそう」

優しく額に銃口を押し付け、容赦無く発砲。

当然の如く絶対防御が発動し、更に零落白夜による極悪燃費によってエネルギーが尽きた白式は、先ほどの箒同様にアリーナの地面に墜落していく。

「つたく、手え離せば勝機があつたつーのに…それで、まだやるか？」

「いえ、降参しますわ…」

「あいよ、それじゃ反省会しようか」

俺はセシリアを伴って地上に降り立ち、身に纏っていたラファールを脱ぎ捨てる。

各関節とも俺の膂力に耐えきれずに過剰な負荷がかかり、僅かだが煙を上げてしまっている。

こんなザマでは、暫く俺はISに乗らない方が良いだろう…。

そもそも、ISは人間が乗る様に設計されているものなのだが、人の力ではどうしても足りない部分が出てくる。

そう言った部分を補うために、各関節部に動作を補助するモーターが仕込まれているのだが、俺は常に人以上の力を出してしまう。

勿論加減は出来るが、戦闘においてそんな手加減をする暇なんぞある訳も無し…結果として人の力以上の異常な力が関節にかかってしまい、壊れてしまう…と、そう言う訳だ。

パワーアシストを解除してニュートラルでやりあつても構わないと言えば構わないが、今度は重量がモロに俺の体にかかる為、ただの枷同然の状態になってしまう。

人間の感覚で言えば、片腕に常に50 kg程の負荷がかかっていると思ってもらって構わない。

「それにしても…本当に大道芸人でしたの？とても、戦闘慣れしていない一般人ではないのですが…」

「おっさんには秘密がつきものなのさ」

「おじさんと言う歳ではないでしょうに…」

遅れてセシリアが地上に降り立ち、身に纏っていたブルー・テイアーズを待機状態に戻す。

一夏と箒もISを解除して此方へと小走りに駆け寄ってくる。

「徒党を組めばイケると思ったんだけどなあ…」

「阿呆、お前らの動きなんぞ全部お見通しなんだから、集団でやろうってんなら予めトラップの1つや2つ用意しとけ」

「私はやはり一対一の勝負の方が…」

一夏は悔しそうに歯噛みし、箒は箒で何やら不満そうに眉を顰めて思案する。

さて、この放課後の個人訓練…何故俺が手を貸しているのかと言うと、単純に次のクラス代表対抗戦まで時間が無く、付け焼刃でも良いから一夏をいっぱしのIS乗りにする為に鍛えているのもう1つ…箒とセシリアのお目付け役である。

この2人…一夏とのロマンスを追い求めすぎる所為か、一夏そっちのけで言い合いの喧嘩をしてしまうのだ。

これではあまりにも拙い…と、勝手ながら判断した俺が、3人纏めて面倒見てやるから訓練に付き合っつてやると言ったのだ。

「箒、そりゃ確かに理想だろうが、此処ではその言葉はご法度だ。第一、剣道みたいな決まった型を使うんだったら、まず相手に反応させるな」

「む…」

「セシリア、お前の機体は確かに射撃戦特化の構成だが、近接戦闘が出来ない訳じゃねえ…近接戦闘の不利は負けに直結するぞ」

「そ、それは…ですが、踏み込ませなければ良いのでは？」

それぞれに駄目出しをすると不満そうな顔をされ、セシリアに至っては反論をしてくる。

内心、エリートとしての矜持がそうさせるのだろうか…此処は一気

にへし折って初心に戻ってもらおう。

こういったプライドは時に成長の妨げになるものなのだ。

「態とは言え、踏み込まれて追い詰められたお嬢ちゃん是谁だったかねえ……？」

「ぐ……そ、それは……」

「あの時、インターセプター（BT用の近接兵装）を容易に展開できれば防げただろ？それが出来ない防げないじゃ話になりもしねえ。それにお前の機体はエネルギー一辺倒で燃費が悪すぎる。どこかで近接戦闘を仕掛ける必要が必ず出て来るぞ」

「グヌヌ……」

セシリアは言い返す事も出来ず、悔しそうに唇を噛み締める。

ブルー・ティアーズに積まれている火器はビット2基に積まれているミサイルとインターセプターと呼ばれるダガー以外がエネルギーを消耗する類のものばかりだ。

つまり、射撃戦で決定打を与えられなかった場合、どうしたってジリ貧に陥ってしまうのだ。

だが、幸いにしてブルー・ティアーズにはビットと言う工夫次第で凄まじい脅威になりうる武器がある……故に……

「だから、セシリアはこれを読んで勉強をする様に」

「これは……？」

俺はラファールの拡張領域にしまっておいたファイルを引っ張り出し、セシリアに渡す。

タイトルは、『分割思考と近接格闘のススメ』。

「恐らく、お前の今必要な内容が其処に書いてある。機体制御とビット制御……両方こなしたいだろ？」

「それは……そうですが……」

セシリアはファイリングされた書類の中身をぺらぺらと捲り、半信半疑と言った顔になる。

なんせ、いずれも半ばお遊びの様な内容ばかりだからだ。

特にお嬢様向けって感じの内容だと……オルガンの課題曲集か？

あれ、手と足両方使って演奏するからな……。

「ですが、これで本当に？」

「兄貴が言うんなら間違いない、やってみろって」

「さつきから気になってたんだけどな…」

「兄貴ってなんだ（ですの）？」

俺、箒、セシリアは一斉に一夏を見つめ、一夏は一夏で首をこてんと傾けて不思議そうな顔をする。

男がやつても可愛くねえよ…。

「いや、もう外堀から埋めてしまおうかと…」

「あのなあ、埋めるのは構わねえけどな…お前、姉ちゃんの意志無視か？」

俺は眉間を揉みながら呆れた様に肩を竦める。

確かに、千冬からは多少なりとも好意らしきものは感じるが、男女のそれかどうかは本人にも俺にも分かっていない。

時折、凶暴だし。

箒とセシリアは俺の後ろで、ひそひそと恨み節を呟いている。

（なんで私達の気持ちには気付かないで、他人の色恋沙汰には聡いのだ）

（噂には耳にしましたが…いいえ、諦めませんわよ…！）

（貴様には負けないぞオルコット…!!）

「アモン兄しかいないと思うんだよなあ…尻に敷かれないで済むの」

「そう言うのはお前が考える事じゃねえつつの。そりゃまあ、千冬に言い寄られるのは悪い気はしねえけどな？」

一先ず乙女たちの決意から意識を逸らし、一夏へと向き合う。

一夏は一夏で自分に向けられる好意に鈍い割りに、他人の色恋沙汰には敏感だ。

それはもう隣に住んでるおばちゃんレベルで。

そう、つまりお節介が過ぎるのだ。

「だけどな、そう言う事に心配りするくらいなら、まず自分をどうこうしてからにしろ」

「ぐ…」

「兄貴だのアモン兄だの呼ぶのは構わねえ…それよかやる事あるんだ

からよ」

わしわしと乱暴に一夏の頭を撫でながら諫め、軽く溜息を吐く。

悪い奴じゃない…他人に対して優しく出来るのは美德だ。

度が過ぎれば悪徳なんだけどな…。

「さて、お前と箒にも言える問題点なんだけどな…お前ら、相手と平行方向から攻めようとするクセ無くせ」

「へ?」

「は?」

「ああ…」

一夏と箒は何を言っているのか分からないと言う顔で、セシリアは訓練開始から気付いていたのか納得したような顔で頷く。

一夏にしろ箒にしろ、ISによる空中戦闘と言うのは日が浅い…つまり、地面に立って戦う時と同じ感覚で戦っている。

どちらもP I C制御をオート制御でやっている弊害とも言えるんだが…あれ、強制的に天地を正そうとするし。

「あのな、空中戦って事は360度全天回りこめるわけだ。それこそ足元から頭のとっぺんからって具合に。にも拘らず、お前らは地上での癖が抜けきらないのか、必ず俺を水平に捉え様として行動できる範囲を狭めている。箒は射撃武器積んで対応できるから構わないかもしれないねえけど、一夏はそういう訳にもいかねえ。なんせ、雪片式型しか積みねえからな」

「うくん、なんか機体がそういう風に動きたがってる気がするんだよなあ…」

「私としては正々堂々と戦いたいのですが…」

「箒…相手がいつもお前と同じ正々堂々で来るって思うなよ…」

箒は不満げに唇を尖らせるが、俺はそれをピシヤリと言って黙らせる。

試合ならばまだしも、戦場でそんな言葉は通用しない。

卑怯、結構。

勝てば官軍と昔から言うしな。

「皆、ルールの範囲内で死力を尽くしてくる。そうさな…例えば、セシ

リアが引き撃ちに徹してお前の土俵で戦えなかった時：お前は相手が卑怯な手で戦ったから勝てなかったと言いつつお前が勝つつもりか？」

「つぐ：そんな事は…!!」

箒は、俺の言葉に反論しようとしてキツと睨み付けてくるものの、強く言い返せないでいる。

負けた時の逃げ道になり得ると本人でも気付いてしまったのだろう。

だが、問題はそこだけじゃない。

「あ、アモン兄、言い過ぎだつて！」

「ええ、少し言い過ぎかと」

一夏は箒を庇う様に俺の前に立ち、セシリアも一夏に賛同する様に小さく頷く。

だが、続く俺の言葉に2人とも黙さざるを得なくなる。

「いいや、駄目だね：此奴には専用機が配られる事がほぼ確定している。今からでも戦場に立つ心構えを叩き込んでおかなきゃ：死ぬぞ」

そう、箒の姉の事を考えれば、箒に専用機：それも新規に造られたコアが搭載された物が配られると言う事は必定。

それも、現行ぶつちぎりのスペシャルな機体が来ることは目に見えるている。

だが、乗り手が甘ったれたケツの青いガキだったら…？

ISを奪われるのなんて目に見えている。

だからこそ、自分の身は自分で守れるくらいの非情さを身に付けてもらわなければならぬ。

「姉さんなんかには：頼りません！」

「…それならそれで良い。けどな、お前の事情なんて考えるとどうかな？」

「そ、それは…考え、ない…です…」

「そんなに酷いんですの…？」

「束さんの二つ名くらい知ってるだろ？本当にあの通りだから…」

「すっぽんぽんでベッドに潜り込まれたことあったなあ…」

俺が遠い目をしながらボソリと呟くと、三者三様…主に軽蔑するか

の様な視線が降り注ぐ。

…俺は悪くない、何も悪くないだろうが…。

「不潔ですわ!」

「…見損なつたぞミユラー先生」

「アモン兄…わりと軟派なのか…?」

「応、勝手に潜り込んでたつたつたろ、俺被害者だぞ被害者!」

俺は仏頂面になりながら必死に抗議するものの、そこは女社会…無情にも被害者カウントされる事は無かつた。

男だつて被害者になり得ると言う事を切に説きたい…。

何とか必死に事態を説明して助平の烙印を逃れた俺は、一夏達よりも早めに訓練を切り上げて、学園の正門前で煙草を吸いながら人を待っている。

…何年振りかの再会となる転入者を待っているのだ。

箒とセシリアのライバルとなり得るだろうその人物は、一夏の幼馴染に当たる人物だ。

しかもやたらと気配りできる…このアドバンテージは、正直デカイ。い。

箒とセシリアはアピールに必死すぎてるからなあ…。

待ち始めてから30分程経つただろうか…何本目かの煙草を携帯灰皿に捨てて上着にしまうと同時に正門の前にタクシーが止まり、中から見覚えのあるツインテールが降りてくる。

「あー…やつと着いたわ…」

「おう、チンチク鈴…久しぶりだな」

「その名を呼ぶのは…シシヨー!!」

タクシーが立ち去つたのを見計らつて、待ち人…凰 鈴音へと歩み寄る。

しばらく見ない間に大きく…なつてないな。

相変わらず体の至る所がちんまいままだ。

もはや、身体的成長は絶望的かもな…。



鈴音：鈴は、他の同い年の女性に比べて少しばかり小さい。

具体的には小学生に見えない事も無い身長しかなく、身体の凹凸も比較的平坦な部類だ。

しかし、その小さな体に反して肝っ玉は据わっており、コミュニケーション能力も高い。

何より、先にも言ったが心配りがよく出来るのだ。

「お前な…相変わらず俺をその名で呼ぶのか」

「シシヨーはシシヨーでしょうが。まさかISに乗れて教師やってるなんて思わなかったわ」

「こつちだつて予想外だよ…。それよか、鈴…お前のライバル増えてんぞ」

「ん？ああ、一夏の事か。あたし、降りたのよ」

…鈴の言葉に半ば目を丸くし、思わず間抜け面を晒す。

一夏が振るとは考えにくい…と言う事は…。

目の前で物思いに耽ると、鈴が俺の足を踏みつけて思考を停止させる。

「いってーな、おい！」

「変に勘繰らないで良いわよ、シシヨー。あたしは、一夏にとってそういう対象で見られなかったと言うだけ。もう、吹っ切れてるんだから」

「ったく、チンチクリンの癖に器量だけは一丁前だな、お前は」

「フフン、良い女でしょう？」

「ハッ、もう一回り歳食ってから出直して来な」

「グヌヌ…」

鈴の額にデコピンをすれば、正門を通って学園内の敷地へと入る。

案内も無しに学園へと入ると、初めて来た人間は広大な敷地の中で迷子になる。

それだけ似通った建物が多いし、通路も標識があるとは言え張り巡らされている。

最早、迷路と言っても過言では無い。

「ああ、そうだ…とりあえず、これパンフレットな。これに地図載って

るから頭に叩き込んでおけ」

「はい。それより、シシヨー…今まで何処に居たのよ？」

歩きながら鈴にパンフレットを手渡すと、鈴は俺の前に立ちふさが  
る様に出て歩みを止める。

その頬は不満そうに若干膨らんでいる。

一切連絡を取らないでいたから、余計に不満なんだろう。

「ん、何処って言われてもな…世界中？根無し草なのは昔話しただ  
ろ？」

「そうだけど…何も旅に出なくたって良かったじゃない？」

「お仕事も兼ねてるんでね…一つ所に中々留まれねえのさ」

「じゃあさ…この学園からも何時か居なくなっちゃうの？」

鈴は不安そうに此方を見上げてくる。

…その言葉は的確で、そして必ず来てしまう。

そもそもこの世界の住人では無い俺に、居場所なんて無い。

俺はあっけらかんと笑って鈴の頭を撫でてやる。

「そら、何時かは居なくなるだろうさ…けど、それは今すぐでもねえ  
し、少なくともどっかにほつつき歩いたりはしねえよ」

「む…なら、良いけど…行くなら行くで挨拶くらいしなさいよ！」

「へえへえ、仰せのままに…」

慇懃無礼にならない程度に紳士的な礼をしてやると、遠くからセシ  
リア達の声が響く。

どうやら漸く訓練を終えて、寮へと戻る様だ。

「へえ…元気そうじゃん。あの二人が一夏にホの字って訳ね…」

「ポニーテールは幼馴染だって話だ。金髪ドリルの方は先日落とされ  
た」

「アイツ、無自覚にフラグ建設するから…それでいて反応してないか  
ら金玉付いてるのかわかんなくなるわ」

「女の子が金玉とか言うなっつーに」

鈴は何処か小馬鹿にしたように…辛辣に一夏に対して呟く。

相当こっぴどい目に合わされたのか何なのか…まあ、想像に難くな  
いんだが。

「え、シシヨーったらあたしの事女の子として扱ってくれるの？」

「そら、扱うだろうが…鍛えるときは容赦しねえけどな」

「うへ…でも、ま…学園に無理矢理来ただけの甲斐はあったわ！また、よろしくねシシヨー！」

鈴は旅の疲れを感じさせないとびきりの笑顔を浮かべ、俺を見上げる。

一夏と何があったのかは分からないが…まあ、昔の様につるむことが出来ると言うのは、純粹に嬉しく思うのだった。

## #22 夜空と煙草と後悔と

鈴を寮まで送り届けて別れた後、俺は寮長室に直行せずに階段を上っていく。

今、この寮のレクリエーションルームは、1組の連中が占拠して一夏の代表就任記念パーティと言う口実でドンチャン騒ぎをしている。羽目を外し過ぎず、消灯時間までに撤収できるのならば構わない：と言う千冬の許可を得た上でのパーティなので、特に問題がある訳ではない。

とは言え、この寮に居る人間がそんな催し物を知らない訳も無く、寮中の生徒が御近付きになろうとレクリエーションルームへと殺到していた。

無論、1組の生徒は検問を設けてクラス以外の人間が入り込まない様に、厳しくチェックしてたりするわけだが。

「あれ、センスは一夏君のパーティに出席しないんですか？」

「ん？俺はパス。おっさんが居たって仕方ねえだろ？」

「え、そんなことないですよ」

階段を上る途中に、1組の生徒の1人に声をかけられて足を止める。

確か：名前はクレア：だったか？

綺麗な赤毛をポニーテールにした、アメリカ出身の生徒だ。

クレアは一夏が懐いているので、出席するものだと思っていたのだろう。

一応見習いとは言え、俺も教職に就いている。

俺が居たのでは、監視している様に思われるだろうし、あくまでも生徒同士の親交を深めるための場だ。

遠慮するのが筋つてもものだろう。

「そんなことあるのさ。それに、俺が居ると悪い事まで覚えさせちまいそうだからなく」

「あ、煙草は止めた方がいいですって。モテませんよ？」

懐から煙草とオイルライターをチラ見せすると、クスクスと笑いな

がらクレアに止める様に促される。

こればかりは止められないルーチンワークの様な物なので、周囲の人間には諦めてもらおう他ない。

そもそも止める気が無いわけだし。

「ふふん、これでも昔はモテてたんでね」

「でも、煙草吸い出した途端…でしょ？」

「まあ、ここ何年かはご無沙汰だわな…」

「ほら。私がお相手してあげよつか？」

クレアはあっはっくん、と言いなながらセクシーなグラビアポーズをとって俺に色目を使ってくる。

言うまでも無く、IS学園の生徒故か非常に整った顔立ちをした少女だ。

そこら辺の馬の骨じゃ、速攻で勘違いして落ちるだろう。

だが、俺はそれを冷めた目で見た後に軽く肩を竦め、額を軽く小突いてやる。

「阿呆抜かせ、せめてもう一回り歳食ってから出直しな。生憎、ロリコンじゃねえからな」

「ぶー、出るとこちやんと出てますう」

「そんな事で大人だつてんなら、まだまだお子様な証拠だぜ？」

クレアは俺の目から見てもそこそこ大きい胸を、両手で下から持ち上げる様にして俺に見せつけてくる。

クレアにとって数少ないセックスアピールであろうその仕草も、俺にとっては大した事のないものだ。

「外見も内見も磨きな…：そしたら、正当に評価してやる。イイ女つてのは身体だけじゃ、なれねえもんだ…：背伸びしなくて良い、お前のペースで女を磨けばいいさ」

「むう、故郷じゃ言い寄ってくる男ばかりだったのに」

「男はいつまで経ってもガキだが、がつついてるのはもつと子供だ。そう言うのはお前を付属品か何かにか見てねえよ」

「それは…」

付属品…もつと言えばアクセサリー…：自分を良く見せるためのな。

彼女が美人であれば、仲間に自慢ができる。

そんな美人が彼女であれば、自身が所有者であるかのように錯覚する。

後は泣かされて、他にイイ女が出来ればポイ…なんてこともあり得る。

勿論全員が全員そうだとは言わない。

クレアの事をキチンと見て、良い所も悪い所もひっくるめて惚れ込むガキも居るだろう。

クレアにも何処かしら思い当たる節があるのか、顔を俯かせる。

アクセサリーとして人を見ると言うのは、何も男に限った話では無いのだから。

「なくに、落ち込んでんだよ？」

「え、べ、別に落ち込んでないですって」

「だったら、笑顔じゃなきゃな。イイ女の特徴だぜ？」

俺は両手の人差し指で口角を押し上げて、無理やり笑みを作って見せる。

程度にも依るが笑顔は人を幸せにする。

それが美人であれば、尚更だ。

クレアは、俺の顔を見てプツと吹き出してお腹を抱えて笑う。

「あははっ、いきなり変な顔しないでよ、センス！」

「応、笑ったな。さつきよりかは、ちったあマシな顔だよ」

「今ならセンス、落とせるかな？」

「無理」

「即答!?!」

俺はクレアを手を追い払う様に振り、首を横に振る。

生憎とロリコンと言うわけでは無い…ストライクゾーン広めだけどな。

「良いから、一夏ん所行って遊んで来い。消灯まで時間がねえぞ?」

「いつけない!それじゃセンス、また明日ね」

「羽目外し過ぎるなよ」

クレアは慌てて階段を駆け下りて、立ち去っていく。

：多少、吹き込まれていた様な感じがしたな：元浮浪者相手に、今の時世の女がそう簡単に色目を使うとは思えない。

大方、お国の方から何かしら餌を出されたんだろうが…。

ガキ共のハニトラに引つかかるほど甘くはないものの、少しばかり気を引き締めて生活を送る必要があるだろう。

ガキを大人の思惑に巻き込まないで貰いたいものだ…。

クレアと別れた後、気を取り直して階段を上って屋上に出れば、フェンスに備え付けられているベンチに腰掛けて足を組む。

何とはなしに夜空を見上げると、雲一つない星空が視界一杯に広がる。

昔に比べて空が濁っている、とどつかの老人が言っていた気がするが、それでも充分綺麗な星空と言えるだろう。

懐から煙草を取り出しゆっくりと口に咥えたところで、隣からライターの火が差し出される。

「こんな所で喫煙か？」

「こんな所だから喫煙だ：なんだ、千冬も嗜んでるのか？」

ライターの持主である千冬は、俺の隣に腰掛けて呆れたような顔をしている。

何時の間に座ったのやら…？

俺自身、1人きりだと思って気が緩んでいたのかもしれない。

大人しく千冬のライターで煙草に火を点け、ゆっくりと煙を吐きだしていく。

「お前程、頻繁に吸うわけでは無い。ただ：何となく吸ってるだけだ」

「あんまり、おススメできる趣味じゃねえんだけどなあ…」

「べ、べつに良いだろう!？」

「いや、そうなんだけどよ…」

千冬は俺から顔を背けると、少しばかりふくれっ面で煙草を口に咥えて火を点ける。

暫くジリジリと煙草が灰に変わる音と、交互に煙を吐きだす音だけが屋上に流れていく。

気まずい：千冬の方は何か言いたげにしているが、話の切欠を掴めずにいる所為かソワソワとするだけで沈黙するだけだ。

「…ウサギはどうしたんだ？」

「私の質問に答えるだけ答えたら、お前の専用機を進めるって言って帰った」

「俺が使つてぶっ壊れなきやいいけどな」

茶化す様に言うと、千冬は首を横に振る。

信頼なのか信用なのかは分からないが、束はきっちり個人に合わせた物を作ってくるらしい。

俺が使ったISのデータをコア・ネットワーク経由で取得しているだろうし、負荷対策はきっちり行ってくるだろう。

どういった仕様の機体になるのかだけは分からないので、不安と言えば不安なのだが。

「アイツをそこら辺の技術者と一緒にしない方が良い：気に入った個人相手に作るのなら尚更だ。あいつは、よく見ている」

「他人に目移りしないからこそ：と言うのもあるんだろうな。人間関係壊滅的でも、もうちつと慎ましやかなら可愛げがあるんだが…」

「ハッ…」

可愛げ、と言う言葉に反応したのか、千冬は鼻で笑い飛ばして肩を竦める。

束の事を良く知っているからこそその反応なのだろうか？

学生時代からの長い付き合いだって話だしな。

「アレに可愛げなんてないぞ。他人を巻き込むだけ巻き込んで、後片付けしない子供だからな」

「たまくに、お前ら友人なのか気になるんだが…」

「友人だからだ…」

千冬は深く溜息を吐いた後、腰を少し浮かせて俺の方へと身を寄せ寄るかかってくる。

灯りがあまりない屋上で顔は良く見えないものの、ほんのりと頬が紅いのが見える。

ただ、それ以上に：表情は不安げだ。



「10年…ISと関わって10年になるんだ…私は」

「束との付き合いがありや、そうもなるわな…」

「…それだけ、長く付き合い合ってきたにも関わらず、私はISと言う存在に本当の意味で触れた事は無かったんだ」

千冬は煙草をもみ消して捨てると、深く溜息を吐いて顔を俯かせる。

…声色からは後悔と申し訳なきがにじみ出ている。

恐らく、暮桜に起きた現象について束に聞いたのだだろう。

ISについて真に精通しているのは、束しかないからな。

「…ISに守られてた、か？」

「…道具の様に扱っていて、それでも尚守ってくれていた…滑稽だと思わないか？」

暮桜の石化現象に関して、ある程度予測自体は出来ていた。

それは、外部からの干渉の物理的な拒絶。

暮桜に施された干渉は、千冬にとって危険な物だったのだろう。

「教壇でISには心があると説きながら、実際のところ自分はそれを信じていなかった。機械に意識なぞ宿る訳が無い、機械的に最良を選択しているだけだ」と

「……」

暮桜は知つての通り、千冬が世界最強と言う肩書を得るに至った特別な機体だ。

苦楽を共にし、常に死闘を演じ続けてきたその相棒は、知らない内に千冬の中で大きな存在となっていたのかもしれない。

俺は静かに口を閉ざして、煙草を携帯灰皿の中に捨てる。

「だって、そうだろう…私には聞こえなかった…暮桜の声が聞こえなかったんだ。聞こえていれば…こんな気持ちにもならなかったのだろうに…」

「聞こえなきやどうしようもねえだろ。想いを秘しては伝わらぬってな。伝えなくちゃ何考えているのか分からねえだろ。束のところの姉妹関係みたいにな。だから…」

俺は優しく千冬の頭を抱き寄せて、優しく撫でてやる。

子供をあやすように、慰める様に頭を優しく撫でて気持ち落ち着かせていく。

本当の慰めにはならないだろうが、気休めくらいになる事を信じて。

「っ…」

「…今回は、知る事が出来て良かっただろう？今度は、もっと優しく接してやれんだろう？」

「だが、暮桜はもう…」

「うだうだするなつて…いつか、また動く日が来るだろうよ」

「だと、良いんだがな…」

千冬は大人しく俺に体を預け、上着の裾を握りしめる。

普段毅然とした態度で振舞っている姿を見ている分、こういった反応をされると少しばかりドキリとさせられる。

見た事のない一面…とでも言うのだろうか？

「…束が言うには、あの闘いの最中にデータの引き抜きとウイルスの注入が行われていたそうさ。犯人までは掴めなかったと言うが…」

「まあ、タイミング的には倉持だろうが…ウイルスってーのは…」

「アモンも知つての通り、ISには生体補助機能が搭載されている。その機能にバグを引き起こさせ、人体を破壊する様に仕向けるものだったらしい」

…随分とエグい殺し方だ。

のたうち回るくらいじゃ済まされないと、想像を絶する激痛を与えて殺すつもりだったのだろう。

千冬がそこまで恨まれているとは思えないが…一夏絡みで引き起こされていると思うと不思議でも無い気がする。

一夏の身元は千冬がしっかりと保護している状態で、迂闊に手出しができない状態だ。

まあ、手を出したら火傷程度じゃ済まされないしっぺ返しを食らう事は目に見えているからな。

問題は、データの引き抜きと同時に送り込まれたウイルスの注入方法だろう。

コア・ネットワークは東が一元管理をしていて、セキュリティが確保されたものだ。

腐っても大天災のあいつが、ハマするとは思えないが…。

「一夏やアモンは安心して良い…東の方で何かしら対策を立てるから、私と同じ目に合う危険はほぼ無いと言って良い」

「俺は兎も角、一夏にそういった危険が無いってのは安心するな」

「馬鹿を言え、お前に死なれては…私が、困る…」

千冬はぼそつと呟く様に言うと身体を滑らせるようにずらして、頭を俺の膝の上に乗せる。

所謂膝枕である。

これって女の柔肌でやるから良いんであって、男の膝でやっても対して心地いいものではない気がする。

「硬い」

「なら、退かせっつーの」

「良いではないか…お前くらいしか、やってくれる男はいないしな」  
「ったく…」

千冬はこちら側に顔を向けずに行っているので表情を読み取る事が出来ないものの、少しばかり声色は嬉しそうに思える。

俺みたいなの膝の何が良いのやら…俺は少しばかり呆れ気味に肩を竦めながら、優しく頭を撫でる。

「随分と甘えるじゃねえか…」

「私だって、女だからな。それに、親なんて知らないし甘えさせてくれる人は…」

「行方不明…だったな」

「ああ…」

千冬達の両親は随分前に家を出て行っただけ、帰ってこなかったそう。

最初は内緒で旅行にでも行っているかと思っていたらしいのだが…それ以来、一度も姿を見ることなくこうして生きてきた。

学業と仕事を必死にこなしながら一夏を養ってきたその執念は、両親に対する当てつけの様にも思える。

「まあ、何でも良いけどな…」

「フツ…あのバカがしてもらってない事をしてもらっていると  
言うのは…気分が良い」

「何の対抗心だ、何の」

「さあな…私にも…わからん…」

千冬は優越感を滲ませた笑みを浮かべる様にフツと笑い、大人しく俺に頭を撫でられ続ける。

感覚的には、大型の猛獣がジャレついているのに近い…千冬の場合豹とかさそう言う感じの。

暫く撫でてしていると、千冬から静かな寝息が聞こえてくる。

「千冬…？」

「すー…」

ペチペチと頬を軽く叩くと、千冬は邪魔だと言わんばかりに俺の手を払い、まるで子供が親にしがみつく様にズボンの裾を掴んで寝息を立てはじめた。

俺は、深く溜息を吐いて静かに空を見上げる。

「どうすんだよ…これ…」

結局どうしようもないので、お姫様抱っこをする形で千冬を運ぶことにした。

5月間近とは言え、まだ夜は肌寒く感じてしまう為、屋上にあまり長居するのも身体によくないからな。

しがみつく千冬を引き剥がしてはしがみ付かれると言う攻防を5分程繰り返し返した末に俺が勝利し、何とか抱きかかえればゆつくりと来た道を戻る。

あまり激しく揺らすと、良い夢見ているであろう千冬を起こしてしまう可能性があったからだ。

一段一段、ゆつくりと1階まで降りると、偶然なのかキャミソールにホットパンツと言う出で立ちの鈴と鉢合わせた。

「あつ、ししよ…う…？」

「鈴か、ちいっとばかり静かにしろ」

「えっ、千冬さん、だよね？」

「千冬だなあ…」

階段から降りて来た俺の姿を見るなり、鈴は喜色満面の笑みを浮かべた瞬間、一気に顔を青褪めさせる。

表情がころころと変わる辺り、感情をストレートに出し過ぎな気がする。

「ち、千冬さんに何したのよ!？」

「だあかあら、静かにしろっての」

鈴は目を白黒させ、果ては瞳孔をグルグルとさせながら冷や汗をびっしょりとかいてアタフタと慌てている。

まるでSAN値チエックに失敗して、一時的な狂気に陥ったと言わんばかりだ。

「そんな悠長に構えていられないわよ!え、なに!?!千冬さんと付き合ってぶぎゅ!？」

「静かにしろってんだらうが」

あまりにもあんまりなその反応に、思わず顔面目がけて喧嘩キックを非常に優しくお見舞いして鈴の事を黙らせる。

鈴は思い込むと一直線な部分が多々見受けられる。

話を聞かなくなったら、1度叩きのめしてからしっかりと聞かせてやる方が手っ取り早い。

「っく!?!乙女の顔に何するのよ、シショー!」

「良いからついてこい。お前にも手伝ってもらいたいからな」

「え…?わ、分かったわよ…」

鈴は渋々、と言った様子で俺に頷くと、歩き出した俺の後をヒョコのように歩き始める。

背後から感じる気配が、さっきからソワソワしているものを感じる。

大方、俺が千冬と付き合っているのでは、とかそう言う勘繰りをしているんだらうが…生憎と付き合っているわけでは無い。

寮長室の扉まで着けば、鈴に鍵で扉を開けてもらおうことで中に入

り、千冬をベッドに寝かせる。

「ん〜…」

「千冬さんが子供みたいだわ…」

「んじやあ、これ頼むわ」

「ふえ？」

俺は、千冬の寝間着を鈴に無理矢理渡す。

別に俺が着替えさせても構わない訳だが、それはそれで何か問題が起きそうだからな。

持つべきものは異性の弟子、か？

鈴はキョトンとした顔で俺から寝間着を受け取り、交互に俺と寝間着を見つめる。

「俺が着替えさせてやっても良いんだが、それだと色々問題だろ？ちよつと面倒かもしれねえけど着替えさせてやってくれ」

「アツハイ」

「んじや、終わったたら部屋の扉ノックしてくれ〜」

鈴は素直に頷いた後に首を傾げるものの、早速千冬 of 衣服を脱がせるためにボタンを外し始める。

非常にそそられる生着替えではあるものの、今後の生活の事を考えると背に腹は代えられない：大人しく部屋を出て、扉の前で待つことにする。

時間的には消灯時間まで間があるものの、聞こえて来るであろうレクリエーションルームのどんちゃん騒ぎが聞こえてこない。

一応、羽目を外さずに節度を守ってくれたら嬉しい：関心関心。

「あら…ミユラー先生。ついに粗相を働かれましたか？」

「聞こえの悪い事言うんじやねえよ、オルコット」

扉脇の壁に背を預けて、鈴からの返事を待っていると大浴場のある方角から風呂上りのセシリアが此方へとやってくる。

そこそこ美味しい目が見れたのか、傍目から見ても機嫌が良いのが見てとれる。

「ふふ、冗談ですわ。それにしても、何故こんな所に？パーティにも参加してなかったではないですか」

「今、弟子2号に頼んで千冬の着替えを頼んでるところだ」

「弟子…2号…ですか？」

セシリアはキョトンとした顔で首を傾げて、此方を見上げてくる。微かに漂ってくるフレグランスは…香りからして相当な高級品であることを伺わせる。

「正式な転入自体は明日から…同じ国家代表候補生だし、多分お前の知っている奴だ」

「は、はあ…」

何とも釈然としない面持ちでセシリアに頷かれる。

俺の交友関係がどうなっているのかさっぱり分からないのと、千冬と何があったのかを濁されたことが原因だろう。

…何があつたのかって言ったら言ったで、面倒な事になりそうだ。

「それよか、お前…随分と良い香水使ってるんだな」

「あら、先生でも分かりますの？」

「それでも良いとこのお坊ちゃんらしいからな」

けっけっけ、と笑いながら話題転換をすると、セシリアは満面の笑みを浮かべて自身の頬に手を添える。

「ブランドの特別な会員にしか渡されない、非売品のフレグランスですの。わたくしっこの香りが一番のお気に入りで…」

「身だしなみに気を使うからなあ…そう言うの、野郎からのポイント高いと思うぜ」

一夏は知らないけど…と言う言葉をグツと飲み込んで、とりあえずセシリアを褒める。

すると、セシリアは確かな感触を得たかのようにグツと小さくガッツポーズをする。

チヨロイな…クツクツク…。

「フッフ、先生に褒められると何だか自信が持てますわね」

「おっと…ただの浮浪者みてえなもんなんだから、あまり参考にすんなよ？」

「いえいえ、色々な世界を見てきた殿方なのですから、大いに参考になりますわ。では、わたくしはこれで…ホホホ…」

「おう、しつかり睡眠取れよ〜」

セシリアは自分磨きに精を出すつもりなのか、す〜つと素早くかつ下品にならない速度で立ち去っていく。

セシリアが立ち去ったタイミングを見計らったのか、鈴は扉を開けて隙間から顔を出して此方をジト目で睨み付けてくる。

「シショール、いくらなんでもあんまりじゃない？」

「ま、酸いも甘いも知るのが恋愛だからな。多少は良いスパイスになるもんさ」

「まあ…それはそうかもしれないけど…」

鈴はなまじ一夏の朴念神っぷりをマトモに見てきたことがある所為か、セシリアに対して合掌をする。

本当に、一夏に対する執着が消え失せてるな…。

「ところで、シショールって何処で寝てんの？」

「何処って…その部屋だ。千冬と同棲してんだよ」

「んな…?! いやいやいや、そんなそんなそんな…本気の本気で言うてるっ。」

鈴は目を見開くほど驚いた後、首を横に振りつつ事実を認めようとしめない。

俺は静かに頷いて、言葉を続ける。

「千冬とはそこそこ一緒に暮らしてたって事で、千冬が監視役を請け負ったらしくってな? この寮に住んでるのも、一夏と纏めて管理するためなんだろうよ」

「え〜…そんな…」

「あのな、さっきから何をそんな残念がってるんだよ?」

軽く溜息を吐きながら、鈴の頭をワシヤワシヤと撫でてやると途端に機嫌が良くなる。

年頃の娘っ子ってのは何だか良く分からんな…。

「だって、シショール人部屋なら気軽に遊びに行けるじゃん」

「年頃の娘っ子が、おっさんの部屋に入り浸ろうとすんな!」

「シショールはおっさんって感じしないわよ! まったく、いっつもおっさんおっさんって自分を卑下するんだから…」



「鈴にそう言われんのは悪い気はしねえけどな…とりま、助かったわ」  
最後にポン、と頭を撫でて鈴と入れ替わる形で部屋に入って行く。

「明日早いんだから、とっとと寝ろよ」

「分かってるわよ！シシヨーも、千冬さんに変な事するんじゃないわよ!?!」

「へへへ、わかってますよ」と

互いにおやすみと言葉を交わし、静かに扉を閉める。

千冬にしろ、鈴にしろ…こうして好意を持たれる事に嫌悪感があるわけじゃない。

だが…いつまで、話を先延ばしにできるものなのやら…そう思考して溜息を吐くのがあった。

## #23 ランチタイムは憂鬱に

「ミユラー先生は、学園での生活には慣れましたか？」

「んー、まあ、自由に外出できないって事以外は概ね問題ないな」

「外出に関しては諦めろ：ちよっかいを出されてまだ日も浅いからな」

朝の会議を終えて、俺と千冬、真耶の3人で教室に向かって歩く。学園での生活が始まってから、早2週間：気付けば桜は緑で生い茂り、徐々にではあるが外の気温も上がり始めている。

春の訪れは既に初夏の兆しとなり、これだけでも季節の移ろいというものを感じることができる。

凰 鈴音：鈴は、1組の預かりとはならず、2組での預かりとなった。

一夏や俺の存在を考えれば、無理矢理にでも1組に突っ込んでくると思っただが、各クラスのパワーバランスを少しは考えているらしい。

もし、1組にばかり専用機持ちが固まる：なんて事態になったら、他のクラスの意欲低下に繋がりがかねない。

「ちよっかいがなきや、近くの公園で遊んでるんだがなあ」

「公園ですか：少し、意外ですね」

「千冬ー、真耶が偏見の目で俺を見てるぞ？」

「だったら、その目つきをどうにかしろ」

「敵しかいねえのかよ…」

遊ぶ：と言うより、本業を楽しむ、と言ったところだが。

あくまでも、俺は大道芸人の人形遣いだ。

教師なんて言う立場は、あくまでもこの学園に在籍するための方便であって、心からこの職を全うしようなんて思っただけじゃない。

ガキの面倒を見るのは嫌いじゃないんだけどな：ただ、物を教えるって言うことに苦手意識があるだけで。

人に物を教えるというのは、案外難しい。

何もないところにただ物を突っ込んででも上手く収まらないのと同じように、順序を立てて1つ1つの事柄を理解させていく必要がある

る。

俺が受け持っているのは座学：一般教科の類だからまだ楽なもの、この学園の大半の教師は命に関わるISの運用方法だ。

この時に間違った覚え方をさせてしまうと、取り返しがつかなくなってしまう。

「それにだ：曲がりなりに公務員が、副業をしようとするんじゃない」

「はあ？こつちが副業だつつの：ISに乗れるから此処に突っ込まれるだけじゃねえか」

「教師を副業扱いですか…」

千冬は諭すようにびしやりと言い放ち、真耶はズレた眼鏡を抑えなおしながら呆れた目で俺を見つめる。

一応、暇を見ては本業の道具である人形のサニティの整備や、動作の練習はやっている。

ガキどもに見られないようにこつそりと、だが。

ただの練習を見せるのは嫌だからな：やるなら、キチンとしたものを見せてやりたいと言うどうでも良いプライドだ。

「副業みたいなもんだろ：首輪代わりの肩書だからな。本音としちゃ、今すぐにも俺を解体して調べつくしてやりたい奴らがゴマンと居るだろうよ」

「一夏の方にも変な宗教家や科学者が押し寄せてきた時期があったな：須らく叩きのめしてやったが」

「織斑先生、乱暴ですよ…それ…」

俺と千冬が不敵な笑みを浮かべると、真耶は乾いた笑いとともにため息を吐く。

俺にしても千冬にしても血気盛んだ：基本的に売られた喧嘩は買い取り、倍額で売ってきたやつに売りつける。

それでもしないと、喧嘩を売る奴が後を絶えないからな…。

その後も穏やかに話しながら廊下を歩いていると、2組から鈴が出ていき1組に入り込んでいく姿を見つける。

「あいつ、自由だな…」

「あのフットワークの軽さは見習うべきところなんだが、その分協調性には欠けるな」

「お2人とも、凰さんとはお知り合いなのですか？」

俺と千冬に疑問を持った真耶は、コテンと首をかしげながら俺たちの方へと顔を向ける。

凰は国家代表候補生の中でも、ずば抜けて知名度の高い存在だ。

理由は言わずもがな…その才覚にある。

基本的に国家代表候補生となる者は、幼い時分から英才教育を施されることが多い。

学園で学ぶことの大半を、早めに修める必要があるからだ。

だが、鈴はそれをたった半年で修めて国家代表候補生に選ばれただけでなく、専用機を受領するまでになっている。

おそらく、鈴はこの学園を卒業したら国家代表として世界に羽ばたくことになるだろう。

と、まあそんな鬼才と知り合いなのが不思議でならないのだろう。

「凰は、去年の春ごろまで私の家の近くに住んでいてな…一夏とは仲良くしてもらってたんだ」

「で、千冬の家に移り込んでいた俺は、必然的にアイツとも知り合いになったって訳よ」

「世間は狭いですね…」

鈴が1組に消えてすぐ、にわか騒がしくなったのを感じた俺たちは、少しだけため息を吐いて少しだけ足を早める。

…分かりやすいあの2人が、鈴に食ってかかるのは目に見えてるしな。

もうちよい、大人に…なんて思うがまだまだ15歳…甘い夢を見がちであれば仕方がない、か？

一足先に教室へと足を踏み入れると、敵意むき出しのセシリアと箒、おろおろする一夏、不敵に笑みを浮かべる鈴と言う一触即発の状況を目の当たりにする。

よく見ると、一夏の机の上に可愛らしい包みが置かれている…弁当、か？

「なーにやってんだ、お前ら？」

「シショ、遅いわよ！」

「あ、アモン兄……」

「先生は黙っていただけですか！」

「わたくし達は、目の前の小娘と雌雄を決さなくてはなりませんので！」

「……」

俺は静かに指をパチンと鳴らす。

すると、ささーつと俺の隣に本音がやってきて俺に傳く。

：…なんでは分からないが、時々餌付けをしていたらこの様に懐かれてしまったのだ。

「どういうことだ、これ」

「えつとですね、2組の転入生のリンリンがね、いつちーにお弁当つくってきたの」

「OK、把握した」

俺は懐から米軍糧食由来のチョコの小袋を取り出して本音に渡すと、本音は恭しくお菓子を受け取りささーつと自分の席に戻る。

決して…決して変な関係では無いことは此処に宣言しておく。

ただ、あの娘…いろいろと耳聡いところがあるので、今後とも重宝しそうではあるが。

(餌付けされてる)

(そうだね)

(いいな)

周りの生徒達の小声を無視し、改めて4人に向き直る。

気にしてもいられないし、餌付けしているのは事実と言えば事実だ。

「鈴、一夏とは何でもねえんじやなかったのか？」

「去り際の約束を遂行しただけよ。シショが居なくなっただけ後も料理の勉強はしてたしね」

「あー、酢豚を食わせてくれるってやつな。ありがとな、鈴」

「はあ…こんなんだから周りの女泣かせるのよ…あんたは」

…酔豚…食わせる…ああ…そういう…。

俺は少しだけ悲しくなってしまう、目頭を強く抑えながら一夏の脳天に拳骨を落とす。

いつそ地獄に落ちてしまえば良いと思う。

「いつてえ!?なにすんだよ!!」

「うるせえ、バカ!マジで朴念神止めねえと磨り潰すぞ!」

一夏は、どうして折檻を受けたのか分からず、涙目で此方を見上げて恨みがましい目で此方を睨み付けてくる。

詳細は鈴から聞き出す必要があるだろうが、恐らく一夏は鈴の精一杯の告白を勘違いして受け止めてしまったのだろう。

で、そんな一夏の様子を見て幻滅した…そんな所だろう。

幻滅と言うより、バカバカしくなったのかもしれないが。

鈴は口元を掌で隠しながらニヤニヤと一夏の事を見つめる。

「やーい、言われてやんのー」

「つつー…なんだってんだよ…もう…」

「箒とオルコツトも、キチンと伝えてねえなら近づいたくらいでガタガタ言うな。敵作るだけだろうが」

「ぐっ…だ、だが…!」

「そ、それができれば苦労は…!」

好きと言う感情よりも羞恥心が勝る…その程度ならば、そもそも恋愛はまだ早い。

恋愛と言うよりも、憧れ…に近い感情だろう。

「いつまで!話を!して!いるんだ!貴様らは!?!」

「あだっ!」

「ひっ!?!」

「いっ!!」

「ぎゃっ!?!」

「グワーツ!!」

俺が一夏達と話し込んでいると、痺れを切らした千冬が神速の踏み込みと振り下ろしで脳天に出席簿を叩き落していく。

時間にして5秒も経っていないだろう…人の身でここまでとは…。

頭を押さえながら涙目で千冬を見ると、まるで野良犬を追い払うように手で払われる。

「もうSHRの時間だ！散れ！」

「は、はいい!!」

「うげ、千冬さ…!?!」

「織斑先生だ！」

鈴は、千冬の事をいつも通りに呼んでしまったがために、追加で制裁を受けてしまう。

心なしか、少し厳しめの気がする…。

「貴様は2組だろう、転入早々に面倒をかけさせるな」

「ぐう…昼、食堂に来なさいよー」

鈴は教室を出て扉を閉める前に宣戦布告の様に言い放ち、勢いよく扉を閉める。

まるで嵐のようだったな…教室は痛みに呻く声しか響いてこない。

「はあ…SHRを始める…山田先生、連絡事項を」

「は、はいいっ」

千冬は聊か機嫌が悪いのか、鋭い目つきで真耶に指示を送る。

真耶は涙目で小走りで教壇に駆け寄り、連絡事項を話していく。

俺はいつも通りに教室の後ろの席に座り、様子を見守るだけだ。

聊か、騒がしい1日になりそうで、背筋に悪寒が走った気がした。

午前中の授業は滞りなく終わった。

休憩時間ごとに鈴が襲撃に來ると思ったが、2組の生徒と仲良くなつてからにするつもりなのか、1組に現れることは無かった。

一度、職員室に戻ってから必要な荷物を手に取り、中庭へと向かう。

中庭には、設計者の趣味なのかちよつとした噴水とバラ園が設えてあり、さながら洋風庭園の様相を呈している。

アーチ状のバラの門をくぐり、噴水の近くにあるパーゴラへと向かいテーブル席のベンチに腰掛ける。

格子状の宿にもバラが生い茂っていて、真夏でも涼しく過ごすこと

ができそうだ。

あいにくと今は4月…バラはまださほど咲いてはおらず、庭園にはやや華やかさが足りない。

「とは言え、すぐに華やかにはなるんだがねえ…」

いそいそと持ってきた荷物を袋から取り出し、2段の重箱を広げていく。

中身は、色とりどりのおかずとおにぎりが詰まっている。

少しすると、千冬が此方へと歩いてやってくる。

「待たせたな」

「女を待つのは男の甲斐性ってな。腹、減ったろ？」

「悩んでいても腹が空く、と言うのは喜んでいいのか分からんな」

千冬は俺の隣に座って、ペットボトルのお茶を差し出してくる。

俺は軽く礼を言ってからペットボトルを受け取り、少し大きめの水筒からお椀に味噌汁を注いでいく。

中身は王道の油揚げと豆腐だ。

時折、日本の食卓は大豆に支えられているような気がしてならないな…。

豆腐、油揚げ、味噌汁の味噌の原材料は全て大豆から出来上がっている。

最近は大豆を肉に見立てたソイパテなるものもあるし、色々と代替えが効くと言うのは純粹に凄いことだろう。

「いただきます」

2人そろって食事の挨拶を行い、黙々と食事を行う。

小さめの小判型のハンバーグ、きんぴらごぼうにヒジキの煮つけ、ブロッコリーと人参の炒め物にデザートのカットフルーツ…おにぎりの中身は無難に鮭のハラミと梅干だ。

「朝からよくも作れるものだな」

「大体は夕飯作るときに仕込んでおくのさ、調理器具使うから洗い物も押さえたいしな」

「純粹に食堂で良くないか？」

「んなことしたら、お前…コンビニ弁当で済まそうとするだろうが」



ずずつと啜る様に味噌汁を飲むと、口いっぱいにかつ出汁の豊かな香りが広がる。

市販の粉末出汁を利用したが、なかなかどうして…やるな。

千冬は、食に関してでは非常にズボラなタイプで、取り敢えず腹が膨れればそれで良しとする人間だ。

酷いときは、飲むゼリーで終わらせることなんかもあったな。

一夏の料理上手は、間違いなく千冬のこのズボラさに起因したものだろう。

おにぎりを一つ取ろうとしたところで、重箱の中身が無くなっていくことに気付く。

「んま、んま…」

「はあ…」

「なあ…暇なん…？」

千冬は溜息をついて目の前に座る人物を見つめ、俺は俺で呆れた顔で口を開く。

目の前にもう見慣れてしまった豊満兎である、篠ノ之 東が座っていたからだ。

音も気配もなく現れるあたり、どこぞの疫病神の様で気味が悪い。

「んん、塩加減ばっちり」

「それで、今度は何用だ…東？」

東は満足げに指についたご飯粒を舐め取り、笑みを深める。

千冬はどこかイラついたような声を上げて、威嚇するようにパージラ内に設えてあるテーブルを指でトントンと叩いている。

「んん、あつくんに会いに来ただけ？」

「帰れ」

「やうだう、ちーちゃんばつかあつくんといひ感じじゃん！」

東は人差し指を頬に添えながらコテンと首を傾げると、千冬はぴしやつと言ひ放ちながらささつと俺に身を寄せてくる。

…修羅場なら他所でやってくれまいか。

東は頬をプクッと膨らませると、俺からお椀を奪って水筒の中身である味噌汁を注いで一気に飲み干す。

「骨身に染みるわく、あつくん！毎日作って！」

「お前が作るんじゃないかねえのかよ？」

「作ったらデートしてくれる？」

「お前もしつこいな…しねえつつの」

頭痛がする…なんと言うか、束は非常にマイペースだ。

いや、マイペースだからこそ、非情な事を非情と思わず実行に移す気概がある。

故の『天災』…こいつのメンタルは鋼ではなく、柔軟なスライムメンタルな気がする。

他人の言葉に傷つかず、かと言って嵌めようとすれば逆に飲み込まれる。

千冬は俺の束に対する返答に安堵したのか、胸を撫で下ろしている。

…俺の事をどう思っているのかは分かっているが、果たして…答えていいものか、な。

「束、こいつが今学園から出たら上に下への大騒ぎになる。この間起きた襲撃事件は把握しているのだろうか？」

「まくねく、IS3機運用しての暗殺とか、よくやるわくって感じ」  
「…束、お前犯人知ってるだろ」

俺はスツと視線を鋭くさせ、束の事を睨み付ける。

あの襲撃事件のせいで、変なフラストレーションが溜まっている最中だ。

できることなら懇切丁寧に叩いてあげて、2度と手出しができないようにしてやりたい。

そんな俺の様子を見て、束は笑みを深めるものの静かに首を横に振る。

「それが、分からないんだよね。ISはISなんだけど…コア・ネットワークから隔離されてて、裏口が使えなかったんだよね」

「…はあ？お前の管轄で何もできなかったってか？」

「そゆこと。束さんとしてもねく、草の根かき分けて探し回っている最中なんだよね。あんまり派手にはやってないけど」

「束…どうやら、嘘ではないようだな」

千冬は神妙な顔で束の顔を見つめ、親指の爪を噛みながら思案に耽る。

基本的に、全世界のISはIS委員会で管理していることになっている。

だが、それは表向きな話であって、真実は違う。

真の意味でISを管理しているのは、目の前にいるうさ耳女、束なのだ。

束は、全てのISコアを繋げているコア・ネットワークを唯一掌握していて、そこから起動も停止も思いのままに行っている。

つまり、気に入らない実験を行っていれば、すぐに察知して緊急停止…なんて芸当も可能な訳だ。

それができないとなると、本当にISを使っているのかが疑わしくなってくるのだが…。

「あつくんが疑うような顔で…濡れるッ!」

「茶化すな茶化すな…ISに匹敵するものが出来上がっていると聞いてねえぞ?」

「出来損ないでも作れる筈がない…レシピは誰も知らないし、そもそもコアはバラせない。バラそうとした自壊するように作ってるからね!」

「…もしかして、中途半端な数なのって…」

「おバカさんがバラしたんじゃないかな」

…キリの悪い数字だと思っていたんだ。

467個…これが最初世界に配布された数だと思っていたが、実際は各国でコアの秘密を知ろうと躍起になっていたらしい。

だが、相次いで起こるコア自壊現象を止めることができず、バラす事を断念。

自壊した数も相当な数になるだろう…束も中々性格が悪いな。

「趣味が悪い」

「は、ハモらなくなつていいじゃん!」

千冬と同時に束を叱責すると、束はウソ泣きでテーブルに突っ伏す

が、すぐに体を起こす。

その顔は悪戯が成功した子供のそれだ。

「第一さー、コアが自力でエネルギーを生む反応炉なのは既に説明してたし、仮に雑なバラし方してたら、核なんて目じやない爆発起こるよ?」

「お前はなんちゅーもん作ってるんだよ…」

俺は顔を覆うようにして、深くため息を吐く。

ISは基本的に放っておけば、エネルギーを自前で作り出すことができる。

必要なのは推進剤だったり弾薬だったりと言ったところだ。

これは宇宙空間で活動するときの緊急事態に備えている為ではないか…と言う研究報告がされている。

そこまで分かっているのなら、とっとと宇宙開発をすれば良いのにな。

東は唇を尖らせてそっぽを向いてから口を開く。

「だって宇宙行きたかったんだもん」

「もんじゃねーよ、もんじゃ…」

「東は昔から欲求に忠実なんだ…こればかりは矯正できん…」

千冬は半ば諦めにも似た表情で、ペットボトルのお茶をゴクゴクと飲んでいく。

長い付き合いの中で、東の調教…もとい、躰を諦めてしまったのだろう。

マイペースさが生んだ悲劇とも言えるか?

「あ、そうそう…あつくんの専用機なんだけどね? 難航してマス」

「ほう…お前にしては珍しいじゃないか」

「だって、あつくんが使うと、今のままじゃ壊すもん」

「出来上がってはいるのか…」

「まくね〜」

東はフンと笑いながら腰に手を当てながら胸を張る。

その動きに合わせてゆっさゆっさと大きな胸が揺れるのを目の当たりにして、思わずぽつりと漏らす。

「ブラくらい着けるよ」

「は？」

「へ？」

俺の口から漏れた一言は、老婆心からくるお節介と言うやつだ。

胸、と言うのは重みに負けてしまいがちだ：特に束の様な豊満なバストを持った人間だと顕著だ。

場合によっては、皮膚が裂けてしまうとすることも起こりうるくらいだ。

そうならない為のブラであるし、着けないなら着けないで他の野郎共の視線に触れてしまう可能性も無きにしも非ず。

これもつまらないわけだ、何故か。

ただ、この言葉を口にしたのは不味かった：なんせ、俺は男だからな。

「…老婆心なんだろうがな：親友にセクハラとはいいい度胸だな、んん？」

「いやん…でも、あつくんにいつ剥かれても良いようにするためなんだぜく？」

千冬はコメカミに青筋を浮かべ、束はくねくねと体をくねらせながら発情したかのように息を荒げる。

俺はすぐに離脱しよう立ち上がろうとするが、まるで頭の上からとつもないプレッシャーを当てられたかのように立ち上がる事ができない。

「まあ、なんだ：次の授業までたつぷりと時間があるから、少し話そうか？」

「ちーちゃん、束さんもお話し混ざりたいぜー」

束は椅子から座ったままの姿勢で飛び上がれば、俺の隣の席に座って千冬と挟み込んでくる。

束は隣に座るだけでは飽き足らず、俺の腕を胸で挟むようにして抱き着き、千冬は千冬で俺の頬を全力でつまんでねじろうとしてくる。

「ひゃめるおー！」

「この際、たつぷりと上下関係を叩き込んでやらねばな…？」

「え、それよりもデートの算段話そうぜ！」

俺の主張は一切無視し、千冬と束は自分の思うがままに話を進めていく。

俺は痛みと癒しを感じながら、話を聞き流す他無かった：第三者の視線を感じながら。

## #24 恋の道化

放課後の第三アリーナ。

俺は、一夏、箒、セシリアの3人の訓練を観客席で眺めながら、それぞれの機体から送られてくる稼働データを確認していく。

オルコットは少しずつではあるが、俺の渡した自主訓練メニューの成果が見え始めたのか積極的に一夏や箒に近寄り、まだまだ甘い近接武器の呼び出しの訓練を行っている。

拡張領域内に量子化して収納されている武装は、別に思考だけで呼び出さずとも音声認識による実体化が可能だ。

しかし、こと高速戦闘において音声入力と言うのは非常に危険だ。声で呼び出すというものは、相手に次に何をするのか伝えているのとそう変わらないからな。

オルコットはブルー・ティアーズを受領してから、その類稀なBT適性の高さもあって、常に遠距離で相手を仕留めてきたのだろう。

だから、無意識化でこう思っている：『近接戦闘をする必要なんてない』と。

だからこそ、一夏に付け入る隙を与えてしまい、ピンチに陥る羽目になってしまった訳だが。

「オルコット、馬鹿正直に一夏達と張り合うな。近接戦闘に限りや、お前は3人の中でドベだからな」

『はつきり、おっしゃいますわね…!!』

「なら、生温く言ってやろうか？」

『結構ですわ!』

バトル・ロワイヤルの様相を呈してきた訓練は、一夏と箒が切り結んだ隙を見計らってセシリアがビットを追従させながらスラストを全開にして急加速。

まだ制御が上手くできないのか、甘い狙いのままビットからレーザーを乱射させて箒と一夏を分断し、そのまま手に持ったインターセプターを振りぬこうとする。

しかし、一夏はあくまでも冷静に雪片式型を構えてインターセプ

ターを受け止めて、刃の上を滑らせるように受け流していく。

箒は、苦い顔をしながら空きになった一夏の背中を見つめ、しかし躍りかかるような真似をしない。

「箒、何か困りごとか？」

『い、いや……くっ!!』

俺は意地の悪い笑みを浮かべながら箒に声をかけるが、箒は首を横に振って雑念を捨てて打鉄の近接用の刀である『葵』を静かに構え直しつつ、勢いよく横に体を投げ出す。

なんとか鏢競り合いまで持ち込んだセシリアが、箒に向かってビツトによる一斉射撃を行ったためだ。

戦場において迷いは命取り……一瞬の躊躇が自分を、或いは味方を殺す。

予め、このバトル・ロワイヤルにおいて正々堂々なんて考えは捨てておけと言ってこれだ。

今時珍しい昔気質なこの性格は……必ずしも箒を幸せにするものではないだろう。

悪いとは言わない……だが、綺麗事で世の中勝てていけるほど甘くはない。

一夏は手早くセシリアの脇腹を蹴り飛ばして距離を開け、動きの鈍っている箒へと手早く踏み込んで体勢が整う前に零落白夜を叩き込む。

俺の目に映る一夏は一切の情を捨て、勝ちにこだわっている。

……これはこれで問題ではあるか。

「がら空きでしてよー」

「ぐっ!!」

蹴り飛ばされたセシリアは、力の流れに逆らうことなくそのまま空中を流れながら背後からレーザーライフルである『スターライトmkⅢ』の高出力射撃を正確に浴びせ、白式に残されていたエネルギーを削り切る。

結果、このバトル・ロワイヤルにおける勝者は、セシリアとなった。流星に、英国代表候補生……IS素人相手に負けるほど落ちぶれても



いないか。

「んじや、お前ら…ピットに集合な―」

『くっそ…これ、俺かなり不利じゃないか?』

『相性はありますが、そうも言っではいられませんよ、一夏さん』

『…フン』

箒は、ややご機嫌斜めと言った様子で一足早くピットに入ってしまった、一夏とセシリアはそんな様子を見て互いに顔を見合わせて肩を竦めて後に続く。

こう…なんと言うか箒は不器用だ。

自分を曲げると言うことを知らず、ただただ真っ直ぐに生きようとしている。

おそらく、そう言う生き方に憧れていると言うのもあるんだろうな。

「あ、いたいた。シシヨー、漸く見つけたわよ!」

「おー、どうしたよ?」

「弟子は師の傍を離れないものでしょ?」

座っていた席から立ち上がろうとした瞬間、両肩に衝撃が走ったと思ったら鈴が肩車の要領で俺に抱き着いて嬉しそうな声をあげる。

大して動じるような素振りを見せることなく、俺はそのまま立ち上がって鈴と共に観客席から通路へと入っていく。

「お前な…師匠だなんだって言う割には敬いってもんがねえぞ?」

「別に良いじゃない。あたしとシシヨーの仲な訳だし」

「ハア…もうちよい、年頃の女つつー恥じらいをだな…」

「…ハッ」

軽くため息を吐きながら窘めてやると、鈴は鼻で笑って(恐らく)肩を竦める。

女に幻想抱いてんじやないわよ…と言う意味合いであろう。

「おう、一遍シメたろか…?」

「子供相手に何マジになってんのよ?」

「そーだったなー、チンチク鈴だもんなー」

「それはそれでムカつくわね…」

チンチク鈴…この上なく、鈴と言う少女を体現しているこの渾名は、言うまでもなく俺が与えたものだ。

最初こそ非常に嫌がられたものの、時間が経つにつれて訂正するのも疲れたのか、鈴もこの渾名を受け入れる様になった。

俺以外が言うとは烈火のごとく激怒する…とは一夏の弁だ。

鈴は俺の髪の毛を掴んで抜けない程度に引っ張り、抗議を示してくる。

「なんで、お昼シシヨは食堂に来なかったのよ？」

「あー、パンダみたいに見られるのにウンザリしててな。いつも弁当持参で済ませてるんだわ」

「それって、やっぱり千冬さんの分も…？」

「アイツ、放っておくとコンビニ弁当とかで済ませるからな…」

鈴は、ふーんと返事を返すだけで、先ほどまでの元気さはどこに消えたのか黙り込んでしまう。

聊か俺の髪の毛を掴む手にも力が込められているのか、若干痛い。

「いきなり、黙り込んでどうしたよ？」

「…べつにー？」

「その割には、不機嫌そうな声出してんじゃねえよ」

鈴は俺の頭に頬杖をつく様にして、グリグリと脳天に肘を押し付けて鈍い痛みを与えてくる。

どうにも、俺と千冬が仲良くしているのが気に入らないらしい…。

「言いたいことはキチンと言えって教えたらうが…。そういうの嫌われんぞ？」

「ぐ…」

鈴が俺に弟子入りをして、一夏に対する恋愛相談を受けた時に最初に言った言葉だ。

想いは伝えて初めて形になる…言わなくても伝わるのは、それこそ人外の領域。

好意も嫌悪も、本当のところは口にしなければ伝わることは無い。

「あのな…お前みたいにな上玉に好かれんのは悪い気はしねえが、最低でももう一回りデカくなってからにしろ。警察案件だっつ」

「ナチュラルにふるんじゃないわよ！」

イエス・ロリータ・ノー・タッチ。

子供は好きだが、恋愛対象に見るのは…。

ゲンナリとした顔をしながらすこしばかり猫背になると、鈴は俺の首に足を絡めて思い切り絞め上げてくる。

しなやかに鍛えられた足は普通の男性なら喜びのあまりに恍惚とした表情で意識を刈り取られるだろうが、生憎と俺は悪魔…この程度の締め上げでやられる程ヤワな体はしていないのだ。

鈴は歯を食いしばって必死に俺を絞め落とそうとするが、俺は何事も無いように歩き続ける。

「そーういや、2組の代表になったんだって？」

「お上の命令よ！シシヨーと一夏のデート取りしてこいって！学園に行く為に飲んであげただけで、ねっ!!」

「ったく、ガキを利用すんなっつーに…」

鈴は漸く諦めたのか、俺の首に絡めていた足を緩めて俺の頭に体重をかける様に寄りかかって息を整えていく。

ガキが俺を絞め落とそうなんぞ、100年早いつつーに。

「しっかし、そんなに俺や一夏に会いたかったかね？」

「一夏なんてついでよついで。あたしはシシヨーに会いたかっただけだしね」

「ったく、昔は一夏、一夏ってうるさかったのにな…」

「あたしだって、決死の覚悟の告白を曲解されれば目が覚めるわよ…」

鈴は大きいため息を吐き、俺は俺で眉間を指で強く揉み解す。

兎に角、一夏の友人の一人である五反田 弾や鈴から聞く一夏の学校での恋愛模様は薄ら寒いを通り越して滑稽と言えるレベルであった。

とあるエピソードに於いての話ではあるが、とある女生徒に放課後呼び出された一夏は、真っ直ぐに『貴方の事が好きなので、付き合ってください』と言われたことがあったそうさ。

それに対して、一夏は『ん、いいぜ？買い物、どこに付き合えばいいんだ？』と返したそうさ…。

もちろん、女生徒は泣きながらその場を逃げ出すように走り去り、一時期不登校にまでなってしまったと…。

流石に脚色されているんだろうなと思っていたが…盲目的に慕っていた鈴がこれ程までになると言うことは、一夏にまつわる女性関係の話は殆ど真実と思っても差し支えないだろう。

「シショーみたいにズバズバ言うなら良いわよ…でも、なんであんな曲解するのよ…?」

「俺に聞くな俺に…」

鈴と同時にため息を吐きながら漸くピットへと入ると、俺と鈴の視界に異様な光景が広がる。

一夏はISスーツを着たままピットの床に正座して、だらだらと冷や汗をかいている。

理由は言うまでもなく、ISを展開し鬼と化したセシリアと箒にインターセプターと葵の切っ先を突き付けられているからである。

「あ、アモン兄…！助けてくれ!!」

「…ミユラー先生、今回ばかりは口出しはしないでくれ!」

「ええ、ええ…女心を傷つける様な殿方は此処で性根を正す必要がありますわ!」

「なにこれ…」

一夏は藁をも縋る様な顔で俺を見つめ、箒とセシリアは首を横に振って手出し無用と言う…鈴ではないが、本当になんだこれ?

「鳳さんも鳳さんですわ!…なんでそんな飄々としてられるんですの!?!」

「そ、そうだ!告白したのに、曲解までして…!!」

「あ……」夏に聞いたわけね…」

鈴は俺の頭を手をついて跳び箱の要領で飛び降りると、すたすた歩いてセシリアと鈴に近づく。

俺も鈴の後に続いて2人に近づき、それぞれの得物を撮む様に掴んで静止する。

「怒ってるのは分かったが、人殺せる武器を容易く人に向けるな。千冬に知られたら反省文だけですまねえぞ?」

「だ、だが！」

「師であるミユラー先生の監督不行き届きでもありますのよ!？」

2人は得物を軽く振って俺の手を振り払おうとするが、ピクリとも動かないことに気付きじつと俺の事を見つめてくる。

その眼にはうつすらとした恐れの色が混じっている。

「…とにかく、落ち着け」

「っ…はい」

「わかりました…」

2人とも異常事態に頭が冷えたのか、得物に入る力が緩みISの展開を解除して生身に戻る。

もちろん、箒は打鉄をハンガーに戻してから、だが。

俺は箒とセシリアから目を逸らし、一夏と鈴へと目を向ける。

「で、今更あたしの言葉の意味を知ったわけ」

「もがもがもが」

「鈴、鈴、足どかしてやれ」

鈴は腕を組んで一夏の顔を思い切り踏みつけている。

こう、積年の恨みはらさしておくべきか…みたいなの？

鈴は俺の言葉に素直に頷いて足を退かし、深く息を吐き出す。

その顔は疲労一色だ。

「い、いや…最初は味噌汁的なアレかとは思ってたんだけどさ…」

「いいわよ、言い訳は。…聞きたくもないし、あたしの恋心はあそこで終わってんの。でなきや、酢豚なんて作ってこないわよ」

「凰さんはそれでいいんですの!？」

セシリアは納得がいかないと言わんばかりに唇を尖らせ、鈴に声を荒げる。

それは恋心を踏みにじられてしまう事の痛みに対する、怒りの代弁と言えるだろう。

「あたしが良いって言ってんの。外野がとやかに言う事でもないでしょう…」

「だが、凰…流石の私でも今回の一件は…」

「はいはい、そういうの、良いから。それともなに? ライバル増やした

いつての?」

鈴は面倒くさいと言わんばかりに、同情を振り払うようにひらひらと手を振る。

そこに一夏に対する執着は無いし、自分の言った言葉に嘘は無いよ  
うだ。

「そりや、振られて落ち込んで、気付いたら自分を虐める様に勉強して  
…そうやって代表候補生にまでなったわよ?けど、そうやってあたし  
は立ち直ったし、もう終わってんのよ」

「り、鈴…俺は…」

「一夏、これに懲りたら女心って言うものをキチンと考えなさいよ?  
今まで、知ろうともしないで無自覚に傷つけてきてたんだから」

「っ…わ、分かった」

一夏は鈴の言葉に顔を俯け、深々と頭を下げる。

箒とセシリアに怒られ、鈴に窘められ…今回ばかりは良いところな  
しだな、一夏。

俺は乱暴に一夏の頭を撫でた後に平手で頭を叩く。

「痛っー!?!」

「ったく、お前は何でもかんでも考えねえからこうなるんだよ。ほん  
と、反省しろよ?」

「はい…」

一夏が力なく返事をする、鈴は俺のスーツの裾を掴んで軽く引つ  
張ってくる。

「ねえ、シシヨー…ちよつと一夏借りて良い?」

鈴は良いことを思いついたと言わんばかりに、悪魔顔負けの邪悪な  
笑みを浮かべるのだった。

静寂と闇に包まれる室内：俺は窓際の席に腰掛けて、1人で酒を飲  
む。

千冬は一足早くベッドに潜り込み、可愛らしい寝息を立てて眠って  
いる。

あの後、俺は鈴に押し出される形でピットを追い出されてしまい、鈴の企み事を耳にする事は出来なかつた。

大方、一夏をパシリの様に扱って俺と自分とをくつつける算段をしると言つたところなんだろうが…。

鈴の恋心ははつきりとした物ではないだろう。

憧れから来ているものに過ぎない：優しくしてくれて、きちんと話を聞いて構ってくれる：汚い部分を知らないからこそ憧れてしまう、いわゆる近所の気の良い兄ちゃん現象だ。

俺みたいなのは真つ当な存在ではないし、それよかもつとマトモな男を引つ掛けるべきだろう。

「等と、意味不明な供述をしており〜」

「お前は本当にいきなり現れんじやねえよ…束」

「えへへ〜」

ぼんやりとグラスを傾けながら窓から差し込んでくる月明りを眺めていると、束が対面側の席に座って此方を見つめている。

頭の中を読まれていたようで、束の笑みは深い。

「あつくくんは…アモンはさ…優しいよね？」

「はあ？」

俺はグラスをテーブルに置き、真つ直ぐに束の事を見つめる。

束は終始笑みを絶やすことなく、俺のグラスに酒を注いでいく。

「可能な限り傷つけない傷つかないように立ち回って、それでいて自分には別に傷ついても構わないなんて思ってるでしょ？」

「どうだかな〜？」

「本当はこの世にいないから」

「…」

流石に動揺を隠せず、俺はごくりと生唾を飲み込む。

この世界に来るにあたって、雇い主である魔法使いは不備がないように情報の改ざんを最低限度ではあるが、行っている筈である。

簡単にバレてしまうようでは、仕事に支障をきたす可能性があるからだ。

「へっへ〜、束さんも千冬さんもとつくに勘付いてるんだぜ？」

束は舌打ちしながら指を振り、してやったり…と言った顔をする。

「どうしてバレたか知りたいかな〜？」

「まったく、体質だけで死人扱いとか良い度胸だな」

「まっさか、これでも束さんは天才だから色々調べてたんだぜ？」  
フフン、と束は優越感に満ちた笑みを浮かべ、グラスに注がれた酒を一口で飲み干す。

流石に千冬を起こす気は無いのか、乱暴にグラスをテーブルに置くことはしない。

その間、俺は必死に頭を回転させる。

どうやって言い包めるかだ…束にはちよつとした嘘は通じないだろう。

此奴はある意味、人の本質を見抜くことに特化している。

「まあ、でもあれだね…一番の決め手はやっぱりISに乗り込んだ事かな。ISは生体補助機能があるでしょ？アレで送られてくるデータに不可解な点が多くってさ〜」

「…だったら、なんだってんだ？」

俺はゆっくりとした動作で煙草を取り出し、口に咥えてライターを手を持つ。

「アモン、煙草…逆さなんだぜ」

「流石にそこまで動揺せんわい」

「ちえー」

俺は煙草に火を点けてゆっくりと煙を吐き出していく。

しかし、あれだな…案外終わりはあつけないものか…雇い主側で不備、と言うか面倒を察知したら勝手に引き上げる事がある。

こうして存在バレがある時なんかは良く引き上げてきたものだが…。

「別にどうしようしようってわけじゃないよ…ただ、人じゃないとかそういう事を気にするほど野暮じゃないってこと」

束はテーブルに乗り出して俺に近寄ると、首に抱き着く形で俺の体を無理矢理抱きしめてくる。

月明りに照らし出される束の顔は、いつもの様に不健康極まりない



青白い顔色でもなく、僅かばかり頬を紅潮させて色っぽく見える。

「ねえ、アモン…東さんは、私は本気だよ？私は本気でアモンが欲しい。私を私として見てくれるアモンが欲しい」

「別に俺でなくたっていいだろうし、態々悪魔になんぞ恋せんでm…っ」

東は、俺の口を塞ぐ様に顔を近づけてキスをし、まるで甦る様に舌を絡めていく。

此方から動かないのはせめてもの抵抗…俺はやんわりと東の体を押し離れさせ、しかめっ面になる。

「へっへー、初めてを捧げてやったぜ！これで赤ちやんできるね！」

「お前の頭ん中、お花畑か何かか…？」

東は満足したかの様に口端からこぼれた唾液を手でぬぐい取り、まるで妊婦の様に愛し気に自身のお腹を撫でている。

…流石に、天才を自称しているんだから、子供のでき方に関して知っていると思いたい。

「まつさかー、アモンが私の事を愛してくれたら孕ませてくれるんでしょ？」

「いきなりキスする人はちよつと…」

「私の本気度を知ってもらうためだからね！」

東は妖艶な笑みを浮かべて舌なめずりをし、俺は俺で窓の方へと顔を背ける。

東の愛情表現は、とにかくド直球のドストレートと言って差し支えないし、そういう好意の表し方に関してなんら不満もない。

なんせ、美人でボインだ…俺だって悪い気はしない。

かと言って、それに応えて良いかどうかは…。

「アモン、君がいつまで生きられるかは知らないし、分からない…流石にそこまで調べられないしね。けど、良いんだ…私は」

…人間じゃない、と言う点が明確にバレただけで、他所の世界の存在かどうかはバレていないらしい。

いや、生体データとかで其処まで身バレしたら、凄いなんでもんじやねえが…セーフと言えばセーフか…？

どちらにしろ、今後はもつと慎ましやかに生きていく必要はあるだろうが。

「どうあれ、お前らは置いていくことになるし、そんな奴に愛されたって仕方ねえだろ」

「そういう優しいところが、私は好きなんだよ…アモン」

束は嬉しそうな顔で俺の事を強く抱きしめ、まるで子供をあやすように背中を撫でていく。

愛されることに忌避感があるわけじゃない。

ただ、只管に俺と言う存在は欲に塗れる…1つ得ればもう1つと際限なく欲しがってしまう。

一過性で束なり千冬を愛しても、一過性では済まない。

最悪、他の全てを殺してでも手中に収めたくなくなってしまふ。

それだけは、やってはならないだろう…こいつらには…こいつらの…。

月明りが照らす部屋の中、俺は束に抱きしめられながらどうやって嫌われようか…ただそれだけしか考えていなかった。

## #25 始まりの夜

5月：クラス代表対抗戦を間近に控えていると言うときに、少しばかり問題を抱える事になってしまった。

あの、渾身の束の告白の翌朝から、千冬がどこか余所余所しく：しかし、少々過剰とも言えるスキンシップをとる様になったのだ。

流石に日中の人目がある時間帯はスキンシップをとるなんて事はしないものの、食事中は必ずと言ってても良いほど俺の隣を離れないし、体をこちらに密着させてくる。

あの時、束の告白を聞いていたのは間違いないが、恐らく束からの宣戦布告の様なものもあつたのだろう。

千冬にスキンシップが多いのでは：と言う話を振っても、普通だの1点張りで事態が大きく好転することは無かつた。

：もちろん、どうしてこんなことをしているのかなんて事には気づいてはいる。

自惚れでもなんでも無く、俺の事を好いているからと言うことくらいは分かっている。

ただ、突き放してしまえば良いだけだと言うのに、何故か：俺にはそれができなかつた。

何故か：なんて言うてはいるものの、答えなんてどうの昔に分かつているんだが。

「はあ…」

サロンの隅にある大理石のテーブル席に頬杖をつきながら、テーブルに掘られた盤上に白と黒の駒を並べていく。

向かい側には、この学園唯一の貴族であるセシリア・オルコットが席について紅茶を優雅な仕草で飲んでいる。

「溜息とはらしくありませんわね？」

「まあ、おっさんにも色々あつてな…」

駒を並べ終えた俺は、懐からピカピカに磨かれた金貨を取り出して両面をセシリアに見せる。

表側には王冠を着けて勇ましく剣を掲げた男性の像が彫られてい

て、裏側には跪き祈りを奉げる少女の像が彫られている。

：ちなみに知人である吸血鬼と少女の夫婦の像だったりする。

かたやロリコン、かたや少し行き過ぎたヤンデレと扱いに困る連中なんだよな…。

セシリアはその金貨を見て少しだけ目を丸くする。

「随分と…。それは何処の金貨ですか？」

「さてな…ダチからの貰い物なんで分かんねえんだわ。で、男と女…どちらにする？」

「では、女性で」

セシリアの宣言を聞いて、俺は金貨を指で上に高く弾いて顔面まで落ちてきたときに握り込んでセシリアの前に突き出して開いて中身を見せる。

コインは少女の像が表側になっていた。

「では、わたくしから…それにしても、ミユラー先生からチェスのお誘いがあるとは思いませんでしたわ。どちらかと言うとテレビゲームがお好きなのかと…」

「アレも良いが、俺はこういうボードゲームの方ばかりやっててな…親父によく扱かれたもんさ」

大理石の盤上を交互に駒を進める音が、静寂に包まれたサロンに響き渡る。

カツン、カツン、カツンと言った音は、さながら戦場に響く軍靴の様に響き渡り、一種の緊張感を生み始める。

もちろん、サロンには他にも生徒がいるものの、俺とセシリアの対決を静かに固唾を飲んで見守っている。

ひそひそとした声は、恐らくどちらが勝つのか…と言う話声だろう。

「定石通りに打っていきますわね…」

「イタリアン・ゲームだったか…？多少は先生らしく打っていかないとな」

「あら…わたくし、これでもチェスには自信がありましたよ」

「そら楽しみだ…一夏も鈴もチェスは打てなくてなあ…」

互いに笑みを深め、セシリアは定石を崩すために一手を打ち込んでくる。

俺はそれらをのらりくらりと凌ぎ、そして王道を突き詰めていくかのように駒を進めていく。

一進一退の攻防はやがて一手打ち込むごとに長い時間を要するようになり、サロンに設置された大きな柱時計の振り子の音が耳障りなくらい大きく聞こえてくる。

誰かが淹れてくれた紅茶を一口飲み、少しだけ頭をクリアにしようとする、徐にセシリアは口を開く。

「…先生も、人ですわね」

「どうだかな…」

「結構、噂になってますのよ？織斑先生とデキあがっていると。ですが、どうやら噂は噂…デキあがる一步手前と言ったところでしょうか？」

「貴族のお嬢様はそんな事も分かるのかね…？」

セシリアは漸く駒を進めて笑みを深くする。

どこかしてやったりと言った顔だ…。

俺は進められた駒を見て、苦々しい顔になる…気付けば敗色が濃厚になってきているのだ。

実力が拮抗してしまっているのであれば、勝敗を分かつのは冷静さだ。

なんてことは無い恋心…俺はその恋心に翻弄されてしまっている

「これでも魑魅魍魎の住まう社交界で舞っていたのですから、多少は人の機微と言うものに明るくなるものでしてよ…」

「だったら、ドストレートに好意を彼奴に伝えればいいじゃねえか」

「その言葉…そっくりそのままお返しいたしますわ」

俺が一手進めると、セシリアはすぐさまに一手進めてくる。

段々と長くなってきた思考時間は短くなっていき、手勢は僅かとなり、キングとクイーンがほぼ丸裸にされる。

打てる手はほぼ無く、目の前に座る王に少女翻弄されるなんてのは良いザマだわな。

もはや、あとは最後の時を見守るだけだ。

「…それは、ふざけてますの?」

「んにや、大マジさ。負けるときは必ずこうする」

キングをクイーンの前へ。

王とは鮮烈に生き、その生き様を敵に、民に、愛する者に見せつけるものだ。

で、あるならば…最後まで残る者の前に出るべきだろう。

「そう言う覚悟はある癖に、随分とへタレていると思いませんか?」

「俺は我儘でな…1つ欲しがればアレもコレもと欲しがっちゃう。だから、欲張らねえようにしてんのさ」

「で、あるならば世捨て人になって、人と関わるのを止めるべきですわ」

セシリアは離れている自分のキングの駒を持つと、俺のキングの駒にぶつけて倒す。

少しばかりの苛立ちを込めているように。

「俺は…人間が大好きだからな。そうしようと思ってもできねえのさ」

「織斑先生の事は特に好いておいでなのでしょう?でしたら…」

「分かっちゃいるんだよ…けどな、それをしないのもまた優しさみたいなところはあんのさ」

深くため息をつきながら立ち上がると、セシリアは不満そうに口を尖らせて俺の事を見上げてくる。

まるで、面倒くさいものを見るかのような眼差しだ。

なまじつか自覚している分、結構クるものがあるな…。

「ミユラー先生…いえ、今はアモン・ミユラーと敢えて呼ばせていただきますしやう。アモン・ミユラー、貴方は莫迦ですわね」

「おう、ようけ言うたな。パツキンドリル…」

「なんとも仰ってくださいまし。アモン・ミユラーのその優しきは、ただのお節介と言うものですわ」

余計なお世話、か…。

やがて俺がどういう形であれ居なくなってしまうと分かっている

上で、そう接してきている。

で、あるならば俺の気遣いなど無用の長物と言うものか？

段々と考えるのもバカバカしくなってきた、思わず眉根を寄せてしまふ。

「わるい、後片付け頼むわ…今日はもう休む…」

「え、ええ…」

セシリアは俺の表情を見てクスリと笑う。

どこか勝ち誇ったようにも見えるその笑みは、歳不相応に大人びていて妖艶にも見える。

「敢えて、はつきりと申しませう。わたくしは、一夏さんが好きです。ですが…わたくしのこの想いは叶える事はできません。わたくしは貴族ですから」

「身分差の恋なんぞ時代遅れだろうが」

「そうした時代遅れの身分に居るからこそ…ですわ。ですが、せめてこの学園に居る間くらいは夢見ても構いませんでしょう？」

IS学園特記事項第21項に学園に在学中の人間はあらゆる機関に干渉を受けない…と言うような記述がある。

つまり、この学園に在学している生徒は皆平等な立場であり、この学園の庇護下にある限りあらゆる外的要因から守られる。

学園が中立の立場であるからこそできる芸当だな。

そんな学園だからこそ…セシリアは貴族としてのセシリアではなく、ただの少女で居られる。

「ガキはガキらしくしてりや良いだろうに」

「先生程子供ではありませんので。後片付けは、わたくしの方でしておきますわ」

セシリアは俺を追い払うように手を振る。

…子供か。

人一倍どころか万倍歳食っても、こと恋愛沙汰はまだまだ青いか…。

俺はげっそりとした顔で俺とセシリアを囲むようにしていた生徒達をかき分けて、サロンを出ていく。

寮の廊下は閑散としていて人の気配が無く、サロンの中とは打って変わってしんと静まり返っている。

「どうにかしちまつてるんだろなあ…あの時から」

静まり返っている廊下を歩きながら、ぼやく様に呟く。

初めて出会ったあの暑い真夏のドイツ…そこから既に今の状況に陥ることが確定していたのかもしれない。

もしあの時一夏と出会う事が無ければ、俺はこの場に立っていないかったかもな。

いや、ISが世界の中心だとすれば、立っているかもしれないか…それでも、こんなに千冬達に入れ込むことはしなかっただろう。

運命と言うものは、平気で此方を弄んでくる。

逃げようと思えば逃げることはできるだろうが…それはしない。

仕事と言うこともあるが、何よりも千冬と東から尻尾巻いて姿を消すと言う選択肢が気に食わない。

「…ったく」

忌々し気に舌打ちをすれば、寮長室の扉の前に立って深呼吸をする。

気分を切り替えでもしなければ、千冬とまともに向き合って話すことができない気がしたからだ。

確実に意識をさせられてるし、そう仕向けられもした。

自覚があつてなのか無自覚なのかは置いておいて、非常に強烈な精神攻撃だったと言わざるを得ない。

惚れた腫れたはなんとやら…男って言うのはいつだって単純なものだ。

意を決して部屋に入ると、どうやら千冬はまだ校舎の方にいるようで、部屋の中は真つ暗だった。

安堵と共に部屋の明かりをつければ、着ていたワイシャツの襟元を緩めて一目散に脱衣所へと向かう。

セシリアとの知恵比べと糾弾に嫌な汗をかいた為、一刻も早くさっぱりとしたかったからだ。

基本的に寮での入浴は大浴場に定められているが、女性は定期的に



来る生理現象があるために大浴場を利用できない期間がある。

そういった場合の解決策として、寮長室込みで簡素…と言っても充分な広さのあるシャワールームが備え付けられている。

流石にバススタブは無いものの、希望者は寮長に申し出ることで自費になるがバススタブの設置も認められている。

現在の1年寮でバススタブを申請したのは、セシリアだけだったな…。

俺は負の思考から意識を逸らすように別の事を考え、蛇口を捻ってシャワーヘッドから湯を吐き出させて頭から被る。

まるで豪雨の様に吐き出されたお湯は、一瞬で全身を濡らしてシャワールームを湯気で満たしていく。

5分か…それとも10分か…暫らくすると寮長室の扉が開いた音が響き渡り、小さく足音が聞こえてくる。

…千冬が戻ってきたようだ。

「…アモン、風呂か？」

「おう…使うか？」

「いや、良い…」

千冬はシャワールームの扉に背中から寄りかかり、何やら煮え切らないような雰囲気で口を閉ざす。

…このままじゃ出れないんだが…とはいえ、そこに陣取るといふことは、あまり顔を突き合わせて話したくない事があるという事だろうな。

「…その、迷惑だったろうか？」

「何がだよ…？ああ、スキンシップの話か？」

「どうも、私は男との距離感と言うのがよく分かっているようだな」

「…まあ、美人にすり寄られるのは悪い気はしねえよ」

シャワーを止めて髪の毛をかき上げて水気を切りつつ、扉の方へと顔を向ける。

…出るに出られないが仕方がない、ここで話を切って顔を合わせづらくなられても困る。

俺は、曇りガラスに映る千冬の背中を見つめる。

「束との会話…一部始終聞いていたんだろ？」

「ああ…あいつは、存在自体が煩いからな」

ゆつくりと扉へと歩み寄り手を伸ばし、扉越しに千冬の背中に触れる。

背中を押し返されるような感覚があったのか、千冬は怯えた少女の様にビクリと体を震わせる。

鉄の女だなんだとか言われていても、やはりこう言うところは可愛らしい。

人の一面だけを見て、何でもかんでも決めつけるのは良くないってことだな。

「あのな…俺は同情も憐みも欲っしているわけじゃねえぞ？」

…うだろうだと考えるのは、もう止めましょう。

俺らしくもないし、悶々とし続けるのも疲れる。

千冬と束は、俺が古い先短い人生を送っていると勘違いしている。

で、あるなら…そんな憐みを抱いての愛情であるならば俺はいらないし、このどうしようもない感情を秘めたるものとして、胸の内にしまいこむ。

だが、もしも…もしもそうでないならば…精一杯、応えよう。

やがて、傷つけてしまう結果であったとしてもだ。

「今日居なくなるかもしれないねえ、明日居なくなるかもしれないけど、そんな事気にしてたら上手くやっていけねえ。今、この場に居るんだったら、精一杯楽しんでいねえと勿体無いじゃねえか」

「…ああ、そうか…」

千冬は何か納得したかの様に頭を上げ、呟く様に言う。

「私は…お前に憐みを覚えた事は1度もない。ただ、お前を見るだけで苦しくて、束との事を考えるだけで苛立ったのは…お前が好きだったからか」

「…誰だよ…お前をそんな風に育てたのは…」

無自覚に今までスキンシップを行っていたと暗に言われ、弟が弟ならば姉も姉だなど思ってしまう。

確か青春時代は両親が不在の中必死に働いていたという話だった

し、そういった感情に疎くなってしまうのも仕方がない気がするが……とりあえず、だ……

「…ひとまず、そこを退いてくれ。風邪ひくつつの」

「あ、ああ……すまん……」

千冬ははつとなつて我に返り、そそくさと脱衣所を出ていく。

…さて、これからどうしたもんかね…？

照明を落とした室内には、何時かの時の様に月明りが差し込んでくる。

少しばかり気まずい感じで夕食を終えた俺と千冬は、窓際に置いてある椅子に座つて黙々と酒を注ぎあう。

互いにどうやって話を切り出すべきか手をこまねいていて、中々話を切り出すことができない。

酒を飲み始めてから早1時間…俺は酔うことが無いものの、度数の高い日本酒を中心に飲んでいたせいかな、千冬は頬を赤らめてぼうつとした表情で此方を見つめている。

「…そろそろお開きにするか？もう日付変わっちゃうぞ？」

「い、いやまだだ…まだ、大丈夫だ…！」

「割と出来上がつてんじゃねーか」

千冬はムツとした顔でタンブラーの中に注がれていた日本酒を飲み干し、俺に差し出してくる。

明日辛くなるのは自己責任…俺は止めるような事をせずに一升瓶を傾けて、タンブラーの中に薫り高い日本酒を注いでいく。

なみなみと注がれた日本酒を千冬は全て飲み干し、口元をどこか男らしく腕で拭くとジツと此方を見つめてくる。

…思春期を殺した結果、自身の恋心と言うものがよく分からなくなっている。

かと言って、このまま束にリードを許すのも面白くない…故に、何とか考えをまとめようと躍起になっていると…まあ、そんな所か？

「…一応、言っておくけどな。俺は、お前の事好きだぞ」

「っ……なぜそうも真顔で言えるんだお前は!？」

「もうな、お前らの事考えるの止めにしたんだよ。気楽だぞ、開き直っちまうと」

自分のタンブラーの中身を飲み干して、テーブルの上に置いてあった煙草に手を伸ばす。

そう、開き直ろう…後の事は後で考えて、いざその時が来たら…出たところ勝負だろう。

「た、束はどうするつもりだ!？」

「ん、そんなもん…」

煙草に火をつけて、窓に向かって煙を吐き出す。

千冬はごくりと生唾を飲み込んで俺の言葉を待っている。

「困い込むに決まってるだろーが」

「堂々と二股宣言する奴がいるか!？」

千冬は顔を真っ赤にして俺の事を睨んで思い切りタンブラーを投げつけてくるが、俺はそれを涼しい顔で受け止めて酒を注ぎ差し出す。

本気の本気で好いていると言うのであれば、応えてやるべきだろう。

なんだか段々気が楽になってきたな…束の後始末はキツイだろうが。

「俺はな欲深いんだよ。欲しいものは何であれ、必ず手に入れる…必ず。俺はお前が欲しけりや束も欲しい。他の誰にもくれてやらねえよ」

「っ…わ、私は…私だけを…!!」

千冬は、テーブルに身を乗り出して俺の襟首を掴んで引き寄せて間近で見つめてくる。

…どこまでも純粹で綺麗な瞳だ。

俺は、千冬の頬にそっと手を伸ばして火照ったその肌を優しく撫でる。

「っ…!」

「幻滅したならそれはそれで良い…俺はお前が思ってるような奴じゃ

ねえからな」

ルールには沿うが、基本的に俺と言う存在はアウトロー…法に背くことを平気で行えるし、非情に徹することができる。

今まで、そういうった側面を殆ど出してこなかったと言うだけだ。

東は…まあ、知っててあの振る舞いだらう。

他人がどう思おうが、大して気に留めないからな…。

「くっ寝るー！後片付けしておけ!!」

「っ…あいよ」

千冬は、顔を背けて離れると大股でベッドまで向かい飛び込むようにして潜り込む。

もちろん、俺に背を向けてだ。

…自惚れでも何でもなく、千冬はそれでも嫌いになれないのだろう…殴らなかつたのが良い証拠だ。

…行為に甘えていると思う。

「でも、それでもな…俺は千冬の事が好きだぞ。出会い頭に鉛玉叩き込まれた仲だったとしてもな」

「…私は、寝ている。だから、寝言だ…これは」

窓から差し込む月明りはベッドまで届くことは無く、暗闇の中で背を向ける千冬がどんな様子で居るのかは判然としない。

千冬は、寝言と言うにはあまりにもはつきりとした声色で言葉を続ける。

「私は、お前を…それでも、嫌いになれずにいる。これが恋心だと言うのであれば、少しでも…お前の前では素直に、なりたい」

俺は千冬 of 言葉に答えることなく窓へと顔を向け、静かに紫煙をくゆらせる。

ほんの少しだけ、安堵してしまった気がした。

## #26 襲撃

特に目立った事件も起きず、クラス代表対抗戦当日となった。

この対抗戦は、いわばクラスごとの実力を測るための試金石とされている：と言うことになっているが、内情は違う。

実際のところは、ISバトルと言うものがどういうことなのかを触れ、或いは見ることで感じて貰う為の場としてあるのだ。

実際、国家代表候補生クラスとなると専用機を持つていることが多く、その大半が専用にチューニングされた特別仕様機や、国が威信をかけて作り上げた次世代型の専用機：学園が保有している訓練機とは性能に雲泥の差が生まれてしまう。

もちろん、そう言った有利不利を覆す隠れた実力を持った人間もいるが、そんなものは本当に極々僅かな人間だけだ。

もちろん、クラスの中にそう言った人間がいないとは言わないが、今回対抗戦に出場するのは各クラスから1人だけ：大会中に片鱗を見せる人間が出てくる可能性は皆無と言ってもいいだろう。

そうした大番狂わせが楽しめそうなのは：来月6月に準備されている学年別トーナメントになるだろう。

こちらの大会は本格的な学園内ISバトル大会で、各国のIS委員会所属の人間から軍の幹部、はたまたIS製造関係の企業や研究所からの賓客が多数集まる大規模なものになるそうだ。

実際、水面下では来月の学園内警備に関する会議が頻繁に行われていたりする。

『ミューラー先生、聞こえますかー？』

「あいよー。しっかし、俺までかり出されるとは思わなかったぜ…」

第三アリーナ地下格納庫：エネルギー供給用のケーブルに直接繋がれた第二世代型ISラファールを身に纏い、大会が始まってからの数時間待機し続けている。

アリーナの管制室に居る真耶からコア・ネットワーク回線で通信が入り、呑気な声で返事をした俺は小さくため息を吐く。

基本的にIS学園と言う組織は、慢性的な資金不足から来る人員不

足にあえぎ続けている。

超が付くほどの一流の設備に機材、専門の知識を備えたスタッフ、そして、青春時代を謳歌すべき女子生徒達に対する手厚いアフターフォロー…と、様々な部分でお金を吸われていってしまっているからだ。

しかも基本的な運用資金は、学園のある日本が税金から賄っている。

税金と言っても、国家運用のための予算枠から僅かな額を絞り出すのに精一杯と言うのが現状だ。

公平中立を謳うのであれば、各国が全体のパワーバランスの元公平に資金を出して運用するのが正しい姿だろう。

これは、白騎士事件と言う盛大なマッチポンプを仕掛けた東に原因がある。

情報統制が敷かれていて一般にはあまり周知されていない事ではあるが、白騎士事件が起こるひと月前…東は14歳と言うあまりにも若すぎる年齢でISコアを作り上げ、世に送り出そうとした。

しかし、その若すぎる年齢に世間は少女の妄想と決めつけ相手にせず、結果としてこの時はISと言う存在の産声を聞くものは居なかった。

この出来事に東はキレちまったんだろうなあ…世界中の軍事施設と言う軍事施設を一斉にハッキングし、掌握。

各国が保有している核以外の長距離弾道弾ミサイルの標的を日本に設定して一斉に発射するという暴挙に出る。

もちろん、これは自分が作り上げたISを活躍させるための舞台装置に過ぎない。

第零世代型…『白騎士』が活躍するための舞台装置だ。

結果として、あらゆるミサイルを人的被害皆無で無力化することに成功した白騎士は、各国の軍の追跡をこれまた人的被害皆無で振り切り逃走。

その直後に東は満を持して、ISを世に送り出すことに成功した、と。

この事からマッチポンプと言うことが分かかっていて糾弾されずに済んだのは、束がISコア製造法を秘匿し、コアにブラックボックスを仕掛けたからに過ぎない。

そして物質的、軍事的な損害を被った各国は、束が日本国籍なのを良いことに日本を糾弾。

IS操縦士育成機関の設立、及び維持費を一括してなすりつけられる羽目になったとき。

…疫病神じゃねーか。

『織斑先生は国の承認が無ければISに搭乗することは許されませんし、互角以上の技術を持つミユラー先生が適任だったんです』

「手放して褒めんよ…照れるっつーに。だが、まあ…この人員不足どうにか解消しねえと、今年から大変かもしれないねえな」

優秀な設備に優秀なスタッフ…と言っても、全てをカバーするには限界があるし、何より常に稼働し続ければどこかで疲弊が生じて回らなくなることもある。

機械であれば部品を交換すれば良いが、人間はそうも行かない。

それに、学園は大量の機密を取り扱う場でもある…迂闊な増員は機密の流出に繋がってしまうため、おいそれと増員ができない。

まさしく八方塞がりだ。

『無い物強請りはできんからな。そうやって待機してもらっているが何か起こるとは限らない…適度に肩の力を抜いていてくれて構わん』

真耶の通信を割り込む形で、千冬が優しい気な声で話しかけてくる。

開き直ったあの夜…あれ以降露骨なスキンシップは減ったものの、何処か張りつめていた気が和らいだ印象を受ける。

一夏や鈴から矢継ぎ早に問い質されたが、変に噂が広がるのも面白くないので適当にあしらっておいたが…あの2人は気付いているだろうか。

かたやニヤつき、かたやローキックだったからな。

「ちーちゃんは優しくして涙がちよちよ切れるよ」

『貴様がその渾名を呼ぶなっ！』

『すっかり仲良くなりましたね。やっぱり一緒に住んでるからでしょ



うか?』

「甲斐甲斐しい主夫は懐かれんのさ」

『2人して揶揄うな!!』

『はーい』

束の様な呼び方で千冬の事を揶揄うと、案の定千冬は声を張り上げて抗議してくる。

案外、今頃顔が真っ赤かもしれないな。

俺は、ニヤニヤとした表情のまま管制室との通信を切り、全身の力を抜いてリラックスしながらハイパーセンサーに映されるアリーナで行われるバトルを見つめる。

今は第二回戦：四組と三組の代表者同士の戦いだ。

四組の方の代表は：なんと言うか、あの悪戯が好きそうな会長殿を彷彿とさせる顔の少女だ。

確か：更識 簪：楯無の妹だったかね？

簪は積極的に攻めることはせず、何処か仏頂面で打鉄のアサルトライフル『焰備』から弾丸を垂れ流している。

対している三組の代表はISを扱うのに四苦八苦しているようで、徐々に被弾を重ねていく。

簪が仏頂面なのは、恐らく倉持技研の一件があるからだろう。

そう、彼女こそが専用機をないがしろにされた日本の代表候補生なのだ。

「まあ、面白くはねえだろうな…認められてたはずの努力を蔑ろにされりゃ…」

ぽつりと呟きながら、簪の戦い方を見つめ続ける。

簪の戦法は何処まで行っても嫌がらせ…つまるところ理攻めの極致だ。

相手がやられたら嫌がることをとことんまで突き詰めてじわじわと削り殺す…また、相手が奇策に転じてもすぐに対応する柔軟性を持ち合わせ、全体の流れを掴むことに長けている。

まあ、今は八つ当たりの側面が結構強いようなので嫌がらせに集中しているように見受けられるか。

結果としてはタイムアウトによる判定勝ち…普通の人間からはどちらも攻めあぐねた結果の様に見えることだろう。

次の第三回戦で、一夏の出番となる。

「さて…何か起きるとしたらこの辺りか…」

ぼんやりと、以前俺が受けた襲撃を思い浮かべる。

世界に2人だけの男性操縦者…欲する人間がいれば排除したい人間もまた居る。

俺の場合は両方の思惑が交差しているようだったが、一夏の場合は…。

心配してどうにかなる問題ではないし、何より…常に俺が見てやれるわけではない。

勿論、間抜け面を晒して良いようにされない為に俺なりに今まで鍛えてきたし、あいつも誘拐事件を機に自身を苛め抜いてきた。

全ては後悔しない為に。

己の弱さを嘆かない為に。

俺は機体を軽く動かして、具合を確かめる。

今、ISのパワーアシストは解除してある…普通の人間には動かすことすら出来ないであろう鋼鉄の塊と化すが、そうでもしないと俺の場合は短時間で行動不能の自滅を起こす可能性がある。

勿論、手加減して動けば良いだけの話だが、戦闘中にそんな気の抜けた動きができるわけもない。

ハイパーセンサー越しに映る映像には、白い甲冑の様に見える白式を身に纏う一夏と、黒と鮮やかな赤に塗られた鈴のIS、『甲龍』<sup>シエンロン</sup>が映し出されている。

互いに何か喋っているようだが、音声までは拾えていないので内容は分からない。

恐らく、互いに煽って精神的な動揺を起こそうとしているのだろう。

「管制室1、学園周囲に動体反応あるかね？」

『学園が封鎖している周囲30キロに動体反応無し…ミユラー先生は仕掛けてくると思いますか？』

「どうにも嫌な感じがな…俺は手を出して一夏は手を出さないなんて道理は無いだろう。警戒は強めておいた方が得策だろうよ」

『海上に教員を配置しての嚴重な警備体制だ…突っ込んでくる莫迦は居ないと思いたいがな』

管制室に居る真耶と千冬に声をかけ、状況を聞くものの今のところは杞憂で済んでいるらしい。

管制室側の方から試合開始のブザーが聞こえると同時に、一夏が弾き飛ばされるのが見える。

瞬時加速…と言うには無防備なその動きは、鈴のしてやったりと言う顔を見て攻撃であることを察する。

『初手から衝撃砲を使ってきたか』

『未完成…なんて報告がありましたけど、やっぱり虚偽報告でしたね』  
「まあ、下手に探られたら堪ったもんじゃねえだろ…さて、零落白夜じゃ対処しきれねえぞ〜?」

衝撃砲…これは甲龍に搭載されている第三世代型兵器だ。

両肩のアンロック・ユニットを起点にPICによる見えない砲身を形成、空間を圧縮することで空気の塊を発射する…と簡単に言えばそういう事なんだが、厄介なことに砲身どころか弾が見えない。

最大出力で圧縮をかけた時に巻き込まれた塵が発火現象を起こして光って見える程度で、通常出力ではそんな現象は起きない。

また、空気の塊を飛ばしているだけなので、零落白夜によるエネルギー無効化能力の適応外と来たもんだ。

鈴の技量は現在の1年生の中でもトップクラス…苦しい戦いになるな。

一夏は素早く機体を制御して鈴を睨みつつ、弾かれるように右側へと移動する。

観客席のエネルギーシールドに衝撃砲の弾丸が炸裂して、ちよつとした悲鳴があがる。

「ひとまず距離を開けて様子をみるしかねえわな…やっぱ、視線かね?」

『十中八九な。イメージ・インターフェイス・システムの弊害とも言え

るが…』

『お二人とも、初撃で看破するんですね』

『山田君、君ならば白式を身に纏って攻略する際どう動く?』

真耶は千冬の問いかけにうん、と唸って熟考する。

恐らく、鈴の癖を見抜こうとアリーナでの戦闘を舐めまわすように見ているのだろう。

『今回のISバトルはフラット…障害物も何もありませんし、まずは相手に高さをとらせませす』

「その心は?」

『私にしろ織斑君にしろ、雪片式型しか持っていないと言うことには違いありません。ですので、鳳さんは衝撃砲による中遠距離戦で仕留めようとするはずですよ。ですので、まずは姿を隠すだけの砂煙を起こしてもらいます』

戦闘を見る限り、真耶の言い分は最も…そして、若干の慢心が鈴に見える。

自分よりも格下だと言う認識による慢心だ。

それは、張り付いて消えることのない笑みからも見受けられる。

『姿を隠せるだけの砂煙が起きれば、後は分の悪い賭け…囷代わりに雪片式型を投擲した後に瞬時加速を用いて回り込み、徒手格闘で仕留める…と、言ったところででしょうか?』

『アモンならどうする?』

「視線で射線を決定していると仮定してだ…射線読んで突っ込む。面倒だからな。零落白夜なら…まあ、一撃必殺も狙えるだろうし」

弾丸の大きさがどれくらいなのか?

連射速度は?

面制圧されるのか?

と言った部分を見る必要はあるが、戦闘を見る限り大して連射速度があるようには思えない。

恐らく、空間圧縮に多少の時間がかかるためだろう。

一夏は意を決したかのように雪片式型を両手で握りしめ、肩に担ぐ様にして構えると踏ん張る様に身を縮めて一気に加速する。

尋常ではないその速度は間違いなく瞬時加速…それも瞬時加速中に再度瞬時加速を行う離れ業だ。

よもや素人の筈である一夏がそんな離れ業を使うとは思わず一瞬動きを止めた鈴は、両手に二振りの青龍刀を呼び出して構える。

『ほう…物にしていたか』

「なんだかんだでちーちゃんお姉ちゃんやってんだよなー」

『茶化すな！』

『でも、上手く近接戦に持ち込むことができましたね！』

そう、実際不意を突くと言う一点において、一夏は上手く立ち回ることができた。

問題は、甲龍の得手が近接戦闘にあると言う点だ。

見たところ、甲龍は安定制を主眼に置いたコンセプトで作られているようで、速度を犠牲に装甲を厚くしている。

並大抵の斬撃では、エネルギーを消耗することなく受け止めることができる。

そう、ただの斬撃では。

一夏は勝利を確信し、鈴は自身の腕を信じて疑わず切り結び続ける。

一合、二合、三合…切り結ぶたびに剣戟は加速し、金属同士のぶつかり合いは甲高い音を幾度も上げ続け轟音と化す。

やがて、鈴は違和感に気付き驚きに目を丸くする。

甲龍のシールドを兼ねているアンロック・ユニットの装甲が、浅くではあるものの斬り裂かれているのだ。

確かに、鈴は努力をして才能を開花させてきた。

しかし…しかしだ…いくら鈍感で少々間抜けだとは言え、一夏がなんの努力もしていない訳ではない。

必死に鍛錬を積み、そして付け焼刃ながらも代表候補生に師事してもらってきたのだ。

俺は2人の弟子の成長に素直に笑みを浮かべる。

『互いに決め手に欠けているか…』

「出し惜しみって訳でもないだろうしな…油断したところをブスリ、

かね?」

『お2人とも楽しそ…っ、所属不明のIS反応接近!!』

和やかに3人で試合の内容を見守っていると、突然真耶が声を張り上げて警報装置を作動させる。

すぐさま緊急アラームが作動するものの、ほんの10秒も満たずにアラームが鳴り止む。

慌てて、エネルギー供給用のケーブルを切断して機体を搬入口まで移動させた瞬間、地震に似た衝撃がこの地下格納庫にまで響き渡る。

ハイパーセンサー越しの映像も気付けばシャットアウトされ、外の様子を窺い知る術はない。

「千冬、真耶…聞こえるか!?!」

管制室との通信は繋がらず、また搬入口のハッチも反応を示さずに沈黙したままだ。

…アリーナ全体の機能が乗っ取られているって事か?

アリーナ全体には強力なシールドエネルギーが展開されているので、そうそう侵入されることは無いと思いたいが、システムを掌握されている以上シールドエネルギーが解除されている算段が高い。

と、なると四の五の言ってられないわけだ。

「給料天引きとかカンベンしろよ…!?!」

ラファールの両肩アンロックユニットに仕込ませたパイルバンカー『灰の鱗』<sup>グレー・スケール</sup>を同時に構えてハッチに叩き込み、炸薬を炸裂させることでハッチを一気に弾き飛ばして加速する。

ハッチからピットまでは邪魔が入らなかつたものの、ピットに入り込んだ瞬間ゆっくりとアリーナへの出入り口が分厚い鋼鉄のシャッターによって閉じられそうになる。

スライディングの要領で機体と床を水平にして滑り込む様にシャッターの隙間を通り抜けてアリーナへと躍り出る。

「アモン兄!?!」

「シショー!!」

「つたく!なんだ此奴ら!?!」

アリーナにはゴリラの様に前腕が大きくISの1.5倍程の体躯

の黒鉄の人型が3体、一夏と鈴を取り囲むようにして降り立っている。

いずれも腕を一夏と鈴に向けつつ微動だにせず立ち続け、一種異様な光景が広がっている。

観客達は突然の襲撃にパニックを起こして非常通路へと殺到しているが、混乱が混乱を招いているせいで思うように避難ができないままにいる。

下手すると防火シャッターが降りている可能性も考えられるな。

「こいつら、アリーナのシールドぶち破って来たんだ!」

「こつちに銃口向けてるけど、まるで動かないのよね…薄気味悪…」

「動かねえなら、動かねえで好都合だ…シールドエネルギーぶち破るって事は、流れ弾で死人が出るかもしれないねえからな」

迂闊に動けず、しかしこのままでは埒が明かない…観客席をハイパーセンサー越しに見つめると、千冬を含めた教師陣は避難誘導にあたっているようだ。

僅かな駆動音を響かせて3体がゆつくりとした動作で動き始める。

俺は拡張領域からいつの日か使った推進器付きの片刃大剣を呼び出し、ゆつくりと肩に担ぐと、地上に立っていた俺は飛び上がる事はずせにホバー移動の要領で手近な敵機へと瞬時加速を行い、すれ違いざまに推進器を全開にした片刃大剣で膝関節部分目掛けて横薙ぎにする。

速度の乗った一撃は鋼鉄を紙の様に容易く切断することに成功するが、倒れることは無い。

今の感触、そして切断面から見てただの機械人形の様だが…。

「何やってるのよ、シシヨー!人が乗ってるのかもしれないのよ!」

「あんな巨人が居て堪るか!ノルマー1人1体、空飛ぶの禁止な!」

「こんな時に鬼かよ!」

片刃大剣についたオイルを振り払い、素早くスライドして背後からの光の奔流を避ける。

集束させた高密度のレーザーを、背後に居た人型が俺目掛けて放ってきたのだ。

危なげなく避けた俺は、背後に居た人型2体を一夏と鈴に任せて、足を切り飛ばした一体目掛けて突進する。

機械人形たちの方が上背の為、極力地上に居る様にすれば流れ弾が観客席に向かって飛ぶことは無いはずだ。

どうも、標的は俺と一夏らしいからな…頭が良ければ同士討ちするようなこともしない筈だ。

「シシヨー…これ完膚なきまで破壊しても平気なの!？」

「両腕両足切り飛ばすだけにしとけ!腹の中に人間居たんじゃ困るからな!」

鈴は機械人形と切り結びながら、何処か気楽そうに声をかけてくる。

まるで一夏の方がよっぽど手強いとでも言いたげだ。

一夏は、動きを見極めるためなのか近接戦闘において受け流しを多用して出方を慎重にうかがっている。

「あらよつとー!」

俺は手早くこちらに向けられた左腕をバターの様に切り飛ばし、返す刃で残されている足を切り飛ばしてから首を叩き落とす。

千冬と比べるなって所だが、動きが悪い…本当は中身がない可能性があるな。

右腕を残してばらばらになった機械人形は一旦距離を開ける為に空へと舞い上がる。

頭は飾りで、体中にレンズの様なものが仕込まれているようだ…まるでゾンビか何かだ。

追撃を入れようと足に力を入れた瞬間、アリーナに起こるはずのない事態が起こる。

『一夏あつ!男なら…男ならその程度の敵を倒さないでなんとするつ!!!』

『篠ノ之、貴様何を?!?』

アリーナに設置されたスピーカーと言うスピーカーから、箒の叱咤にも似た激励が飛び出したのだ。

一夏と鈴は思わず動きを止めてしまい、機械人形の拳をまともに受



けてしまい弾き飛ばされ、スピーカーからは絶えず箒と、諫める千冬の声が響き続け：一斉に俺の背後にある管制室に機械人形の銃口が向けられる。

思考を全て置き去りにし、全てが遅延する世界で俺は管制室に対して楯になる様に無防備なまま躍り出る。

無理な挙動をした結果かスラストから煙が噴き出す。

しかし構わずにアンロックユニットのシールドを2枚構えたところで、俺の視界は光に飲まれた。

## #27 黒鬼と悪魔

——ただ、ただ私は励ましたかったただけだった…後も先も考えられないくらいアイツが好きだったから。

まず、目を灼かれた。

とてつもない光の奔流は容易く俺の視界を白く染め上げてハイパーセンサーが強制的にシャットダウンするものの、直接見てしまっていた俺の目は視神経が焼き付いてしまっている。

続いて、全身を覆うじんわりとした熱…もはや熱いなどと言う言葉は生温く、俺の体はマグマの中に居るのではと錯覚してしまう。

身に着けていたラファールは装甲が融解し、脱落。

辛うじてISだったかな？くらいの原型しか保っていない。

そして、背中に衝撃が走りバウンドするように転がっていく。

体を穴だらけにされたり、ばらばらにされたりと色々やられたことはあったが、この世界でここまで痛めつけられるとは思ってはいなかった。

人の肉がこんがりと焼けた匂いが鼻につき、嫌悪感を催す…と言っても今現在の俺の体臭なので文句も言えないが…。

「か…あ…い…」

掠れた様な声しか出ないのは喉を焼かれた所為だろう…声を出そうとするたびにやはり激痛が走る。

無様…無様としか言いようがない。

先ほどの戦闘は、気楽に考えすぎていた…一夏や鈴に口酸っぱく慢心するなど言っていたにも拘らず、ちよつとしたアクシデントが起きてもこの様だ…。

生き死に関係なく胴体をナマス切りにしておけば、こんな事にはならなかっただろう。

「あゝ あああああっ!!!」

ビクン、と体が跳ねるような衝撃が走ると視界に光が走り、耳に音が流れ込んでくる。

無駄に高い再生能力が、俺の肉体を急激に再生させていくのが分かる。

死んだ細胞の下から新しい細胞が生まれ、切れてしまった神経は再び繋がっていく。

その1つ1つが手に取る様に分かり、産声にも似た激痛を俺に教えてくる。

痛い、痛い、痛い…言葉で言うのは簡単だが…ちよつと体揺らすの止めろってんだ…!!

「あ、アモン!!アモン!!!」

「ゆら…すな…い、てえ…」

「な…な…」

千冬は俺の体に縋りつく様に必死に揺らし、箒は箒で俺の体が再生していく様子を見たのか言葉を失っている。

服や頬が煤けてはいるものの、一先ずは無事なようだ…。

管制室の外から、甲高い金属音と爆発音が響き渡る。

随分と、暴れまわってるらしい…。

一度大きく噎せると血の塊を吐き出し、先ほどからあった胸の違和感と吐き気がすーっと消えていく。

「ち、ふゆ…そここの、バカ連れて…離れてろ…」

「だ、だが…っ」

「…あ、っ…やつと、動けるか…」

俺は何事もなかったように体を起こし、コキコキと首の骨を鳴らす。

すっかり肉の焼けた様な匂いは無くなり、全身に倦怠感がある程度で激痛も走らない。

着ていたISスーツは…まあ、奇跡的と言うかご都合主義的に下半身だけは無事なままだ。

「いいから、お荷物居たんじゃお前もまともに動けるわけねえだろ…？」

「っ…ば、化け物…」

箒は俺に対して恐れを抱いたのか、ゆつくりと後ずさりながら管制室の出口まで向かう。

箒の言葉に千冬は顔を顰めるものの、俺は手で千冬を制して箒を一瞥した後に管制室に空いた大穴へと向かう。

外から戦闘音とは別の音が響き渡ったからだ。

大穴から外を覗くと、意外にも一夏と鈴は冷静な表情で機械人形をナマス切りにしている…胴体を。

その情け容赦ない戦闘は、少しばかり育て方を間違ってしまったのかと疑ってしまいたくなる。

ただ、そんな情け容赦ない戦闘もそう長くは続かない。

新たに追加された5体が、一夏と鈴を包囲しているからだ。

互いに試合開始してから今まで戦い続けている為に、シールドエネルギーの残量も心許無いかもしれない。

「千冬、ここから近い格納庫はどこにある?」

「システムをハッキングされている所為で、ハッチが開けられん…格納庫から機体を持ち出すことは不可能だ」

搬入口のハッチは薄かったからパイルバンカーで事なきを得たが…やはり生身で分解するしか…等と思索すると、高速で何かが突っ込んでくるような音が響き渡ってくる。

俺は慌てて近くに居た千冬の腕を掴んで覆いかぶさり、飛来してくる謎の物体から千冬を庇う。

「なっ!?」

「厄日かドちくしょう!!」

「ひっ!!」

管制室に突っ込んできた謎の物体は、辛うじて管制『室』の体を保っていたものを粉々に粉碎し、天井に大穴が開く。

お、俺は悪くない、俺は悪くないはずだ…。

箒は頭を抱えてその場にしゃがみ込んでいたが、奇跡的に瓦礫が降り注ぐことなく無事なようだ。

俺は安全を確認して千冬から体を退かして、飛来した物体へと目を

向ける。

「…人参？」

「…人参だな」

「…っ…」

ポツリと感想を漏らすと、つられて千冬もポツリと呟く。

箒に至っては送り込んできた人間を察知したのか、頬をひくつかせて非常に曖昧な顔で沈黙している。

そうこうしているうちに、飛来物である巨大な人参のハッチが開いて無数のメカニカルな触手がノロノロとした動作で現れる。

…恐らく、この人参の物体を送り付けてきたのは束であろう…そして、考えられることは一つ…。

触手は『みいゝつけた』と言わんばかりに一斉に俺の方へと向き、俺が反応する前に四肢に絡みついて人参の中に引きずり込む。

神速と言っても過言ではないだろう…いくら俺が疲弊したからと言って反応できない訳がない。

油断していたつもりもないしな…。

人参の中に引きずり込まれるとハッチが閉じ、頭にとてつもない衝撃が走ったかのように情報が流れ込んでくる。

「ぐっ…クソ、ウサギ…あれ、テメエの仕業か…!？」

『そんな訳ないじゃん…あつくん、ぱぱつとフィッティング済ませるから1体捕獲してくんない？用事が済んだらそっち向かうからさ』

束は呆れた様な声で俺に返事をする、触手が全身を撫で回すように俺の体を這っていく。

俺の頭に流れ込んで来るのはISの情報だ。

単純な本体スペックだけを見れば、第三世代型とそう大差ない様に見える。

触手は俺の体を這い終えると自ら分解されていき、俺の体に装着されていく。

一般的なISと異なるそれは全身装甲フル・スキンと呼ばれるタイプの物で、生身が露出していない。

艶やかな黒地の装甲に蔦の様な金のエンブレビングが走り、どこ

か彫像めいた印象を覚える。

頭部には全体を覆うフルヘルム型で、額に装甲と同じ一本角が伸びている。

銘を黒鬼<sup>コッキ</sup>：日本人でもないのに和名のISに乗るってのは、何処か変な感じがするな。

一瞬の浮遊感と共に光が俺を包むと、アリーナの中央に居ることに気付く。

「新手!？」

「今度はISみたいだ…けど!」

一夏と鈴は3体まで減らした機械人形を前に、俺に目を向ける。

何もない空間からいきなり現れれば、警戒して当然と言ったところか。

ハイパーセンサーに映る視界にファースト・シフト完了と言う表記が現れ、背中に4基のアンロックユニット型ウイングスラスタが開され設置される。

何れも祈りを奉げる女性の姿をしており、機体の雰囲気もあって不気味さが際立っている。

「おう、お前ら下がってる…おじさんの出番ってやつだ」

「な…ぶ、無事だったのかよ!？」

「シショールが簡単にやられるようなタマじゃないって分かってるでしよー!」

一夏と鈴は俺から声が聞こえると、途端に笑顔を浮かべて武器を握る手の力を強める。

俺がそう簡単にくたばる様なタマかってんだ…なんせ、この身は人に非ずだからな。

2人は素直に俺の言葉を聞いて、管制室の前まで後退する。

3体いる機械人形は、何れも俺を標的と定めたのか両腕を高く掲げて俺に差し向ける。

俺は躊躇することなく、ワンオフ・アビリティを起動させる。

ほんの、一瞬の出来事だ。

計6門にも及ぶ集束型レーザーカノンは確かに俺を捉える…筈

だった。

俺は3体居る内の中央の1体の背後に姿を現し、ウイングスラスター2基の機能を開放する。

1基はまるで着物を着崩した花魁のように炎を纏い、1基は氷の華をあしらったドレスを身に纏った姿へと変形する。

スレイヴ・ユニット：ブルー・ティアーズに搭載されているビット兵器の発展型の兵器。

ビット兵器と異なる点は、何れも人型で人間とほぼ同じ挙動で操作できる点にある。

「行け…」

3体の機械人形が反応する前に、右手にいた機械人形は炎を纏ったスレイヴ・ユニット『華焰』が背筋が凍るほどの艶やかな笑みを浮かべて灼熱の抱擁を行い、ドロドロに融かし尽す。

左手に居た機体は華焰の動きに反応して腕を差し向けるが、行動を起こすことができたのはそこまでだった。

氷を身に纏ったスレイヴ・ユニット『氷華』が華焰同様に抱擁を行い、全身を凍結させた後にそのまま粉々になるまで締め上げたからだ。

…火力と言う一点において、とんでもなく使いにくいもん寄越したな…あのウサギ…。

ボンヤリとそんな事を考えながら軽く右腕を振るうと五指からワイヤーブレードが飛び出し、俺の背後に居る1体の五体を悉くを切り飛ばし、胴体に絡みついて拘束する。

恐らく、過去にドイツで暴れまわったときに使った糸を参考に束が用意したのだろう…この一点に置いて正直、感謝したい。

倒れ込んだ機械人形をアリーナの床にめり込むまで思い切り踏み潰し、俺は漸く一息ついた。

ワンオフ・アビリティ『シンインキゲン神隠鬼現』

単純に言ってしまうと、ワープ能力だ。

厳密に言っていると操縦者ごと機体を量子空間に格納、半径500メートル

ル以内であれば指定した地点に再び出現させると言う物だ。

この能力の恐ろしい点でいえば、非常にローコスト且つ対象を選ばないと言う点にある。

対象を選ばないと言うのは比喻でも何でもなく、指定した1つの物体を運動エネルギーそのままに量子跳躍させるのだ。

流石にアサルトライフルの様な連続して弾を吐き出すものに関しては効果が薄いものの、単発式の弾丸やミサイル等と言ったものであれば、そのまま撃った本人にお返しすることも夢ではない。

ただし、制約として連続での使用ができない、自分以外の生物は量子跳躍させることができないというものがある。

具体的には1分間のリキャストタイムを要求され、その間はどんなに短い距離であっても跳躍することは出来ない。

結果として跳躍地点から半径500メートルの範囲を飽和攻撃された場合は回避できないし、人を逃がすことには使えないということになる。

あくまでも攻撃するためのワンオフ・アビリティと言う事だろう。さて…。

俺は、IS学園の地下にある広大なエリアの一画である整備エリアの一室の脇で、大量の書類にサインを書き続けると言う苦行を行っている。

具体的には、今回俺に束からセクハラを受けつつ渡された専用機『黒鬼』の委員会登録用の書類から兵装管理に関する要綱に至るまで、事細かに書く必要が出てしまったのである。

しかも今夜中に。

「莫迦なんじゃねーの、マジで」

「ちよつと扱ってる物が物ですから…それよりも、よく無事でしたね？」

「ラファールが優秀だったんでね…エネルギーに余裕がなきや、今頃お陀仏だったろうよ」

真耶は解体分析を進めていた鹵獲機から離れ、此方へと歩み寄ってくる。



事後処理を終えた後の肉体労働は、女性の身ではかなり堪えるだろうよ…。

今回の襲撃事件、第一、第二アリーナを含めての大規模な襲撃事件だったらしく、怪我人こそ奇跡的に出なかったが、事件自体に緘口令が敷かれる事になった。

学園の立地上本土から遠く離れていて、人の出入りも少なかったお陰でちよつとしたボヤが起きたことになっている。

もつともIS委員会には報告済みであり、日本政府も事件の概要は把握している。

ある一点を覗いて…。

「それより、そっちはどうだった？」

「…機能的にはISとそう大差がありませんね。機関部に関しては自壊装置がセットされていたのか、跡形もなくなっていましたけど」

「自立行動可能な無人機…ねえ？」

今のこの世に於いて、ISに迫る火力を持つ無人機と言う存在は非常に危険な存在だ。

現状469個しかないISCコアは、その全てが軍事に使われているわけではなく、万が一この数を超える無人機を用意してしまった場合、面倒な事になりうる。

例えば…虐げられてきた男性達によるテロ、とか…。

今回、IS委員会や日本政府に報告していない事柄として、鹵獲した機体については伏せられている。

これは理事長からの指示であり、そして東からのお願いでもある。用事が終わったら来るって話だったけど…。

俺は真耶に気付かれない様に小さくため息を吐く。

「篠ノ之博士…本当に来るんでしょうか？」

「あいつが来るって言ったら来るだろうさ。箒は？」

「今は懲罰房で大人しくしています。酷く憔悴しきってましたが…」

「チフユノオニノセツキヨウノセイジヤナイカナ」

「…と、言うことになっておきましょう。私はそろそろ失礼しますね？」

箒は懲罰室と化した寮長室で、非常に厳しい愛情を千冬から与えら

れた後、今日を含めた3日間懲罰房で過ごすことになっている。

原因は言わずもがな、非常事態下における自己中心的な行動をした為：と、俺の体質に関しての口止めを兼ねている。

死体にしか思えない物体が逆再生の様にケガが治る様子を見れば、誰だって化け物の様にしか思えないだろう。

事実、化け物ではあるが。

「休校になった：つつても先生は仕事塗れだからな：どっかでリフレッシュしておけよ？」

「肝に銘じておきますけど：それはミユラー先生もですからね？」  
「へいへい」

立ち去る真耶をひらひらと手を振りながら見送り、その姿が地下施設の闇に溶け込んだのを見計らって、横目で整備室の隅を見る。

真耶は疲労からなのか、それとも素なのか：部屋の隅に居た存在に気付けなかったようだ。

「なーに不貞腐れてんだよ：？」

「べつつにー？アモンは、あんなボインがいいなんて、思っていないし：？」

「うわ、めんどくせえ：おっぱい魔王が言うセリフじゃねえよ」

部屋の隅に居た人物：篠ノ之 束は、唇を尖らせながらジト目で此方を睨みつけている。

2時間近く放置する形になったので、それでいじけているだけなのだろう。

束は自慢の胸を態と揺らすように大股で此方に歩いてくると、俺が書類にサインをするために使っていた机に腰掛けて見下ろしてくる。

「で、どうだったかな：現行最強のISのお味は」

「扱いづらいんでリミッターかけとけ」

「辛辣うー！」

俺は左手の薬指に嵌められた黒曜石を思わせる指輪を眺めながら、束に手を伸ばす。

束は何処か嬉しそうに俺の手を取って、優しく握りしめてくる。

「まあ、調整が必要なのは否定しないよ：急場しのぎで用意したもの

だしね」

「十分動くから火力だけどうにかしとけて、マジで」

「お客様の要望にはアモン限定で何でも聞いちゃうよん！」

うへへーとヤらしい笑い声を上げながら、他は俺の手を自身の頬まで持ってきて頬ずりをする。

ひんやりと、しかし滑々とした肌は心地よく、不摂生の塊のような女とは思えない肌触りだ。

相変わらず、徹夜でもしているのか目の下は隈ができていて、若干トロンとした目になっている。

「ところで…あの話——」

「二股でいいならな」

「ふえ…？」

「二股でいいなら、お前を喰う」

束が口説こうと口を開こうとした瞬間に先手を打ち、ニヤリと笑みを浮かべる。

よもやOKを出すとは思ってもいなかっただらしく、束にしては珍しく表情も動きも彫像の様に硬直している。

「もうな、ここに居られる期限だとかそういうのは度外視する。俺は、お前も千冬も欲しい。だから、両方食い散らかす。もちろん、お前が嫌だつて言うならこの話は無しだけどな」

「…マジ？」

「クソみてえな男だろう？俺はな…」

俺の手を掴んでいた束の手を引き寄せて、手の甲にそつとキスをする。

「悪魔が欲の皮被って、人間の真似してるだけなのさ」

束はゾクリ、と身を震わせて満面の笑みを浮かべると、青白かった頬を紅潮させて机の上から俺の膝の上に飛び降りて万力じみた怪力で俺の体を締め上げてくる。

「フッフー！もちろんだよ、アモン。私は君の物だ…ああ、ゾクゾクするね！」

「…マゾヒストかよ」

「否定はしないよ！なんせ、ちーちゃんに殴られる妄想だけでご飯は3杯行けるからね！」

「…いくら私でもそれは退くな、束」

カツカツ、と言う足音を響かせながら千冬が此方へと歩み寄ってくる。

その顔は疲労一色で束同様に顔色が良いとは言えない。

「アレは、お前の作品ではないのか？」

「あんなブサイクと一緒にしないでよね！第一、無人機なんてナンセンス極まりないしね！」

束は千冬の間いかけに答えて、俺に向けていた笑みとは別のどこか邪な笑みを浮かべる。

「あんなブサイクで私のISと対抗しようなんて、随分と思いがつた連中じゃないか」

「超高高度からの一斉投入…手間暇を考えれば余程の金持ちが絡んでいると見える」

「虐げられてきた男たちの為にやりましたってんなら、理由が簡単で良いんだが…」

束は心底どうでも良いのか売ってきた相手がどんな相手なのか想いを馳せ、俺と千冬はこれから一夏や俺自身の身の振り方に若干の面倒を感じてため息を吐き出す。

千冬としても今日の事は取り合えず終わりにしたいのか、頭を横に振って意識を切り替える。

「ところでだ…アモン、貴様本気で二股を公言するつもりか？」

「俺は束もお前も欲しいいつつたろ？」

「むう…なら…せめて抱きしめろ…私は抱きしめて貰ってすらいないんだが…？」

千冬は恥じらうように顔を伏せ、頬を赤らめながらボソボソとつぶやく様に言う。

そこに世界最強と言う肩書や鉄の女などと言う渾名を与えられた女の姿は無く、まるで恋する少女の様な印象を受ける。

「え…同棲してんだから、今は束さん優先じゃダメ？」

「お、お前はキスもしているだろう!？」

「…遅い青春か何かか?」

俺は束の締め上げてくる腕をやんわりと外して膝の上から退かせば椅子から立ち上がり、千冬の方へと歩み寄る。

背後で束がぶつくさと言文句を言っているが、この後肉襦袢の様にべったりとくっついてくる未来しか見えないので無視することにする。

「抱きしめろってお前に言われるたあな…」

「わ、悪いか!？」

「悪かねえよ…可愛いもんだと思うけどな」

「っ…」

千冬は若干涙目で怒鳴り声をあげ、羞恥心を隠そうと躍起になっている。

今まで誰にも甘える事が出来ず、甘えようとした事もないから甘え方がよく分かっていないのだろう。

俺は口元に笑みを浮かべながら千冬の体を優しく抱きしめ、背中を撫でていく。

最初こそ、千冬は体を強張らせていたものの段々とリラックスしてきたのか体の緊張が解れ、胸元にしがみつく様に手を寄せてくる。

「…存外に、良い」

「そいつはよかつ…!？」

「アモン、ちーちゃん!部屋行って蛇みたいなくんずほぐれつと行こうぜえ!」

束は千冬がリラックスしたのを見計らったのか、俺の背後にしがみつく様に飛びついて下品な笑い声をあげる。

俺は若干呆れた様な顔になり、千冬はムツと不満顔で俺の背後から顔を覗かせている束の事を睨み付ける。

「お前は帰れ、目的は済んだだろう?」

「帰るって…束さん、今日からここに住むんだけど?」

「はあ…?」

千冬は追い払うように手を振ると、束は何を言っているんだと言わ

んばかりに首を傾げる。

束の突飛な行動と言うのにはある程度慣れていた気がするが、よもやIS学園を根城にするとは…。

部屋に行こうとせつつ束を無視して、俺と千冬は盛大なため息を1つ吐くのだった。

「私は…なんにも、悪くなんか、ない…!」

IS学園の懲罰房…その簡素なベッドの上で、篠ノ之 箒は膝を抱えて丸まっていた。

ただ、一夏を激励したかった。

私が声をかければ何時も以上に力を出してくれると思った。

けど、けれど…どうして私はこんなところで反省をさせられている…?

そんな出口のない思考に振り回され、箒は己の所業を省みる事が出来ないままだった。

不意に懲罰房の扉が開き、1人の女性が入ってくる。

「篠ノ之、いつまでそうしているつもりだ?」

「ちふゆ、さん…」

箒は赤く泣き腫らした目で懲罰房に入ってきた女性…織斑 千冬を見上げる。

研ぎ澄まされた日本刀の様に鋭いその視線は、未だに自身を責め立てているような気がして委縮してしまう。

「篠ノ之…お前は真っ直ぐだ…だが、あまりにも真っ直ぐすぎて大事なことを見落としてしまっていないか?」

「大事な、こと…ですか?」

千冬は小さく頷くと、箒と目線を合わせるためにしやがみ込み、真っ直ぐに見つめる。

その視線はさつきと打って変わって優しさに満ち溢れている。

「お前が一夏の事を好いていると言うことは知っている…だが、一方的な好意は他者を傷つけかねない」

「そんな…そんなことない！私は一夏が好きで一夏も私の事が好きで…！」

「それは異性としてか…？それとも友人としてか…？嵐に関する顛末は本人とアモンから聞かされている。それを知っていてなお…異性として見ていると思うのか？」

「っ…」

箒は千冬の言葉に反論することができずに言葉に詰まり、何も言い返すことができない。

あの優しい笑顔は…私だけに向けているものではないのだと…本当の意味で気付かされてしまったから。

「あー、なんだ…恋は盲目と言うが…私も最近それを思い知らされてな」

「…あの人は何者なんですか？」

「…ただの大道芸人さ。優しい、ただの…な」

千冬に恋心を抱かせた『化け物』。

死体から蘇った『化け物』。

そして、姉と言う存在が箒よりも好いている『化け物』。

箒はあの再生を目の当たりにして人間として見る事ができず、ただた異物の様に感じてしまっている。

何より、自身に会いに来ず姉がうつつを抜かしている存在と言うことが気に食わないと言うことに本人はまだ気づいていない。

「箒、真っ直ぐストレートに進めるのは美德だ。だが、時には立ち止まって周りを見ると言うことも大事だと言うことを肝に銘じておけ」

「…はい」

「ああ、それと…アモンに関しては他言無用だ。本人もひた隠しにしている」

「…はい」

その返事は、懲罰房にむなしく消えていくような小さな声だった。

## #28 悪魔と乙女と帰る場所

束を背中にしがみつかせたまま無言で寮へと戻ってきた俺と千冬は、既に消灯時間になっていたことにホッと胸を撫で下ろした。

何といつてもVIP中のVIPである篠ノ之 束が、寮を訪問したとなれば上へ下への大騒ぎになるのは目に見えている。

しかも事件直後：そんな事になれば、教師陣の睡眠時間がゼロになることは必定だ。

俺は何も問題が無いとはいえ、同僚にそんな目に合って欲しくないからなあ…。

束に黙ってないと殺すと脅しを入れて抜き足差し足で千冬と共に入る寮は、消灯時間と言うこともあつて静まり返っていて何処か物寂しい。

「…何処までついてくる気だ？」

「えー、そりやもちろん愛の巣まで！」

「もうちょい声抑えろ…」

眉間を揉みながら、背中にしがみつく束をずるずると引きずり続ける。

地下施設から一向に離れる気配の無いところを見ると、寮長室までやって来ることは充分に考えられた。

…此処に住むとなるとクールの扱いをどうするのだろうか？

いや、答えはもう見えている…ある意味ドイツの機密存在であるあの小娘を、この場所に置くのは非常に不味い気がする。

遺伝子を弄繰り回されて体を弄ばれて…クールの存在が世間に露見した場合、どうなるか分かったものではない。

まあ、一度助けたものを見捨てるほど情が無い訳でもないので、暴れるのも吝かではないんだが…千冬には正直に話しておいた方が良さだろう。

どうにも面倒事が重なり始めている気がするならないな。

「んっふふ…アモンは良い匂いがするなあ…」

「否定はしないが…」



「臭いって言われるよかマシだけど、嗅ぐんじやねえよ…」

束は俺のうなじに顔を埋めて、深呼吸をするように匂いを嗅ぎ続ける。

暴れられるよりは良いのだが、匂いを嗅がれる度にもむず痒い。

しかも、束がそう言った変態的行動を取る度にぐいぐいと千冬が俺に体を寄せてくる。

…こう言う所、本当に可愛いんだがなあ…普段が普段なんだよなあ…。

「なんだ、言いたいことがあるなら言ったらどうなんだ!」

「千冬、声、声。徹夜は嫌だろ…?」

「むう…」

千冬の唇に人差し指を押し当てて黙らせると、顔を真っ赤にして途端に静かになる。

廊下に響くのは、俺と千冬の足音と束の呼吸音くらいになる。

俺が僅かに腕を広げると、千冬はすかさず自分の腕を組ませて指を絡ませる様に手を繋いでくる。

素知らぬ顔で腕を組んできているが、グイグイと自分の胸を押し付ける様になっている辺り、束にリードを許すまいと言う意思が感じられる。

箒や一夏が今の俺の惨状を見たらどう思うのやら…。

何事もなく、熾烈な女の戦いに挟まれながらも寮長室に辿り着けば、思わず俺は固まる。

何というか…こう…空気が違うのだ。

「あれれ、どうしたのかなあ…?」

「…お前な、なんかやっつたろ…?」

「何をした、束?」

千冬も同様に寮長室の変化に気付いたのか、千冬も胡乱な目で俺の背中から依然として離れない束を見つめている。

束は不敵に笑いながらも沈黙し、俺に鍵を開ける様に促し始める。

「いいから、いいから…早く入ろうぜえ」

「…処す？」

「…内容によりけりだ。鍵はアモンが持っているのだろうか？」

千冬は諦めろ、と首を横に振ってため息を吐く。

この辺の諦めの速さは付き合いの長さ故なんだろう…仕方なく懐から鍵を取り出して差し込んで開ければ、目の前に予想通りの人物が慎ましやかに立っていた。

「おかえりなさいませ」

「……」

「たっだいまー！クーちゃん！」

黒いゴシック調のエプロンドレスに身を包んだクーは、恭しく俺たちに頭を垂れて出迎えてくれる。

まるで、今まで帰って来るのをそこで待ち続けていたかのようだ。

束は元気よく俺の背中からクーに声をかけると、漸く背中から離れてツカツカと寮長室へと入っていく。

「…思った事言っていないか？」

「言うな…大体わかる…」

「何か…粗相を働いてしまいましたか？」

俺と千冬は殆ど同じタイミングで片手で両目を覆い、起きもしていない頭痛に耐える。

そんな様子を見たクーは、おろおろとした様子で俺たち…取り分け、俺に対して恐れる様に声をかけてくる。

「いや、気にすんな…お前は悪くねえ…悪くねえんだ…」

「そうだな…お前の保護者がな…」

「は、はあ…一先ず、お入りください」

クーに促されるままに俺と千冬は、『元』寮長室へと足を踏み入れていく。

寮長室に踏み入れた俺は、強い眩暈を覚える。

体調を崩したとかそういう事ではなく、原型を留めることなく変貌してしまった寮長室を見てしまったからだ。

まず、部屋の間取りが拡大していた…兼用だったはずのリビングと寝室は完全に分けられ、革張りの高そうなソファーに、踝まで埋まり

そんなカーペットが敷き詰められている。

リビングに設えられたゴシック調のキャビネットには千冬の好きな銘柄の酒が並べられている。

ソファアの前に置いてあるテーブルは大理石製の物が置いてある。いつからここは高級ホテルのスイートルームになったのだろうか？

「まてまてまて…どうしてこうなった、つか間取りがおかしい！テメエどうやって拡張しやがった!？」

「そりやもう、量子空間に片足突っ込んでるからねえ。便利でしょ？？」

「戻せ、束…頼むから…」

束は聞く耳持たぬと言わんばかりにソファアにだらしなく座り、テーブルに置いてある籠の中に入っているクッキーに手を伸ばしていく。

深いため息とともに千冬に手で風呂に入る様に促し、俺は束の座っているソファアとは対面に腰掛ける。

「なんと説明すれば良いんだ…」

「もうなるようにしかならねえよ…風呂入ってこいってば」

「いや、この娘の事に関して聞かなければならないこともあるからな」千冬は自分の背後に控えているクーを指で指し示し、俺の隣に座って身を寄せる。

「どうも、厄介事であるならば一気に腹に抱えてしまおうと言う魂胆が見えるな。」

クーは束の隣にちよこんと座り、静かに黒く染まる金の瞳をこちらに見せてくる。

その瞳は闇に浮かぶ月の様に、どこか儚げで幻想的にさえ見える。

「遺伝子強化試験体…」

「そ、クーちゃんは最後の生き残りだよ。アモンと束さんで施設をポッコボコにしてやったからね。あ、ドイツ軍の隊長さんもだっけ？？」

「…そうだな」

千冬は自分の手を組んで強く握り、軽く息を吐き出す。

この分だと、ドイツ軍が過去に何をしていたのかはある程度独自に調べていたようだな…手助けしたのはボーデヴィツヒのおっさんか。どこまで知っているのか…だが…。

「束、アモンも巻き込んだな?」

「最初はスケープゴートにするつもりだったんだけどね…興味湧いたからこうして学園に居る訳だけど」

「やっぱり見捨てる気だったか…まあ、過ぎたことをとやかく言うつもりはねえけどな」

「さっすがアモン、話がわかるう〜!」

「後で泣かすけどな!」

大方、あの時は千冬や一夏と仲良くしている俺が気に食わなかったとかそんな理由で、秘密研究所を襲撃したテロリストとして差し出すつもりだったんだろう。

勿論、そうなくても逃げ切る自信はあるんで問題は無かったが…。自分が中心に世界が回っている…と言う考え方は、その内調教して改めさせて行けばいいだろう。

「ひどいもんだよ、その隊長さんと違って、クーちゃんは完全に玩具扱いだったからね〜」

「束、それは関係ねえ話だろ…蒸し返すな」

「いえ、私は大丈夫です」

「震えてるのにか?」

殴る蹴るの暴行だけならまだ良かっただろう、慰み者にされてしまうのも仕方が無かったかもしれない…けれども、玩具の様に、子供が蟻を踏み潰すように尊厳を叩き折る様な真似をクーは受けてきた。

クーは顔をやや青ざめさせて、僅かばかり顔を俯かせている。

束は今になってそんなクーの様子に気付いたのか、クーに抱き着いて子供をあやすように頭を優しく撫でていく。

「クーちゃん、メンゴメンゴ…ちよつと無遠慮だったねえ!」

「い、いえ…私は構いません…すべては救っていただいた束様とアモン様に恩返しができるば…」

「もう！ママとパパだって教えたでしょ？」

：この場合、パパってのは俺の事を指すんだろうな。

懐から煙草を取り出して口に咥えて火を点けると、横からどこか恨みがましい視線が俺に注がれてくる。

そんな目をされても、俺は何も答えられません。

「あ、そういえばクーちゃんは自己紹介してなかったねえ！ほら、アモンとちーちゃんにしてあげて？」

「はい、束様」

「何処までもマイペースだな、おい…」

すっかり、俺と千冬は束のペースに飲まれてしまい、会話の流れを掴めなくなってしまうている。

クーはゆつくりと立ち上がり、スカートの裾を掴まんで深々とお辞儀をする。

「クロエ・クロニクルと申します。以後、お見知りおきを…アモン様、織斑様」

「渾名だったのか…」

「束…その名は…」

「へっへっ、良いでしょう？私たちは忘れちゃいけない名前だし…」

クー…もといクロエは俺と千冬の反応に首を傾げ、何処か不思議そうにしている。

俺としても、千冬の少し驚いたような顔は何処か新鮮で、そして何かが引っかかる。

少なくとも、世間一般に認知されている束の交友関係に、千冬以外の名前と言うのは知られていない。

もちろんプライベートの話なので、世間に認知されていない交友関係も勿論あるだろう。

千冬は少しだけ悲しそうに顔を伏せ、束は穏やかに笑みを浮かべるだけだ。

俺は1つだけ咳ばらいをして、リビングに広がる沈黙の空気を振り払う。

「ともあれだ、ボロボロだったクロエを助け出し、少しばかり不安だっ

だが東に預けてたわけだ」

「…どうして、助けた？」

「ハッ、俺に理由を求めんなよ。やりたい事をやるのが俺なんだからな」

千冬の静かな問いに、俺は軽く肩を竦めた後にソファァーにふんぞり返る様に座りなおす。

欲求にただただ忠実であれ…自己満足であろうと利己的であろうとだ。

その果てに何が待っていても。

「アモン…なんでもかんでもと抱えられる訳ではないだろう？」

「さて、な…できる事とできない事くらいは分かっているつもりだけだな」

「アモンにできないことは無いよ…だって東さんがいるからね！」

東はドヤ顔で大きく胸を張り、鼻息を荒くする。

出来ないことは何もない…そう、信じて疑っていない顔だな。

実際のところ、東にもできないことがあるだろうに…。

「ところで、だ…クロエの扱いはどうすんだ？」

「6月にここに転入してくる奴らいるでしょ？そいつらと一緒に学園所属にするよ」

「何を勝手な…それにその話はまだ…」

「束様、私は束様のお世話ができれば…」

6月…随分と中途半端なタイミングで、転入生を寄越してくるもんだな。

まあ、学園の難関試験を突破さえできれば、転入自体は何も問題が無い。

タイミングどうこうなんて言うのは、大して関係が無いのだ。

クロエの所属の話を進めようとすると、クロエは首を横に振って嫌そうにする。

「クーちゃん、そんなに嫌？」

「はい」

「これまた、きつぱり言うな…。目か？」

クロエは静かに頷き、瞼の上からそつと自分の目に触れる。

どうしたって人と違ってしてしまう部分…それも目に見えて分かってしまうそれは、クロエにとってもコンプレックスとなってしまうようなようだ。

クロエはちよこんとソファアに座った後、俯いたまま強くスカート  
の裾を掴む。

「…私はこの目をあまり見られたくありません。私自身、割り切れて  
いると言う訳では…」

「束、母親役をしていると言うのであれば、あまり無理強いをするな」  
千冬が束に対してピシヤリと言うと、束は唇を尖らせてそっぽを向  
いてしまう。

ただ、母親と言う言葉に反応したのか、渋々と言った感じだが静か  
に頷く。

「かと言って、この部屋に缶詰って訳にもいかねえだろ？束と同様に  
客人として丁重にもてなす形にしといた方が良いんじゃない？」

「分かっている…学園としろIS委員会にしろ、束の居場所が割れて  
いるのは色々都合が良い」

「…申し訳ありません」

「何がだ？」

いきなりクロエが深く頭を下げてきたので、俺と千冬は異口同音に  
同じ言葉を発して同時に首を傾げる。

それは見事なシンクロっぷりだったらしく、束は『ウププ…』と忍  
び笑いを漏らして笑いを堪えているが、千冬は勘に触ったのか懐に入  
れていたボールペンをナイフ投げの要領で束の額に投げ飛ばして黙  
らせる。

スコン、と小気味の良い音を立てて、ボールペンは束の額に直撃し  
て砕け散った。

…どんな力で投げりや砕けるんだよ…。

「クロエ…子供は大人に迷惑をかけても構わないんだ。その逆はあつ  
てはならないがな。だから、今は精一杯生きて、精一杯成長しろ…お  
前なりにな」

「お前には色々あるんだろうが、小難しい事は抜きにして生きてみな。俺のダチみてえに眉間に皺を寄せてたら可愛い顔が台無しだ」

「だから、お前はそうやって軽口を叩くな…」

千冬と一緒にクロエを諭してやると、本当に優しくコメカミを拳で小突かれる。

何時もであれば少しだけ本気の拳が飛んでくる筈なんだが…。

「千冬…お前、手加減できたのか？」

「お前は私を何だと思ってるんだ…」

「イチヤついてないで、束さんの事を心配してくれても良いんじゃないかな!？」

俺の言葉に、千冬は呆れたようにため息を吐く。

どう思ってるかと言われれば素直に言っただけやりたいところだが、今度は手加減なしで拳が飛んできそうなんで黙っておくことにする。

鋼鉄の女とかトビキリの美人とか。

そうこうしている内に、痛みに悶え苦しんでいた束は漸くこちらに向き直り、頬を膨らませて抗議の声を上げる。

そんな俺たちの様子を見て、クロエは口元を押さえてプルプルと震え始める。

「…っ…」

「クーちゃん…?どこか苦しいのかな!？」

「おいおい、大丈夫か?束、コアは馴染んでるんじゃないのか?」

「万が一なんてこの束さんが起こすわけないよ!」

「ち、ちがいま…フフツ…」

クロエは堪えていたものを抑えきれなくなったのか、小さく笑いだしてしまう。

俺と束は、顔を見合わせてホッと一息つく。

折角助けたものがいきなり亡くなるなんて、笑い話にもなりやしない…等と思っただけ胸を撫で下ろす。

「申し訳ありません。その、あまりにも仲が良かったので…」

「まあ、仲良くなきゃこれからやっていけねえからなあ…」

「そうそう、家族みたいなもんだしね!」



「籍入れてねっつ」

漸く落ち着いたのか、ひとしきり笑い終えたクロエは深々と頭を下げて謝罪してくる。

別に謝る様な事でもないんだがな…恩人って思ってるからこそ、あまり失礼な態度をとりたくないってところか。

クロエと束とで朗らかに笑っていると、今度は千冬から不機嫌そうな咳払いが飛んでくる。

「んんっ…お前たち、コアとはどういう事だ？」

「あー、まだ言ってなかったか…」

「そうだそうだ！クーちゃんの心臓がISコアだっていうのを教えるの忘れてたぜ！」

「おい」

束は自分で頭を小突きながら舌を出し、軽い感じで千冬に謝る。

いや、謝る様な事でもないんだがな…。

「いやいや、待て…それではなんだ？この娘は喋るISと言う事か？」  
「生体同期させなきゃね、この子は遠からず死んでたんだよ…。ちーちゃん、これは私でもどうしようもないこと。それだけ、酷いことをされてたってことさ」

「…この件に関しては他言無用だな。束、お前の方できっちり面倒を見ておけ。学園にもクロエの体の事は伏せておく」

「それが懸命だわな…クロエの身を案じるなら」

束の事だから、何かしら身を守る手段を持たせているだろう…だが、今までペットの様に飼われていた少女が、非常事態にすぐ対処できるとは思えない。

…学園内に俺を襲った奴等の仲間が居るのは、明白な訳だし。

「そだねえ…まあ、束さんの傍以上に危険で安全なところはないさー」  
「言うねえ…」

「そこにアモンとちーちゃんが加わることで、最強に見える」

「調子の良いことを…まあ、良い。一先ず明日理事長に話を通すから、アモンもついてこい」

千冬の言葉に俺は素直に頷く。

どのみち、専用機関連の書類の提出なんかもあるんで、同行するのは何も問題が無かった。

あとは…。

俺はジイツと束を見つめる。

「やだ…アモンが熱い視線で見てる…」

「脱ぐな脱ぐな…やらねえし、ガキの前でやるかってんだよ!」

「アモンは、大人しくしているかどうかと、箒と仲直りしろ…そう言いたいんだろう?」

「そう言うこった。学園に来たのはその辺も絡めてなんだろう?お前にしちや思い切りもよかったからな」

束がエプロンドレスを脱ごうとするのを止めると、千冬から補足するように説明が入る。

如何せん、何でもできる癖に好きな奴にはとことん不器用だ。

好意をもった相手には、ドストレートにしか想いを伝える事が出来ない。

その癖、本気で嫌われていると分かれると、途端に割れ物を触ることもせずに眺めるだけだ。

対人関係が壊滅的だと、こうも両極端になるもののだろうか…?

「まあ…いつまでも、このままって言うのは…良くないし?」

「…お前、何を吹き込んだんだ?」

「いや、口酸っぱく仲直りしろって言ったただけだったんだがな…」

束は、両手を組んでモジモジと体を揺すりながらたどたどしく本音を口にする。

これから起こることに対する不安なのか、それは歳不相応に少女らしかった。

俺はゆっくりと立ち上がって束の傍まで向かい、頭についているメカニカルなうさ耳を引っこ抜いて直接ワシワシと頭を撫でていく。

「まあ、フラれたら慰めてやるし、骨も拾ってやる」

「アモン…ありがと」

「…!?!」

束が俺に対して礼を口にするのと、今度はその反応に対して千冬は目

を丸くして驚く。

…お礼をまともにするなんてこと、自体殆ど無かつたんだろうなあ…。

引っこ抜いたうさ耳を束に手渡すと、俺は隣に座っていたクロエを抱きかかえる。

「俺先に寝るわ…疲れた」

「あ、ああ…おやすみ」

「んっ！寝室皆一緒だからね！」

「…あいよ〜」

クロエは緊張が解れていたのか、スヤスヤと穏やかな寝息を立てて眠っている。

兎に角、明日だ…今日はもうゆっくりと寝ちまおう…。

俺は千冬たちに見送られながら、クロエを起こさないようにゆっくりと寝室へと向かった。

## #29 タヌキと乙女と一人の男

「ぐ…腹、いてえ…」

「気持ちには分からんでもないが、シャキツとしろ…此処の理事長は海千山千の大妖怪だからな」

「だから、いてえんだよ…ったく…」

翌朝、俺と千冬は束にキツく部屋に閉じこもる様に厳命して、俺と千冬はスーツに袖を通して校舎にある理事長室へと向かう。

理由は勿論、篠ノ之 束及びクロエ・クロニクルの今後の扱いについてだ。

IS関係者は、基本的に束の人となりと言うものを理解している為、学園に住み着くと言った束の行動を拒否し、排除すると言うことは出来ないと言うことは重々承知しているだろう。

問題は、世界各国の首脳陣がこの事態をどう思うのか…と言う事だ。

篠ノ之 束を制するものは、この世界を牛耳るも同然だと言っている。

なんせ、唯一のISコアを製造することができる技術者だ。

その価値は金なんかで図ることはできない…それだけ、ISは特異な存在だからな。

…思えば、図らずとも束と恋仲となることで、世界の中心に触れているような状況が出来上がっているな。

ダンマリ決め込んでる魔法使的には、満足のいく内容ではあるか…?

「まあ、お前もよく知っている人物だ…そう気負うこともないだろう。最早、賽は投げられた」

「そりやそうなんだがな…束が大人しく部屋で過ごしていると思うか？」

「…正直、無理だと思う。筈は懲罰房で反省中で、元々消極的にしか接触をしていないから問題ないとして」

「一夏だろうなあ…」

俺は静かに胸の前で十字を切り、今頃酷い目に合っているであろう一夏に対して祈りを捧げる。

束の消極的な行動…と言うのは、本人に接触しないと意味であって、断じて箒に興味が無い訳ではないし、本人も海の底よりもつとと言うと、マントル深くまで愛している。

何が言いたいかと言うと、『変態』レベルで愛しているのだ。

千冬の使用済み下着を持ち去ろう…いや、持ち去っているくらいだ。

恐らく今頃一夏の部屋で、しっかりと堪能していることであろう。

「…とりあえず、今は目の前の事に集中しよう」

「そだな…」

朝も早く、本日は休校日と言うこともあつてかグラウンドから聞こえてくる部活動中の生徒の声以外に物音は無く、校舎内はしんと静まり返っている。

いつも騒がしい生徒達で溢れている校舎も、人が居なければまるで別世界に足を踏み入れたかのように静謐さで満たされている。

そこに寂しさや郷愁と言った感情が湧くわけでもなく、本来はこうあるべき…と言わんばかりだ。

理事長室に辿り着いた俺たちは、千冬が先に立って扉をノックする。

『どうぞ』

「失礼します」

中から聞こえてきたのは男性の…それも俺が良く聞く声だった。

…確か、この学園の理事長は女性だったはず…という事だ？

俺が首を傾げていると、千冬は静かに扉を開けて中に入っていく。

俺もそれに倣って理事長室へ入ると、応接用のソファーに見知った顔を見つめる。

「遅かったですね、織斑先生、ミユラー先生？」

「千冬」

「はあ…お前が此処に居ると言うことは、用件も分かっているとと言う事か…更識？」

更識 楯無…IS学園を統べる生徒会長は、綺麗な足を組んでソファに座り、優雅な仕草でティーカップを手に取って紅茶を飲んでいる。

その顔は何処か満足げで、自分の思った通りに行動してきたことがどこか嬉しいようだ。

「ええ、この学園にやってきた核爆弾とおまけ…その処遇についてですよね？」

「そのおまけの方もやべえけどな…。で、おっさん…その席に居るのが本当の立ち位置ってことか？」

「まあ、そんなところですよ。ですが、薄々気付いていらしたんでしよう？」

「どうだかねえ…そこまで頭良いわけでもねえからな」

更識から視線を離し、大きい黒檀のデスクに座る男性…轡木 十蔵を睨み付ける様に見つめる。

轡木は俺の視線に怯むことなく柔和な笑みを浮かべ、手を差し出してソファに座る様に促す。

「まあまあ、立ち話もなんですしどうぞ座ってください」

「わかりました」

「……」

千冬は素直に頷いて更識の対面に座り、俺はその隣に大人しく座る。

その様子に満足げに頷いた轡木は、ゆっくりと立ち上がってこちら側に歩み寄り、更識の隣へと腰掛ける。

「さて…篠ノ之博士とお連れの少女の取り扱いに関して、ですね」

「ええ、理事長もご存じの通り、あいつは一度決めたらテコでも動きません。強制的に排除しようにも何をされるか分かったものではありません。ただ、他人に興味をもって動く人間ではないので、余程の限りの事が無ければこちらに牙を剥くこともないでしょう」

「でも先生、それはこの学園内部の話…諸外国からすれば、そんな事は関係ないですよ？」

更識は千冬の考えをさらっと否定し、事実を突き付けてくる。

そう、あくまでも学園内部では問題が無い。

しかし、諸外国…この場合は日本を含めた物言いになるが、それらの国家群には関係が無いのだ。

なんせ、身柄を確保して万が一にも手懐ける事が出来れば、I S コアを延々と吐き出す一大生産プラントを作ることだって夢ではない。

そうした場合、世界の覇権を牛耳ることだって夢ではないのだ。

…絵に描いた餅だけだな。

「つつつても、ここはI S 学園…絶対的な中立性を確保された一つの国家みてえなもんだろ？もし、此処に政治的干渉が起きる様なら、それを跳ね除けることだって出来るはずだ」

「表向きではそれで構わないでしょう。しかし、先日の襲撃事件同様にテロが発生しないとは絶対に言いきれません。我々は明日を担う子供たちを預かっている身なんですよ」

「それこそ、束の奴に手伝わせれば良い。最低限の餌は学園に用意できてるからな」

轡木は先ほどまでの柔和な顔を崩し、鋭い目つきになる。

その反応は、俺が垂らした釣り針に食いついたことに他ならない。

内心笑みを浮かべそうになるのを必死に隠し、俺はそのまま言葉を続ける。

「タイミング的に見たって、一夏や千冬、何より妹である箒が心配でこの学園に来たって事は明白だろ。ちつと言い含めれば何とかなるんじゃないやねえの？」

千冬は横目でジロ、と睨み付けてくるが、俺に任せる事にしたのか黙り込む。

更識の奴がニヤニヤとした笑みを浮かべているのが、少しばかり気になるな。

「最悪、I S による襲撃が起きたところで、束がコアの起動に関するマスターキーを持っているのは明白だ。コア・ネットワークを構築したのはあいつだからな…相手は成すすべなくI S を剥ぎ取られていくことだろう」

「ですが、I S 委員会から要請が来た場合はどうするおつもりで？」

「委員会と言っても、所詮はコアの分配と管理を目的とした組織だ。以前、俺を襲撃してきたときのIS反応をチラつかせてやりや良い：更識、お前やりあったんだろ？」

「ええ、逃げ足だけ速くて嫌になっちゃうわ」

ISコアには、基本的に識別ナンバーと言うものが割り振られている。

ここで基本的にと言ったのは、単純に当初生産されたのとは別に生産されたコアには識別ナンバーが割り振られていない所為だ。

俺の黒鬼にも振られてなかったしな…。

そして、コアはそのナンバー毎に変更できない反応を発し続ける為、そのデータさえあればどの国に割り振られているコアなのかが一目瞭然となっている。

これは、単純に国家間での裏口取引によるコア移動を封じ込める意味合いが強い。

それだけコアは軍事的、政治的に強い影響力を持っていると言う事だ。

「委員会すら脅す…形振り構わないやり方ですね？」

「ハッ、売られた喧嘩はキチンと買うのが流儀つてもんさ」

「随分と過激なやり口じゃない、ミユラーせんせ？」

「そら、でくの坊送り付けてきた犯人に言ってもらいてえもんだな」

で、そんなコアの在処を問い合わせてしまえば、委員会としても困ったことになる。

仮にその反応がどこかの国の所属しているコアなのであれば、その国の委員会の役員が全力で差し止めを求めてくる。

そうでなくとも、所在がはっきり分からなければ委員会の存在意義に関わってしまう。

もし問い合わせに答えなければ、マスコミ各社に情報流すぞと脅してしまえば良い。

嫌なら、口出しするなと条件をつけて…そうすりゃ、責任をとりたくない責任者達は見ぬフリをせざるを得なくなるわけだ。

「でも、せんせが其処まで過激な策を打つので、男と女の関係に



なつたからでしょ?」

「そう言うの見越して、盗み聞きさせてたんだろ、更識」

「へ?」

俺は白けた顔をしながら、楯無を見つめる。

昨日の今日で俺と束の関係を知っている…となれば、寮長室が盗み聞きされていたのは確実。

しかし、束が大改装を施した後で盗み聞きをしていたのだとしたら、それは最早束の掌の上だと言うことに他ならない。

アツパラパーだが、あいつは無駄な行動をしない合理主義者だ。

恐らく、俺との関係も利用してこの学園に居座るつもりだな。

「ほう、そうですか…それはそれは…ここでミュラー先生に何かあつては、学園に何をされるか分かったものではありませんねえ?」

「あれは損得抜きに欲望に忠実だ。下手に刺激したらそれこそ、全員の身がヤベエ」

「それはおまけについても適用されるわけね…」

「まあ、その子については学園の生徒として迎え入れる事にしましょう。篠ノ之博士のお気に入りの子供とは言え、学園で保護するには所属させるしかありません。本人に力が無いのであれば尚の事」

…クロエの学園編入。

正直、かなりデリケートな問題ではある。

確かに、クロエに何かあると束は確実に保護しようと動くだろう。

つまり、クロエに首輪をつけることで束の制御をより確実にしたい狙いがある訳だ。

無論メリットが無い訳ではない…束の傍からしか見えない世界と、それ以外の世界とは見え方がガラリと変わってくる。

俺や束への負い目で生きているような状況よりも、自身の価値観をキチンと認識できるようになる…かもしれないからな。

腕を組んで考え込むと、千冬がおもむろに口を開く

「彼女はドイツ軍のモルモットにされていた過去があります。もし、この学園で生徒として過ごすことになれば、ドイツを刺激してしまう事にはなりませんか?」

「遺伝子強化試験体…その存在はあの国にとって機密の塊なわけだし…おじ様、私も賛成はしにくいわ」

確か、ドイツは第二次世界大戦だか何だかの時に、ユダヤ人を大量虐殺した過去があったんだっただか…？

その虐殺も一方的なものから収容所での強制労働、果ては毒ガス等の人体実験…人間を弄繰り回す研究に関して、忌避感が国民の中にあっても不思議じゃないな。

ただ、そう言った部分は伏せておけば問題は無い…筈。

無論、クロエを知っている人間が学園内に居ないとも限らないが。「俺としちゃ、生徒として迎え入れてやりてえけどな…あいつはもつと物を知るべきだろ」

「おや、ミュラー先生は私と同意見ですか」

「まあな…おっさんの思惑がどうあれ、クロエはまだまだ子供だ。子供は子供らしく遊んでりゃ良いし、考えるのは腹黒の役目だろ」

「生徒会長としては、学園に所属するのであれば、その子も含めて全力で守ることに異存はありません」

更識は最終的には中立、と言う立場を通す様だ。

千冬は、俺と轡木、更識の視線を真つ向から受けて考え込み、小さく頭を縦に振る。

「では、この話は束に通しておきます。そうすれば、クロエも納得するでしょう」

「分かりました。では、篠ノ之博士には外部顧問、と言う形で学園に滞在していただく方向で調整しておきます。編入手続きは一週間後にやってくるドイツとフランスの代表候補生と同時に行い、1組で面倒を見てもらう形になりますか…構いませんね？」

「その代表候補生…専用機持ちか？」

「そうよ、ミュラー先生。本当は分散すべきなんだけど、1人は軍属、1人は出資企業のお子様…前者は織斑先生も知っている子だし、後者はねじ込めと言われて断り切れなかったのよ」

軍属、ドイツ…いや、まさかな？

今じゃ隊長をやっているって話だし、学園に編入してくる必要も無

いはずだ。

フランスの方は、なんて言うか…出資されてる側の悲哀を感じると言うか何と言うか…。

「ええ、言わんことも分かりますが…まあ、これも戦略の一つと言うことで納得しておいてください」

「なあ、おっさん、タヌキとか言われてねえか？」

「酷いですね…これでも学園の良心と言われているんですが…」

「……」

「本当ですよ？」

轡木の言葉に、千冬と更識は随分と白けた目を向けている。

どうも、裏ではやはりタヌキらしいな…このおっさん。

そうでなければ、千冬が『大妖怪』なんて言う訳が無いか。

そもそも、このIS学園…保有しているISの量がアメリカよりも多い。

これは、学園の生徒が過不足なくISに触れる為と言う建前があったからだ。

無論、普通に考えればこんな分配方法は許されないだろう…国力に直結するものだからな。

だが、長い目で見たとき、未熟な操縦者よりもキチンと訓練を受けた操縦者が乗ったISの方が遥かに有益であることは間違いない。

そうでなくとも難関校…ただ3年間を無為に過ごさせるわけにも行かない。

…なんてことを目の前のタヌキがごり押したんだろうなあ…割と正論だから黙らせやすいし。

「まあ、良心でもタヌキでもなんでも良いや…」

「いやいや、良くありませんよ？それはそうと…ミユラー先生、あまり女性を食べないでくださいね？」

「あ？」

「は？」

「ブツ…」

更識は轡木の発言に口元を扇子で隠しながら笑いを堪え、千冬は冷

や汗をとめどなく流しながら目を丸くし、俺は俺で訝しがる様に眉を顰める。

穏やかな笑みを浮かべているのは、この部屋で轡木だけだ。

「職場恋愛を禁止していませんが、程々にしておかないと後ろから刺されかねませんから」

「やくだく、ミュラー先生つてば手え早〜い」

「おう、その扇子は宣戦布告かなんかか？」

更識の口元を隠している扇子には、デカデカと『ケダモノ』と達筆で描かれており、確実に俺をバカにしているような雰囲気を感じる。

落ち着け、高々小娘の言う事だ…ガチで取り合う程ガキでもない…。

「はっはっは、恋愛は大いに結構。人生には潤いが無くてはいけませんからね」

「か、からかわないでください！」

「いやー、無理だろう…そんな顔で言われても」

千冬は顔を真っ赤にしながらソファアの前に置いてあるテーブルを両手で叩きながら立ち上がり轡木を睨みつけるものの、その眼光にはいつもの鋭さが欠けている。

轡木は、そんな千冬を見て満足げに頷いて笑みを深める。

「っ、失礼しました！」

千冬は耐えられなくなったのか、逃げる様に理事長室を飛び出していく。

ありや、本当に恥ずかしかつたんだな…。

「…ミュラー先生。私はね、彼女を幼いころから知っているんですよ。もちろん、篠ノ之博士もね」

「おじ様、その話初耳なんですけど？」

「いままで、話していませんでしたからね…」

轡木は何処か寂しそうな顔を見るとソファアから立ち上がり、デスクの後ろにある大きな窓の前まで歩いて背中を向ける。

「ちようど、織斑先生のご両親が行方不明になった辺りでしょうか…？そう、ISが発表される少し前…幼い少女だと言うのにも関わら

ず、彼女は抜き身の刀の様に鋭い気配を発し続けていました」

中学くらいの頃合いか：今でも時折そう言った雰囲気を感じるが、轡木の言葉が正しいければ今よりもやさぐれていたと思ってもよさそうだな。

俺と更識は轡木の次の言葉を待つように、静かに黙り込む。

「大人は誰も信用しない。私は私だけの力で生きていく。：どれほど手痛い目に合ったのかは定かではありませんが、少なくともあの時の織斑先生は誰も信用していないと言った感じでしたね。そんな、昔の姿を知っていると：今の織斑先生は本当に揶揄い甲斐があつて良いですね」

「まるで、父親みたいな物言いをするんだな」

「パトロンみたいな真似をさせてもらいましたからね：勿論、直接的ではありませんが」

中学生の子供が、今の今まで普通に生活できる状況って言うのも確かに不自然か：色々と便宜を図ってもらったりしていたんだろう。

轡木が、其処までする理由は分からないがな。

「まあ、そんな訳で：これでもミユラー先生には感謝しているんですよ。あの、たった1人の家族を守ることしか考えてこなかった織斑先生が、1人の女性として貴方に恋心を抱いているのですから」

「案外、俺も軽薄だからな：裏切るかもしれねえぞ？」  
「それもまた、人生のスパイスと言うものですよ。後始末はこちらでやっておきますので、ミユラー先生はもういいですよ」

俺はゆつくりと立ち上がり、理事長室を出る前に少しだけ振り向いて轡木の背中を見つめる。

「おっさん、千冬を教師に誘ったのはアンタか？」

「よく、お分かりで」

「アンタはタヌキで学園の良心だわ」

それだけ言うと、さっさと理事長室を出て、俺は廊下を1人寂しく歩いていく。

暫らく歩くと、校舎の下駄箱の前で千冬が1人で立っているのを見つける。

「どうやら、俺を待っていてくれたらしいな。」

「寮に戻っていたんじゃないかねえのか？」

「お前が来るのが遅かったからな…。なあ、アモン…その、私は…」  
千冬は深呼吸をすると、不安げに此方を見上げてくる。

その様子は、やはりどこかいつもの一本筋の通った強さを感じさせない、何処にでもいる女性のそれだ。

「変わってしまったのだろうか…？」

「なんだ、変わるのが怖いのか？」

「怖い…か…。そうだな、今まで…此処まで心を許した覚えは無かった。だから、戸惑っ…」

俺は、千冬が全てを生きる前に優しく抱きしめて、背中を撫でていく。

千冬は俺の胸元に手を添えて、しがみつく様に握り込む。

「お前に…そうされると…弱くなってしまう気がする」

「別に、悪いことじゃねえよ。1人じゃ誰だって弱い。1人で弱けりや2人、それでも弱けりや3人だ。少し、気い抜いておけ」

強い奴なんてどこにもいない…ただ、弱いところを見せないように必死になっているだけだ。

強いと思っているのは、弱さを忘れているから。

強いと言われるのは、弱さを見せないから。

誰しもが弱く、そして強い…だから、俺は人が嫌いになれない。

そして、こうして女を愛してしまうんだろう。

俺は千冬の顔を上に向かせ、優しく唇を重ね合わせる。

こんなに可愛いんだ…キスだってしたくなる。

長いキスを終えて顔を離すと、唾液の糸が伸びてプツリと切れる。

「っ…此処は一応職場だぞ…」

「誰も見てなきや良いだろうが…とりあえず、束のところに戻るぞ」  
「あ、ああ…」

頬を赤く染めた千冬から離れると、少しだけ寂しそうな声がかかる。  
左手をポケットに突っ込んで歩き始めれば後を追うように千冬が

慌てて駆け寄り、俺の手を掴んで指を絡めてくる。

一応、学園内には生徒が居るんだがな…俺は少しだけ嬉しそうに笑みを浮かべて、顔を背ける千冬を眺めた。

悪魔としがらみと

#30 ようこそ、IS学園へ

一週間なんて早いもので、あっという間にクロエが編入する日がやってきた。

理事長である轡木と話したその日に束とクロエとで再び話し合い、何とかクロエを納得させることができた。

クロエの学園編入に関して思うところが無いとは言わないが、部屋に引き籠っているよりは遥かにマシな状態になるし、何よりもクロエはあの地獄のような環境や束の傍に居る世界以外の事も充分に知る必要がある。

物事を柔軟に、なおかつ貪欲に吸収できるのは今の内だからな。

色々な事を経験して、立派に成長してくれれば……まあ、俺としては満足だ。

で、だ……俺は背中にとある人物をぶら下げて引きずりながら、ノシと言った感じで廊下を千冬と転入生3名とで歩いている。

いずれも無言……これは、俺が口酸っぱく絶対に突っ込むと言ったからだ。

「……あの」

「あ……なんだ、デュノア？」

だが、金髪の貴公子然としたデュノア社のお子様は耐えきれずに、歩調を俺に合わせて背中に居るモノを見る。

デュノアの顔色は若干悪く、こちらのご機嫌を窺っているかのようだ。

「その、重くないんですか？」

「あのな、重かったら汗かいて息も乱してるわい。こんなの重い内に入らねえよ」

「そ、そうですか……」

若干、背中にへばり付いているモノが嬉しそうにしている気配が伝わるが、俺は努めて無視をする。



教室まではまだあるし、背中のモノに対するプレッシャーを紛らわせる為に、俺はゆつくりと口を開く。

「日本には3日くらい前から居たんだろ？」

「はい、時差ボケがあったままだと辛いですし…転入前にいただいた書類には、今月末に行われるトーナメントに出場しなくてははいけません。僕も男ですから、勝つためにそれなりの訓練もこなさないと」

「女みたいに可愛い顔しておいて、やる時ややるって意気込み…嫌いじゃねえぞ」

「あ、あはは…」

シャルル・デュノア…3人目の男性IS適正者…フランスのトップメーカーであるデュノア社の御曹司にして、国家代表候補生の資格を持つ優等生…と、肩書と顔や仕草を見れば、この学園の黄色い声が通常の3割増しくらいに大きくなることうけ合いだな。

実際IS学園の制服も綺麗に着こなしつつ姿勢も歩き方も綺麗なもんだから、どこぞの貴族のお子様に見える…が。

千冬はひた隠しにしている事実ではあるのだが、俺は一目見た瞬間に看破しちまった。

デュノアは骨格から見て、間違いなく女性だろう。

コルセットや服で誤魔化してはいるが、歩く時の動きで大体検討がつく。

なんせ、人形制作で人体の隅の隅まで調べつくしたからな…俺に看破できないものは、ない。

「アモン・ミュラー…私に言うことは？」

「遠路遙々ごくろーさん。隊長やつてるんだって？」

「…軽い気がするが、まあ良いだろう。お陰様でな…私としてはお前と会うことはないだろうと思っていたのだが？」

少しばかり不機嫌そうな声が、俺の前から発せられる。

千冬の隣を歩いていて、腰まで綺麗に伸ばした銀髪が美しい眼帯娘…ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

あの事件から、もう3年くらいになるのか…？

なんとも早いもんだな…。

「先生は、ボーデヴィツヒ少佐とお知り合いなんですか？」

「1ヶ月ばかりお世話してもらってな。くれてやった眼帯、大事にしてくれておっさんは嬉しいよ」

「ち、父が…戴いたものは大切にすべきだと言うから…」

「2人とも、無駄話はそこまでだ。転入生3人は此処で待つこと」

「了解しました」

「はい」

「……」

3人全員が1年1組に転入…ムスツとした顔のままのクロエは兎も角、デユノアは会社が無理言って戻り込み、ラウラは…軍の意向を反映した感じか。

両国とも虎の子の国家代表候補生を送り込んできている形だな。

ざっと書類を見た限りでもISの適正値は両社ともにAであり、訓練機を用いた適性試験でも試験官を圧倒する程の手練れだ。

仮に問題が起きた場合、それ相応の実力者が揃っている1組に割り振るのも仕方ない…と言うことにはしておこう。

大事なことはタヌキが片付けるだろうしな。

「アモン、そんな顔をするな…気持ちには分かるが」

「…東、寮長室に戻ってろって、悪いこと言わねえから…」

「…ヤダッ」

そして、この転入生よりも遥かに問題がある物体T・Sに対して、俺はどうにも腹を括れない思いを抱いている。

千冬としても投げても殴っても掴ってもテコでも動かない東は、出会った当時以来だったらしく半分匙を投げてしまっている。

…これでも千冬と同一年だったんだから不思議だわ…。

「ちーちゃん、アモン、これはね、箒ちゃんに対する重大な一歩の為なんだよ！頼むよ!!」

「平日中にアクシジョンを起こすな！こっちはふざけてやっているんじゃないんだぞ？」

「悪い事言わねえ…箒の俺に対する評価が最底辺突破して回復不能領域にまできちまつてる…そんな人物とお前が戯れてたら、箒はどう思

うよ…?」

箒は懲罰室から出てきてからと言うものの、俺を避け続けている。その瞳に映るものは『嫌悪』と『恐怖』。

人間以外の存在が自分の傍に居る。人間面して自分たちに接してくる。

何よりも…いつ襲われるのか分からない…もし、襲われたとき抵抗できるかどうか分からない。

なんて言ったところだろう。

お陰で授業中に指名するときの気不味さが半端ない。

箒は俺に話しかけられる度に体をビクつかせてくるからな…俺にそんな意図が無いなんて言ったところで通じる訳もない…。

一方的な拒絶は、崖っぷちに掴まることさえ許してくれないものだ。

「でもでも！学園に来た4分の1の理由だし！」

「せめて本当の理由って言ってくれよ…」

「天才はね、複雑怪奇なんだよ…」

「自分で言うんじゃない…」

束はフツと笑ってもっともらしい事を言うが、アプローチの仕方が奇天烈すぎると思わないのだろうか？

俺は、どこぞの狼の様にジクジクと痛む胃に苦しみながら深くため息を吐き、ゆっくりと扉に手をかける。

もう、いい加減腹あ括ろう…。

「おはよーさーん」

「!!?!」

扉を開けて俺が教室に入った瞬間、教室の中の時が止まった。

言うまでもなく、俺の背中に居るはずのない人物がしがみついて密着しているからだ。

白く燃え尽きた様な顔をする者、現実を直視できない者、新たなネタに悦ぶ者、そして…。

「ね、ね、姉さん!?!その、その男から離れるんだ!!」

「箒ちゃん!まさか箒ちゃんが心配してくれるなんて!!」

「…危険物扱いくらいは訂正してくれても良いんじゃないか?」

「兄貴…これ、どういう事?」

束は、箒が自分を心配して声を張り上げた事が嬉しかったのか、喜色満面の笑みで俺の首を万力の如く締め上げてくる。

ミシリ、ミシリと骨が悲鳴を上げる声があるものの、俺にとっては赤子が抱きしめてきている様なもので努めて無視をする。

一夏は、至極冷静な顔で俺と束を見比べて訪ねてくる。

付き合い長いから、突拍子もない事には最早慣れっこなんだろうなあ…。

「1週間前から学園に潜伏しているテロリスト予備軍です」

「…マジか…」

「おう…まあ、苦労は分かるな?」

神妙な面持ちで一夏は頷き、俺の苦労を偲ぶかのように静かに首を横に振る。

タヌキとの会談に始まり、この1週間の間にクロエと束の私服作り、並行してクロエの調理スキルが壊滅なんてレベルじゃなかったんで技術指導。

料理を任せたら奇声を上げる暗黒物質なんて、まるで漫画みたいな物体作り出したのには本気で驚いた…それをケロツとした顔で丸のみにした束にも。

あと、やつぱりと言うかなんと言うか、支障が出るほどではないとは言え少しばかりズレた感性を持っていたので基本的な日常生活のマナーも叩き込んで、e t c. e t c.。.

いくら、人間ではないと言っても、魔法が使えない以上どうにも出来ないことが俺にはある。

よく、頑張った方だと思おうわ…。

ひそひそとした声で一夏と喋っていると、そんな俺たちに気付いた箒が一夏に檄を飛ばす。

「い、一夏!早く姉さんを引きはがしてくれ!」

「…無理じゃないか?束さんが此処に居るって事は、アモン兄と千冬ね…織斑先生が匙投げたって事だろうし」

「だ、だが！」

「…いや、諦めようぜ？実害があるわけじゃないんだしき。束さんだって、織斑先生達と邪魔をしないって約束で此処にいるんだろ？」  
箒の若干ヒステリーが混じったかのようなその檄を、一夏は冷静な態度で首を横に振り箒を落ち着けさせようとする。

大人しくしているのであれば、実害があるのは俺くらいだしな：  
まあ、ISに携わる者が束を意識しない訳が無いんで授業に身が入るかどうかは分からないが。

一夏の言葉に箒は何かをボソリと呟いて顔を俯かせ、束は束で満面の笑みでコクコクと頷く。

「そうそう、束さんは大多数の凡人に用は無いのさ！だから凡人諸君は束さんが引いた道を歩いていればいいと思うよぶげらっ!?」

「口を開くな…落とすぞ」

「どこにだよ…兎も角、束は口開くな…俺の為を思って」

「しつかないなあ…アモンとちーちゃんのお願いだからね〜！」

（…大変そう…）

教室中の生徒から同情や憐みと言った視線が降り注がれている：  
気がする。

なんていうか…とんでもない女に引つかかったんだね…みたいな。

不意に千冬が箒の頭に出席簿を叩き落とし、喝を入れる。

「いい加減お前も座れ…あれに関しては諦めろ」

「…はい」

いつもより幾分優しく落とされた出席簿は、千冬なりの優しさだったのだろう。

それに気づいた箒は1度俺を強く睨み付けた後、静かに自分の席へと戻っていく。

ほんと、嫌われちまったもんだなあ…。

「え〜、山田先生は一時間目の授業の準備をしている為、S H Rは私が執り行う。最初に、このクラスに転入生が3人配属されることになった」

教壇に立った千冬は、まるで事務処理をするかのようにてきぱきと

連絡事項を伝え始める。

実際、先ほどまで行っていた茶番のせいで少しばかり時間がおしてしまっている。

しかし、3人の転入生の話で教室が騒然とする。

「せ、先生！・I S 学園ではこんな風に短いスパンで転入生が来ることってあるんですか!？」

「なんで1組ばかりなんですか!？」

「今回は、色々な事情があって来ることができなかった者たちばかりだ。1組に配属される理由は私も把握していない。質問はこれ以上受け付けんからな」

何処か苦虫を噛み潰したかのような顰め面の千冬は、素早く質問を打ち切り廊下で待っている3人に声をかける。

「待たせてすまなかった。入ってきてくれ」

俺は誰にも気付かれないように——束には気づかれたが——懐から耳栓を出し、素早く耳の穴に押し込む。

偽物とは言え、3人目の男性適正者だ…反応なんてわかり切ったものだろう。

エプロンドレス風の改造が施された制服に身を包んだクロエ、ドイツ空軍の制服を模して改造された制服を身に包むラウラが入り、そして貴公子然とした佇まいで一夏と同じ無改造の男性制服に身を包んだシャルルが入ってくる。

「え、ちよっと待って…」

「う、うそ…」

「静粛に。シャルルから自己紹介をしろ」

千冬に促されたシャルルは静かに頷いてから一步前に出て、柔らかな笑みを浮かべる。

その所作はどこか芝居がかっていて、妙にくどい。

恐らく男性であろうと強く意識しすぎているからなんだろう。

だが、それに気付く人間も僅かなはずだ。

なんせ此処は孤島と言う名の女の花園…異性に接触するチャンスは休日の外出許可が下りた生徒だけだからな。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルルは丁寧にお辞儀した後、綺麗な笑みを浮かべる。

その顔を見た一夏は、ハツとした顔になって急いで両耳に手を当てて塞ぐ。

一夏もこの学園の生徒たちの行動パターンは覚えたらしい。

「「キヤー!!!」」

突如起こる超音波破壊砲『黄色い声』。

クラスのはぼすすべての生徒から喜色んい染まった叫びが上がり、窓がびりびりと振動を起こす。

シャルルはそんな声にビクツと体を震わせ、ラウラは眉をしかめて耳を塞ぎ、クロエは直立不動で気にした様子がない。

まるで普段から騒がしいから、もう慣れっこですと言わんばかりだな。

因みに束は飽きたのか、俺の背中にしがみついたままうなじに噛みついたり舐めたりしている。

「3人目！3人目の男性よ！」

轡木のおっさんは男性に含まれないらしい…いや、この場合は3人目の適正者って意味か？

「しかもうちのクラス!!」

そうだね、これが陰謀関わってなければ尚良かったのでは…と思わずにいられんぞ。

「守ってあげたくなる系の美形!!」

ノーコメントで。

「地球に生まれて良かった!!」

イケメンがいてって言う意味なら学園の外にウジャウジャ居ると思うんだがなあ…まあ、ロマンスを手軽にってなるとそうもいかないらしい。

千冬は深くため息をついて、頭を軽く抱える。

「あー、静かにしろ…SHRの時間は少ないんだ。自己紹介を続けるぞ」

ラウラは耳を覆っていた両手を外し、眩暈がするのか眉間を軽く揉み解す。

恐らく軍での生活と学園の緩さとのギャップが凄まじいんだろう……まあ、ボーデヴィツヒ大佐としては、そういう普通の人間らしい生活にも慣れさせておこうと言う腹積もりかもな。

義理とは言え、娘との接し方も中々サマになってきているんだろう。

「……ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ドイツ空軍シュヴァルツエア・ハーゼ隊……確か此方の言葉ではクロウサギと言うそうだな、その隊長をしている。階級は少佐。そこに居るアモン・ミュラーとは顔なじみだ。何か質問はあるか？」

ぶつきらぼうだが、それでも何とか自己紹介を言い切ったラウラは、内心ホツとしたのか深く息をつく。

ラウラはクラスの全員を見渡すと、手を上げた1人を見つめる。

「なんだ？」

「あ、あの……どうして、軍人さんが……？」

もつともらしいっちゃ、もつともらしい質問だな。

ドイツ空軍……それも1つの部隊の隊長にまで上り詰めた人間が、学園に来る理由なんて無いはずだ。

基礎知識、応用知識、さらには操縦技術に至るまで頭二つは飛び抜けている証拠だからな。

「良いだろう。諸君らも知つての通り、現在各国は第三世代型ISの開発に躍起になっている。この学園にはそれらの試作機が多数送り込まれている……英国のBT、中国の甲龍、ロシアのミステリアス・レイディ etc. etc.……そう言った機体との戦闘データ収集が目的だ……と言われたのだが……」

「……………」

ラウラは突如口を噤んで眉根を寄せる。

何と言うか……こう、恥をさらす様で嫌だなあ……と言わんばかりの顔だ。

だが、生徒たちはそんな様子に気付くこともなく、ラウラの言葉の



続きを固唾を飲んで見守る。

「そ、その…しょ、少将が言うには表向きにはそう言う事にしておくら、学園生活を楽しんで来い、と…」

「…お前の父ちゃん、出世したのか？何やったんだよ…？」

良くて降格、最悪クビだと思つてたんだがなあ…。

ともあれ、ボーデヴィツヒ大佐…いや、少将殿はご健勝であらせられるつと…。

ラウラの話を聞いた生徒達は、何処かホツとしたような顔で表情を緩める。

ガツチガチの軍人だったらどうしよう、とか考えていたんだろうな。

「…クロエ・クロニクルと申します。故あつて目に障害がありますが、束様のご厚意によりISの試験機を貸与され、ハイパーセンサーによる視覚補助で皆様と同じように物を見る事が出来ます。特例と言う事で実技には参加しませんが、何卒よろしくお願いします」

クロエは恭しくスカートの裾を摘まんで頭を下げ、予め打ち合わせをしていた通りに自己紹介を終える。

クロエの眼球は特殊だ…他人からすれば俺のような異質感を受けるかもしれない。

だが、生体同期型ISとなつているクロエは、ハイパーセンサーの副次効果で目を閉じていても物を見る事ができる。

ただ、弊害としてISを装着することが出来ない。

なんでも、コア同士が互いに干渉しあつて機能不全を起こすらしい…。

「んも〜！クーちゃん、ママだつてばあ！」

「黙れ！」

「ぶぎゅっ!!」

束はいつもの様にプクーツと頬を膨らませてクロエに抗議するが、その直後に千冬の拳が容赦なく束の顔面に突き刺さる。

それはいつそ見事なまでの右ストレートだったが、それでも束は俺から離れようとはしなかった。

最早意地か何かか…？

「あー、クロエは不器用で仏頂面だが根はいい子だ。皆仲良くしてやってくれや」

「はいー！」

「皆が良い子でおっさんは嬉しいよ…んじや、シャルル達は空いている席に座ってくれ」

3人に席につく様に促すとラウラは一夏の席の前に止まり、ジィツと見つめてくる。

まるで興味深そうに観察するように…恩師の弟だからと言うのもあるのだろうか。

「…教官には本当にお世話になった。お前とは仲良くしたいものだな…織斑 一夏」

「一夏で構わない。俺もラウラって呼ぶからな」  
「そうか…」

それだけ言葉を交わすと、ラウラの頭に出席簿が叩き落とされる。

…本当、こう言う所容赦ないよな…千冬。

「もうお前の教官ではなく、担任の教師だ。織斑先生と呼べ」

「ハッ！申し訳ありません!!」

「敬礼もいらん…いいから席につけ」

ラウラは再び敬礼すると、素早く自分の席まで歩いていき静かに着席する。

隣に座っている女子はラウラに質問をした女子だな…何か聞きたそうにソワソワしているな…。

「さて、連絡事項はこれで終わりだな。次の授業はお待ちかねのISを用いた歩行訓練だ。午前中はすべてその訓練に費やす形になるが、素早くISスーツに着替えて第二グラウンドに集合だ。遅れるなよ！」

「はー！」

SHRはこうして無事に終わり、いつもとは違う日常が回り始める。

さて、どうしたものか…と思いつながらシャルルを見つめる。

男装の麗人：求められていることはスパイ活動…この学園において  
はもつとも罪の重い犯罪行為だ。

それこそ、故郷の土を踏めるかどうかも怪しいレベルだからな。  
なんとかそうならないようにしてやらなくっちゃあな…。

## #31 優しい日常

ISスーツ：それは人が円滑にISを運用するために考案された衣服の事を指す。

衣服、と言つても基本的に女性物であるISスーツは所謂レオタードやスク水、果てはハイレグ水着の様なボディスーツの類しかない。スーツにはバイタルデータを検出するセンサーと端末が組み込まれており、肉体から発せられる電気信号を増幅してISに伝達する。電気信号を伝達するだけならば、ISスーツは必ずしも必要な物ではない。

しかし、スーツ自体が緊急用の生命維持装置としての役割を果たすため、着用を義務付けられているってわけだ。

基本的に身に着けるISスーツは、操縦者の好みに合わせて良いことになっている。

ただ、ボディラインがきつちり出る上に露出もそこそこ多いため、IS操縦者は日夜カローリと戦うことを宿命づけられている：なんて与太話があったな。

とりあえず、話を戻そう。

問題は、男性用のISスーツだ。

今まで男が運用することを想定していない為、オーダーメイドの特注品となっている。

つまり、デザインが選べないと言うか、そもそも存在していないのだ。

今回、俺と一夏はイングリッド社と言うデザイン性よりも機能性を重視する傾向にある会社からISスーツを提供されている。

この会社はIS学園の教員用のISスーツを卸している会社で、信頼性が非常に高い。

此方としても変なものを着せられる心配が無くなったので、少しばかりホッとしていた。

そう、していたんだ…。

「うひいーやっぱリアモンってば、ムツキムキイッ！」

「あのな…スーツ、一応あるんだけど？」

第二アリーナ更衣室…本来着替えは教員用の更衣室で行うものなのだが、女性しかないこの学園では男である俺が使う訳にはいかない。

なんせ、何かしらの問題が起きたら真つ先に疑われる羽目になるからな。

そんなわけで、俺はこうして少ない休憩時間を使ってアリーナに駆け込んで着替えて…と言う何とも面倒くさい事をしているのだった。

勿論、今回は当然の様に束の目の前でストリップを披露する羽目になった…離れないし、いざれ見たり見られたりするしと割り切った。割り切らざるを得なかった…。

「黒鬼が特殊なISなのはわかってるでしょ？凡骨が作ったエロくん…ゲフン、しょーもないスーツなんかより、束さんのスーツの方が断然良いもん！」

「おう、今本心が透けて見えたぞド畜生が」

今、俺が身に着けているISスーツは胸の下までしか丈がないタンクトップと股間にサポーターが入ったスパッツとやたらとピツチリしたブーツだ。

いずれも機体色に合わせた黒で統一されている。

束にしては気の利いた股間部への配慮ではあるが、いつも着ていたウェットスーツとかプ○グスーツ染みたISスーツでは無いため、非常にあちこちがスースーする。

束は俺に近寄って、僅かに割れている腹筋の溝を人差し指で丁寧になぞっていく。

「うへへ、アモンの腹筋舐めて良い？」

「余計なところまで舐める気だろ…やめれ。つーかな…あんまり俺と関わってつと、箒と仲良くできなくなるんじゃないやねえか？」

箒ノ之 箒と言う少女は頑なだ。

そうしていなければ、生きてこれなかったと言わんばかりに。

それは普段の生活態度からも見て取れるし、必ずしもそれが悪いと

は言わない。

愚直なまでに真つ直ぐで居られると言う事は美点だ。

それだけ芯が通っていると云える…だが…協調性が無ければ美点たりえないのもまた事実だ。

そんな少女にしてしまったのは、間違いなく周囲の環境なわけで…そんな環境にしてしまったのは目の前の脳内メルヒェン女の落ち度だろう。

「箒ちゃんはさ、大人が怖いんだよね。ずーつとずーつと、黒服達に監視されててさ…お友達だつてできやしない。まあ？東さんといつくんとちーちゃん…それにアモンが居ればそれはそれで良いんだとは思うけど。まあ、少しこの話は置いておいてさ…アモンは優しいじゃん？東さんの注文をキチンと聞いてくれるし、別に助けなくてもよかつた道端の小石だつて助けちゃう」

「そら、買い被りすぎだな…俺にだつて抱えられるものの限界ぐらいは分かるし、限界が来たら取捨選択だつてする。死にたかねえからな」

両手に抱えられるものはそう多くない。

精々愛しいものや本当に親しいものくらいしかないだろう。

見ず知らずの人間に情を覚えて助けるなんざ間違っている…一度助けたものは最後まで責任を持つ必要がある。

そんな事を繰り返していたら…待っているのは地獄だ。

「そう…それならクーちゃんを助けたのは…なんでさ？」

「そら、抱えてやれると思つたからさ…まあ、最終的に東に放り投げちまつたけどな」

「…まあ、そういう事にしてあげましょー」

「随分含みのある言い方じゃねえか…」

ジト目で東の事を睨み付けると、東はクスリと笑つて俺の体に抱き着いて胸元に耳を当ててくる。

まるで子供が親に甘えてくるかのようだ。

大して抵抗する気もなかつた俺は、優しく抱きしめ返してやる。

「うへへ…このままお仕事サボってしっぽりやつちまおうぜえ」

「んな訳に行くかつつの…つたく…」

「言動チンピラっぽいのに、そゆとこ本当に真面目だよね」

「これでも育ちが良いんでね…うら、そろそろ離さねえと授業に遅れるっつの」

束としてはもつと構えと言わんばかりに頬を膨らませてくるが、こっちは暫定公務員…給料が出るのであればきつちり給料分の仕事をこなさないと税金泥棒になってしまう。

後ろ指はさされたくないからな…それに、悪魔は与えられた仕事はなんであれ完遂する。

契約、大事。

俺は膨らんだ束の頬を指でつついて萎ませ、そのまま頬を掌で撫でて唇を重ね合わせる。

不意打ちだったのか、束は少しだけ体を震わせて唇を重ねるだけのキスだけでは物足りないと言いつつ唇を舐めてくる。

「んっ…ちゅ…」

微かな吐息の間に俺は束の舌を受け入れて、互いの舌をねつとりと絡ませていく。

1つの欲求が俺の頭の中に湧いてくるが、努めてそれらを見殺して充分長くなつたディープキスを此方から切り上げ、首筋に顔を埋めて所有権を主張するかの様なキスマークをつけてやる。

「つつ…んあ…もつと…」

「だーめだつつの…今ので満足しとけつつの」

「いけずう…束さんはいつでもぼっちこいなのにいっ」

口では物足りないと言いつつ漸く俺から離れた束は、普段の言動からは考えられない艶っぽさが感じられる。

束はキスマークのついた首筋を愛おしそうに撫でて笑みを浮かべる。

「ふへへ…こういう主張も悪くないね。お手付きにされたみたいだし」

「はっ…他人に手え出されちゃ堪ったもんじゃねえからな。とりま、今はそれで我慢しとけ」

「あつた！」

束の額に軽くデコピンを喰らわせてから、すたすたと束の横を素通りして更衣室を後にする。

こう、欲張ることは欲張るんだが、どこかで歯止めを効かせておかないとかなり危険だな。

ずぶずぶと肉欲に溺れていってしまいそうだ。

何とか、折り合いつけていかなきゃな…。

少しばかり駆け足でグラウンドへと向かうと一夏とシャルルの2名を除いて、生徒の大半が整列して授業の開始を待っていた。

生徒たちの前には黒のジャージに竹刀を持った千冬が仁王立ちしている…その…割と古臭いな…？

「随分と遅かったな…」

「束を引きはがしただけでも褒めてくんね…？ I S スーツ気に食わねえからって、お手製のに着替えさせられたりとか…色々な…」

「どうだかな…？」

千冬がジト目で俺に対して抗議してくれば、俺はがっくりと肩を落としてため息を吐く。

どうせ乳練り合っていたんだろう？と言わんばかりのその眼は、事実なので何とも反論しにくい。

そんな俺と千冬の会話を聞いていた生徒たちは、俄かに騒ぎ始める。

「修羅場、修羅場よ…」

「千冬様…どうして…」

「こんな身近な場所で昼メロ見れるなんて…！」

「教師たちの爛れた関係、とても美味しいれす」

「いやいや、そんな事よりもミユラー先生の恰好、そこはかたくエロスじゃない!？」

各々が好き勝手に口走る中、鋭い視線を千冬以外から感じ取る。

俺は顔を動かさずに視線だけを動かして、俺に対して敵意を向けて



いる人物を見る。

言うまでもなく、箒だな…。

千冬も俺に向けられている敵意に気付いたのか、何処か複雑そうな顔をする。

千冬としては、俺の存在を1人のヒトとして認めてもらいたいのだろうが、俺の蘇生を目の当たりにしてしまった箒はそうも行かない。

出来の悪いB級ホラー映画みたいだもんなあ…。

「織斑先生く、一夏まだ来てないんですけど〜?」

「鳳、随分と不満そうな顔だな…んん?」

「えく、なんでもないですよ〜」

「お前らは顔を突き合わせる度に腹の探り合いするの止めろっつの」

唐突に鈴が手を上げて、一夏が来ていないことを告げる。

どこかその声には千冬に対する対抗心があり、千冬もそれを感じ取って煽る様に答える。

あの二股宣言の翌日から、千冬と鈴は顔を突き合わせる度にこんな様子だ。

一応はつきりとフツたつもりではあるが、鈴としては俺の事を諦めるつもりは毛頭ないらしく、恋敵として千冬を見ている様だ。

千冬は千冬で自身の恋が実つていると言う事もあって、余裕綽々と言った態度で居る。

…間に挟まれる俺の身にもなってほしい。

身から出た錆って言うのかね…?

「やだなーシショ、ただの挨拶みたいなもんですってばー」

「そっぞアモン、小娘の可愛い戯れみたいなものだ」

「ぐぬぬ…」

((織斑君早く来てっ!!))

グラウンド内に不穏な空気が満ち始めたころになって、漸く待ち人が来る。

6月洋上と言う事もあってかこの時期はやたら蒸すため、此方に走ってくる一夏とシャルルは全身を汗でびっしょりと濡れている。

あの分だと校舎内で鬼ごっこでもしてきたのだろう。

一夏は休み時間中に教室から出ると、毎度の如く男に餓えた狼の群れに襲撃されている。

単純にお近づきになりたい…と言う理由で追いかけてきている分まだマシなんだがな。

今の男尊女卑の世情を思えば、一夏や俺に危害を加えようなんて腹積もりの奴が居ても可笑しくはない筈なんだがな。

俺に関していえば、千冬とのISバトルが功を奏して迂闊に近づこうなんて奴らはいないみたいだ。

「すつすみません！遅れ：！？」

「ひっ…い、一夏！なんだか怖いよ！！」

（（遅いよ！！））

「…遅刻はしていないようだが、次からは5分前に行動しろ。いいな？」

此方に駆け寄ってきた一夏達は、千冬と鈴の放つ不穏な空気に足を竦ませて頬をひくつかせる。

…鈴の威嚇に簡単に乗ってしまう辺り、千冬もまだまだ娘つ子つてことなのかねえ…？

なんて考えると、俺の頭に垂直に立てられた出席簿が叩き落される。

「誰が娘つ子だ!？」

「だから手加減しろっつーに！頭割れるだろうが!!」

鋭い痛みになりながら頭を押さえて身悶える。

最近千冬にはちよくちよく思考を読まれることが多くなってきた。いる。

表情に出しているつもりはないんだが、生憎と普段はそこまでポーカーフェイスが上手い訳じゃない。

僅かな表情の変化を読み取られているのかもしれないな…あまりにも具体的に読み取って来るから怖いんだが。

「…コホン。ではこれから実戦訓練を始める。今日は訓練機を用いた歩行訓練を専用機持ち主導で行ってもらおう。織斑、オルコット、凰、デユノア、ボーデヴィツヒを班長として出席番号順に割り振る…前に

だ、オルコットと凰は前に出ろ」

「…？分かりました」

「はい」

千冬がセシリアと鈴を指名すると、2人とも首を傾げながら列から前へと出てくる。

ふと、上空に気配を感じてそちらへと目を向けると、第1アリーナの方角から何かが飛んできているのが見える。

そう言えば朝のSHRから真耶の姿が見えてなかったな…？

セシリア達が前に呼ばれた理由に気付いた俺は、心の中で2人に合掌する。

所謂イケニエと言うやつだからなあ…。

俺が何とも言えない顔で、セシリア達に対する千冬の説明を聞いていると、IS特有のスラスターの音がグラウンドに響いてくる。

遅刻したからか、随分と速度を出してるみたいだ。

「では、オルコットと凰以外の生徒はグラウンドから出る様に」

「はいー！！」

これからこのグラウンドで行われるのは、真耶対セシリア、鈴ペアによる模擬戦だ。

その説明を聞いた生徒達は皆セシリア達の勝利で終わると言う確信を持っている様だ。

なんせ、普段が普段だからな…おっとりとして気の弱い真耶が、そこまで強いIS操縦者とは思っていないのだろうか。

昔から『能ある鷹は爪を隠す』って言うのにな。

生徒たちがゾロゾロとグラウンドから出ようと移動し始めたとき、上空から真耶の叫び声が響き渡る。

「ああああ！！どいてくださーい！！！！」

その緊迫した叫び声に気付いて上空を見上げた生徒たちは、脇目も振らずに一目散に走って逃げだす。

だが、些か遅かったようでIS『ラファール・リヴァイヴ』を身に纏った真耶は真っ直ぐに一夏目掛けて突っ込んでいく。

その速度は凄まじいの一言で、生身の人間が喰らえば問答無用でミ

ンチになる様な速度だ。

真耶が一夏に接触する瞬間、避けきれないと悟った一夏は白式を緊急展開して衝撃に備えるもその瞬間が訪れる事はなかった。

「織斑 一夏、山田教官、大丈夫か？」

一夏と真耶の間に入ったラウラが、ISを右腕だけ部分展開して真耶に翳しピタリと動きを止めているのだ。

小走りでラウラの元まで駆け寄ると、右掌は真耶に触れていないことが窺える。

恐らくは第三世代兵器に違いない…物体停止能力…つてところかね？

ラウラは俺が近寄って来たのに気付くと、すぐにISを解除して俺の方にドヤ顔で向き直る。

「お前よりもスマートに止められただろう？」

「バーカ、あんときや俺は生身だったっての。でもま、上出来だろ。それより…真耶、機体トラブルか？」

「あく、恥ずかしながら…私の専用機は調整中にして…パラメーターを弄りながら動かしていたらこんなことに」

ラウラの頭をよしよしと撫でてやると、至極満足そうに腕を組んで胸を張ってくる。

基地内で見ただあの刺々しきと言うものは其処にはなく、年相応の少女らしい一面が垣間見れる。

親がすっかりしていたからかねえ…子供が子供らしい表情をしているのは良いもんだ。

「まったく、山田君がピーキーな設定が好きなのは知っているが、軽く小娘を揉むだけなんだから適当で良かっただろうに…」

「いえいえ、代表候補生…それも今期待の新人ともなれば本気で相手をするのが筋というものです」

「それで事故を起こされては困ると言っているんだ…次からは気を付けてくれ」

「すみません…」

千冬も此方へとやってきて真耶を軽く諫めると、ラウラを見つめ

る。

ラウラは千冬の視線に気づいたのか、すぐさま姿勢を正して千冬へと向き直り直立不動の姿勢をとる。

「申し訳ありません織斑教官！非常事態と判断しISを無断展開しました！」

「教官ではなく、先生だ」

千冬は手に持った出席簿でラウラの頭を軽く叩き、クスリと笑う。

その顔は、どこか優しいもので一夏も見惚れるように見つめて白式の解除を忘れてしまっている。

「織斑にしるボーデヴィツヒにしる、非常時の緊急展開は法律において許されている行為だ。よってこの件に関して咎める事は無い。山田君は後で始末書を提出するように」

「ありがとうございます」

「は、はい…」

一夏は漸く緊急展開した白式を解除し、ホッと息をつく。

千冬の言う通り、普段の生活においてISを無断で展開する場合、法によって厳しく罰せられることになる。

最悪、国家反逆罪として一生を塙の中で過ごす可能性も充分にあり得るのだ。

だが、今のような人命が関わる様な大事故や、専用機持ちの命に関わる様な状況であれば、ISの展開は許されている。

前者は兎も角として、後者の場合最悪ISコアを機体ごと奪われてしまう可能性があるから、当然の処置だと言えるだろう。

「さて、話もついたところだ：オルコット、凰、お前たちには先ほどにも言ったように山田先生と相対してもらおう。現役国家代表に匹敵する技量を持つ教員である山田先生に勝つ事ができれば、山田先生の給料から天引きと言う形で1週間デザート無料券を進呈しよう」

「お、織斑先生!？」

「やるわよ、セシリア…」

「ええ：デザートパスは魅惑のアイテムですから！」

真耶は動揺したように目を見開き、千冬に抗議するかののように声を

張り上げる。

対して、セシリアと鈴はぎよろりとした爬虫類的な目で真耶の事を睨み付けている。

エモノハミツケタア…なんて、そんな感じの目だな、あれは。

俺は1人ポツンと皆から離れた位置に居るクロエへと目を向けると、クロエも此方に気付いたのか小走りで此方に駆け寄ってくる。

「何か、御用でしょうか？」

「んにや…ぼっちみたいに1人で居たからな…気になったってだけだ」

「は、はあ…」

クロエは困ったように眉根を寄せて首を傾げる。

関わった人間と言えば屑か災害かのどちらかしかないクロエは、他人との距離感と言うものが掴めないのだから。

幸いなことにこの学園に男性は殆ど居ない為、変にトラウマに触れる事はないだろうが。

一夏に関しては、俺や束の知人と言う事もあつて問題は無いようだ。

本音がおっとりとした笑みを浮かべたまま、ノロノロとした速度で此方へと歩いてくるとクロエの手を掴んで歩き始める。

「さく、くーちゃん避難しないと危ないよ〜？」

「布仏…さん、引つ張らないで…」

「G o G o !!」

「おー、本音、頼んだぞ〜」

ひらひらと本音とクロエに手を振り、千冬の元まで歩いていく。

おっとり鈍重な本音は、あれで結構な頑固者だ…クロエも暫らくは嫌々ながらも本音のペースに付き合わされることだろう。

ただ、その内他人との距離感も分かる様になるかもしれないな。

「遅い…」

「ぼっちのフォローも大変なんでね…」

千冬は唇を尖らせつつ、上空に上がった3人の姿を確認してリモコンのスイッチを入れる。

グラウンドの四隅から1本当たり3メートル程の柱がせり上がり、グラウンド全体にシールドエネルギーによる遮断バリアーが発生したようだ。

「シールドエネルギーの展開は完了した。3者とも準備は良いか？」

「はい！」

「では、試合開始!!」

千冬の宣言と同時に真耶対セシリア、鈴ペアの火蓋が切って落とされた。

## #32 梅雨の空と人模様

結果から言ってしまうと、2人の代表候補生は惨敗を喫した。

原因は、互いの連携を上手く取ることができなかったことが1つ。そして、真耶の事を舐め切っていたことが1つだ。

真耶が代表候補生として現役時代——今も現役だが——に付けられた渾名『銃<sup>キリシタ</sup>央<sup>シールド</sup>矛塵』は当時千冬と並んで有名だったらしい。

らしい、と言うのは真耶に関する情報の殆どが無かったためだ。

大体のメディアが、あまりにも強すぎた千冬ばかりを追っていた弊害だな。

とは言え、そこは代表候補生…それなりにモデルなりなんりの仕事も並行して行っていたため、一部のISファンの間ではそれはそれは人気らしい。

まあ、あんなデカいの持っていればなあ…。

勿論、モデルの仕事は千冬も例外ではなく、探せば当時モデル活動をしていた千冬の画像が少ないながらも出てくる。

恐らく、そう言った副業がメインとなって腕が鈍ってしまう事を恐れただろう。

勿論、最低限スポンサーの要望に答え続けていたから、こうして画像が出てくるわけなんだが。

授業は現在、専用機持ちを班長としてローテーションでの歩行訓練を行っている。

千冬と真耶は忙しなく各班の間を歩きかって訓練を指導し、専用機持ちは各々が各々のやり方で歩行訓練のサポートを行っている。

遠目から見て、それぞれの個性が出ているのが見て取れるのは中々楽しいものがある。

中でも教え方が断トツで上手いのはシャルルだろう。

他の班より比べて、スムーズに後退が出来るからな。

問題は…やはり鈴だろう。

如何せん感性に頼った物言いが多く、上手くコツが伝わって無いようだ。



「……アモン様、私はどの様にすればいいでしょうか？」

「ん、したら授業風景を眺めていて、気づいた点に関して細かくレポートを取ってくれ。後で反省会を開くときに発表してもらおう」  
「承知しました」

ISを展開及び装着することができないクロエは、教鞭を執ることが出来ない俺と一緒にグラウンドの端にあるベンチに座って授業を眺め続けている。

最初は黙々と見学をしていたのだが、何もしていないと言う状況に嫌気がさしたようだ。

かくいう俺も存在価値を問われているような気がして、何とも居心地が悪い気分浸っていたりしている。

あくまでも一般教員：ISは専用機を与えられているとはいえ、経歴の上ではド素人も良いところだ。

訓練には付き合っても、偉そうなことは言う事が出来ない。

「…不満か？」

「…いえ、大恩あるアモン様の願いと言う事であれば、現状に不満はありません」

「もちつと、本心で物事を語っても良いんだぞ？」

何度目かの同じような質問に同じような受け答え。

クロエは救われたことに負い目を感じているのか、俺や束の言葉にはある程度従順だ。

未だに束の事をママ呼びしてないが。

ともあれ、俺には本心からの言葉と言うには些か疑問が残り続けている。

この学園生活で、自分と言う個をしっかりと獲得してもらいたいの  
が俺の心からの願いだ…と言うと、些か父親面している感じがする  
か。

「いえ、これが私の心からの本心です。…それに…」

「それに？」

クロエは顔を上げてうつすらと目を開けると、鬼教官ばりにキビキビと訓練に打ち込ませているラウラを見つめる。

遺伝子強化試験体…その生き残りであるクロエと、完成系とされるラウラ。

系譜から見れば姉妹と言っても差し支えないか。

本人がそれを認識しているかどうかは分からんが。

「いえ、些細な問題です。アモン様や束様の抱える問題に比べれば」「あのバカはどうか知らねえが、俺なんて大したもん抱えちやいねえよ…着の身着のままっつてやつでな。ま、いい加減カゴノトリ状態は解消したいもんなんだが…」

貴重な男性操縦者、貴重な千冬と互角の力量を持つ者、経歴不詳、身元不詳の大道芸人。

そんな人間が誘拐されでもしたら大事だっつて言うんで、専用機を貰った今でも俺はこの学園に軟禁状態のままだ。

なんだかんだで色々と約束を反故している状態なんで、なんとかこの軟禁状態が解けないものか思案している真っ最中だ。

いや、タヌキに泣いて縋れば何とかかなりそうな気もするんだが…。勝手に出ていくと千冬に迷惑かけちまうからなあ…。

「アモン様は、今の生活が不満なのですか？」

「不満だなあ…。俺は、2本の足で旅するのが大好きだし、そういう風にできちまってる。それに…1つに留まると執着しちまいそうっつてのがな」

「執着…？」

欲張れば欲張るほどに身を滅ぼす。

抱え込みすぎれば、それは大きな爆弾になって破裂する。

それが自分1人が犠牲になるだけで済むならそれはそれで良いだろう。

だが、得てしてそう言った欲は周囲に深い爪痕を残していくものだ。

「まあ、臆病だから落ち着きがねえっつてこった」

「や、やめてください」

「ははは」

クロエの頭をワツシワシと撫でてやりながら朗らかに笑うと、千冬

が此方に手招きしている。

俺は持っていたメモ帳を量子化して拡張領域に仕舞い込みながら立ち上がり、千冬の元へと小走りに駆け寄っていく。

「授業も終了間際だ、お前の専用機を披露してもらいたい」

「あー、なんだかんだで調整が長引いていたからな。まあ、構わないだろう」

「全員、此方に集まって整列しろ！」

「はい！！！！」

千冬の掛け声と共に専用機持ちを含めた全生徒が、一斉に訓練を中止して此方へと集まってくる。

その行動には一点の曇りもなく軍隊が如しだ。

専用機持ちを先頭に整列を終えると、千冬はその場に腰掛ける様に指示を出す。

「これから、アモンに専用機を披露してもらおう。一般的なソレとは異なる機体だからよく見るように」

「はい！！！！」

「…妙なプレッシャーかけんじゃねっつの…」

ボソリとボヤキ、待機状態と化している黒鬼に意識を軽く向ける。

左手の薬指に嵌められていた黒鬼が微かに輝いた瞬間、瞬きするよりも早く全身を漆黒の装甲が覆いつくし、凶悪な面構えの鬼面が頭部を覆い額から鋭い角が伸びれば、背部に四基のアンロックユニット型のウイング・スラスタが展開される。

「これが、第三世代型ISの黒鬼だ。フル・スキン型なんて軍隊でも最近見ねえ仕様だろ？」

『あの時』も見てて知ってるけど…悪役にしか見えないわよ…」

「そら、デザインした束の奴に文句言え…」

鈴は若干引き気味の笑い顔で俺の事を見上げてくる。

兎に角、黒鬼は見た目の凶悪さのせいで威圧感が凄まじい。

そして、ISの中でもかなり小さい部類になる。

理由として、このISは胸元にあるコアがジェネレータの他に駆動制御を担っている為だ。

基本的に、ISコアが行えるのはエネルギー生成とPIC制御の2つのみとされている。

と言うか、そう設定しているそうだ。

意図的な制限を施すことで、急激な技術進化の抑制を図る…と言ったところか？

だが、黒鬼のコアにはその制限が無い。

本来であれば、パーツの各所に埋め込まれているであろう機器が無いため、その分スペースを埋める事ができる。

結果として、大幅なダウンサイジングを可能にしたわけだ。

更に、硬質化しているとは言え黒鬼の装甲を形成しているものは液体金属だ。

電気信号を送ることで筋肉の様に伸縮して、通常のISのパワーアシストと同等の膂力を発揮する。

この辺は今まで散々ぶっ壊してきたからな…束が気を利かせてくれたんだろう。

だが、その分燃費は高くついでしまっている。

常時エネルギーを全身に行き渡らせつつ絶対防御も展開しなくちゃならないから、こればかりはどうしようもないだろう。

「標準装備は両指のワイヤーブレードと背面にある4基のスレイヴ・ユニットだな。拡張領域にや余裕があるんで後付けに何でも乗せられるが…それをすると、今度はワンオフ・アビリティに影響が出るな」  
「[G:]」

「静粛に…織斑が発現しているんだ、アモンが発現させない道理は無いだろう？」

ワンオフ・アビリティと言う単語に生徒達は一斉にざわつくが、千冬の一声ですぐさま落ち着きを取り戻す。

それだけ、ワンオフ・アビリティを発言している操縦者と言うのは希少なのだ。

基本的に、ワンオフ・アビリティはISの次の段階であるセカンド・シフトを行う必要がある…とされている。

されていると言うのも、確認された事象の殆どがセカンド・シフト

後だったからなんだが。

セカンド・シフトをしないで発現しているのは、イタリア代表の『テンペスタ』そして、千冬が駆っていた『暮桜』の2機だけだ。

「まあ、作ってるやつが作ってるやつだからな…なんか細工でもしてるんだろ」

「え!？」

「瞬間移動!？」

俺は身じろぎせず上空へとワンオフ・アビリティによる量子跳躍を行い、生徒たちの目の前から姿を消す。

拡張領域を利用して自身諸共に量子化、規定範囲内に再び実体化する事で瞬間移動を可能にする『神隠鬼現』は、こと戦闘において絶大な能力を有する。

直撃しそうになっても、瞬間移動で安全地帯まで逃げてしまえば良い訳だしな。

俺はラウラにコアネットワーク通信で連絡を入れる。

「ラウラ、お前の機体にレールカノン積んでたろ？アレを俺に向かってぶっ放せ」

『…構わないが、機体に傷がついても知らないぞ?』

「そんなときや、俺が適当に言い訳しとくから気にすんなって」

ラウラは至極嫌そうな声で俺の言葉に答えると、1人生徒の列から離れてからIS『シユヴァルツェア・レーゲン』を起動させる。

篠ノ之 束の悪名は世界中に轟いている…そんな束謹製のISに何かあつたら、大事になるのは目に見えていると言わんばかりだ。

まあ、それでも信頼からか何なのか、お願いを聞いてくれるのは助かる訳で…。

「まあ、データも取れるし上司にや面目立つだろ」

『理解はしている…だが、私とてまだまだ子供なんだ…怒られたくない』

「ははは、可愛いもんだ」

可愛い、と言う言葉にムスツとした息遣いが聞こえて、一方的に通信を切られてしまう。

少し、背伸びをしたいお年頃…と言ったところか…ラウラは、俺に向かつて何の合図もなくレールカノンによる砲撃を一度行うが、その弾丸は俺に届く前に姿が掻き消え、ラウラの背後10メートル地点に落下し炸裂する。

ハイパーセンサー越しで見るラウラは驚きに顔を強張らせ、背後へと顔を向けている。

俺は腕を組んで忍び笑いを漏らしながらゆっくりと地上に降り立ち、ISの展開を解除する。

「な、何が起きたんですの!?!」

「何が起きたって…ちよつと弾丸を瞬間移動させてやっただけだ。インターバルがあるが、俺のワンオフ・アビリティは拡張領域を利用した量子跳躍能力だ。無機物であれば拡張領域の許す限り抱え込んで移動させることができる」

「…ハイパーセンサーで確認していたとは言え、レールカノンの弾丸をワープさせた? 一体どんな目をしているんだ…」

セシリアの言葉に答えてやると、ラウラが信じられないものを見る様に此方へと戻ってくる。

データ自体は取れていたらしく、何が起こったのかは理解できたが納得はできていないと言ったところか…。

「いやほら、アモン兄つて規格外だし、今更なあ…」

一夏は何も驚くことは無いと言わんばかりに首を横に振り、それにつられて幾人かの生徒達がうんうんと頷いてしまっている。

「あの速度なら千冬でも弾丸切り捨てる事が出来たんじゃね?」

「…まあ、出来ないとは言わんな」

((…ええ…))

個人的にそこは出来ないと言って欲しかったのは、まあ…内緒だ。

午前中の授業を滞りなく終えた俺たちは、後片付けを生徒達に任せてそそくさと昼休みをとることにする。

放課後は、いつも通り一夏達の訓練に付き合うことになるため、俺

はISスーツの上に衣服を着る事にした。

ISスーツは手入れが面倒だとは言え、生命維持装置の塊でもある。

じめじめとした梅雨の時期である今は、逆にISスーツを着ていた方が快適に過ごせたりする。

なんせ、発汗から体温からすべて管理してくれるからな…こればかりはIS様様って言うか、デチューンして一般向けに販売しても良い気がするな…。

手早く着替え終えた俺は、いつもの様に校舎の中庭にあるパーゴラの下にあるベンチへと向かうと、千冬が足を組んで静かにベンチに腰掛けている。

「遅かったな」

「そら、着替える手間があるんでね…あんな格好でうろついていたら変質者扱いになるだろうが」

俺は手に持った重箱をベンチに置き、手早く広げていく。

黙々と2人で食事をしていると、不意に千冬が口を開く。

「…デュノアの事は他言無用で頼む」

「一週間保つかどうかわかんねえぞ…？寮の部屋割りだって一夏と個室になるんだろうしな」

男として偽って転入してきたシャルル・デュノア。

シャルルの父親は、フランスのIS企業デュノア社の創設者にして現社長のダニエル・デュノアだ。

此処のところ、デュノア社は経営不振に陥っている…と言うのは、この業界では有名な話だ。

歴史的にライバル的な立ち位置にある英国に後れをとっている…第三世代ISの開発が難航している為だ。

EU防衛計画、通称『イグニッション・プラン』のトライアルも厳しいなんて話もチラホラだ。

「…どうにかして時間を稼ぎたい。私とて、このまま事の成り行きを見守るつもりはないからな」

「お前1人の影響力でどうにかできるような問題でもねえだろうが…」

ちったあ頭を冷やしな」

人1人の影響力と言うのはタカが知れている…どのような権力者であれ、それは変わらない。

世の中の物事と言うのは大多数の人間の意志によって流れ、決定し、実行されていくのだ。

そんな流れを引退した国家代表の教師が何かを言ったところで、どうにかなるとは思えない。

いや、1人だけいるか…鶴の一声だけでどうにでもできるような人間(？)が。

「私は、冷静だ」

「日本の元国家代表選手が、他国の一企業の問題においてそれと口出しできるわけねえだろうが」

「それでも、行動に移さないよりはマシだ！」

「ああ、そうだ…ガタガタ口に出して動かないよりも動く奴は遥かに良い。けどな、それで無駄骨折るのは違うだろうが」

軽く額にデコピンを叩き込み、大きくため息を吐く。

過去にデュノアと何があつたのかは分からないが、些か千冬は冷静さを失っている。

冷静沈着な鉄の女が、だ…相当由々しき事態に陥っていると思っても構わないだろう。

「っ！何をする!?!」

「あんまり、感情的になるんじゃないやねえよ…頭は冷たく心は熱くってな。まずは、事情を話せ」

千冬はハツとなった顔で数回瞬きをした後、ゆっくりと深呼吸をする。

自分が感情的になりすぎていた事に、今になって気付いたようだ。

千冬に其処まで思いつめさせるほどの人物が関わっている、か…妬けるもんだわな。

「…すまん」

「気にすんな…で、話してくれんのか？」

「ああ…その、どうと言う事は無い話ではあるんだが…」



千冬はゆつくりとペットボトルの緑茶を飲み込み、一息つく。

若干頬が赤くなっているのは、冷静さを失っていたことを反省して恥ずかしくなっているからか…？

俺は、懐から煙草を取り出して口に咥え、ライターで火を点ける。

「…シャルルの母親とは、国家代表候補生時代に鎬を削った間柄でな…。喧嘩する程仲が良い…とも言うのか？喧嘩もよくしたが、それ以上で得難い友情を互いに感じていたと思う」

「…デュノア社の社長の嫁さんか…？それから連絡があつたわけか？」

「そうだ。自分では止める事が出来ない…だから、どうか娘を助けてくれ、とな」

ゆつくりと煙を吐き出し、思索する。

「どうやら、この男装騒動はデュノア社長の独断で決行されたものよ。ようだ。」

形振り構わないこの作戦は、どう考えても無謀と言う他無いだろう…。

破滅願望がある、と言うのであれば非常に納得できる話ではある。

「まったく、ちったあ相談してもらいたいもんだね」

「すまん…友人の頼みだったからな。…私は、どうにかしてシャルルを無事に保護したい」

「だが、それも本人がスパイ行動をするかどうかに依るだろ。この学園に置いてスパイ行動はご法度。脅迫されたにしろそうでないにしろ、例外なくムシヨ送りだ。そこに情状酌量なんて無いのは、俺より勤務歴の長い千冬がよく分かっている筈だ」

現実問題、もし本当に法を犯してしまったのであれば、俺たちはシャルルを庇い立てする術は無い。

子供が大人に利用されて、臭い飯を食うのは我慢ならないが、法は法…そこに感情を持ち込むわけにはいかない。

「俺もお前も、学園を出る事は出来ない…直接直談判しようにも、それが出来ないっていうのは大分心苦しいもんがあるな」

「ああ…何とか現状を好転させる努力はする、と彼女は言っていたが、

それもどこまでアテにできるか分かったものではない」

「少しは友人を信じてやれよ…」

俺は呆れた顔でため息とともに煙を吐き出し、吸殻を携帯灰皿の中に放り込む。

千冬は千冬で片手で顔を覆い隠し、深いため息を吐く。

「そう言いたいのはヤマヤマなんだが…デボラは肝心なところでツメが甘くてな…男運もないし…」

「お、おう…」

酷く実感の籠ったその眩きは、その不幸に千冬自身も相当付き合わされていたからだろう。

巻き込み体質と言うのだろうか…いや、俺も人の事言えないくらいトラブルを持ち込んだもんだが。

「ある時は男にお金を取られたと泣きつかれ、ある時は浮気されて捨てられたのなんだのと…結婚して連れ子とは言え子供もできて、順風満帆だと思っていたんだがなあ…」

「なんつーか…お祓いにも行かせた方が良くね…?」

「本当にどうして…」

最後に深くため息を吐き、がっくりと肩を落とす。

此処まで男運がないと、悲しくなってくるな…いつか来た幸も今と違ってはただの不幸と化してしまっている。

そういう星の下に生まれてしまっていると言ってしまうえば簡単だが…今回は、そうも言っていられない。

子供が関わってしまったからな。

「何にせよ、後手後手で動くしかねえだろ…あんまり、思いつめるなよ?」

「ああ…歯がゆいがな」

梅雨の時期にしては爽やかな風が、俺たちの気持ちなど知らんと言わんばかりに一吹きするのだった。

### #333 眠れぬ夜に

午後の授業は滞りなく終え、職員室で期末テストの作成をしつつシャルルに関する本国での表向きの情報をネットで確認していた。

シャルルの存在は本国での認知度はやや低めで、大々的には発表をしていなかったようだ。

フランス発の男性操縦者が現れたが、事実関係は調査中。

操縦技術は目を見張るものがあり、すぐに代表候補生に抜擢され頭角を現した。

デュノア社と深い関わりがある人物らしい。

まあ、出るわ出るわ虚偽を交えた情報の数々が：おそらく、情報を錯綜させる事によってシャルルの人物像を臆気にし、身元を探らせない狙いがあるんだろう。

それは、シャルル自身の身柄の安全を考慮した苦肉の策の様に思える。

主導しているのは、母親のデボラの方か？

もちろん、国家ぐるみの陰謀ではあるので、政府の役人も関わっていることだろう。

なんにせよ、数日もすればフランス本国の方にもシャルルの素性が露呈するのは間違いない。

IS学園におけるISに関する技術情報、機体スペックに関するデータは部外秘として徹底的な情報統制が敷かれている為、あまり表に出る事は無い。

しかし、個人的な情報となると途端に緩くなるようで、まるで世間話が伝播していつているかのように情報が筒抜けになっている。

俺なんか此処に勤め始めて数日で、週刊誌に比較的正確な情報が載っていたくらいだったからな。

確か、雑誌名は：インフィニット・ストライプだったか？

IS関連の情報に關しちやこの雑誌が一番だっという評判で、学園の売店にも置いてある。

：話を戻すか。

ともあれ、この数日間でどれだけの事をしてやれるのかが課題となるだろう。

勿論、俺自身が動く必要はないし、それこそ本当に無関係と言いつ張って事態を静観することも可能だろう。

だが：シャルルがこれからやろうとしていることは、これから掴めるはずの幸せの可能性さえも無くしてしまう。

それだけはどうにも納得できない…それが例え親から命じられたものであつたとしても。

テストを作成する手を止めて、座っている椅子の背もたれに体重をかけて体をのけ反らせると、後頭部に柔らかいものが当たりおまけにさらに重量のある布に包まれた柔らかか…おっぱいに目を塞がれる。

「東、関係者以外立ち入り禁止だぞ」

「おんやあ？ ISの生みの親が IS 関連の施設に関係者じゃないからなんて門前払い喰らっちゃうのおかしいかな？」

「言い方変えるわ、学園所属者以外立ち入り禁止だ」

「ぐぬぬ…」

どうも思い悩みすぎて、大分時間が経っていたらしく外は陽が沈んで夜の帳が落ちている。

照明も俺が居た付近のみしか点いておらず、職員室は薄暗くなっていた。

少しばかり暑苦しいので、早々にこの天国からオサラバするべく姿勢を正そうとすると、東は俺の顎を両手で抱える様に掴んで離さない。

「お前な…一応、俺仕事なんだぞ？」

「えく、いいじゃんく、日中は色々抱き着くだけで我慢してたんだから、くんずほぐれつのイチヤイチャしようぜ」

「しねえつつの…そこまで不良でもねえよ」

腹筋の力のみで何とか姿勢を戻そうと四苦八苦するものの、がっかりと顎をホールドされてしまったと思うように上体を起こすことができない。

雰囲気から、東はチェシヤ猫の様なニヤニヤとした笑みを浮かべて

いるだろう。

「さつきも言ったが、俺は仕事なんだっつもの。色々やること多いんだぞ、これでもな」

「お仕事よりも束さんを優先すべきなんだぜ？」

「あのな、何事にも義務と責任があんの。人の世に生きるつてのはそういう事なんだよ」

「凡人凡俗なんて当事者同士で騒がせておけばいいじゃん！」

俺が構う気を起こさないことに大変ご立腹なようで、束はブーブー言いながら俺の頬を思いつきり抓る。

単純な世捨て人であるならば、まあそれでも良いんだろう。

他人と関わりを持たないのであれば、誰にも迷惑がかかることは無い。

だが、束は違う：ぶつちやけ異質も異質だ。

本人が世界中の人間よりも：それこそスーパーコンピューター等よりも優秀な頭脳を如何なく発揮し続ける為、その生み出したものは世情すらも変えてしまう。

何かを思いつくだけで、まるで子供が作り上げた積み木を壊してしまうように世界をかき乱しかねない。

本人に思ったよりも継続性が無いことが唯一の救いではあるが。

「あのな、天才だとか凡人だとかそういう括りは視野を狭めるぞ。お前がどんなに特別であろうとただの人間の篠ノ之 束だ。神にも悪魔にもなれやしねえ：させる気もねえけどな」

「特別を特別だとひけらかして何が悪いのさ」

「ひけらかしたところで得るものは何もねえってことさ。チャホヤされてえのか？」

「べ、べつに：：私は：：」

自己証明、自己顕示：：そう言った欲望があるのであれば、自らを大きく言って他者に認めてもらおうとするだろう。

だが、それは行き過ぎれば鬱陶しいだけだし、他者と大きく溝を作るだけだ。

元から他者を拒絶していたはずの束が、そういう欲を持っていると

は思えない。

考えられるのは、自分と他人との違いのギャップをそう言った言動、思考で誤魔化し続けている…と言った所か？

認めた人間に対して過剰な興味を抱くのはその反動からだろう。

なんだかんだで人肌が恋しいのだ…と思いたい。

悪魔として他人の考えが分かる訳ではない…あくまで推論だ。

顎の拘束が緩んだ瞬間に上体を起こして束から離れ、椅子を回転させて軽く自分の足を手で叩く。

「私は、なんだよ…？」

「う…：今日のあつくん意地悪じゃない？」

「さってね、仕事を邪魔されたからじゃね？」

束は俺の意図を理解したのか此方に背を向けて、思い切り体重をかける様に俺の足の上に腰を下ろす。

ぎしつと椅子が軋む音がするものの、そこはIS学園…教師が使うものも一級品ばかりなのでとても頑丈且つ座り心地の良いものなので壊れるような心配はない。

何よりもこの束…やたらと体重が軽い…胸にバカデカイ重りつけてんの。

束の頭からメカうさ耳を取り外して机の上に置き、胸の下に腕を回して優しく抱きしめてやる。

「随分座り心地が悪い椅子だね！」

「おー、だったらとつとと降りろや」

「えー、誰かが私をがちりホールドしてるからね〜？」

抱きしめてみると分かるんだが…存外に此奴の身体は華奢だ。

それこそ、少し力を入れれば枯れた木の枝の様に簡単に折れてしまいかもしれない。

一体こんな体のどこに、俺と張り合うような膂力があるのやら。

束は俺の体に自分の体をしつかりと預ける。

「ねえ、アモン…君には居なくなっただけほしくないよ。こうやって抱きしめて、安心させてくれる存在は…きつと君以外に居ない」

「あんな、俺はわるーい男で、何時か居なくなるんだよ。それだけは変

えられねえ」

「だったら、私はどこまでも追いかけるよ…何処までもね」

「…やめとけやめとけ。お前にゃ長生きしてもらわなくちゃな」

…欲が深い、とは言え、出来る事と出来ない事は理解している。

あくまでも違う世界の存在…この世界にとつて俺はお邪魔虫で、お目こぼしで此処に居させてもらっているような状態に過ぎない。

もし、睨まれてしまえば、この場で俺と言う存在は消え去ってしまうだろうよ。

そして、逆もまた然りなのだ。

「…お前、甘ったるい匂いしてんなー」

「んん？セクハラ案件かな!?」

「バーカ、お前は俺のもんだから何しようがセクハラにやならねえよ」

束のうなじに顔を押し付け、深呼吸するように匂いを嗅ぐ。

好いた女の匂いと言うのは、本人にとつて香水に勝る良い匂いになる。

当然、千冬も同じように良い匂いがするもので、ちよくちよく嗅いでいたりする。

寝てる間に。

いや、束は兎も角として、千冬にそれをやると羞恥のあまり全力のレバーフックが飛んできたりする。

可愛いんだか可愛くないんだかな…。

「え、そしたら一発又いちやおうぜえ」

「おっさん臭いので却下」

「乙女に向かって!?!」

俺は漸く観念してPCの電源を落とし、帰り支度の準備を始める。

気付けば食堂が閉まっている時間だ…寮長室で千冬も帰りを待っているだろうしな。

「お、お仕事しゅーりょーかな?」

「とつと帰って明日の準備せにやならんからなあ…」

束の頭にメカうさ耳を乗っければ、2人そろって立ち上がり職員室を後にする。

すでに灯りが落とされた校内は暗くいかにもな雰囲気が漂っているものの、互いにさして怖がるわけでもなく互いに互いを茶化し合うように話しながら帰路へと着く。

：他人にもこうやって接してりや、ちよつとネジがイかれた程度の女で済んでるんだがなあ…。

深夜、阿呆みたいにデカイベッドで目を覚ました俺は、ゆつくりと体を起こして左右に視界を向ける。

左手側には、クロエを抱き枕代わりに背中を向けて眠る束の姿が見える。

時折、クロエのくぐもつた寝言が聞こえるが、悪夢を見ているのではなく単純に顔に胸が押し付けられているからだろう。

右側には千冬が背中を向けて静かな寝息を立てている。

虫の鳴き声1つ聞こえない静寂の中、俺は静かにベッドから抜け出して寝室を出る。

リビングまで向かってテーブルに放置されていたライターと煙草を手に取りれば、そのまま寮長室を出て寮内の廊下を静かに歩いていく。

中途半端に寝て中途半端な時間に目が覚めてしまったせいか、やたらと目が冴えてしまっているのだ。

どうせ、誰もこんな時間に寮内をうろついているとは思えないので、上半身は何も身に着けていない。

ゆつくり一段一段階段を昇っては各階の廊下を歩いて見回りを行い、生徒たちが寝静まっていることを確認する。

一通り確認を終えれば、そのまま屋上に上がって備え付けのベンチに腰掛けて煙草を口に啜える。

持ってきていたライターで着火しようとするが、中々火がつかず少しばかり苛立ってくる。

どうも中身のオイルを切らしてしまっている様だ。

「つたく…」



仕方なく煙草を箱の中に戻し、ぼんやりと頭上に輝く星空へと目を向ける。

星の位置や星座等は世界によって異なるものだが、輝き事態に大きな差異は無い。

環境汚染で昔よりも映えなくなったと言われては居るものの、それでも星空は美しく俺の目に映り込む。

「どこに行ったかと思えば…寝なくて良いのか？」

「まあな…そう言う千冬はどうなんだ？」

「私か？私も問題ないさ…ただ、なんだ…どうもお前が居ないと寝つきが悪くてな」

屋上に現れた千冬は少しはにかみながら此方へと歩み寄り、俺の隣に座り体を寄せてくる。

梅雨時とは言え夜中ともなれば肌寒くなるもので、薄着の千冬の肌が触れてほんのりと温かく感じる。

「…その、お前に言いたいことがあってだな…？」

「んだよ…改まって言う事なのか？」

千冬は恨みがましい様な視線で俺を見上げてくる。

腕をガツチリと掴み、逃がすつもりは無いようだ…どうもハツキリと俺に答えてもらいたい様だ。

俺の言葉に千冬は頷きはするものの、言い出し辛いのか中々話し出そうとしない。

「言いたい事、あるんならハツキリ言ってみろよ？」

「…いや、やはりいい！私のキャラでもないしな！」

「言わなきゃ伝わらねえぞ…？」

まるで酔っぱらったかのように千冬は頬を赤くさせて顔を背けるものの、決して腕を離さない辺り離れるつもりは無いらしい。

俺は少しばっかり困ってしまつて、どう話を切り出していくべきか悩んでいると、ぽそぽそと千冬が何か呟いているのが聞こえてくる。

「はつきり言えつて…俺、何かやらかしてんのか？」

「そうではない！そうではないんだが…」

「なら、なんだよ？デボラ絡みで何かあったのか？」

準備に時間がかかる様な口ぶりだったのだが…シャルル関連で何か問題でもあったのだろうか…？

ただ、状況的にはどうにもシャルル絡みの話をするようには思えず、俺hあたただただ困惑していくばかりだ。

千冬は意を決したかのように此方をキツと睨み付ける。

若干涙目なんだが。

「…構え」

「は？」

「私に構えと言っている。あのバカばかりとベタベタするんじゃない！」

「アツハイ」

掴まれている腕は羞恥のあまり強く握り込まれ、ミシミシと言う音を響かせはじめる。

本気で恥ずかしいらしく、千冬は顔を茹蛸の様に真っ赤に染め上げている。

「確かに、私は公私を分けようと言う話はした。生徒に示しも付かんしな！だと言うにも関わらずあのバカが引っ付いても説得もしないのはどういうことだ!？」

「落ち着けて…束が説得してどうにかなる様な奴かよ…？」

「ぐうう、小娘の様な物言いはせんと誓っていたがな、私だって初恋なんだ周りの目を気にせずくっついていたいと思っただって良いだろう？」

人物像…と言うのは他人が作り上げるものだ。

ああいう人だ、こういう人だ、だからきつとこんなことはしないんだ…有名であれば有名であるほどにそうした虚像は本当の心を雁字搦めに締め上げ、染められていく。

千冬もそう言った類のものであったんだろう。

なんせ、世界に轟く初代ブリュンヒルデ…ストイックさばかりが目立てば、男に現を抜かすなんて事は出来なかっただろう。

「人一倍恥ずかしがりなのに、そういう事望んでるのな…可愛いやつめ」

「かわ… 挿揄っているのか!？」

「知ってるか…? 好いた女はどんなに醜かろうが、可愛く見えるものなんだぜ」

千冬の後頭部に手を回せばそのまま体重をかけてベンチに押し倒し、鼻先が触れるか触れないかくらいまで顔を近づける。

千冬はきよろきよろと挙動不審気味に視線を彷徨わせ、やがて俺へと視線を固定する。

「本当に、可愛いやつだな…千冬」

「何を…」

「美人で腕つぶしも強くて、何より目が良い。腐ってねえ綺麗な眼だ… いったって真っ直ぐに見つめてくるその眼が」

そんな人間に好かれていると言うのは、存外に心地いい。

ゆっくりと顔を離すと何かを期待していたのか、千冬は残念そうに声を漏らす。

「お前は… 中々手を出さないな？」

「責任とってやれんのか分かりもしねえのに、迂闊にやれつかよ…」

「お前にしては随分と弱腰じゃないか」

千冬はそう言うなり俺の首に抱き着いて無理矢理引き寄せ、些か強引にキスをしてくる。

俺はそれに逆らうことはせずに受け入れ、互いを貪る様に舌を絡めていく。

さっきまでのしおらしい態度は何だったのかと言いたくなるようなその行動は長く続かず、自然と離れていく。

「私は… お前にだつたら構わないと思っっているんだがな？」

「随分と積極的じゃねえか…」

「色々と吹っ切れもする。私はな、アモン… お前が思う以上に我儘な人間だからな。このままあのバカのリードを許すつもりはない」

千冬はフフフと不敵な… それでいて綺麗な笑みを浮かべて俺を見つめる。

吸い込まれそうな黒い瞳はいつものような鋭さは無く、どこか優しげだ。

「もうちよい仲良くできねえかねえ…?」

「欲深な自分自身を呪えよ?ま、まあ…そういう所も好きだから文句は言っていないだろう?」

「ありがてえこった…」

こと恋愛に関しては引つ込み思案気味な癖に、一度吹っ切れると大胆になるな…。

抑圧している反動ともとれるんだけどな…。

適度にガス抜きしてやらなきやいけないかもしれない。

「千冬、そろそろ外出許可下りても良いと思わねえか?」

「いきなりどうした?」

「ん、いい加減学園に缶詰状態は勘弁してくれって事さ。専用機もあるし、東の関係もあつて学園からは早々離れられねえ…なら、許可が下りたって良いと思うもんだろ?」

「それは…まあ、そうなんだろうが…」

千冬は難色を示すかのように口ごもる。

恐らく、学園は俺の矢鱈と良いフットワークを警戒しているんだろう。

フラツと雲隠れでもされては学園の、ひいてはIS委員会の面目丸つぶれなんてことになる。

あくまでも俺はモルモットって体でいるからな…役人どもは。

「それにほら…お前と色々出掛けてみたいのもあるしな」

「…建前でもそういう風に言われるのは、嬉しいものだな」

「そういう風に言うなよ…悪い男みてえじゃねえか…」

「事実、悪い男だろう?お前の言うイイ女を2人も囲っているんだからな」

千冬はニヤリと笑みを浮かべた後に、真剣な表情に切り替える。

先ほどまでの甘ったるい雰囲気など霧散してしまったかのようだ。

「恐らく、許可されるにしても市内の範囲だけだろう。監視付きでな」

「男性操縦者ってだけでこれだ…そんなに惜しいもんかねえ…?」

「世界に2人だけの存在だ…殺してでも奪い取るなんて考える奴なんぞ五万というだろうさ」

「それが女ばかりだつてんなら…冗談くらい言わせろよ…」

軽口を叩いて茶化そうとするが、殺気の籠った視線を向けられて軽くため息を吐く。

千冬もほぼ同時にため息を吐いて、俺の額を指先で軽く小突く。

「お前は死なないだろうが死なれては困る…アモンが居なければ、寂しいのだからな」

「そう簡単にくたばりやしねえよ…間近で見てるだろうが」

「それでも、だ…方が一と言う言葉があるだろう？だから、アモン…せめて、死ぬのだけは勘弁してくれ」

「それに関しちゃ約束できる。絶対にな」

千冬の頭を宥める様に撫でてやり、安心させる。

口約束であつても、こと生き汚さに関してはこの世界でもトップだと言う自負がある。

なんせ、この身は悪魔…人の手でどうにかなる物ではないからな。

「妙に自身たつぷりだな…」

「自分の体の事は自分がよく分かっているつてもんだろ？ISと生身でやり合つたつて生き残る自信はある」

「…悪魔は言う事が違うな」

「そら、悪魔だからな」

2人で顔を向き合わせて笑っていると、東の空が徐々に明るくなつてくるのが目に入る。

なんだかんだで夜明けを迎えてしまったらしい…。

「そろそろ戻つて弁当の準備しねえとな…」

「結局、夜更かしをしてしまったか…」

今更になつてやってきた睡魔に2人して肩を落とし、腕を組んで屋上から出ていく。

何事もなく、こうやって日常を過ごせればいいと…叶いもしない願いを思いながら。

## #34 悪魔と悪だくみ

獅子<sup>シヤ</sup>身<sup>ル</sup>中の虫候<sup>ル</sup>補を抱えてから数日…特に状況に変化が起こることは無く、今日も今日とて平和に時間が過ぎていく。

シャルルは芝居がかつてはいるものの、上手く女生徒達をあしらいつつ一夏の貴重な男友達ポジションをキープして常に傍に居続ける。

放課後の自主訓練時も2人で良く行っているようだが、目立った模擬戦闘を行っておらず一体何のために男装しているのか分からなくなってくる。

そんなシャルルが女だと言う事を知らない箒やセシリアは、一切警戒することなく舌戦でのキャットファイトを時折繰り広げている。

鈴が時折仲裁に入るの——ついでに適当な餌の用意——をするので、大事に至ることは無い。

ラウラはラウラで純粹に織斑 一夏と言う人物に興味があるのか、箒達の目が離れた隙を突いてちよこちよここと親交を深めている。

一夏もそんなラウラに友好的に接していて、交友関係はすこぶる良好と言えるだろう。

時折軍隊格闘の訓練も施してもらっているらしい。

さて、ここで問題になるのがクロエの存在だ。

兎に角、他人と言うものを寄せ付けようとしな…休み時間の時は俺の傍を雛鳥の様について回り、時折不安そうな顔で此方に顔を向けてくる。

今までにない環境が幾許かのストレスとなり、何時傷つけられるかわからない状況に怯えているようにも見える。

一筋の光明があるとするならば布仏 本音の存在だろう。

時々飴をあげてはクロエにけしかけているんだが…そも取りつく島が無ければ中々交友関係にまでは発展しない訳で…。

「クロエよう…もうちよい、人付き合い上手くなろうと思わねえ?」

「…それは、必要な事でしょうか?」

「まあ、必要だろ。いつまでも束の傍に居られるわけでもねえぞ?」

放課後の教室で机に腰掛けて、椅子に座るクロエを見つめる。

教室には生徒が一応一人も残っていないので、クロエは普段閉じている瞼を開けて俺の事を見つめ続ける。

「私は命を救ってくれた大恩あるアモン様と束様にご奉仕する事ですか、その恩に報いる術がありません」

「お前が命を拾ったのは偶然だろ…確かに施術したのは束だが、少なくとも俺に恩義を報いる必要はねえ」

「いいえ、アモン様が居なければ…私はあのまま無残な木偶人形として辱めを受け続けて居た筈なのです。で、あるからこそ…私は…」

クロエはふるふると首を横に振り顔を俯かせる。

クロエ自身は本当に何も持っていない。

生まれた時から死にかけ、朽ちる寸前まで…使えるものは自分の体しかないと思いついでいる。

俺はガシガシと頭を片手でかきむしりながら、深くため息を吐く。

こういった手合いは非常に頑固だ…悪い事ではないが、今回に限った話で言えば悪い事だろう。

「俺はな、見返りが欲しくてお前を拾ったわけじゃねえ。俺が気に食わねえから拾ったんだ」

「ならば、これは私が勝手に聞いている恩義なのです。それに報いなければ私は、私のちっぽけなメンツすら保てない」

「…なら、俺がこれから言いたいことも分かるな？」

「…それが、本当に望みなのであれば」

人間関係は矯正されて出来る物ではない。

そんな人間関係など脆いもので、必ず何処かで破綻しなかった事になる。

俺は深くため息を吐いて肩を落とす、首を横に振る。

「とりあえず、束の相手してやってくれ…」

「わかりました。それでは、また後程」

クロエは席から立ち上がると小さく頭を下げて教室を出ていく。

俺は腕を組んで天井を見上げながら思索してはため息を吐き、すぐに眉間を揉んで教室の隅に配置されている掃除用具入れのロッカーを睨み付ける。

「出てきなデバガメ猫。出てこなきや、扉を瞬着で塗り固めんどぞ？」

「……えー、何時からバレてたのよ？」

「最初っから…っーか、授業はどうしたんだよ…お前午後の授業から居ただろ？」

教室に置いていたトランクから仕事道具である操り人形…サニティを取り出して両手に瞬間接着剤を持たせて構えさせる。

すると、観念したかのようにロツカーの扉が開き、此処にはいない筈の生徒…更識 楯無生徒会長殿が悪びれもせずに出てくる。

一応国家代表とは言えこの学園の2年生である此奴には、いかにハードワークであろうとも生徒として授業を受ける義務がある。

此奴は堂々とその義務に反して、俺と一夏…そしてシャルルの行動を観察していたのだろう。

暇人め。

「ふっふーん、基本的に運営がメインになる生徒会長は、ある程度の授業は免除されてるのよ？」

「おー、公的な不良生徒めが…ようも言いよるわ。で、この時間まで残ってたのはどんな理由だ？」

「あら、それは貴方が一番理解している事ではないかしら？」

楯無は、此方へしやなりしやなりと蠱惑的に歩み寄りながら笑みを深める。

楯無の言う通り、俺も少しばかりこの生徒会長…いや、この学園の黒い面を司っている更識には用事があった。

千冬が交渉しているであろう外出許可はそう簡単に下りないだろうし、なにより今は時間が惜しい。

先を見据えて行動しておかないと、ガキが1人臭い飯食わされる羽目になるからな。

そこで、この目の前の猫の出番となる訳だ。

俺は若干無然とした表情になりつつも小さく頷き口を開く。

「なら、話は早えわな…ぶっっちゃけ何処まで把握してる？」

「それはもう根掘り葉掘り。手、貸してほしいでしょ？」

「ああ、そりやもう人形になつてくれるなら喜んで借りたいわな」



俺の言葉に楯無はより一層に笑みを深める。

根掘り葉掘り知つていふ事だ、いつでも莫迦親父にトドメを刺せると言う事だ。

だがここで安易に手を取ると、絞り粕になつても絞られ続ける未来がちらちらと見える。

楯無の所属国家はロシア：アメリカと張り合い続ける大国は、できる事ならば男性操縦者と未永いお付き合いをしたくて仕方ないだろう。

「あら、そのお歳でお人形遊び？」

「おいおい、俺は人形遣わせたら右にも左にも出るもの居ないんだぜ？」

軽く肩を竦め微かに指を動かせば、サニティに可愛らしくお辞儀をさせる。

楯無はそれをあまり興味なさそうに見つめ、すぐに俺へと視線を移す。

「学園としては立ち位置を変えるつもりはないわ。あくまでも、騒ぎを起こさなければ現状維持。だって、そのままでも問題はないのだから」

「情が無えのは為政者として当然の有り方だ。一応確認しとくが、騒ぎが怒ればシャルルは学園から追放されんだな？」

「ええ、そうなるわね。シャルル君にその気が無い事を祈るばかりねえ」

楯無は扇子を開いて口元を隠し、その笑顔を隠す。

俺は対照的に、眉間に皺を寄せて仏頂面になっている。

言質を取ることはできた。

問題は手段とタイミングになる訳だが、こればかりは運否天賦に身を任せるしかない。

義母がどれだけやれるのか、シャルルがどこまで隠し通せるかと言う所に掛かっている。

最悪一夏だけにバレルだけならまだいい。

鈴も：まあ、良いだろう。

しかし、箒とセシリア：あいつらにバレるのだけは不味い。

一夏が関わる事になると簡単に顔や態度に出てくるからな…。

「俺としちゃ、陰謀だのなんだのはガキ巻き込まねえで他所でやれっ  
と感じだな。IS自体が若いせいで、乗り手まで若いにしてもだ」

「ISに関わるのなら、遅かれ速かれ歯車に巻き込まれるのは当然の  
事よ。人1人が主張したところで、歯車は容赦なく噛み砕く。だか  
ら、先生も限界を知るべきなのよ」

「それは忠告かい？」

「ええ、もちろん。貴方は良い教師だと思うわ。自身を飾らずに居ら  
れるのだから」

パン、と乾いた音を立てて扇子を畳んだ楯無は、クスリと笑って俺  
の周囲を回る様に歩いていく。

俺の存在に対して懐疑的だった楯無は、どうやら1人の存在として  
俺の事を認めてくれたらしい。

とは言え、認めただけでありだから無償で手を貸すなんてことはあ  
り得ない訳だ。

今後とも末永いお付き合いをする為、餌のチラつかせをしている事  
には変わらない。

どこまで本気でそう考えているのかは、俺には分からないのだが  
…。

「忠告痛み入るって所だが、忠告聞いても止まらねえのが俺でな？」

「でしようね。無鉄砲は悪徳よ、セ・ン・セ？」

「悪徳を成すのが悪魔の本分だろうよ。まあ、でも…お前の手はギリ  
ギリまで取るかどうか悩ませてもらうかね？」

なににせよ選択肢が増える事は好ましい。

この身は所謂囚われの身みたいなものだからな…コネが多少はあ  
れど、連絡を取る手段が限られている。

状況に一番近い部分に居るであろうあの男と連絡を取るのも、戸惑  
いとためらいがあるしな…他所の軍隊所属の人間に相談する訳にも  
なあ…基地1つ壊滅させてるし。

「あら、案外慌ててないのね？」

「大人は慌ても顔や態度に出さねえもんなのさ」

「ヒューツ、見ろよあの綱みたいなメンタルを。こいつは何かしでかすつもりだぜ！」

「褒めるな、照れるぜ」

実際問題、一番最悪で一番最良な手が無い訳でもない。

あれこれ尽くしてやれば喜び勇んで行動起こす人間が、超身近な場所に居るからな。

絶対に取りえない手ではあるけども。

「ほんと、先生とは末永いお付き合いをしたいわね」

「お、あんまり甘く見てると食い散らかすぞ？」

「やだ、先生つたらだ・い・た・ん」

話すことはある程度話したので世間話でもして適当に終わらせようとする、教室の扉がガタツと言う音を響かせる。

2人して扉へと目を向けると、扉に設けられた小窓の端に目の前の楯無と同じ色をした髪が見える。

ふ、と楯無の方を見ると大して気温が高い訳でもないのに全身をびっしょりと汗を濡らしていた。

「…大丈夫か？」

「え、え、ええ…大丈夫…更識 楯無は狼狽えない…狼狽えないのよ」  
楯無は表情を隠すように扇子を震える手で広げるものの、センスにはばつちりと『狼狽』の二文字が描かれている。

恐らくイメージインターフェースシステムを応用した、ハイテク扇子なのだろう。

つまり、目の前の人間が狼狽える程度には、聞かれない言葉が聞かれたと思っっているわけだ。

俺は、少しばかりそんな存在に対して興味が湧いたので、指を軽く舞わせてサニティを動かし、扉の前に待機させる。

「めっちゃ狼狽えてるじゃねえか。んだよ、オボコじゃあるめえし…」  
「生まれてこの方恋なんてしたことないけど、経験はそれなりにあるわよ」

「まあ、暗部は色々あるもんなあ？」

楯無は上目遣いで顔を真っ赤にしながら此方を睨み付けてくる。

：俺はと言うと、内心複雑な心境ではある。

や、貞操がどうか言うつもりは無いが…こう、オツサンとしてモヤツとしたものがだな？

俺は拳で自分の側頭部を軽く小突く動作でサニティを動かして、扉を勢いよく開ける。

果たしてそこに立っていた人物は、扉に耳を押し付ける様にするポーズのまま固まっていた。

「え、えつと…」

「か、簪ちゃん…」

「…っ」

簪ちゃん：要は楯無の妹はコホン、と軽く咳ばらいをしながら姿勢を正してキリツとした顔で此方を見つめてくる。

対照的に頬をひくつかせて気まずそうな顔をする姉の顔を見て、俺は必死に笑いを堪える。

さつきまで此方を手玉に取ろうと画策していた人間のペルソナが簡単に剥がれ落ちたからな…こういうのはいつ見ても愉悦がこみ上げてくる。

なんせ、悪魔なもんで。

「ご、ごゆつくりいっ!!」

「待って！簪ちゃん！待ってえッ!!」

「ぶはっ…くくっ…!!」

簪はその場から逃げ出すように走り出し、楯無は誤解を解く為に凄まじい速さで駆け出して簪を追いかける為に慌てて教室を出ていく。

俺は俺でついに堪えきれずに笑い出して、大声で笑いだす。

別にそうと操作したわけでもないが、サニティはどこか呆れたように俺を見つめ続けていた。

IS学園1年寮はサロンや図書室、さらに大浴場にエステルームとおよそ学園の寮とは思えないほど充実した設備で溢れている。

さもありません、女性が扱うISは本人のボディスタイルが強調された機体デザインになるのが今のトレンドだ。

必然的に若い身空から美を磨き続けなければならぬ宿命となつてしまっている。

最新の機械設備にこうしたケア設備…寄付やら学費やら日本の血税をつぎ込んでも維持するだけでも大変だろう…。

あまり、俺には関係は無い訳なんだが。

そうした設備に不備が無いかを確認するのも寮長の役目であり、定期的に各施設を回つて点検したり、利用者に意見を募つては纏めたりしている。

そんな訳で寮に戻つても書類仕事をちよこちよこやっている訳なんだが、今日俺の姿はサロンの一角にあつた。

部屋では所構わずに束がへばり付き、そんな姿を見て千冬もへばりつきと、身動きが取れなくなるためだ。

正に男冥利に尽きる。

両手に華つてのは非常に美味しい要素ではあるが、お仕事だけは真面目にこなしておきたい俺は2人の額に少々痛いデコピンをかまして黙らせ、こうしてサロンでラフな格好をした生徒達の視線を浴びながら仕事をしている訳だ。

普段、制服姿で——改造しているとはいえ——キツチリしている姿を校舎内で見ている身としては此処に来てから2か月ほど経つたとは言え、ギャップが中々面白い。

勿論一夏や俺を意識しているのか、いささかセクシーな格好で歩いている者がいるものの、決してそういう素振りを見せない所為か大多数が自身の恰好をあまり気にしなくなつてきている。

一種の家族のような共同生活が生んだ信頼関係とでも言うのだろうか…？

そんな中、少し異様な格好の少女が俺の元へとやってきた。

「少し、いいか?」

「ラウラか…ちつと待つてな」

声をかけられチラツと横目で見ると、そこには制服姿のラウラが

立っていた。

時間にして20時…もはや授業なんて無いのにだ。

普通であれば、すでに大浴場で今日の垢を洗い流してパジャマなりなんなりに着替えているもんなんだが…。

「…用件があるのが分かかって聞くんだけどな？」

「うむ」

「なんで制服なんだ？」

サロンに居た生徒達も同じ疑問が浮かんでいたのか、一斉にコクコクと頷く。

そんな反応を見て、俺も一瞬だけ安堵する…認識を間違えちゃいなか少しばかり不安だったからな。

そんな俺たちの思いとは裏腹に、ラウラは何を言ってるんだ？と言わんばかりのドヤ顔になる。

「服など制服だけあれば問題ないだろう？」

「者ども出合えい!!!」

「二二ははーっ!!!」

指をパチンと鳴らし集合をかけると、サロン内に居た生徒達が一斉に俺の元まで集まり立膝を着いて一斉に傳く。

その異様な光景はドイツ軍特殊部隊隊長の目には異様に映ったらしく、一歩後ずさっている。

「殿、何事でありましょうか！」

「うむ、そこなドイツの小娘に御洒落と言うものを教えてやれ」

「ハッ！承知いたしました！」

「さあ、みんな！ラウラちゃんを確保して出荷よく！」

「どこへだ!？」

新しい玩具を見つけたと言わんばかりのギラついた目で、ジリジリとラウラを取り囲む生徒達。

ラウラは腰に下げていたナイフを握りながら、周囲を警戒しながら壁際へと追い詰められていく。

「お前な、良い歳した乙女が制服だけで充分とか言うんじゃねえよ」

「二二そうだそうだー!」

「ラウラちゃんは美少女なんだからもとおめかししなきゃダメ！」  
「わ、私はこの学園に遊びに来たんじゃありませんぞ!？」

ラウラは、鬼気迫る生徒達家臣の気迫に気圧されつつも必死の反論をする。

確かにそれは正論である……この学園は優秀なIS操縦者や技師を排出するために作られた専門学校である。

だが、IS操縦者がISに乗る以外に行っている仕事を思い出してほしい。

そうだね、グラビアアイドルだね。

「あのな、IS操縦者と言うのはISに乗るだけを求められるものじゃねえ。言ってしまうえばアイドルだ。普段の私生活や己の美と言うものが必然的に求められてくる。にも拘わらず、制服だけで十分だとか言うんじゃないよ」

「ぐ……」

「お化粧だっしてないでしょ?」

「すっぴんでそこまで綺麗って嫉妬ものだけだね!」

正論を振りかざし、更にやいのやいのと生徒達を取り囲む状況に諦めたのかラウラはがっくりと肩を落として深いため息を吐く。

女の子って言うのはな……もつとこう……キラキラと輝いていなきやいけないんだよ……。

「何虐めてんのよシショ……!」

「っだー!？」

突如スパーンと言う快音と共に後頭部に衝撃が走り、俺は痛みに頭を押さえる。

声をかけられた方向へと目を向けると、ハリセンを肩に担いだ鈴が呆れた顔で此方を見つめている。

「ばっか、これは正当な教育だっつもの」

「涙目の女の子取り囲んで言葉攻めしてるようにしか見えないわよ」

「り、鈴音……」

「鈴で良いって言ったでしょうが……まったく、あんたらもやり過ぎないようにしないとトラウマになっちゃうわよ?」

「「ハイ…」」

鈴は散れ散れと発破をかけて生徒達を散らし、鈴が少しだけ涙目になっっているラウラの手をとって俺の前まで引つ張り出す。

「で、なんか話があるんでしょ？」

「あ、ああ…今まで、アモン・ミュラーが何をしていたのか聞きたくてな…」

「そんな面白い話でもねえぞ…？」

先ほどまでの騒がしさと打って変わって、サロンの中に生徒達が居るにも関わらずしん。と静まり返る。

皆、ソファなり椅子なりに腰掛けて談話するでもなく、興味津々と言った感じで俺の方へと目を向けている。

俺は諦めたように1つため息を吐いて、ラウラと鈴に向かい側に座って待つように伝えて席を立つ。

長話に必要なお茶とお菓子を用意するためだ。

一体どこから話すべきだろうか…？

恐らく織斑家に世話になっている間の事は基本的に伝わっているだろう。

何か、面白いエピソードでもあれば良いんだろうが…俺はそんな事を考えながら給湯室へと入るのだった。



## #35 悪魔は嗤う

「と、まあそんな感じで、日本を離れた後はユーラシア大陸…いや、ヨーロッパを避けて右へふらふら左へふらふらつてな感じだ。大方見て回ったんで、久々に千冬と一夏にでも会おうか、なんて思っ再び日本に戻ってきたら…」

「偶然居合わせたISに触れて、起動させてしまった…と言う事だな？」

「正確にや、未成品のつて付くけどな」

およそ2時間に渡って語った昔話は、サロンに集っていた生徒達にとって娯楽に勝る物だったらしく、時折ラウラや鈴以外にも茶々や質問が飛び交うほどであった。

味気ない訳ではないが、娯楽小説の様に事件に巻き込まれることは殆ど無かった旅なので、現地の様子や文化なんかを語るしかなかった。

しかし、それでもこの学園には様々な国から人が来ているだけあって、俺の話に同意したり立ち寄った場所に住んでいた、なんて声が時々聞こえてきた。

こうして見ると世界と言うものは1人で居るにはあまりにも広すぎて、狭いような気がする。

もしかしたら、この学園に俺が旅をしていた時にすれ違った人間が居るのかもしれない。

奇縁と言うものは摩訶不思議なもので、どこでその縁が出てくるのか分からないものだ。

ドイツで別れたラウラが、今や俺の生徒としてこの学園に居る訳だしな。

「ところで…なんでヨーロッパを避けてたのよ？」

旅の話はもう終わり、時刻も消灯間際…そろそろ切り上げて部屋に戻らせようと思った矢先に、鈴が不思議そうな顔をして此方を見る。

さて、困った。

ヨーロッパに近寄らなかった理由は、言うまでもなく東との邂逅にまつわるあのテロが原因だ。

東が万全を喫して対策を立てて、セキュリティを落として居たのなら問題は無いだろうが、あの時点ではあいつは俺を切り捨てるつもりでいた。

よって、俺だけがドイツにマークされていた可能性は無きにしも非ず…余計なトラブルは自分の首を締め上げるだけだからなあ…。

どうしたものか、と思索しているとラウラが口を開く。

「鈴音、アモンはドイツに居た時に事件の首謀者として誤認逮捕されたことがあってな。恐らくそこから苦手意識が芽生えてしまったのだろう」

「あー、あれな。結構デカい事件だったってんで取り調べもキツかったしなあ…」

渡りに船…ラウラが助け舟を出してくれたので、俺はそれに有り難く乗っかる事にする。

事件自体は確かにあったし、誤認逮捕も…まああった。

ただ取り調べ自体は非常に穏やかに済んだし、後半に至ってはほぼ世間話しかしていなかった。

あんときのオツサン元気にやってるかな…。

「私としてはドイツ…ひいてはEU自体其処まで怖い国々ではないので、気軽に来てほしかったがな」

「バツカ、監視されてる体で追い出されてんだから近寄ろうと思わねえっつの」

「確か、監視役は織斑先生…千冬さんだったわね？」

俺は鈴の言葉に静かに頷くと、サロンの中が俄かに騒がしくなる。

なんせ、年単位で千冬と付き合いがあるって初めて暴露したからな。

学園に来てからの千冬の状態や対応に、ようやく合点がいった生徒もチラホラと居るようだ。

「で、中国には寄ったのかしら？」

「そら仕事だからな。いやあ、中華料理覚えるのは楽しかったぜ」

「シシヨーのその仕事って何なのよ…」

「そら、クライアントとの契約問題で守秘義務がある…教えらんねえな」

「教えられないって言うか、言っても信じられないだろう。」

「よもや別世界からコンニチワしてる存在が、こうして喋っているなんてな。」

「まあ？少なくとも料理覚えるのが仕事じゃねえのは確かだわな」

「アモン、そんなにお前の料理は美味しいのか？」

「そこら辺の料理屋なんて裸足で逃げ出すわよ…だから、あたしも弟子入りしたんだし」

「親父よりも上手だから弟子入りさせてくれーって来たんだよなあ」

「あの当時は今思い出しても、普通に穏やかな生活だったかもしれない。」

「朝昼晩と家事をこなし、一夏や鈴、その友人たちの面倒を見て1日を過ごす。」

「血生臭くないし、陰謀も渦巻いていない。」

「強いて言うなら、必死にラブコールを送ってきていた束の対処が大変だったってくらいか。」

「アイツは人の話を聞かないからな…忙しいってんのに。」

「和洋中なんでもござれじゃない。で、今も甲斐甲斐しく千冬さんに愛妻ならぬ愛夫弁当作ってるんでしょ？」

「あいつなあ…無理矢理良いもん食わせねえと栄養バランス崩すからよ。一夏も大分苦労してたみたいなんだけどな」

「昔話に華を咲かせていると、不意にコアネットワークのプライベートトチャンネルでコール音が響く。」

「相手のコアは白式…つまりは一夏からだ。」

「こんな時間に俺に連絡を取ると言う事は…まあ、そういう事なんだろう。」

「さって、そろそろ消灯時間だぞ。良い子は寝ねえと喰われっちなうぞ〜？」

「え、先生なら喰われてもいいかな〜」

「H A H A H A、面白え冗談言いやがる」

冗談交じりに脅し文句を言うと、ふぎけた様子で生徒達が俺の話に乗っかってくる。

そんなにモテる面構えじゃ無いと思うんだがな…それはさておき、夏を目前にして怖い話をしてお開きにするでしょう。

静かに手にグローブを嵌めながら、俺は穏やかな口調で話し始める。

それこそ、世間話をするかのように。

「これ、アフリカのとある部族に伝わる話なんだけどな？夜つて言うのは、あの世の領域つてやつなんだと。死者が闊歩し、生者は微睡の中で身を隠す。そうすることで互いが互いを認識できないようにしてるんだと。でな？死者つてのは常に餓えて、乾いて、凍えている。それらを満たすために必要な物つて何だと思う？」

「…話の流れから推測するに、人、か？」

ラウラの言葉に静かに頷き、口角を凶悪な程に歪める。

人によつてはそれこそ悪鬼羅刹の様にも見えたかもしれない。

俺は怯え始めた生徒に構わず話を続けていく。

「ラウラの言う通り人だ。それもハラワタだと尚良い。そいつらは、明るい場所を目指して歩き、人を見つけたら腹を搔っ捌いて血を浴びる様にしてハラワタを引きずり出す」

話を言い終える前に、指をピクリと動かしてグローブの指先に付けられている非常に見えにくい鋼線を操り、サロンの電気を落とす。

次いで、出口に一番近い生徒の足にサニティに少しだけ触れさせる。

サニティは言うまでもなく体温が無いので、死人の様に冷たい感触が感じられたことだろう。

「き、キャー!!!」

当然の様に1人叫び声を上げれば恐怖は伝播し、我先にと出口へと向かって走り出す。

出口は既に開放されていたので、特に混乱することもなく生徒達は各自の部屋へと飛びい込むようにして入っていく。

パチ、と言う音がすると再びサロンに明かるくなり、ジト目のラウラと鈴が此方を見ている。

「まあ、全部嘘話なんだけどな？」

「サニテイまで用いて脅かすのはどうかと思うぞ」

「どうせ、人払いしたかったつて所なんでしようけどね…シシヨ、人間は何でもできる訳じゃないんじゃないの？」

付き合いの長い鈴には俺の意図は読めていた様で、ドヤ顔で此方を見つめてくる。

——あたしには何でも御見通しよつてか？

「人間はな。まっ、どっちにしろ消灯時間だからな。お前たちもとつとと部屋戻つて寝ろよ」

「はくい。それじゃシシヨ、また明日」

「今宵は楽しかった。また、話が聞けると助かる」

「あいよ。それじゃ、見回り行くかねえ…」

3人揃つてサロン室を出て、寮内の電気を1つ1つ落としていく。ラウラと鈴が部屋に入って暫らくした後、俺は一夏の部屋の扉の前で止まりノックをする。

暫らくして扉が開くと、真剣な表情をした一夏が戸口に立っている。

その顔は一世一代の大勝負に出る…そんな博徒に近い顔だ。

「…それで、話つてのは何だ？」

「ここだと聞かれるのは不味い。かと言ってゾロゾロと寮長室まで出向くわけにはいかないんだ」

「だろうよ」

「…やっぱ、兄貴も知つてた側か」

「そら当たり前だろう。こと人体に関しちや詳しいのは教えてただろう？」

取り敢えず、ここで立ち話をするわけにもいかないので一夏に促されるままに部屋へと入る。

寮の部屋の間取りは旧寮長室と其処まで大きな変化はなく、少しばかり懐かしさがこみ上げてくる。

今の寮長室はほら…束が無駄のない無駄な改造をしてくれたおかげで、間取りが2倍近く広くなってる。

何処のスイートだってんだ…。

居間兼寝室となつている部屋に入ると、ベッドに腰掛けているシャルルがビクリと肩を震わせて此方を見上げてくる。

取り繕うのも疲れていたのかその顔には濃い疲労が滲みだして、煮るなり焼くなり好きにしてくれとでも言いたげだ。

「で、手短にしるよう！俺もくだらねえ演劇を見てる程暇じゃねえ」

「っ…」

椅子を差し出してきた一夏を手で制して、閉められたドアに寄りかかる様にして背を預けて腕を組む。

シャルルは俺の言葉に怯える様に身を竦めて声を詰まらせる。

もう、逃れることができないだろうと、そう感じているからこそその恐怖。

自身の身に何が起こるのか分からないからこそ、最早打つ手無しと感じてしまっているんだろう。

「…兄貴、シャルルを助けるために手を貸してほしい」

「嫌だって言ったら？」

「嫌だと言つても手を貸してもらおう。俺一人じゃどうしようもないし、かと言つて、シャルルの身の上を聞かされたら黙つてなんていられない」

一夏はギリギリと拳を握り込みながら、冷静に慎重に言葉を選んでいく。

あくまでも冷静に…激情に身を任せてしまえば、逆に丸め込まれると言う事を理解しているからこそだろう。

だが、まだ青い。

俺はそれを指摘するように、鋭く話を返す。

「で、その身の上話とやらが本当だという確証はあるのか？」

「それは…」

「悪いがな、シャルルがそうやって男装してきた時点で、ありとあらゆる発言が偽りの可能性があるんだわ。この学園に入る際に過去の経

歴と言うものは洗い浚い調べられることになっているからな」

以前言ったように、この学園は世界各国の機密と言う機密が集う魔窟となってしまうている。

竜が抱え込む宝が如き軍事機密が集うこの場所は、それだけデリケートだ。

入学者や職員、出入りする業者に至るまで皿を舐めまわすように調べ上げるのは最早必然であった。

では、そんな学園がこの場所に表向き知らないフリをしてまで、シャルルを入れた理由は何か…？

「だ、だけど…！」

「言わんでも分かるだろ。企業どころか国ぐるみでやってる不正って事だよ。もちろん学園側に賄賂が送られてねえとは言いつれねえがな。で、此処まで言われてシャルルが何も言わねえってことは、俺の言う事の大半が正しいってことだろ？」

「…はい」

「シャルル！」

シャルルはポツリと呟く様に声を絞り出し、静かに頷く。

両手で顔を覆って静かに嗚咽を漏らし、身体を震わせる。

子供にや、荷が重すぎるわな…。

少なからず、境遇に同情をしていた身としては、今こうして辛辣に対応するのは心苦しくはある。

かと言って、千冬にこんな役目を押し付ける訳にはいかない。

悪役は悪魔にこそ相応しいと言うものだろう？

「でも…でも…僕は、スパイ活動、なんて…するつもりは、っ…なかったんです…！」

「ああ、そうかい。だったらなんで、この不正をすぐに学園に報告しかなかったんだっつの」

はあ、とため息つきながら呆れたように吐き捨てると、一夏がシャルルを俺の視界から遮る様に立ち胸倉を掴んで睨み付けてくる。

「もう止めるよ！弱きを助け、強きを挫くって教えたのは兄貴だろ!? なんで、その兄貴が！」

「そら、シャルルが俺にとっての敵認定されてるからだろうが。此奴の目的は、男性操縦者及びこの学園に存在する第3世代型ISのデータを入手する事なんだろうからな」

「やる気はなかったって言ってるじゃないか！」

「で、話は終わりか？」

俺は冷めた視線を激情に滾る一夏の視線へと返し、軽く手を払って一夏を離れさせる。

結局のところ、助けを求めないと言う事は現状のままでもいいと思っ  
ている証拠だ。

特記事項第2-1があると云っても、搦手で来られれば守ることも容易くは無いだらう。

手が無いとは言わないが…言質は取ってるしな。

「…分かった、こうなったら兄貴を屈服させてやる!!」

「ハッ、言うじゃねえかクソガキが。テメエが逆立ちしたってこの俺にや勝てやしねえよ」

「俺はな、どんな手を使ったって守りたいと思ったものを守ってみせる！そうでなければ俺は…織斑 千冬の弟だなんて言えないんだ!!」

一夏はギラギラとした目で俺を睨み付けて啖呵を切る。

それはまるで御伽噺にでも出てくるヒーローのように勇ましい。

だが、勇ましいだけでは何も得ることはできない。

生憎と俺たちは現実の世界に生きているのだから…。

「いいぜ、宣言通りに俺を倒して魅せる。明後日、アリーナを1つ貸し切りにしてやる」

「素直に頷かなかったことを後悔させてやる！」

「ああ、そうかい。テメエが地面に這い蹲って泣きじゃくってる姿が  
楽しみだ」

互いに互いを挑発するように言葉を吐き捨て、俺は一夏の部屋を出る。

暫らく廊下を歩いた後、俺は立ち止まって口元を抑え忍び笑いをする。

「いや、まさかねえ…ククっ…」



精々が泣きついてくる程度だと思っていた俺は、あまりにも違う対応に思わず嬉しくなってしまう。

ガキだガキだと思っけていても、男はやっぱりああでなくては張り合えない。

まあ、順当に叩きのめすんだがな。

俺に勝とうなんざ、生まれ変わっても早すぎる。

「随分と面白そうではないか、何かあったのか？」

「いやなに、お前の弟つてのはよくできた弟つてことさ」

「…まさか？」

千冬が背後から近づいてきて不思議そうにするも、俺の言葉を聞いて思わず鼻白む。

思っけていたよりも早く、シャルルの化けの皮が？がれてしまったからな：一度デボラに連絡をとつて対応を協議する必要はあるだろう。

俺は振り返つて千冬の肩を抱き寄せて、やや無理矢理にでも寮長室に向かつて歩き出す。

「そう、そのまさかつてやつさ。明後日どのアリーナでも良いから取っけておいてくれよ。ちつとばかし現実つてのを叩き込んでやるからよ」

「…あまり痛めつけてくれるなよ？」

「そら、一夏次第だろうよ。やつぱ、男つてのは意地がなけりやあな」  
けっけっけ、と笑いながら横目で千冬を見ると、少しばかり不安そうな顔をされる。

別に命を獲る訳でもなし：そんなに心配するようなことは無いはずなんだけどなあ？

寮長室に入つて、いの一に番に台所に向かえばウイスキーのボトルと氷を入れたグラスを3つ用意してリビングへと向かう。

「おつかえりー！」

「なんだ、まだ起きてたのか？」

「いっくんとアモンが喧嘩するつて聞きましたねー！」

「絶対え盗み聞きしてると思つてたわ…」

ソファに寝転がつていた束がムクリと体を起こして、抱っこをせが

む様に両腕を広げてくる。

俺はそれを無視して束の隣に座り、千冬は千冬で小さく舌打ちしつつ俺を束と挟むようにして隣に座る。

「コアネットワークで全部筒抜けだからね〜」

「プライベートってもん考えろよ…」

「言うだけ無駄だ、無駄。それでだ…：今後はどうするつもりだ？」

テーブルにグラスを3つ並べてウイスキーを注いでいると、千冬は真剣な表情で問い質してくる。

親友の義理とは言え娘の一生が関わってくる問題だからな…：気が気ではないのだろう。

束は割とその辺りどうでも良いと思っっているのか、俺の膝の上に寝転がってちびちびとウイスキーを飲んでいる。

3人の間の取り決めで、晩酌は1杯までとしている。

酔っぱらうとこの2人、手が付けられなくなるからな…：脱ぐし。

「助けるに決まってるだろうが。ウラ自体は取れてるしな…：まあ、今回の喧嘩は所謂儀式ってやつだ。何が起きても決して心を折らない為のな」

「結局のところお前の掌の上か」

「まあ、弟子のケツ持つのは師匠の役目ってな…：そう、簡単に見捨てるもんでもないさ」

千冬は首をコテンと傾げて俺の肩に乗せて、徐々に体重をかけてくる。

少しだけ安心した、と言う所だろう。

「で、だ…：束、テメエも手を貸せ」

「え〜、なんでさ？」

「俺が気持ちよくなる為だからに決まってるんだろ？」

今回、どのみち外に出ることが叶わない俺は、一手投じる為にどうしても束の手が必要になってくる。

こいつの技術力は世界探しても比肩する奴がいなからな。

味方であればこの上なく頼もしい存在だろう。

「え〜、でも束さんにリターンないしなあ〜」

「抱く」

「やります！やらせてください!!」

「ちよろいZ…いてえよ、千冬」

単純な報酬をくれてやると言った途端に、束は喜悦に満ちた笑みを浮かべてやる気を出すものの、千冬が俺の脇腹をとんでもない握力で掴んで無言の抗議をしてくる。

束ばかり美味しい思いをさせるなと言う抗議だわな。

だがん、抱くと言う言葉には別にやるって言葉だけじゃないわけ…。

「わあってるつつの、だからそんな恨みがましい目で俺を見るんじやねえよ…」

「ふん、別に私は何とも思っていないとも…」

「やせ我慢は毒だぜ、ちーちゃん？」

ウイスキーを飲み干した束は、何処か挑発するように俺の腰に抱き着いてニヤニヤとした笑顔で千冬の事を見上げる。

千冬は表面上何とも思っていないようにちびちびとウイスキーを飲んで、束の額を人差し指で軽く小突く。

「やせ我慢？この私が？ありえんな」

「え、だってあんまりアモンとイチャつかないじゃ〜ん」

「私は大人の恋愛と言うやつに興じているんだ。小娘みたいにベタベタするのは卒業しているのさ」

フフン、と千冬は鼻で笑いながら得意げにしているが、千冬は千冬で今も寄り添い続けて居るので色々台無しなのは…まあ、ご愛敬か。

「ちーちゃん、スキンシップは大事だつてば。言葉で言うより手っ取り早いしねー」

「束、そりゃ箒にやってやれ」

「む、箒ちゃんとの距離がな〜」

束はがっくりと肩を落とす、大きくため息を吐く。

確証のない直観ではあるものの、すぐに箒との不仲は改善されるよな気がする。

…大きな痛みを伴って…だろうがな。

## #36 汝、血を奉げよ

IS学園の地下には、地上に存在している施設よりも大きい規模の設備が整えられている。

それは学園の如何を整える為であり、またあらゆる脅威に対して即時対応できるようにする為でもある。

それだけ学園には価値あるものが多く存在していると言う事だ。

現行の技術力の粋を集めてもきっかけすら作ることができないISコア：それが諸外国よりも多く集まっている場所なのだから、当然と言えば当然の備えである。

従って、教員1人1人の実力は言わずもがな、各国のエースパイロットに比肩する程の実力を持つ腕利きが集っている。

とは言え、そんな腕利きも訓練しなければ実力が鈍り本領を發揮することは叶わなくなる。

だが、地上のアリーナなどで訓練を行うとなれば、生徒達が委縮してしまう可能性がある。

あくまでも穏やかな学園生活を、という理事長の方針があるからだ。

では、どうするのか：それが、今俺が居る地下のIS訓練場だ。

地下空間と言う事もあってアリーナはこの1つしかないものの、規模としては1番大きい第一アリーナに匹敵するほどだ。

俺はアリーナの真ん中に立ち尽くし、煙草を吸って時間を潰す。

天井から煌々とした灯りが全体を灯しているので薄暗いと言う事は無く、むしろ昼間の様に明るく感じてしまう。

『アモン、本気でやるんだな?』

「本気じゃ無けりゃならねえのさ。ここで心が折れるんなら、一夏は所詮その程度：俺やお前が鍛えるだけの価値はねえ」

『…分かった。私も、腹を括ろう』

一夏が啖呵切った日から、千冬からは再三に渡って手加減を言い渡されていた。

弟を可愛がるがあまりの行動ではあるものの、今回に至ってはそれ

は余計なお世話と言うものだ。

一夏は覚悟を既に決めていて、俺はその覚悟を受け止めてやらなければならぬ。

「で、専用機持ちは全員居るのか？」

『ああ、見るだけでも価値あるものではあるだろうしな』

「ハッ、一方的な蹂躪に価値があるものかよ」

千冬の言葉に鼻で笑いながら肩を竦める。

これから行われるのは決闘であって試合ではない。

ルールなんてあつてないようなもの…どちらかが倒れるまで続く獣の争いそのものだ。

もしそれに価値があると言うのであれば、それは酔狂な人間だろう。

もしくは…それに興奮を覚える人間か…。

もつとも、それは俺と一夏には関係のない話だ。

奥に見えるゲートから、純白の甲冑を思わせるISを身に纏った一夏が勢いよく飛び出してくる。

後付武装を格納できない白式の武装は雪片式型一振り…付け焼刃の技術しかない銃器を持たずに、真つ向勝負で俺に向き合うつもりらしい。

「俺相手に真つ向勝負か？」

「俺には此奴しか無いからな…兄貴を叩きのめしてみせるさ」

「あまりデカイ口叩くもんじゃねえぞ、一夏」

「っ!!」

火のついた煙草を指先で弾いた瞬間に、黒鬼を身に着けて一夏の背後へと転移する。

時間にして刹那にも満たない時間だ。

俺は一夏に反応する事すら許さずに、後頭部を鷲掴みにする。

「どっぴんぐっぴんぐ」

「ぐあっ!!」

そのまま地表に向かって瞬時加速をかけ、顔面からアリーナのコンクリートに覆われている床に叩きつける。

弾丸よりも速い速度での落下は容易く床をクレーター状に砕き、破片が宙を舞う。

そのまま2度、3度と頭を床に叩きつけた後に空中に放り出して、強烈な回し蹴りを一夏の無防備な胴体に叩き込む。

『アモン！試合はまだ!?!』

「試合？これは試合じゃねえよ…ガチの殺し合いだ。此奴が俺に喧嘩を売った。俺が此奴の喧嘩を買った。そうなたら俺のルールじゃ殺し合いになるんだよ」

回し蹴りが一夏に炸裂した瞬間、妙な手応えを感じた。

咄嗟に雪片式型を構えて蹴りを受け止めたらしい。

普通の人間だったなら、すでに顔面がザクロの様にミンチになっている筈だが…ISの絶対防御は本当に絶対に守ってくれるらしい。

まるでボールの様に蹴り飛ばされた一夏は、床を二転三転と転がった後に腕の力を利用して高く跳躍して軽く咳き込む。

「甘っちょろい考えは失せたか？」

「ああ、お陰様で…本当に手段問えなくなりそうだ」

「初めから言ってるだろうが…まずは此処まで近付いてこい。できるもんならな」

「言ってるクソ兄貴!!」

俺は大仰に腕を交差させてから迎え入れる様に開き、鬼面に覆われた顔で一夏を睨み付ける。

一夏は雪片式型を両手でしっかりと握り込み、刃を肩に担ぐ様にして構える。

腕で胴体をカバーし、最速で突っ込んで思い切り振り下ろす。

単純だが一撃必殺を狙うには最適解とも言えるだろう。

これが生身であるならば、狂人と言える。

しかし身に纏うものは天才が作り上げたIS…そこら辺の鎧よりも堅いものが一夏自身の体を守ってくれるのだ。

で、あるならば…後は度胸と技術がモノを言うんだろうな…相手が普通であるならば。

「征！く！！ぞおっ!!」

一夏は1度体を丸める様にして空中で踏ん張り、思い切りのいい瞬時加速を行う。

プロのそれと見比べても遜色ない速度は、確かに速い。だが、反応できない訳ではない。

腕を広げたまま指を少しだけ曲げると、一夏は察知したのか無理矢理横方向へとスラスターを噴射させて軌道を変更し、俺への突撃コースを無理矢理捻じ曲げる。

俺はそれを一步も動かさず、頭すら動かさずに腕を軽く広げる動きをして追撃をかける。

一夏が察知したもの：それはハイパーセンサーで辛うじて見えるレベルまでに研ぎ澄まされたワイヤーブレードの群れだ。

両手十指から放たれるワイヤーブレードは、俺の繊細な指の動きに合わせて猟犬の様に、あるいは毒蛇の様に一夏を追い立てる。

一夏は体勢を整えて細かくスラスターとPICによる操作で機体を小刻みに動かし、絶えず襲い掛かるワイヤーブレードを懸命に切り払っていく。

「くっ…!!」

「口だけで生きてると大変だなあ…：肝心要の時に何も出来やしねえ。大見得切ったところでガキにできる事なんざ何もねえのさ」

「違うつ！俺は俺が守ると決めたものを守る！絶対にだ!!」

挑発するように顔を向けずに一夏を焚きつける。

一夏はそれでも諦める事はせずに果敢に俺に向かって躍りかかってくる。

その距離は一向に縮まらないにも関わらずに。

「言うねえ、言うじゃねえか。だが、今のお前はなんだ織斑 一夏？俺に傷1つ付けられずに立ち往生してるテメエは、本当に守りたいもの守れんのか？」

「くっ…!!」

一夏は俺の言葉に反論できず、だがそれでも力を緩めることなく刀を振るい続ける。

それしか知らず、それしか理解できないが故に。



結局、一夏は俺に対して勝ち目が無い。

一矢報いる事すら出来ずに立ち往生してしまっているのが良い証拠だ。

「そろそろ終わりにするか…ガキの我儘に付き合おうのが俺が一番嫌いなんですね」

「まだだ!!」

「そう、まだまだよ一夏!!」

第三者の声が響いた瞬間、背中からとてつもない衝撃が走る。

たたらを踏む様に一步踏み出して転ぶことは阻止するものの、ダメージはダメージ…思った通りに事態が動き始めていて俺は鬼面の奥でほくそ笑む。

俺が体勢を整えて反撃に出るのを防ぐ為か、矢継ぎ早に大質量の砲弾やら見えない弾丸やらが俺に向かって飛来してくる。

「火力支援! 途切れさせるな!!」

「分かっているわよ! シシヨー相手に加減できるわけないでしょ!」

「ええ、ええ、一夏さんの事情もデュノアさんの事情も分かりましたので…ここで果てていただきましょうか」

「なっ…これは俺と兄貴の決闘なんだぞ!」

飛来してくる砲撃を避け、或いは格納しながら、止む無く俺は一夏から距離を開ける。

ゆっくりと腕を組んで、新たに現れた4機へと目を向ける。

『…これもお前の想定通りか?』

「どうだかねえ…まあ? 思ったように事態が進むのは大変宜しい事だわな」

千冬へと言葉を返しながら、格納できた2発のレールカノンの弾丸にほくそ笑む。

一夏1人じゃ完封できるが、ヒヨッコとは言え専用機が4機も増えるとなると流石にそこまで甘くは無いただろう。

まあ、勝つがな。

「一夏、先生は手段は問わないって認めていたんだよ? それに、これは僕の問題でもあるんだ」

シャルルは覚悟を決めたと言わんばかりに重機関銃『デザート・フォックス』を俺に向け続ける。

恐れもなく、かと言って破れかぶれと言う訳でもないその顔は、先日見せた時よりも遥かに覇気に満ちている。

「こればかりはねえ…発破かけたシシヨーもシシヨーだけど、今回ばかりは自業自得ってことで」

「まったく、先生は人が悪すぎますわ。必要な事なのでしようけど、やり方と言うものがありますわ！」

鈴とセシリアは呆れたように、八つ当たりするように俺に向かって直接砲撃を叩き込んでくる。

ハイパーセンサーで確認できる限りでは笑っていない笑顔だな、ありや。

「織斑 一夏…一人で出来る事なんてタカが知れているんだ。私はそれを訓練生時代に思い知り、そして学んだ。ならば、貴様も学ぶべきだろう」

「…皆…」

ラウラはニヒルな笑みを浮かべて一夏へと目をやる。

部隊長は言う事が違うもの…暫らく見ないうちにちっこい体でデカくなったもんだな。

一夏は深く深呼吸した後、ゆっくりと此方へと目を向ける。

「そういうことらしい。俺はこのまま兄貴を慰す」

「構わねえよ…一分が2分になったところで気にも止めねえもんさ」

「」「ぶっ殺す!!」「」

軽い挑発に皆一様に同じ言葉を吐き出して、一斉に俺を取り囲むように動き始める。

ラウラだけは後方に居るな…まずは頭から潰すのが得策か。

俺はゆっくりと歩き出し向かってくる4人に立ち向かおうとして、鈴の真正面へと転移し左腕を薙ぐ様にして振るう事でワイヤーブレードで拘束する。

「んなっ!?!機体が…!!」

「まあ、なんだ…弟子が師匠のやることにケチ付けるもんじゃねえぞ

？」

「横暴！」

「悪魔だからな」

鬼面の奥でニコリと笑えば、右腕も薙ぐ様に動かして拘束を強めそのままジャイアントスイングの要領で鈴を思い切り振り回し始める。

それだけで俺の周囲に配置されていたビットは動きを止め、一夏もシャルルも迂闊に近づけなくなる。

「そら、受け止めてやんなあ!!」

「シショール?!?!」

「チイツー！」

後方に控えていたラウラに向かって、思い切り鈴を投げ飛ばす。

弾丸の如き速度で投げ飛ばされた鈴を見捨てる訳にはいかなかったラウラは、物体停止能力を用いて鈴の体を急停止させる。

俺の読み通りに動きが止まった2機の頭上に、さきほど借りておいたレールカノンの弾丸を2発出現させてそのまま叩き込む。

動きが止まっていた鈴とラウラは反応する事すら許されず、そのまま脳天に弾丸をお見舞いされてそのまま地上に墜落していく。

ここにきて死ぬ気でやらなければ勝ち目が無いことを悟ったセシリアは、ビットを鋭角に操作して直接俺の体に叩きつけようとする。

ビットの精密操作に集中するためか、セシリアの動きが止まるものの、それをカバーするかの様にシャルルがデザート・フォックスによる火力支援で俺の接近を許さない。

神隠鬼現のリキャスト1分：地味にもどかしいものだな。

「でええやあああ!!」

「見えてねえと思ってたのか!?!」

ビットの動きに翻弄されていると踏んだ一夏は、上空からの唐竹割で俺を両断せしめんと迫るがハイパーセンサーの視界と隠せていない気配で察知した俺は体を右へとズラスことで容易く避け、逆に大振りで隙ができた一夏の髪の毛を掴んで

鼻面に思い切り膝蹴りを叩き込む。

「ガアッ!!」

「一夏!? こんのおっ!!」

シャルルは瞬時加速を用いて一夏と俺の間に割って入り、勢いよくシールドに隠されたパイルバンカー『灰の鱗』を突き出してくる。

「とつた!!」

「舐めんなクソガキが!!」

「いいえ! これですわよ!!」

突き出されたパイルバンカーの砲身を掴んで、思い切り握りつぶし破壊する。

だが、そのおかげで動きが止まった俺は、シャルル諸共にビット兵器による一斉射を浴びる事になる。

全天から放たれる射撃からは脱出不可能…シャルルも女とは思えない獰猛な笑みを浮かべている。

絶対防御があるからこそ許されるこの戦法は、しかし俺には通用しない。

俺は単一仕様能力を発動してセシリアの眼前に姿を現す。

「テメエも床の味を味わわせてやろうか…?」

「ひっ!?!」

鬼面の下顎が開き、威嚇するように蒸気が溢れ出す。

セシリアは今まで感じたことのない威圧感に身を竦め、思わず身を竦める。

戦場に於いて致命的なその隙を晒したセシリアの顔面を掴んで後方へと投げ出す。

戦線に復帰した鈴とラウラの砲撃への盾とする為だ。

「きゃああ!!」

「セシリア!?!」

「容赦ないってーの!! てえりやああつ!!」

墜落していくセシリアのカバーに入る様に鈴が俺へと呐喊し、双天牙月を突き出し或いは薙ぎ払い距離を開けさせようとする。

ラウラはセシリアを受け止めて体勢を整えさせに入っているな…。手を抜いてやっているとは言え、流石に手間がかかるな…質の良い

実力をつけてきている証拠と言う事だろう。

俺は拡張領域内に収めていた一振りの大曲剣を呼び出し、双天牙月を受け止める。

「つたく、めんどくせえ…」

「シショールが抵抗するからでしょ!？」

「弱え奴らに指図されんのは嫌いだからな!」

その剣は、分厚く、重く、そして何よりも叩き潰すことに特化している。

その特徴は峰に備えられた五連ブースター…以前使った欠陥兵装を束に改造させた、人が扱う様にはできていない特化兵装『鬼喰み』だ。

俺は躊躇なく柄に備えられたトリガーを弾いてブースターを全開にして鈴を弾き飛ばす。

「行きなさい!!」

「止まるか!!」

鈴が弾き飛ばされた瞬間を狙って、セシリアはビットを一斉に俺に向けて突撃させる。

1つ1つが臨界寸前のエネルギー量を抱えているところを見ると…随分と思いつつた戦法にシフトさせたな!

「落ちなさい!!」

「これも持っていけ!!」

セシリアは俺に接触する寸前のビットを次々と自爆させていき、ラウラはレールカノンの砲身が焼け付くことも厭わずに次々に弾丸を吐き出させていく。

リキヤストまでのわずかなタイムラグを狙われて転移が儘ならない俺は、爆炎に包まれながらレールカノンの弾丸を切り払っていく。

「もらったああ!!」

「一夏!」

一夏は今の今まで機会を伺っていたのか、地上すれすれをスライドするように飛行しながら手に持った重機関砲『デザート・フォックス』を俺に向かって撃ちこみ接近してくる。

シャルルの武装のロックを解除して借りやがったなあ野郎！

「これで、トドメだあ!!」

一夏は十分に接近してから重機関砲を投げ捨て、最速で雪片式型を展開。

腰だめに構えて零落白夜を展開、俺に向かって体当たりを行う。

俺はそれを切り払ってやろうと鬼喰みを高く掲げるが、その腕はいつの間にか接近していたラウラによって動きを止められる。

「やれー織斑 一夏!!」

「おおおお!!」

頃合い。

俺は、態とその一撃を受ける。

零落白夜はエネルギーによる防壁をすべて無効化する。

黒鬼の装甲は、全てシールドエネルギーによって制御された液体金属で出来上がっている。

では、そこに零落白夜を叩き込んだらどうなるのか…？

答えは…。

「え…」

「あ、アモン…？」

「いいか、一夏…何かを守ると言う事は何かを排除する事。何かを排除すると言う事の答えが…こいつだ」

腹部に深々と突き刺さる雪片式型…守る物が無くなる事で無防備になり、殺傷能力を如何なく発揮する。

零落白夜の本質はあらゆる障害を排除して断ち切ることにある。

刀身全体を零落白夜が覆ってしまう為に、絶対防御を突き破って刃を届かせてしまうのだ。

「ち、ちがう…お、俺は…!!」

「ガキに覚悟しろなんて言うつもりはねえけどな…腹括るつてえのはこういう事なんだよ」

俺は一夏の額を指先で弾いて跳ね飛ばし、深く突き刺さったままの雪片式型を引き抜いて放り捨てる。

引き抜いた瞬間にシールドエネルギーが復活し、裂かれた腹を液体

金属の装甲が覆っていく。

「まったく、呆けてんじやねえぞガキども。勝負はテメエらの勝ちにしてやらあな…だけど、自分たちが握ってるものの本質をキチンと見定めとけ。いざって時に生死を分かっただからな」

「「「「……」」」」

ラウラを除いた全員が、呆然とした面持ちで俺の事を見ながら立ち止まっている。

ISは安全だ、という固定観念が崩れた瞬間だからな。

俺は脇腹を抑えたままピットへと入り、ハッチが閉じた瞬間にISの展開を解除して軽く背伸びをする。

「ちいっと酷な授業だったかね？」

「やり過ぎだな…まったく。もう少し手段があつたらうに」

千冬が慥然とした表情で俺の事を見つめ、血で濡れた俺の脇腹を見る。

傷跡は既に無く、切られた事が無かつたかのようだ。

「だが…遅かれ早かれ苦悩する事か。知ってほしくない苦悩ではあるが」

「守るってことはそう言う事だろう。どちらかを天秤にかけて切り捨てる。成し得る奴だけがどちらにも取れる」

千冬が差し出してきたタオルを手に取り、脇腹の血を拭っていく。

あつという間に白いタオルは朱く染まっっていく。

絶対防御も場合によりけりだな…。

「アモン、お前は…」

「俺は無理だった」

千冬の問題かけが終わる前に、ピシヤリと答えて黙らせる。

遙か昔も大昔…天秤にすらかけられずに守れず、生き恥を晒したのが俺だ。

生き恥を晒した結果が今だって言うのならば、それは必要な事だったのだろう。

…さて、あいつらはどうするかね…？

「んじや、千冬…！頼まれてくれねえか？」

「何をやる気だ？」

「そりやお前…王手詰みへの更なる一手さ」

「…なぜ一夏は…」

「いっくんは優しいからねえ」

寮長室に2つの影…篠ノ之姉妹の姿がそこにあった。

寮長室に備えられた大型テレビに映し出されていたのは、地下訓練場でのアモン対専用機組の争いだ。

箒はスカート裾を強く握りしめ、束は束でどこか楽しそうにアモンの戦いぶりを眺めていた。

「皆守りたい！…つてまっすぐ一直線！アモンは代償を教える為に喧嘩を買った訳なんだけどさ」

「…人ではないのに？」

「人じゃあるなしは、関係ないんじゃないかな？」

束は箒の言葉にスツと目を細め、しかしチエシヤ猫の様な笑みを浮かべる。

箒の中にある僅かな嫉妬心を知ってしまったから。

大好きな存在の隣に居たいと言う気持ちを知っているから。

「…姉さん、私も専用機を持つていたらあの場所に居る事ができたのだろうか？」

「できただろうね。なんせ専用機持ち限定での課外授業って事だったし」

箒にとって悪魔のような魅力がある。

専用機を持つと言うだけで特別扱いされる…その事実が一夏の疎外感を感じてしまっていたが故に。

一夏の隣に居たい、必要とされたい…あの男よりも。

「姉さん…私は…」

「んふふ、だいじょーぶ！お姉ちゃんにまっかせなさ〜い」



## #37 悪魔と親父と悪だくみ

ドイツとフランスの国境沿いにある片田舎に俺の姿はあった。

俺は、その町にある古ぼけたバーのカウンターに座って、真昼間から酒をあおる様にして飲んでいいる。

ドイツに入国してから早3日：既にあの男には連絡が入っている筈なので、動くとしたらそろそろの筈…。

「おっさん、おかわりくれー」

「あんななあ…良い歳した男が真昼間から酒飲んだくれるもんじゃないだろ?」

「なら、真昼間からバー開けてんじゃねっつもの」

「まったく…体壊しても知らないからな!」

グラスに注がれていたスコッチウイスキーを飲み干して俺がマスターに注文を入れると、マスターは俺に忠告するようにグラスを上げて新しく酒を用意する。

この3日間、俺は安宿とバーを往復する生活を続けている。

理由としては、待ち人が俺の元に辿り着くタイミングが計れなかったからだ。

一応このバーの営業時間は連絡してあるんだが…向こうもお偉いさんだ、中々時間も取れない事だろう。

お代わりのグラスが俺の前に差し出されると、マスターは訝しがる様に俺の事を見つめてくる。

「あんたが旅行者つてのは知ってるんだがよ…こんな片田舎の町に何の用があるってんだい?」

「この国に友人が1人居てな、ここで落ち合う約束を取り付けたんだがトンと連絡をつけられなくてねえ。あっちもお偉いさんになっちゃまって不用意に電話ができねえから、こうして待つしかねえんだわ」  
不用意に連絡が出来ない…これは紛れもなく本当の事だ。

なんせ、俺は本当ならばIS学園のベッドの上で寝ていることになっっているのだから。

本当：狙って行ったとは言え、一夏は良い仕事をしてくれた。

「言つちやなんだが寂れた町なら人目につきにくいからな。ま、そんなわけで待つてる間に金を落とさねえつてもも癪なんで、こうして飲んだくれてる訳よ」

「どっかの富豪の放蕩息子かい？」

「ははは、んなわけねえだろう？放蕩息子でも、もつとマトモな身なりで旅するだろうさ」

夏も間近に控えた梅雨の時期にボロコートの一張羅姿である俺の姿を見て、マスターはそれもそうかとひとしきり頷いて納得し、口を挟まなくなる。

グラスの中身が半分ほどになった時に、バーの扉が開いて客が1人中へと入ってくる。

その男は逞しい体つきをしていて、何時か見た時の様にラフな格好で俺の近くまで歩み寄り、隣に座る。

「待ちくたびれたぜ、ボーデヴィツヒのおっさん」

「まったく、君のおかげで慌てて休暇申請を出す羽目になった僕の苦労を労ってもらいたいものだよ」

ラウラ・ボーデヴィツヒの養父であるヴィクトル・ボーデヴィツヒ少将は、俺に手を差し出して握手を求めてくる。

俺はその手を見て、素直に握手をする。

「ブリュンヒルデから君に関しての連絡は聞いていたが、壮健そうで何よりだ。娘は何か面倒を起こしていないかな？」

「その点に関しちや心配ねえよ。堅物なのが玉に瑕なんだが、寮の連中におもてy：可愛がつてもらってるしな」

「それはよかった」

さて：：そろそろ俺がこの場所に居る理由を述べなくてはならない。

一夏達との実戦をしたその日の内に、俺は千冬にデボラ夫人と少将に連絡を取ってもらい面会の約束を取り付けていた。

夫人とは準備が出来次第千冬から連絡を入れさせると言う形にして、俺は最初に少将と接触するためにこうして片田舎へと足を運んだのだ。

そして俺が単純にこの場所まで出てくることのできた理由：それ

は、一夏が俺を刺した事により入院していることになって  
いるからだ。

東協力の元、学園の医療ポットの中に精巧に作られた俺の  
人形を放り込んで、あたかも俺がそこで眠り続けているように  
誤認させている。

暫らく一夏にや悪い思いをしてもらうが、これも立派な授業の  
一環…これを取り越える事ができないようじゃ戦士としては半人前が  
良いところだろう。

こうして偽装を終えた俺は、東の実験と称した人参ロケット  
打ち上げで無事に日本を出国。

ドイツに辿り着いた後は、こうしてバーに入り浸りになって  
いたって訳だ。

「しかし…まさか君が教師になるとは夢にも思わなかったな」

「俺もだよ…物教えるのは苦手なだけだよ…」

再会を祝して乾杯をし、おっさん2人で真昼間から酒をあおる。

駄目親父此処に極まれり…ラウラが見たら呆れた様な目をされる  
こと請け合いだろう。

「それで…僕を此処に呼んだと言う事は、何か困っての事なの  
だろう？」

「おうよ…ガキが1人臭い飯食いそうになってな。それをどうに  
かしてやらなきゃ夢見が悪くってよ」

「ふむ…それはお隣のお家事情と言うやつかな？」

どうやらドイツではシャルル…もといシャルロットの身元  
に関する情報を掴んでいる様だ。

そもそもが無理のある設定だ…バレていない事の方がおかしい。

俺は懐から煙草を取り出し、火を点ける。

「ふー…どうにも俺にや納得できなくなってるな。こうして色々  
と無理を言っ出てきたって訳さ」

「とことん甘い男なのだ…君は」

「さあて、そいつはどうかねえ…？」

俺はくつくつくと忍び笑いを漏らし、ゆつくりと煙草を吸い始め

る。

今回、デユノア・パンには惨めな思いをしてもらおう…それだけの事をなしてきたのだから、因果応報と言うものであろう。

俺はUSBメモリを懐から取り出して、准将の手に握り込ませる。

「こん中の情報を、それとなくフランス国内のマスコミにリークしてもらいてえんだわ。EUにはアンタくらいしか頼れる人間が居なくってよ」

「そういう風に言ってもらえるのは嬉しいが…それは勿論我々にリターンあつての事だろう?」

無償でやる仕事など無し…当然の話だ。

なにか自分たちに利益があるからこそ、物事は速やかに動いていく…。

だからこそ、それなりの報酬を求めずにはいられないのだ。

「人間災害の智慧の一部…つてところだな」

「…本気かね?」

「本気でなきや呼びつけたりするかよ、バーカ。つっても俺が引き出したのは、お前ん所の娘っ子が使ってる機体のパーツに関しての意見だけだ。あんまり期待するもんでもねえからな?」

人間災害…つまり天災の智慧と言うのは、どの国も欲して止まない禁断の知恵のリングだ。

誰しもがそのリングを求めて独占したいと願っている。

そんなリングの一欠けら…手に入れられるのであれば、手に入れたくもなるだろう。

「良いだろう、取引は成立だ。天災とのコネクションを持つからこそできる交渉だな」

「まあな…帰ったら可愛がつてやらねえと」

「噂には聞いていたが…本当に手籠めにしたのかね?」

俺は肩を竦めて笑うだけで返答を終える。

実際のところ、手籠めにされたのかしたのか不明瞭な所はあるのだが…。

勝手に惚れられて俺が折れた様なもんだしなあ。

「まったく、君の価値は計り知れないものになるな…学園から出るのが困難になるのではないかね？」

「まあ、そこらへんはタヌキ共…こつちじゃキツネの方が分かりやすいか、そいつらとの交渉次第だろう」

「なるほど、老獪な人間との対決次第か…苦勞が次から次へとやってくるものだ」

少将は同情するかのような視線を向け、煙草を懐から取り出す。

俺は素早くオイルライターに手を伸ばして火を点けてやる。

「苦勞つて点じやアンタも相当だろ…どうだい、組織の実態は」

「話にならないね…上は利用する事ばかり考えている。これでは彼女たちが踊らされているとは分からないだろう」

女尊男卑に隠された実体…それは円滑な兵器的運用だ。

女性を優遇？

馬鹿言うな、こぞつてISに乗りたがる奴らは目先の報酬にとらわれ過ぎている。

ISは国防の要になっている…つまり火種が起き、戦争になれば駆りだされるのがISになる。

戦争ともなれば、そこにISバトルによるルールなんて存在しない。い。

今でこそ平和なもんだから戦争らしい戦争は起きていない…だが…。

苦虫を噛みつぶしたような顔を見ると、少将は俺の肩を優しく叩く。

「そんな顔をするものではないだろう…最悪を想定しておくのは絶対だが、起こさなければ良いだけの話だからな」

「そりゃ、そうだけだよ…」

「君は、態度とは裏腹に優しい男だよ…君の美徳だ、大切にしまえ」  
美徳であり悪徳でもあるってところだけだな。

変に苦勞を背負い込むのも、こんな性格だからってのは理解してるんだが…。

「こちらはこちらで上手くやるさ。ところで…これは個人的な質問な

ののだがね？彼女の故郷はどうだった？」

「ハッ、反吐が出ちまったよ」

グラスの中に入っていた琥珀色の液体を一気に飲み干し、カウンターに叩き付ける様にグラスを置く。

今思い出しても腸が煮えくり返る様な思いだ：少将が俺にアタリをつけたのは、恐らく街で騒いでいた旅行者の情報を目にしていただろう。

今時監視カメラのない場所なんて無いからな：元より施設襲撃は束によって起きたものだど断定していたかもしれない。

「あくまで個人的な質問だ。僕は此処で聞いたことは外部に漏らしはしないよ」

「口が堅いもんだねえ：」

「娘を助けてくれた恩人だからね：それくらいはするさ」

少将は席から立ち上がると俺に背を向ける。

「この件は明日にも動かせてもらうよ」

「確認取れたらデータをお前のデスクに送っておくわ」

「了承した：やれやれ、人間災害殿は未恐ろしい」

少将が店を出ていったのを見て、俺も席から立ち上がりトランクを担ぐ様にして持つ。

此処での用事は終わったので、早速フランスへと入国しなくてはならない。

いやあ、真綿で首を絞める様に追い詰めていくのは何にしたって愉快なもんだわ。

「これ、口止め料だな：マスターは、此処で聞いたことはただの世間話だったし、俺の事は迷惑に思っていた：OK？」

「あ、あ、あんた何者なんだ!？」

俺はカウンターにポンと札束を置いて、さっさとバーを後にする。「何者ってそりゃあ：悪魔だろうよ」

滞在していたホテルを後にし、その足で国境を越えて無事にフランスへと入国した俺は、今日の宿を取れなかったので教会へと足を運

び、そこで宿を取ることにする。

寂れた教会ではあったものの、そこを切り盛りしていた老神父夫妻は快く礼拝堂の一面を提供してくれた。

時刻は22時…俺は黒鬼のコアネットワーク通信を利用して、束へと連絡をとる。

すげえ…ワンコール目が終わる前に出やがった…。

『おっはよー！朝からアモンのラブコールなんて、束さん寝てないのに目が覚めちゃったよ!!』

「寝ろつつつたよな、この馬鹿！」

『なにおう!?この天才にして完全無欠の束さんを馬鹿だとう!?』

束と共同生活を送るうえで、俺は最低限でも睡眠を5時間取る様に約束を取り付けていた。

見てくれは良いのに、睡眠不足や栄養失調からくる目の下のクマやら肌荒れや、枝毛やら抜け毛やらと女性としての最低限の身だしなみが壊滅的だったが為だ。

クロエは俺の言いつけを守って身だしなみに気を使ってくれと言うのに…この母親ときたら…。

「約束、破ってんじゃねえつつの……たく。そっちは変わりねえか?」  
『それはもう、色々と順調だよん。もちろんシュレディングアの箱も開けられてないし?』

「そいつは重畳…この分ならサクツと終わらせて帰国できそうだな」  
シュレディングアの箱とは、言うまでも無く俺の人形が入っている医療ポットの事である。

流石にポットから出されると、体温が無いのでバレてしまう可能性が高まってしまう。

ある意味、時間との戦いを強いられているのだ。

『うへへへ、帰ったらしっぽりとね〜』

「あー、はいはい時間がとれりゃあな」

帰る頃には恐らく期末テストの採点やらなんやらで、しっっちゃかめっっちゃかになってると思うが…まあ、黙っておこう。

『ね〜え〜アモン〜、言って欲しい言葉があるな〜』

こう、前かがみで腰を振る様な動作で見上げてきている構図が容易に思い起こせるような甘い声で、束は俺に催促してくる。

たまにはカウンター気味に言ってやるのも悪かねえか…？

「束」

『ん〜？』

「帰ったら骨抜きになるまで愛してやるから覚悟しろよ？」

『んんんんっつ！！…ふう、やっぱリアモンのサドっ気全開低音ヴオイスはイけるね』

突如悶えるような声が聞こえてきたと思ったら、いつもよりテンション低めの冷静な声で束は俺のセリフを評価してくる。

賢者モードになってるんじゃないよ…。

「そろそろ千冬に代わってくれ」

『あいあ〜い、ちーちやくん』

呆れた様な声で通信が変わる様に言うと、束は至極満足したかのように千冬を呼び出す。

暫らくすると、がさごそとした音と共に千冬が通信に出る。

『そちらはもう真夜中か、久々の外の空気はどうだ？』

「そら最高に決まってるんだろ。あとでデボラに連絡入れておいてくれ」

千冬は特に心配している素振りを見せる事もなく、俺に声をかけてくる。

『ああ、分かった。順調そうで何よりだ』

「まだとっかかりだけだな…それで、一夏の方はどうだ？」

『それなんだが…』

一夏の事を尋ねてみると、千冬は困ったような声で言いよどむ。

どうやら少々腑抜けになってしまっているらしい…人を刺すなんて初めてだろうし、仕方ないだろうが…正念場だな。

『授業自体はキチンとこなしているが、どこか上の空でな…相当に堪えているらしい』

「でなきや、怖いわ。まあ、極端な話…命の取り合いをする事の怖さを知れただけでも儲けもんだろう？」



いずれ立つことになるであろうその場所で、自分が奪われないようにするために…。

可愛がってるからこそ心を鬼にして教えなくてはならない事がある。

『そう、ならなければ良いのだろうか…』

「無理だろ…男がISを使える様にならない限りは」

男性がISを扱えると言うだけで、シャルロットの様な被害者が生まれるくらいだからな…。

俺たち男性操縦者は火種になり続けるだろう。

『つと、すまない…そろそろ会議があるので通信はここまでだ』

「あいよ…まあ、なんとか上手くやってくれ」

『ボロを出しはしないさ…その、アモン？』

千冬はもごもごと何かを言いたげにするが、中々言い出せず少々重苦しい沈黙が続く。

暫らく待ち続けていると『良し』と言う声がし、大きな深呼吸が聞こえてくる。

『その…ア、モン…お前が居ないと寂しいので、早く、帰ってこい…』

「…お前は時々、男心撥る事言うよな…」

『な、なにを!!』

正直心臓と股間に悪い。

普段が普段なので、所謂ギャップ萌と言う奴だろう…不覚。

「馬鹿にしてるわけじゃねえって。なら、とつととお仕事終わらせて帰らねえとな」

『もう、知らん！勝手に振り回しているんだ！早くしないと承知せんからな!!』

千冬は照れ隠しからか怒った様な口調で捲し立てると、一方的に通信を切ってしまう。

いやはやまったく…ツンデレか…？

「あー…つたく…早く帰りてえ…」

俺は礼拝堂の一面でうずくまる様にして横になり、そのまま眠りに落ちた。

## #38 パリで出会う雨

その日、IS業界：ひいては世界に激震が走った。

『デュノア社長ダニエル・デュノア辞任。後任は元フランス国家代表デボラ・デュノアに』

デュノア社の業績が芳しくなかったのは確かな事ではあるものの、現在のラファール・シリーズのシェアを考えれば辞任に至るほどでは無かったのは明白：では、何故辞任をすることとなったのか？

それは言うまでも無くヴィクトル少将閣下に渡した、ありとあらゆるスキャンダルがフランスメディアに一齐に報じられたからだ。

政治家に対する賄賂から脱税、果ては火遊びのお相手まで詳細に報じられてしまったダニエルは、役員会での弾劾決議の果てに辞任へと追い込まれることになったのだ。

会社の名に傷が付いてしまったものの、俺には関係が無い。

なんせ、俺はシャルルがシャルロットとして生きられるようにすることだけが目的で、今までお膳立てをしてきたのだから。

——話は少し遡る。

フランスはパリにある古い教会：サンテティエンヌ・デュモン教会の礼拝堂で、俺は静かにステンドグラスを眺めながら人を待つ。

サンテティエンヌ・デュモン教会はパリの守護聖人である『ジュヌヴィエーヴ』が眠っている教会で、パンテオンの裏手にあるため目立ちにくいもののそれなりに規模の大きい教会となっている。

中でも絵画の様に繊細なステンドグラスが有名で、それを目当てに観光客がやって来るのだそうだ。

俺が待っている人は言うまでも無くデボラ・デュノア夫人：シャルロットの継母であり、千冬にSOSを求めてきた御仁だ。

俺は、場や相手から浮かかないように黒のスーツに血の様に赤いネク

タイを締めて佇んでいる。

約束の時間の5分前…と言うタイミングで俺の隣に1人の女性が歩み寄る。

ベリーショートのブロンドに陶磁の様なきめ細やかな肌、少しキツめの目つきではあるものの女性らしく美しい顔立ち…俺とは真逆の純白のスーツをビシッと着こなしている。

「この教会のステンドグラスはお気に召したかしら？」

「まあまあな。それで、悪魔に何の用だい？」

暫らく互いにステンドグラスを眺めてから、デボラが口を開く。

ややハスキーな声色は何処か彼女にクールな印象を与えさせる。

もつとも、彼女の半生を多少なりとも聞きかじっていると、とてもじゃないがクールな女性と言う評価を下すことはできないんだが。

「貴方と契約をする為に」

「出血程度じゃ済まされねえ…誰かの首が必要だ」

俺が静かに歩き始めると、俺の隣を歩く様にデボラもそれに追隨してくる。

俺の言葉にデボラは生唾を飲み込むものの、静かに頷く。

元より覚悟の上…と言った顔つきだ。

「もう、後戻りはできない…それならば、私はまだあの子の未来を取るわ」

「結構…そう言ってこなきや、お前の首も落とさなきやならなかった」

俺はにんまりと笑みを浮かべて、礼拝堂の中を見学するようにゆっくりと歩いている。

悪魔が教会の中を闊歩し、人に禁断の果実を差し出す…背徳的行為の極みだな。

もつとも、人1人の犠牲で子供1人の未来が多少明るくなるんだ…文句を言われては堪ったものではない。

「お前の旦那がやらかしていることは全部こつちが握り込んでな、それを全部信頼できる筋に預けてマスコミにリークさせはじめてる。早けりや明日の朝にでも顔面が真っ青になってるだろうさ」

「そ、それは…会社自体も…」

「まあ、傷がつくだろうな…で？」

足を止めたデボラを横目に俺はそのまま歩き続け、ゆつくりとデボラの周りを歩いていく。

誰かの首が必要だと言った。

出血程度で済まされないともし言った。

そして、それに納得をした。

故に、もう契約は成されている…こうなったら悪魔は止まらない。

目的の達成のためにありとあらゆるものを犠牲にし続ける。

悪魔と契約に魂を売るをすると言うのは、手段を選ばないと言う事と同義なのだ。

「で…って…会社にはそこで働く社員たちが居るの！彼らを路頭に迷わせろと言うの!？」

「親が、子の人生狂わせた結果だろうが…血がつながってねえだの關係ねえだの言わせねえぞ？必死に泣いていたのに丸投げしたテメエが四の五の言うのか？」

「っ…」

そう、丸投げした…駄目だと分かっているでもそれを避けさせることが出来なかった。

元よりシャルロットがスパイをしていたら…もしくは今後の業績に影響を与えるであろう第3世代の試作機を開発できなかつたら、遅かれ早かれ従業員達は路頭に迷う羽目になっただろう。

今更なのだ…そんなリスクは。

「デボラ、お前には血反吐を吐いてでも走り抜けてもらう。死に物狂いで駆け抜けなくちゃ、お前もシャルロットも、従業員ですら地獄を見るぞ」

「そん、な…」

「千冬よ…ちよいと甘ちゃんじゃねえか…？」

俺は深いため息を零しつつ軽く眉間を揉む。

無意識に煙草を手に取りそうになるのを必死にこらえつつ、顔面蒼白となっているデボラを見つめる。

恐らく、今余人の人生がその両肩に乗っかっていることを想像して

しまっているんだろう。足がすくむだろう、逃げたくもなるだろう：それでもやつてもらわなくちゃならない。

今後似た様な事を起こさせない為にも。

「八方手を尽くして社長の座に収まれ。役員共を黙らせるだけの土産は用意してあるからな」

「やるしか、無いのね…」

「形振り構わねえから、悪魔の甘言に乗るんだろうが」

ニヤリと笑みを浮かべて、俺は懐から1つのUSBメモリを取り出した。

——そして、今に至る

ラジオやテレビは連日の様にこのデユノア社の電撃交代劇を報道し、ダニエルもまた贈収賄の一件で逮捕されることとなった。

俺は今そんなニュースをカフェの端で優雅に紅茶を飲みながら、ラジオから流れてくるニュースに耳を傾けている。

『また、本国よりIS学園へと出向していたシャルロット・デユノア氏の性別詐称に関しては、氏の身の安全を守るためであったと言う発表があり——』

シャルロットの性別詐称は、デボラがシャルロットをIS学園へと遠ざける事で会社と切り離そうと画策した…と言う事にした。

知つての通り、IS学園はある意味世界から隔絶された一種の国の様に機能している。

最悪、会社の不祥事発覚から帰国命令が出たとしても特記事項第21項を笠に3年間と言う期限付きだが匿う事もできる。

もつとも確実な案ではない為、こうして俺がフランスまで出張ってお膳立てしてきたわけなのだけれど。

ともあれ、これにて俺はIS学園へ幽閉生活に逆戻り：次いで束と千冬の猛攻と一夏を宥め…更に期末考査のテストの用意と目まぐる

しい毎日が待っていることになる。

…帰りたくねえ…。

「ここ、席空いてるかしら?」

「…空いてるように見えるかい?」

「ええ、偉丈夫が辛気臭そうに紅茶を飲んでるだけですもの」

突如声をかけてきた女性は有無を言わずに俺の向かい側に座り、ミルクティーを店員に注文する。

その女性は、春の夜にIS学園に侵入してきたブロンドの美女だ。

「まさかこんなところで出会えるとは思ってもみなかったわ、Mr. ミュラー」

「ダレノコトデスカソソナナマエノヒトシラナイナー」

「すつ呆けなくてもいいわ。私と貴方の仲じゃない」

「って言う割にはお前の名前を俺は知らねえけどなあ…」

俺は軽く肩を竦めてため息を吐けば、目の前の美女は自身の人差し指で唇に触れながら『それもそうね』と頷く。

味方でなければ敵、と言う訳でもない。

あくまでも向こうのビジネスの関係上敵対することになっただけなので、俺個人としては目の前の鯖読み美人に対して特別思い入れがあるわけではない。

ただ、俺がとても苦手になっている人物…と言うか幽霊?に雰囲気似ているので、少しばかり関わりたくないとは思っている。

「私の事は…まあ、スクールとでも呼んでくれれば良いわ」

「土砂降りねえ…それで、またスカウトのお話かい?」

スクールと言う名前とは裏腹に夜空に浮かぶ月の様に静かな輝きに満ちた美女は、両手で頬杖をつけて俺の事を見つめる。

俺はそんなスクールの顔を背けながら横目で見つつ、新しく注文した紅茶を静かに飲む。

「今日はオフの日で、お仕事とは関係ないわ。ここで行う仕事はもうないし…折角パリに居るのだから、観光をなんて思ったら居ない筈の人が居るじゃない。私の記憶違いでなければ…外出は禁じられていた筈よね?」

「何事も抜け道はあるもんでね…で、それだけか？」

どうにも苦手意識を持ってしまっている所為か、早く追いつきたいと言う気持ちが顔を出してしまふ。

そんな俺の心を見透かしたように笑みを浮かべたスコールは、軽く肩を竦める。

「別にスカウトをしようとかそういう魂胆で声をかけた訳ではないわ。ただ、貴方の事を少し知りたいと思っただけ…。白状すれば、興味があるわ」

「それは、俺が男性操縦者だからだろうか？」

「まさか…玩具を使えるってだけで興味を惹く対象になりはしないわ」

ISを玩具…束が聞けば目を吊り上げて怒りそうな気がするな。

俺も玩具だとは思ってるが…ただの人間からすればとんでもない兵器になっている訳だが。

なんせ物理法則の縛りが殆どないからな。

「言っちゃなんだが、趣味悪いって言われねえか？」

「ええ、私は趣味が悪い上に悪食よ…どんなものであれ齧ってみたくなるの」

そう言うと、スコールは妖艶な表情で舌なめずりをしてみせる。

作りものだけにボディラインは、そこらの女性が見たら嫉妬しそうなほどに出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる。

男の性としては、やはりそれでも魅力的に見えるものではあるものの、そそる程のモノでもない。

「おお怖い怖い…溺れたら骨までしゃぶり尽されそうだ」

「ええ、もちろん…私と言う女に溺れてみる？」

「あいにく2つの沼に溺れてるんでね…他所当たれ」

「あら、釣れない…」

スコールは心底つまらなさそうな顔をして、唇を尖らせる。

俺をナンパして等と本気で思っていたのだとしたら、愉快的な女だ。

不意にスマホの着信音が響き、素早くスコールがスマホを手に取り電話に出る。

スコールの目つきが僅かばかり鋭くなったのを見て、俺は懐から煙草を取り出して口に咥える。

暫らく小声で会話しているのを眺めていると、スコールは電話を切って席から立ち上がる。

「美人は引つ張りダコかい？」

「ええ、有能な人はそれなりに仕事をこなすものよ」

スコールは軽く肩を竦めると俺の隣まで歩み寄り、顔を此方へと近づける。

俺は僅かばかり顔を背けようとするものの、スコールはお構いなしに俺の頬に口づけを落としていく。

「ふふ、お手付きくらいはしておかないと」

「しつこい女は趣味じゃねえってな…」

「V. T. は生きている…それじゃ、次も敵対関係ではないことを祈っているわ」

スコールは顔を離す際に耳元で訳の分からない事を囁き、そのまま背を向けて立ち去って行く。

俺はその背中を見つめて小さくため息を吐きながら頬に付いたルージユの跡を手の甲でぬぐい取り、小さくぼやく。

「もう来るんじゃないっての…」



## #39 帰還

どこぞの組織のスカウトマンであるスコールとの邂逅から早一日：移動中に纏めた今回のデュノア社騒動のレポートをこっそりと生徒会室の偉そうな机に放置して、医務室へとそそくさと入っていた。

医務室の中に別に用意されている医療用カプセル室へと入ると、その中にはまるで生きているかのように眠り続ける俺の人形がカプセル内に横たわっているのを確認することができる。

部屋の様子を見る限りでは見舞客も入ってきている様子はなく、隠蔽効果はそれなりにあったことだろう。

その間に一夏を精神的に苦しめてしまったことは、多少なりとも悪く思わないでもないが…。

俺はカプセルの装置を切って、扉を開いて人形の着ていた衣服を剥ぎ取って着替える。

残っている人形と先ほどまで着ていた衣服は、黒鬼の拡張領域内に仕舞い込むことで証拠を丁寧に消しておく。

室内やIS学園のあらゆる場所に設置されている監視カメラに関しては、天災殿が細やかに丁寧に修正してくれている。

「こうして、シュレディングアの猫ならぬシュレディングアのアモン作戦は幕を閉じたのだった、まる」

どこか充実感を得たかのような清々しきを感じつつ、医療カプセルに設置されていナースコールのボタンを押すことで、たった今日覚めたかのように俺は演出するのだった。

「レポートは確かに読ませてもらいましたよ、アモン先生」

「デュノア社から腕利きの技術者の引き抜きに、今後のラファール関連の装備や修理パーツの購入価格の割引、デュノア社で開発された新型装備の優先配備…よくもまあここまで引き出せたものね」

「へっへっへ…それなりに良いものもチラつかせてやったからなあ」

場所は変わって学園長室…今回の件の報告と挨拶を兼ねて、学園長

である轡木のタヌキと更識の猫娘と顔を突き合わせる。

無論、今回の件は俺が表立って動いているなんて事がバレてしまうと、学園の立場が非常に悪くなってしまふ。

目の前の2人の情報操作能力と天災のイかれた手腕が無ければ、到底実現することが無かつた事だろう。

「技術者に関しては整備課の外部講師としてお招きする形になりますし、ラファール関連の装備が潤うのは学園の防衛と言う観点でも非常によろしい…ですが、念を押して言ったと思っていたのですが…？」

「ハッ、女置いて行くかよ」

「やーだー、もう自分の女扱い?」

「茶々入れんな」

轡木は笑みを浮かべていた顔から一変させ、険しい表情で俺の事を見つめてくる。

先ほども言ったように俺が外をブラついていた等とバレてしまうと学園の監督責任を問われる結果になり、学園の中立性を崩してしまふ事に繋がりがかねない。

IS学園は、上位組織であるはずのIS委員会からも事実上干渉を受ける事が無い。

今回はそういった立場である学園に傷をつける事態になりかねず、轡木としても俺がフラフラと歩きまわるのは胃に悪いのだろう。

「はあ…貴方を舵取りできるとは思っていますでしたが、天災と同じ性質ですか」

「おう、同列にされるのはマジで嫌すぎるぞ…アイツよりはまだ感性マトモだつっの」

「感性がマトモなら、デユノア社の一件に関わろうなんて思う訳ないでしょう? 今回の一件は私たちが動かなくて済んだから学園側に大きな利益を運んできたけれど…先生にはもう少し自分の立場と言うものを理解してもらわないと」

轡木と更識は大きいため息を吐いて俺の事を見つめてくる。

勿論、俺自身に反省の色が見られないからに他ならない…俺にとつ

てこの学園は止まり木の様なもので、偶々巢を作らざるを得ない案件が重なってしまったからこの場所に居るに過ぎない。

出てけと言われたら5分以内に学園から出ていくことだってできる。

そんな状況で俺が此処に戻ってきたのは、ひとえに千冬と東の存在…そして弟分である一夏に依るところが大きい。

千冬と東は下手すりゃ俺を追っかけて来そうな雰囲気があるが…一夏はちいっとばかり苛め過ぎたからな。

フオローしてやらないと、今後に差し支えるかもしれない。

「へえへえ…悪うござんしたつと…。確かに隠密性優先で勝手に動いたのは悪かったさ。でもまあ、ガキ泣かせっぱなしってのはつまらねえんでな」

「その子供の父親がお縄についてただけど…?」

「そこまで面倒見てやれねえよ。万能でもなんでもねえからな」

…結果として、シャルロットは自身の本来の性別に戻り自由を手に入れ、代償として父親を失うと言う形になった。

何かを得るには何かを手放さなければならず、そして外道であったが故の末路であると思うと…俺は父親に対して何かをしてやろうと言う気持ちにはさらさらなれなかった。

元よりデュノアは女性として居たい、自由でありたいと願っていただけだ。

悪魔は契約外に関しては、とことん薄情になれる。

「後の調整は此方でやっておくこととします。アモン先生、くれぐれも無茶をしないように…いいですね?」

「あいよく、任されて〜」

「いまいち不安だわ…」

よつこらせとソファーから立ち上がれば、俺はひらひらと手を振りながらそのまま学園長室を出ていく。

学園長室の扉を閉めると同時に、ふわりと嗅ぎ慣れた良い香りが鼻孔をくすぐる。

「よう」

「おう」

S H Rはとうに過ぎ、もはや1時間目の授業が始まっているにも関わらず、学年主任である織斑 千冬が壁に背を預けて俺の目の前に立っている。

互いに短く言葉を交わし、自然な動作で同時に歩き始める。

「久方ぶりの娑婆の空気はどうだった？」

「悪かねえわな…旅が好きだったのは変わらねえわけだし」

「…そうか」

俺は偽りなく本心を口にする。

偽ったところで俺の本質は知られてしまっている訳だし、そこに意味を見出すことができない。

俺は千冬や束に聞かれた事であれば可能な限り正直に話してやりたいし、そうしていききたいと思っている程度には大切に想っている。

千冬は何処か寂しそうな顔で——といっても表面上は鉄面皮の様にいつもの顔だが——少々俯き加減で俺の隣を歩いている。

「とつとと軟禁状態が解かれないもんかねえ…？」

「そんなに外が良いなら、帰ってこなければよかつたではないか？」

「馬鹿言え、帰って来るって約束したろうが」

「それは…そうだが…」

千冬は俺から顔を背ける。

ははーん、珍しく千冬は乙女らしい部分を表に出している様だ。

自分と束が俺を縛っているのではないか、と思わなくてもいい自己嫌悪に陥っていると。

俺が肩を震わせてくつくつと忍び笑いを漏らすと、千冬はバツと顔を上げて俺の方を睨み付けてくる。

「な、何がおかしい!？」

「いや、随分と可愛らしいもんだと思つてよ。千冬、俺が居なくなるのはまだまだ先だろうし、そう簡単にお前の傍離れようとはしねえよ。今回の件は特別だつただけでな。俺が言いてえのは、お前と旅行に行くのも悪かねえなつて事だ」

現状、本当に学園から出る事が許されていない俺は、誰かとどこか

に出かけると言う事ができない。

ががちがちのお仕事空間に居続けると肩が凝って仕方がない…寝泊まりしている寮には生徒達もいるしな。

そういった視線が無い場所と言うのは、やはり精神的に落ち着いてくる。

こう言う所はいくら歳を重ねても、非人間であつても改善されることは無い。

「日本はこの辺りしかブラついたことねえし…あれだ温泉とか有名なんだろ?」

「火山大国だからな…東京でも掘ったら出たなんて話がある程度には有名だが」

「いいねえ…美味しい飯に、美味しい酒、それに別嬪同伴の温泉旅行…」

「…何を想像している?」

そういや、7月に修学旅行が予定されていたのだったか…宿泊する場所が温泉旅館だつて話をチラツと耳にした事がある。

海沿いにあるつて話なんで、新鮮な魚介に舌鼓を打つことが出来るんだらう…その間、俺はおそらくボツチ飯なんだらうが。

「そりゃあ何つてナニよ」

「いっそ握りつぶしてやろうか…」

「サーセンツシタ」

千冬は忌々し気に俺の股間を睨み付けて、掌を握ったり開いたりしている。

時折、コキコキとした小気味良い音をさせているところから察するに、半分本気で半分冗談なのだろう。

千冬の握力で握られたら、それこそお陀仏になりそうで怖いな…。俺は軽く身震いしてため息を吐き、眉間の軽く揉み解す。

「まったく、軽口は変わらんのだな…アモンは」

「人間のコミュニケーションは黙ってちゃ伝わらねえし、かと言っていつもクソ真面目に話してたつて疲れるだけだろうが…多少はユーモアつてやつが無けりゃな」

「良くも悪くも裏が無いな…お前は」

「ぎーて…そいつはどうかねえ？」

裏が無いと言うのは、それこそ自分全てをさらけ出したモノにしか許されない言葉だろう。

そう言った意味では、俺にもそれなりに裏があるって言う事だ。

担当クラスの教室に辿り着くと同時に、授業終了のチャイムが学園内に響き渡る。

本来であれば、中で授業をしている真耶が出てくるのを待つべきなんだろうが、俺は躊躇することなく教室の扉を開ける。

「おつはよーさん。何日ぶりだ？」

「あ、アモン先生…もういいんですか？」

真耶はいきなり開かれた扉を見て俺が入って来たのを確認すると、少しだけ驚いたかのように目を見開いた後に少女らしく首をコテンと傾げる。

それと同時に教室中の視線が俺に集中する。

「き…」

「あ、やべ…」

「「「きやあああああ?!?!」」」

俺は素早く両耳を手で塞いで衝撃に備えると、教室どころか学園中に響き渡るかのような悲鳴が1組の生徒全員から一斉に放たれる。

その衝撃たるや窓ガラスがびりびりと震えるほどであり、余程驚いたのだろう。

てつきりSHRで伝わっているものだと思っていたんだが…。

「先生！過労で倒れたって聞いてたんですけど!?!」

「私は何者かに襲われたって!」

「篠ノ之博士に解剖されかけたとか!?!」

「あー…まあ、過労って事で…」

クラス中の生徒が俺へと一斉に詰め寄ってくると、尾鰭が付いた俺の噂を一斉に捲し立ててくる。

俺はあまりの勢いに思わず後ずさりしてしまう。

なんていうか…若い奴らのバイタリテイってのは本当に…。

「シショールが起きたと聞いて!」

「はえーよ、チャイム鳴ったばかりだろうが」

隣のクラスから騒ぎを聞きつけてきた鈴が、教室の出入り口で生徒に殺到されている俺の腰目掛けてダイブするように抱き着いてくる。

もちろん鈴程度の体重の体当たり程度で揺らぐことはなく、そのまま抱き着かせて頭をポンと撫でてやる。

「うう…：シショ…：心配したんだからね!？」

「あー、はいはい…：悪うござんした。ったく、生きてんだから泣くなっつかスーツに鼻水つけんじゃねって!」

「つけてないわよう!!」

鈴は俺の身体に抱き着いたまま体を震わせて大声で泣き始め、あまつさえ顔を俺に押し付けて涙をスーツに吸わせ続ける。

新手の嫌がらせかよこいつ…。

困ったように視線を彷徨わせると、千冬はニヤリと笑って顔を背ける。

教室内へと目を向けると大半の生徒が生暖かい目で俺を見つめている。

教室内に居たラウラとセシリアはどこかホツとしたような顔をし、箸はちらちらと俺に視線を送ってくる。

そして…――

「おう、一夏…：随分腑抜けたじゃねえか」

「あ、アモン…：兄…」

どこか暗い表情をした一夏とシャルロットが俺の視界へと入り込んできた。

## #40 一難去つて次二難

昼休み。

俺は社会科資料室と言う名の自室のデスクで紅茶を啜りながら、目の前で浮かない表情のまま黙している2人を見つめる。

1人は今回のフランスが起こした事件の最大の被害者、シャルロット・デュノア。

彼女の性別は事件が起きた時に学園側で即訂正が入り、男子生徒から女子生徒へと肩書が変更されている。

勿論、男装してまで編入してきた理由は報道されている通りであり、学園側は前もつてこの事態に対して対処すべく動いていたと言う事になっている。

これはあの生徒会長が気を利かせてくれた方便であり、実際のところ国外退去処分の後にフランスで処罰される可能性があつたつて言うんだから笑えない。

だが、結果として彼女の国家代表候補生としての肩書は守られ、こうして学園で勉学に励むことが出来るようになったのは非常によろしい結果だと俺は思う。

そして、浮かない顔をしているもう1人……それは、言うまでも無く織斑 一夏だ。

此奴が浮かない顔を押している理由はたった1つ……それは我を通してそうとした結果、俺を病院送りにしてしまった——と、思い込んでいる——ことだ。

齢15：今年で16歳になる訳だが、それでも人(?)を殺しかけたと言う事実は一夏自身に重くのしかかり続けているんだろう。

結構な事だな。

もし、これで能天気な顔を俺に拝ませていたら、問答無用で顔面整形を施して見放していたところだ。

「で、用つてなんだ?」

重苦しい空気の中、いつまでも話し出すことができない2人に対して、俺は助け舟を出すかの如く話を切り出していく。



今は昼休み：時間も限られているし、午後は俺が受け持つ授業ばかりなので無駄にできないのだ。

「そ、そのお父さんは…」

「あ？報道の通りなんじゃねえか？俺は眠りこけてたから知らねえんだけどな。つーか、お前も大概優しいもんだな…」

「道具として扱われはしたけど…それでも…僕にとつては唯一の血縁で…」

「血縁だろうと他人は他人だぞ。お前に害意を成そうとした時点でそれは敵だろうが」

しどろもどろと言った感じで話し出すシャルロットに、俺はすつ呆けた態度で答えを返す。

壁に耳あり障子に目あり、人の口に戸は立てられぬ…変なところで俺が外出していたところが漏れると面倒極まりない。

シャルロットは、お人好しではあるんだろう。

勿論、今回に限って言えばそれは美徳ではあるんだが、美徳であると言う事は利用されると言う事でもある。

シャルロットは父親にその優しさにつけ込まれて、スパイなんて役目を担いかけてしまった。

血縁だ、実の親子だって言うなら、態々危険な目に合わせるなんてしないはずなんだけどな…その点、血縁でもないのに親身になって身を案じてくれていたデボラの方がまだ親らしい。

いや、旦那の暴走を止められなかった時点でアレかもしれないが…。

「神は自らを助けるものを助ける…害意には自分で向き合う必要がある。その結末がどうあれな」

「そんな…僕は…」

「別に今生の別れになるわけでもねえだろうが…」

俺は大きいため息を吐いて、落ち込むシャルロットを眺める。

…誰もが救われることなんて絶対がない。

何かを手取るならば、その手に掴んでいるものを手放さなければいけない時が必ず来る。

あの狼は…終ぞそれが出来ず終いだったか…。

「で、お前の隣に居る俺の愚弟は、何をシケた面してんのかねえ…？」  
シャルロットとの会話を切り上げた俺は、一夏へと目を向ける。

俺に目を向けられた一夏はビクリと体を震わせると、真っ直ぐに此方へと視線を送ってくる。

「思い知ったか？」

「っ…！」

俺はニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら一夏を見つめる。

対する一夏はそんな俺の言葉に息を呑み、途端に視線を彷徨わせ始める。

『皆を守れるように強くなりたい』

純粹で眩しい輝きを放つ少年らしいその願いは、ともすれば両手をどす黒く染め上げると言う願いでもある。

俺たちが生きているのはあくまでも現実の世界だ。

無理な事は無理だし、押し通ろうと思えばそれなりに生贄も必要になってくる。

皆を守れるようにと言う事は、外敵すべてを打ち倒すと言う事に他ならない。

「お、俺は…兄貴を殺そうと、思った訳じゃなくて」

「だろうよ、無我夢中だったもんなあ…我を押し通すために形振り構ってらんなかったもんか？けどな、それが現実だ」

「俺は、人殺しになりたいんじゃないんだ…ただ…守れるだけの力が欲しくて…」

あの時、俺の身体に突き立てられた雪片式型…もし、俺でなかったら致命傷だったそれは、明確な殺意があつたわけではなく、ただ一心に『勝ちたい』と言う執念の元に突き立てられたものだ。

本来であればISのシールドエネルギーである『絶対防御』が作動して、俺の肉体に傷1つ付くことは無かつただろう。

だが、雪片式型には…白式にはワンオフ・アビリティである『零落白夜』がある。

あれにはあらゆるエネルギーを無効化すると言う、恐るべき能力が

備わっているのだ。

それは、『絶対防衛』も例外ではない。

「現状ISつてえのは兵器だからな…人殺しの道具だ。それこそス  
ポーツで使うようなもんじゃねえのは分かってるだろ？ま、零落白夜  
使つて斬つたのが俺で良かったな。俺じゃなきゃあの一突きでお陀  
仏だ」

「なんでアンタはそこまで追い詰められてたのに怒らないんだ!？」

終始ヘラヘラとした態度で居たのが癪に障つたのか、一夏は俺に詰  
め寄つて襟元を掴んで持ち上げる。

怒られた方がマシだと言わんばかりの表情だな…。

「そら、態とだからに決まってるだろ、バーカ」

「んなっ!？」

俺はあの時、我を通すと言う事の意味を…現状のISの本質を教え  
る為に態と無防備を晒した。

そうでもしなければ遅かれ早かれ一夏はその手を血に染めて、酷く  
苦悩する羽目になる。

こんな平和な世界では、人を手にかけてと言う事は重い…あまりに  
も重すぎる。

特にガキには踏みとどまることが出来なくなってしまふほどに…。

一夏には真つ直ぐ育つてほしいと言う俺なりのエゴもあるんだが  
…。

「てめえらガキ共が徒党を組めば俺に勝てるのか思つてる時点で、思  
い上がりも甚だしいっつーに…。第一、行動不能に追い込むなら初  
手で緊縛状態にして転がしておくつてんだよ」

「わ、わざ、と…」

「さつきも言ったが、俺じゃなきゃ死んでたのは確かだ。それだけの  
深手ではあつたからな。なんせ、内臓がグチャグチャになつてたから  
なあ…」

「うっ…」

一夏の白式には雪片式型しか積まれていない。

つまり、初手で『神隠鬼現』で急接近してから関節を面白おかしい

方向に曲がる様にワイヤーブレードで縛り上げれば、それだけで無力化が出来たのである。

一夏は先ほどまでの怒りがどこに行ったのかへなへなと床にへたり込み、シャルロットはあの時の怪我の具合を聞いてしまつて口元を両手で抑えて吐き気を堪える。

「あの時、お前はシャルロットを守つてやろうと必死だったろ？守ると言う事はな、外敵を排除するのと同義だ。お前は俺を無力化しようとしていたんだろうが…零落白夜の事をきちんと考えてなかったからああいう事態になつたつてーわけよ」

「あ、アモン兄…アンタ…始めから…」

「バーカ、バーカ、当たり前だろうが。ガキ共の考えなんぞ全てまるつと御見通しだつつの」

俺は椅子に座り直して襟元を正し、一夏とシャルロットを見つめる。

「シャルロットに関しちや、はなつからやる気がねえのが分かつていたしな」

「そ、そんな…いい、いえ、やる気が無かったのは本当だけど…そんなに演技下手だったかなあ…」

「付け焼刃も良いところだろ…」

どうしてもシャルロットの演技は少女が憧れてしまうような男子像を元にしてしまつている節があり、演技がクサすぎるのだ。

勿論、この学園の女生徒達は基本的に男と言う存在に餓えつつ夢も見てしまつているので、察しが良い一部の生徒以外は勘付きもしなかつただろうが。

「で、一夏は一夏で最近白式がきちんと動かせるようになって天狗になりかけてたからな…零落白夜が如何にヤベエのかつてのが再認識できたろ？」

「ひでえよ…アモン兄…」

ケケケ、と悪い笑みを浮かべながら項垂れている一夏の頭をつま先で軽く小突いてやる。

…一応、これで気負う事もなく、かといつて自分の持つているもの

を考えも無しに振り回すと言う事もなくなるだろう。

重ねて言うが、今の世界において零落白夜と言うその刃はあまりにも危険すぎる。

シャルロットに関しては、時間をかけて納得していくしか無いだろう。

血縁とて他人、親子であれど害意があれば敵とは言ったが、少女が割り切るには色々な事が短期間で起こり過ぎたからな。

帰国する機会があれば父親と面会することも可能になるだろうし、その時に真意を問い質す様にすればいい。

社会科準備室の悲喜こもごも：こうして、昼休みは穏やかに過ぎていった。

久しぶりの授業は少々騒がしくなったものの、滞りなく終えることが出来た。

俺が不在の間は各クラスの担任がローテーションを組んで受け持っていたらしく、また生徒達も授業を軽視することなく取り組んでいたと言う事だ。

ISが世界の中心に据えられているとはいえ、全員が全員その道に進める訳ではない。

そうしたときに一般教養が無いって言うのは非常に拙い訳で：あのタヌキの教育方針つてのも満更悪い訳でもないな、うん。

「はあ…」

俺は深いため息を吐き出しながら、目の前の寮長室と書かれた扉の前に居る。

なんていうかこう：帰ってきてしまったなあ…と言う変なストレスが俺の心に重くのしかかってきているのだ。

理由は主に1人アリスの所為なんだが：それもまあ、元を正せば俺が軽率に口走った報酬の所為でもあるんだが。

俺は意を決してドアノブに手をかけて扉を開き、寮長室へと入っていく。

「ただいま…つと…？」

寮長室へ入ると部屋は薄暗く、人の気配が感じられない。

千冬はまだ職員室で今月行われる学年別トーナメントの調整作業に追われているので、この部屋に帰ってきていないのは明白なんだが：俺はてつきり全裸の束が触手状の得体のしれない何かと共に寝室に引きずり込んでくるものだと思っていたので、ちよつと肩透かしを喰らった気分である。

「そーいや、今日は教室にクロエが居なかったな：大方束に振り回されちまつているんだろーうが…。」

ともあれ、我が家（仮）へ穏便に帰って来ることができた俺はホツと胸を撫で下ろしながらリビングへ向かい、どつかりとソファアに座り込んでネクタイを緩める。

「…あいつらの匂いだ」

4人で共同生活をしていれば自ずとそれぞれの匂いに嗅ぎ慣れてしまい気付かなくなるものの、長期で旅に出てこうして帰ってきて香ってくると言つては何だが安心するつてものである。

暫らくぼんやりしていると、キッチンの方からガタガタと何やら物音が響き始める。

「どうやら、誰か居たらしい…と言つても束くらいだろうが。」

：普通なら気付くはずなのに気付かなかつたところを見るに、どうやら俺も相当腑抜けている様だ。

それだけこの学園での生活が日常になっていと言う事なんだろうが…。

キッチンへとやや重い足取りで向かうと人影はないものの、誰かが漁っていった痕跡が残っている。

：やはり、何かが居る。

「つつてもこの部屋に侵入する剛毅な奴らは居ないだろうしなあ…束を怒らせたいつてんなら別だろうが…」

どうも、各国から要請があつたのかこの学園の生徒は束の存在に関して消極的な態度を取っている。

現状、束がすべてのISコアの主導権を握り込んでいるので、怒ら

せてしまった時が怖いと判断したのだろう。

英断ともとれるその決断を、俺は手放しで褒めてやりたい。

一先ず、飯を作る必要もあるので俺はバカデカイ冷蔵庫の扉を開けて中身を確認しようとする。

因みにこの部屋の冷蔵庫がやたらとデカイのは、千冬がダース単位で酒を仕入れてくると、束がこれまたダース単位で栄養ドリンクを何処からか仕入れてくるのが原因だ。

千冬は酒豪な上、学園と言う立場上売店に酒を置くことが出来ない為にダース単位の注文になってしまふのは仕方が無いのだが、束の場合は基本的に食事なんてレーションで充分と思っているクチなので、こうして栄養ドリンクだけで乗り切ろうとする節がある。

クロエに料理を仕込んでキッチンと食わせる様に仕向けてはいるものの：クロエもまだまだ料理が下手な状態で満足な出来の料理を提供できずにいたりする。

どうせ碌なものが入っていないのだろうな：と、諦めムードで冷蔵庫を開けた俺の目の前に広がった光景は、予想を反したのものとなった。

「階段…？」

そう、階段である。

俺が留守にしている間にまた部屋を改造したのか…？

放っておくと本当に何をしでかすのか分からない辺り、天災らしいと言えば天災らしい。

何があるのかを確認するために、俺は意を決して階段をゆつくりと降りていく。

特に空気に違和感がある訳でもなく、また空調がしっかりしている為肌寒さも感じる事がないので快適な空間と言えば快適な空間と化している。

10分程階段を降っていくと、可愛らしい人参をモチーフにした扉が視界に入ってくる。

俺は特に警戒することもなくその扉を静かに開けて、スタスタと中に入っていく。

そも俺がああ階段を見つける様にしていた時点で、束は此処へ俺を呼び込むつもりだったのは手に取る様に分かる。

「くんくん…アモンの匂いが濃くなったよクーちゃん！」

「束様、アモン様ならその…背後にいらつしやいます」

束は深紅に金の蒔絵を施された華の様に鮮やかなISの目の前で座り込んだまま、空間ディスプレイを無数に展開させてそれらをほぼ同時に操作している。

およそ人間業とは思えない情報処理を行いつつ、傍らに控えていたクロエと日常会話を難なくこなすその姿は、成程…確かに天才なのだろうな。

「テメーは何を作っついていやがりますかね!？」

「いだだだ!!!」

俺は素早く束の背後に踏み込んで、後ろから束の両頬を思い切り抓って引つ張る。

よもや自分専用のISを今更作っているとは考えにくい…と、なると思えば答えは一つと言う事になる。

俺は深いため息を吐いて束から両手を離す。

…ため息増えた気がするな。

「えへへへ、アモン…」

「なぐに甘い声出してんだか…。クロエ、お前サボったな？」

「……」

「おいこら、そっぽ向くんじゃねえよー!」

束は全ての空間ディスプレイを消失させると、俺の身体を万力の様に締め上げる様に強烈なハグをしながら胸元に顔を埋めていく。

俺はとりあえずは優しく抱き返してやってから、クロエをジト目で叱責しようと声をかけるものの、クロエは聞こえていないと言わんばかりに顔を背けて俺と視線を合わせようとはしない。

…こいつ…。

「束の面倒見ねえと拙いのは分からんでもねえけど、学園の生徒なんだからキッチンと授業には出る、マジで。キッチンとしてくれねえと、束や俺の顔に泥塗ることになるんだからな?」



「…申し訳、ありませんでした」

「分かればよろしい」

クロエの行動原理は束や俺に尽くすことに絞られている。

少々汚いやり口ではあるものの、俺や束を出汁にしてやれば案外素直に言う事を聞いてくれる。

先ほども思ったが、どうも人間味が増してきたな…クロエ…。

「で、箒に頼まれてもしたか？」

「んふふ、前々から組み上げてはいたんだけどね！この間箒ちゃんから専用機が欲しいって相談受けちゃってさ。束さんとしてはこのチャンス活かすなら今でしょ！って感じでギンギンになるよね！」  
「ならんでええわい…ったく…どうすんだよこれ…」

箒が専用機を欲する…と言う事態が起こる事は充分に考えられたものではあるものの、こうも早い段階で欲しがるとも思っただけではなかった。

なんせ、ISは大嫌いな姉の作品だ…本来であれば関わろうとも思わない代物の筈だ。

箒自身に余裕が無い状態に追い込まれているとも取れるが…まあ、欲すること事態は構わない。

誰しもが専用機と言うものに憧れを抱くものだから。

強請った相手が問題なのだ。

「現行最強を目指して開発を進めてるんだ。なんて言っただけでこの束さんのラブリースウィートシスターである箒ちゃんが扱うんだからね！」

「デショウネ…」

「思い切ってコアも新造して搭載しちゃったよ、ほめてほめて」  
「褒められるか馬鹿!!」

ISコアは現存するすべてがIS委員会によって一括管理され、各国の国力に応じて分配されている。

そんな最中日本人の少女である篠ノ之 箒の手元に現行最強を謳ったISが専用機として支給され、なおかつ新造されたISコアが搭載されている…なんてことが世界中に知れ渡るのである。

そんなことになったら箒の人権は無視され、骨肉の争いが各国間で起きる事は想像に難くない。

束は天才だが周囲の事を省みない…故に天災とされてきたのだ。

「えー、いいじゃんケチンボ。久々に会えたんだよ？ハグしてくれただけどキツスとか色々もつとしてくれてもいいじゃん。あつちも準備、い・い・し？」

「よかねえわい…ったく、どうすんだよこれ…」

俺は抱き着いたまま衣服を脱ぎ始めた束を尻目に、災いと呼びそうな新型機を睨み付ける事しかできなかつた。

## #41 難題と日常と

——紅椿。

現行最強を目指して開発されたこの第四世代・I Sは、今世界中で躍起になって開発している第三世代型を置いてけぼりにするほどの性能を秘めている。

それは最早この世界においてどのような財宝よりも輝かしく、そして人々を魅了するに余りあるポテンシャルを秘めている。

こんなものを小娘の専用機として与えようと言うのだから、天井からつるされている天災殿は考えが甘い…。

「アモーン、ドーして束さんは吊るされなきゃいけないのさー!？」

「じゃかしいわい!とんでもねえ爆弾作りやがって!」

意気揚々と紅椿の性能のレクチャーを束から聞かされた俺は、片付けた筈の頭痛の種が再び戻って来たのを感じ取り、これ以上作業を進めさせる訳には行かないと言わんばかりに素早く束の身体を縛り上げ、駿河問の状態で天井に吊るし上げた。

此奴の場合、ただの縛り方では簡単に抜け出してしまう可能性があるからな…。

「爆弾だなんて酷い言い草だね!?こんなにも筈ちゃんピッタリなI Sなの!!」

「だから爆弾なんだろうが!ガン〇ムに初めて乗ったセ〇ラ状態になるっつーの!」

訓練の成績を見る限り、現時点の筈のI S実戦訓練での評価はB+と言ったところだ。

これは本人自体にI Sに対する想いが何処か希薄な部分がある所為で、真面目に取り組んではいるものの身に入ってきていないのが原因なのではないか…と思っている。

理由は言うまでも無く、今吊るされている束が原因だろう。

聞くところによれば、束がI Sを開発して大々的に世界にアピールした直後、篠ノ之家が政府の重要人物保護プログラムの対象になってしまったそうだ。

世界のパワーバランスを簡単に突き崩してしまう I S …その開発者たる束の弱みであるであろう家族を手厚く保護するのは政府としては当たり前の措置ではあるものの、当時小学4年生…多感な時期である筈にとつては恨みたくなくなるような境遇に陥ってしまったことになる。

また、束も束で接触できるにも関わらず接触することを怠ってきたために弁解するチャンスを放棄してしまい、姉妹仲は崩壊した状態になってしまった。

そんな事もあり、筈自身の I S に対する想いは非常に複雑だ。

—— 家族を離れ離れにした存在。

—— 嫌っている姉の作った存在。

—— そして…想い人と再び巡り合わせてくれた存在。

そんな、複雑な心情が中で渦巻いているなら、I S の訓練に身が入る訳がない。

そも、一夏と一緒に居ると言う為だけに I S を利用しているならば猶更に。

大方、嫌いな姉に恥を忍んで I S を強請ったのも一夏の周囲に専用機持ちが多かったからって所だろうよ。

さて…どうしたものか…。

「なあ、束…お前自分の事を天才だつて言つて憚らねえよな？」

「もちのロンき！なんて言つたつて束さんは誰にも作れない I S の産みの親なんだからね！私以外の凡俗が立ちはだかつた所で、この束さんに勝てるわけないじゃん！あ、勿論ちーちゃんとアモンは別だけだね…グへへ…」

「…お前は誰にも止められねえわな…けどよ、筈はどうだろうねえ…？」

「…何が言いたいのさ？」

束は確かに天才かつ人災故に天災である。

彼女は他に誰も思いつかないような独自の発想を以て常に人類の一步先を見通し、結果として文明レベルから見ても異質としか言いようのない I S の開発に成功する。

そんな存在に人類が対抗するのは生半可な事では不可能であり、事実として各国から指名手配されているような状況かで尻尾すら掴ませず、そしてありとあらゆる非人道的研究の全てを握りつぶしてきた。

故に：故に、彼女は自分自身を基準としてしか物事を見れなくなっ  
てしまっている。

そして、身内の評価は激甘なのだ…。

「いんやー？平々凡々の箒じゃそんなじゃや馬扱いこなせるわけがねえんだよなあ…。一夏が初手から上手く扱えたつてのは、本人に上昇志向があつたからつてのがデケエ。だがよ、箒は真面目に授業を受けちやいるが、あくまでも一夏ありきでしかISに向き合えていねえ気がすんだわ…」

「別にそれでもいいじゃん？その何が問題だつてのさ」

「そいつ、ナンバー的には470個目のコアを使つてるだろうが…箒を中心にしてドロツドロの政争が始まんぞ。基本的にや所属は日本つて事になるだろうが、果たして最新鋭且つ頂点に位置するようなISを他の国が黙つて見てるかねえ…？」

紅椿は、聞く限りであれば現状この世界で頂点に位置するISだ。

予定されているワンオフ・アビリティや展開装甲と呼ばれる特殊装甲：これらは今この世界では机上の空論程度の産物であり、実際に造り上げる事が出来たものは束を除いて存在しない。

そんな機体を日本が独占する…ともなれば、各国はパワーバランスの均衡を崩すと言う名目で確実にちよつかいを出してくるだろう事は想像に難くない。

この機体をIS学園所属の機体として登録してしまう…と言う事も考えられるが、その場合実質的な上位組織であるIS委員会からのちよつかいが入ることが予想されるため、これも悪手。

最悪『ころしてでも うばいとる』：なんてことが起きかねない。  
「そんなの、束さんが黙らせるに決まつてるじゃん？」

「その結果お前さんは重犯罪者扱いになつて、箒の肩身が狭くなるだけだつつの…。いい加減もうちよい視点合わせろ。束1人が中心つ

て訳じやねえんだよ」

「束様…此処はアモン様の言うとおりにすべきかと。私は束様がどのような存在であろうと御傍に居ます…ですが、束様が苦勞なされるのは…嫌です」

「……」

束が何か反論を言おうとする前に、今の今まで黙り続けていたクロエが静かに言葉を口にする。

それは正しく本心から出た言葉であり、真摯な想いが込められている。

これには束もバツが悪そうに視線を彷徨わせ、暫らくしてから大きく溜息を零す。

「はあく…それで、どうすれば良いのさ？」

「娘にや弱いねえ…束も人の子か…」

「…ぷいっ」

俺がニヤニヤとした笑みを浮かべて束を見上げると、心底不機嫌そうな顔で束は顔を背ける。

他人の説得に折れてしまった…と言うプライドが傷つけられる事態が不満で仕方が無いのだろう。

俺は軽く肩を竦めて束を縛り上げていた糸を解いてやり、天井から落ちてきた束の身体をしつかりと受け止めてやる。

「おーら、むくれてねえで機嫌治せっつーの」

「束さんは悪くないです、世界が悪いんです」

「あー、はいはい悪くない悪くない」

「…クス」

まるで赤ん坊をあやす様に背中をよしよしと撫でながら束を宥めていると、傍らに居たクロエから笑い声が漏れ出す。

俺と束はハツとなつてクロエの方へと向くものの、クロエはいつも通りのすまし顔を気取っている。

「なにか…？」

「クーちゃん、今笑わなかったかな？」

「いいえ、滅相ありません。ところで、この地下施設への入り口が開

けっ放しでしたので…」

クロエは至って平静に受け答えをし、この空間の出入り口を指で指し示す。

其処にはこめかみを若干痙攣させながら、精一杯の笑顔を浮かべて仁王立ちをしている千冬の姿があった。

…これは駄目かもわからんな。

「随分と楽しそうだな…束?」

「あ、ち、ちーちゃん…」

束はギギギ、とさび付いた金属関節の様にゆつくりと千冬の方へと顔を向け、引き攣った笑みを浮かべる。

この反応を見るに、この施設どころかISすらも相談なしで造り上げていたのだろうか…。

ただでさえ厄ネタの多い状態で、更なる厄ネタを用意してますなんて言えるわけがないしな。

「貴様の後ろにあるものはISだと思うのだが…勿論、事細かに教えてくれるのだろうか?…叩き出されたくなければ」

「アツハイ」

つかつかと千冬は此方へと歩み寄って無造作に束の顔を鷲掴みにし、ずるずると引きずりながら紅椿の元へと歩いていく。

俺はその様子を眺めてから、クロエに対してポツリと呟く。

「飯の用意しよ」

「承知しました」

「まったく…まっつっつたく! 厄介なものを作ってくれろ!」

「あんまり飲むと明日に響くぞ、おい」

クロエを伴った夕飯づくりは滞ることなく終えることが出来た。

俺が留守にしている間は鈴に指導してもらい、基本的な調理は一通りこなすことが出来る様になっている。

ただ、俺は大雑把にしか料理をしないのに対し、クロエの場合は計量器を用いて正確な分量で料理をしたりするので、その辺りで齟齬が合ったりする。

分量が正確ならば、まず失敗はしない筈なのでこれはこれで問題ない。

夕食を終えた後、クロエはそそくさと寮長室を出て行ってしまった。

なんでも、寮長室に寝泊まりするのも問題がある…と言う学園上層部の意向があつての事で、今は1人部屋で寝泊まりをしているそうだ。

そんなわけで、現在…俺は両手に華状態とは言え酔っ払い2匹に絡み酒を載っている状態になっている。

千冬はタンクトップに下着だけの色気も欠片もない姿で俺の左腕をガツチリとホールドする形で抱き着き、日本酒をまるで水か何かの様にハイペースで飲み続ける。

「え〜〜ちーちゃん酷いでござるよ〜？こーの束さんが作ったものに厄介なものなんてないんだぜ〜、ぐへへ〜」

「はいはい、だ〜れも悪くねえ悪くねえ…」

束は束でこの後のお楽しみを既に期待しているかの如く、ブラウス1枚だけを羽織った状態で俺の足にうつ伏せの状態で上半身を乗せて足をバタバタとさせている。

こっちはこっちで規格外なのか酒を飲んでも酔っている素振りをみせない。

もっとも普段から酔っぱらっているかのような奇天烈っぷりを見せるのだが。

「やかましい、ただでさえお前の面倒で手いっぱいだよに、ガキにあんなもの持たせられるわけないだろう？」

「ガキじゃありません〜。箒ちゃんって言うプリチーな名前があるんです〜」

…結局、紅椿はまだ渡さないと言う事で決着がついた。

専用機持ちになると言う事は生半可な努力で成せるものではない。

それは数多い国家代表候補生の中でも、ほんの一握りの人間しか所有していない事からも窺い知ることができる。

特に突出したものを持っている訳でもない箒が現時点でポンと専



用機を得た：…なんて事が起きれば間違いなく人間関係に軋轢を生んでしまう。

もつとも、本人は一夏との繋がりを保てればそれで構わないのだろうが…。

ただ、教師と言う立場から見ると、将来的な問題も考えてそんなことを容認する訳には行かない。

よって、まずは面談をして本人の考えや覚悟を聞き出し、今月行われる学年別トーナメントの成績を以て仕様を決定し引き渡すことにする。

場合によっては、スペックを第3世代試験機レベルにまで落とす予定だ。

低スペックで突出した能力が無いともなれば、監視対象にはなるだろうが大分興味は薄まるはずだからな。

仮に筈が専用機持ちになると言う覚悟を持ち、トーナメント上位に食い込むほどの成績を残すのであれば…。

「まあ、落ち着け…その話は決着ついただろうが。そういや、トーナメントの形式変えるんだったか？」

「ああ、20n2のタッグマッチ形式だ。最低でも稼働可能なISが2機、会場内に居ればアクシデントにも対応しやすくなる。前回のクラス別対抗戦でも一夏と鳳が良い仕事をしたからな」

「何も無きやいいが…ああ、聞きそびれてただけだよ…V・T…つて言葉に聞き覚えあるか？」

パリにてスコールが別れ際に寄越した単語…V・T…。このインシャル染みたものは学園のデータベース上にも存在しておらず、終ぞ俺は正体に辿り着くことが出来なかった。

俺がこの単語を口にした瞬間、2人とも戯れるのを止めて真剣な表情で此方を見つめてくる。

「その言葉…どこで聞いた？」

「パリでこの間の襲撃犯と出くわしたときにな。リップサービスなんだろうが、V・T…は生きているっつー言葉を残していきやがってな」

『Valkyrie Trace System』：？あんな時代遅れまだ研究してたの？」

千冬と束は嫌悪感を露にしてしかめっ面になる。

Valkyrie Trace Systemが言葉通りのものだとして、考えられるのは：モンド・グロツソ出場者の中でも各部門優勝者の通称であるヴァルキリーの模倣。

となるとマンマシーインターフェースとして積まれるものだろうから…。

「おおよそ、アモンの考えている通りのものだ。V. T. はモンド・グロツソにて榮譽に輝いたブリュンヒルデ及び各部門ヴァルキリーの動きを機械的に再現するシステムだ。勿論、それを扱う人間の事など考えず強制的に動かしてしまう為、無人機の様な挙動を行う。よって、制御が効かない代物になってしまった。現在のISの認識のまま使用するととなると非人道的極まり無くなるため、IS委員会が研究の即時停止を命令した」

「そのあと、この束さんが研究施設をペシャツて潰したり、データと言うデータにウイルス貼り付けて消したりして丁寧な世間から失くしてあげただけどねえ…無人機の件と言い何処の誰なんだろうねえ…？」

表向きはキチンと命令に従って研究を止めていたが、どこぞの誰かがそのシステムの研究を続けていたって事か。

「生きている…と警告をしてきた以上、恐らくこの学園に所属しているISのいずれかに積まれてしまっている可能性があるわけだな。」

「千冬、今からISの一斉点検を行う事は可能か？」

「この学園管轄のISであれば問題ないだろうが、日本所属の専用機以外は皆渋い顔をされるだろう。なんせ条約違反の代物が自国の専用機に積まれていたとなつては外間が悪すぎる。そんなことが露見すれば自国のISコアを取り上げられる可能性だつてあるからな」

「〜っ！また腹が痛くなりそうなもんを…」

面子と外間は国にとって重要なものだ。

それらがおぎなりになつてしまえば、国と国同士の対等な会話すら

できなくなってしまうのだから。

「まくまく、あんなシステムなんて起動した所でこっちからシャツトアウトしてあげればどうとでもなるし？もーまんたい、もーまんたい」

「つて訳にもいかねえんだよ。変に問題が起きれば学園の弱みに繋がって、こっちが不利になる…かといって強硬策にも出れねえからなあ…」

「お前とて、ここから出ていく羽目になるのは嫌だろう？」

千冬の言葉に束は満面の笑みを浮かべて、俺の首筋に思い切り抱き着いてくる。

「なら、気張れよ束？無人機の件と言ってお前を出し抜いてきたやつらの謀の可能性があるからな」

「これも此処に居る為の必要経費か…凡俗がどうなろうと構わないけど、それで居られなくなるんじゃないや本末転倒だし」

束は珍しく素直に頷いた後に、何を考えたのか俺の耳に噛みついて舌をいきなり這わせてくる。

俺は背筋に走る悪寒に身体を思わずびくつかせて、片手で束の顔面を掴んで耳から離させる。

「何考えてんだ束!？」

「何って…そりやナニでしょう？束さん我慢したのでそろそろご…ほう…び…欲しいなあ〜」

「ほう…勿論私もご相伴に預かれるんだろうな？」

「もちのロンサー！」

千冬も負けじと俺の身体に抱き着いてきて首筋にキスを落とす、普段からは想像もつかないような妖艶な笑みを浮かべる。

2人は俺の返答を聞くまでも無く衣服へと手を伸ばし――

――このあと滅茶苦茶以下略。

## #42 放課後談話

「学年別タッグ・マッチ・トーナメントねえ…」

夕焼けに暮れなぞむ校舎…のすぐ傍にある喫煙所。

俺はそこで一人煙草を吸いながら、手元にある資料を静かに眺める。

今月に開催される生徒達の最初のお披露目会である学年別トーナメントは、二人一組のタッグ・マッチ戦へと変更された。

理由は単純にして明解。

トーナメント中にはほぼ確実にトラブルが起こるため、アリーナ内で対処できるISを増やす為だ。

二年生、三年生ならいざ知らず、一年生でトラブルに対処できるのか…？

と言う疑問は当然のことながらあるわけなのだが、そちらのトラブルに関しては俺が居る。

例えアリーナを遮断する防壁があつたとしても、俺にとっては壁が無いのと変わりがない為だ。

問題はそのトラブルを起こす元凶が、専用機持ちの操るISの中に存在していると言う事だろう。

全学年に点在している専用機の整備報告書を、天災殿に見せる為と言う嘘をでっち上げてまで提出させたものの、当然のことながらシロ。

学園の方で詳細な整備をやろうとしても、各国から機密が含まれているので駄目だと真っ向から拒否されてしまう始末。

実際に天災殿にバラさせる案も考えたが、後々に起こるリスクと本人のやる気を考えるところの案を実行する気にはなれなかった。

つまり現状八方塞がりの後手後手っぷりである。

「隣、失礼しますわ」

「お、別嬪さんがおっさんに何か用かい？」

こんな煙たい場所に来る筈も無からう人物、セシリア・オルコットは煙草の煙に眉根を寄せる事も無く俺の隣に座り、デバガメの様な二

ヤニヤとした笑みを浮かべている。

俺は慌てて煙草を灰皿の中に捨てると、煙を手で払っていく。

「別に、吸っていてもよろしかったのですが？」

「アホ抜かせ。副流煙だ何だって煩いってーのに、大事な国家代表の卵に不健康なモン吸わせる訳にやいかねえだろうが」

「言動はどうでも、紳士的ですわね…」

セシリアは俺の態度が可笑しいのか口元を手で隠しながらクスクスと笑い、すぐに表情を真面目なものに直す。

「随分と大胆な行動に出ましたわね？」

「おう、どうせあのバカ兔が言いふらしたんだろ？朝飯ん時居なかつたし」

IS学園は基本的に封鎖された環境であることは、以前にも述べた通りだ。

詰まるところ、学園内にしか非日常的刺激を得る方法が無いため、日夜生徒達は退屈と戦う為に刺激を求め続けている。

で、今年に入って生まれた刺激…男性操縦者の編入と言う一大イベントが起こった訳なのだが、男性操縦者の片割れである織斑 一夏はあの通り鈍感オブ鈍感を超えた朴念神であるため、存在自体は刺激になろうともロマンズに発展するにはあまりにも動きが弱く、その周囲を固めている専用機持ちが強力過ぎて傍観者にならざるを得ない。

では、もう一方の俺はと言うとそも子供に変な目を向ける事も無く一線を引き続けている為に自分たちでは話を発展させることが出来ない為にやはり傍観者にならざるを得ない…かった。

過去形になってしまったのには理由がある。

それは学園全体に、皆の憧れである千冬と世界中からほぼ指名手配されているような状態である束と肉体関係を持った所か相思相愛状態に陥っていると言う噂が上から下まで広まってしまったが為だ。

お陰で学園の上層部はこの事実関係の調査をする羽目になり、俺と千冬の昼休みは潰れる…のは自業自得として、学園外にも噂が漏れ出したのか新聞社やテレビ局から引つ切り無しに取材の申し込みの電話が来ていて、その対応に追われてしまっている。

男の影がまったく無かったからなあ…千冬。

「妖怪の正体見たり、枯れ尾花…と言うのでしたか？」

「随分日本語に詳しいもんだな」

「いえいえ、先生程ではありませんわ」

俺は肩を竦めて苦笑する。

暗に、言動通りの女たらし…とセシリアは俺に言いたいのだろう。否定はしないし、何だったら五股だって仕掛けるくらいの気概はある。

イイ女つてのは何人いても良いもんさね…。

「ええ、背中は押ししましたけれども…ここまで節操無しとは思いませんでしたわ…」

「ケツケツケ、案外気楽なもんだぜえ。仲が良けりや猶更なあ…！」

「悪い顔で凄まじいでくださいまし。ただの悪党にしか見えませんわよ…」

セシリアは呆れた様なため息を漏らして首を横に振り、俺の事をジト目で睨み付けてくる。

俺はそんな視線を軽く受け流して、三下笑いをするだけだ。

「ですが、お陰で締め付けもキツクなってしまったのでは無いのですか？先生は一夏さんの様に自由は与えられていないのでしょうか？」

「ソコなんだよなあ…なんせ根なし草で定住してねえからな。フラフラと行方くらませられたら困るってんで、学園から一步も出られねえってのがなあ…」

千冬は兎も角として、束とそう言う関係に至った…と言うのは、学園としてもIS委員会としても非常に困った事態になってしまった。

現状、ISコアを管理運営しているのはIS委員会と言えども、そのコアのマスターキーとも言うべき制御権を一括に管理運営しているのは束だ。

世界は今、ISによってバランスを保っている…つまり、束に近い存在であればある程、この世界を牛耳れる存在になると言っても過言では無いだろう。

大国であればある程、国の防衛力をISに依存してしまっているか

らな。

そんな最中にひよっこり近しい存在になってしまった俺が現れてしまつて、委員会は俺の扱いについて大慌てで議論する羽目になっているだろう。

このままだと、俺は一生旅ができない身体にされそうだし…。

「それこそ首輪をつけられて飼ひ殺し…なんて憂き目になるのでは？」

「そこんところは東が許すと思うか…？」

「篠ノ之博士を見ている限り、飼ひ殺し…は考えられませんわね…」

東は心を許した相手にはとことん甘くなるし、とことん何やっても許してくれる…そう考えてしまう節がある。

実際のところ千冬達も『まあ、東のやることだし…』と、諦めて許してしまつたことが多々あつたと思うし、ブレーキがイかれてしまつている以上諦める他無い。

詰まるところ、俺でも東の制御は出来るなんて思つてないし、一度動き出したら殺すか何かしないと止まらないだろう。

「この件は先生の自業自得ですし、わたくしとしても…まあ胸の空くような出来事ではあつたので良いのですが…」

「ですが…なんだよ？」

「何か探りを入れていませんか？」

セシリアは大人顔負けの鋭い眼差しになり、俺の事を睨み付けてくる。

流石は大貴族のお嬢様…怪しい動きには敏感になっているようだ。

貴族社会つてのは、仲良しこよしなんてお花畑な雰囲気広がつている世界じゃないからな…食うか食われるかの政争が渦巻いている。

水面下で足をバタつかせている白鳥の様に。

「ところが何にもねえんだよなあ…これがな」

「篠ノ之博士が突飛も無い事を仰る…と言うのは理解していますが、片手間に第三世代機を作る様な方が機体整備に関して興味を持つとは思えません」

「それこそ俺の預かり知る事じゃねえつてば。そりゃ、俺は千冬や東

とふかくく繋がっちゃいるけどな。一応ISに関しちや知識は知っていても教員としちや関わってねえ。つまり、何も知らねえってこつた。一応、普通科の担当教諭だぜ？」

実に勘が鋭い：嫌いじゃねえけどな。

束が関わる、と言う事でセシリアの国の方でも色々と探りを入れろと言われたんだろうがな。

V・T・システムの事に関しちや表沙汰にする訳には行かない：信憑性もクソもない情報源からの言葉だが、無視する訳にはいかない。

もし、表沙汰になってしまったら、各国にちよつとした混乱が起ころことは明白。

どの国もが潔癖を表明し、そしてもし：いずれかの国に所属している機体に搭載されていたらどうなるのか？

傍観者としてはニタニタと笑いながら見ていられるが、当事者には堪ったものではないだろうよ。

「いつそ、教える側に回った方が良いと思いますわ。最初は半信半疑だったあのテキストのお陰で、わたくしも実力が伸びてきているのは実感できていますし」

「そもそも、俺あ教える側にや向いてねえんだよ。面倒だからな」

「面倒だと感じている人間が、イラスト付きでテキスト用意するとは思えません」

「凝り性なんだよ……」

ISを教える側に回る：と言う打診が無かった訳でもない。

この喫煙所を利用してると、もう一人の喫煙仲間であるタヌキの爺様と顔を合わせる事になるからな。

IS学園はその特異性から慢性的な人材不足に陥っている。

ISの取り扱い方を教えようにも、優れた人間は各国の軍部が抱きかかえてしまっていて教えられる人間を揃える事が難しくなっている。

かと言って、無理矢理人材を確保しようとするれば学園に対する内政干渉が強まる可能性が高くなり、中立性を維持できなくなる。



そう言った事情があつてか、少ない教師を酷使する状態に陥ってしまっているのである。

家計だけでなく人材までもが火の車…幸い給料は使う暇が無いとは言え阿呆みたいに高く設定されているので、辞める人間は居ないみたいだが。

兎に角そんな事情があつて、巧みにISを扱う事が出来る人間と言うのは非常に貴重であり、もういつそ俺の事も徴用して本格的な教師に仕立て上げてしまおうかと画策しているらしい。

「つーかな、ただでさえ普通科目の授業受け持つてんのにISの授業も見るとか俺に過労死しろってか？」

「あら、先生は悪魔なのだと憚らないのですから、いつそ死なないのでは？」

「阿呆、首切られたり心臓ブチ抜かれたら死ぬわい」

多分、死なないと思うが。

ともあれ、くつそ疲れる羽目になるのは目に見えてしまっているので、俺としては御免被りたい。

それはタヌキの爺様にも伝えているのだが、一向に諦める様子を見せず…近々切り札を切られそうで戦々恐々としている。

「そーいやお前さん…タッグ・マッチ・トーナメントの相手は決まってるのか？」

「ええ、鈴さんと組むことが決まってますわ。流石に山田先生にやられっぱなしと言うのも癪ですし、ここは一度組んだ相手とやってみようかと」

「まあ、あん時や酷かったからな…」

以前の実習の時に二人がかりで真耶に挑んで、一方的に遊ばれて撃墜されていた光景を思い出す。

あの時は千冬が煽って喉けたと言う事もあつたが、個人のアクが強くて連携もへったくれも無い状態だった。

向上心の強いセシリアと鈴が組むとなると…優勝候補となることは間違い無いだろう。

「ええ…あんな無様はもう晒したくありませんわ…」

「箒は…一夏辺りと組むんだろうな」

「いえ、それが…どうも一夏さんはデュノアさんと組む様でして」

シャルロットが…ねえ…？

一夏と組みたいと言う女子の競争率は凄まじいものを誇ったろうに、いったいどうやってその席を手に入れる事ができたのやら…？

俺は内心箒に合掌しつつ、どうやって引っかけ回したのかと思案を巡らせていく。

「先生、わたくしはこれで失礼しますわ」

「おう、門限までには寮に戻れよ」

「勿論、これでも優等生です」

セシリアは飛び切り綺麗な笑みを見せて立ち上がると、俺に背を向けてアリーナのある方角へと歩いていく。

恐らく、これから鈴と動きの擦り合わせをするのだろう。

初日でツンケンしてたお嬢様が、よくも変わったもんだ。

さーって期末テストの準備でもするか、等とぼやきながら喫煙所を後にし、校舎の中に入っていくと一人の女生徒が声を荒げる場面に遭遇し、思わず俺は曲がり角に身を隠して様子を伺う。

「あの男が姉さんや千冬さんに何か吹き込んだんですか!？」

「…専用機はお前が思っている様な軽いものじゃない」

声を荒げる女生徒…篠ノ之 箒は、相対している人物である千冬に對して苛立ったように声を荒げ続ける。

恐らく、箒の専用機になる予定である第四世代型IS紅椿の受け渡しの権について千冬に言い渡されたのだろう。

何とも、損な役回りを押し付けちまった形になってしまい、俺は深いため息を吐き出してしまう。

こういう役目は嫌われ者が負うものだろうに。

「そんな事は分かっています！専用機はこの学園にあるどの機体よりも強くなる！けれども私には今その力が必要なんです！」

「力が欲しければそれに見合うだけの能力を持て。凰、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ…専用機を持つ者は皆相応に能力を身に付けてきた。それが出来ないのであれば、貴様には専用機に触れる資格

すらない」

「だったら、一夏は!？」

「奴は貴重な男性操縦者だ。データ取りは必須だし、何よりも単独行動中に身を守る為の武器が必要になる」

千冬は可能な限り冷静に、そして優しい声色で箒を諭す様に口を開いていく。

だが、それでも箒は納得できないでいる。

ただ、その考え方はあんまりにも身勝手ではないかと思う…思春期の複雑な年代ではあるが。

だからといって所有が認められるのかと言えば、それとこれとは話が別なんだがな。

「おっと、アモンは…等と言うなよ？ 奴の技量の高さは私と同等かそれ以上だ」

「変に持ち上げんじゃねーよ、千冬」

「っ…!!」

流石に盗み聞きしているのも限界に感じたので、曲がり角から姿を晒すと千冬は小さく舌打ちをし、箒は心底驚いたのか身体をびくつかせて慌てたように此方へと振り向く。

「い、いったい何処から…?」

「あの男が何か吹き込んだんですか…つてところから。吹き込んだぞく、ガキが持つにやヤバイくらい強烈だったからなく」

箒は震える声で俺を睨み付け、千冬は片手で頭痛がするかのようように頭を抑える。

「あんなバケモン振り回されちゃ、流石に俺も抑えきれねえからなあ…まあ、お前さんを試す良い機会だし要は勝ちや良いんだよ、勝ちやあな」

「…アモン・ミュラー…お前のせいで…!」

「〜♪」

俺は箒をあしらう様に口笛を吹いて敵意を誤魔化す。

あんまり続くようなら、あえて紅椿に乗せてボコボコにしてしまうのも良いだろうが…今は闘争心を刺激させてやる気を引き出して

やった方が良いだろう。

「トーナメントで優勝する…そうすればすぐにでも渡してくれるんですね…?」

「各種申請があるし、根回しもしなくてはならん。だが必ず専用機は引き渡そう」

箒は大きく深呼吸をして千冬と専用機を受領を約束し、俺に対しては殺意すら籠っているような視線を送り込んでくる。

随分とまあ…頼れる奴が居ない奴らしい余裕の無さだ。

一夏しか心を許し切れないと言わんばかりの敵意は、俺が一手に引き受けた方が良い。

でなければ、クラスメイトにも八つ当たりしそうだな。

「…アモン・ミュラー、私はお前が嫌いだ」

「おくおく、嫌いで良いさ。感情向けられる分まだ心地いいってもんさ」

「アモン、煽るんじやあない…はあ…」

宣戦布告とも取れる言葉を、俺は軽めに受け取って笑みを浮かべると、千冬は困ったように頭を抱え込んでしまう。

中々珍しい姿ではあるので、眼福と言えば眼福である。

箒は俺の身体にわざと体当たりするようにしてその場から立ち去っていくと、今度は千冬が不満げな顔で俺の事を睨んでくる。

「なんで出てきた!?!」

「いんや、箒の敵意は俺だけに向けさせてた方がまだ気が楽だろうなって思ってたよ」

千冬は一足で俺まで詰め寄るとネクタイを掴んで俺の頭を引き寄せ、八つ当たり紛いの頭突きをお見舞いしてくる。

大して痛くも無い一撃ではあったものの、千冬は若干涙目だったので思っていたよりもダメーヅが跳ね返っていたらしい。

俺は頭を千冬から離すと千冬の額を優しく撫でながら、にへらつと笑みを浮かべる。

「まあ良いじゃねえか、これで箒もISの授業をしつかり受ける様になるんだろうしな」

「いや、良くないだろう!？」

「遅かれ早かれ専用機は渡っちまう。だったら、越えるべき壁役くらいはやっておかなきゃ、箒も本気にはなれねえだろ？」

専用機を受領して俺をボコボコにしてやりたいだろうしな…一夏の注目を受ける為に。

今はそれでも良い。

力と向き合うには、実際に手にしないと分からない事もある。

東が関わるって事の恐ろしさも身に沁みるだろうしな…。

「おい、三下の悪役がするような笑みを浮かべるな」

「おっと、いけねえいけねえ…クールに笑ってねえとな。ケツケツケ…」

「なんで悪役臭が抜けないんだ…お前は…」

千冬は改めて呆れたように溜息を吐く。

俺はそれに対して決まり文句の様にこう言い放つ。

「そりゃ…悪魔だからさ」と。

## #43 黒い雨

箒から明確な拒絶を受けて数日：真つ当な問題解決の方策を打ち出せないまま、学年別タッグ・マッチ・トーナメント開催日が刻一刻と迫って来ていた。

V・T・システムに関しては、余計な情報が広がってしまう事を恐れて、ごく一部の教師陣と生徒会長のみ情報を開示するに留まっている。

下手に生徒に広まろうものならば、噂に尾鰭がついて外部へと漏れ出した末に火消しできないほどの山火事国際問題へと発展する可能性が否定できない。

ましてや今回のトーナメントはIS操縦者を目指す者にとって、外部へ自分をアピールするための大事なイベントであり、専用機を送り込んでいる国にとってはその性能を惜しみなくアピールする場にもなる。

特にEUで開発されているブルー・ティアーズとシユヴァルツェア・レーゲンは、イグニッション・プランと呼ばれる統合防衛計画その次期主力機の選定に関わってくると言う事もあって、トーナメント開催日が迫るにつれて整備班がピリピリしてきているとラウラとセシリアが互いに愚痴を溢し合っていた。

本人たちは整備班に助けられている部分もあるので、大々的に文句を言うわけにもいかないのが実情だ。

国家代表候補生と言うのは、何とも肩身が狭いものだ。

そんな頭痛の種が今か今かと芽吹こうとしている最中、俺はある一つの問題に関して頭を悩ませていた。

「ワンオフ・アビリティのリキヤストタイムを短くしたい？」

「応よ。この先、一分のデメリットを抱え込むのは危険な気がしてな…」

寮の消灯時間はとうに過ぎ、日付が変わろうとしている頃。

ベッドの上で千冬と束に挟まれながら、黒鬼の転移能力：『神隠鬼現』のリキヤストタイムの問題を束に相談する。

使用後一分…このデメリットを長いと見るか短いと見るかは人それぞれではあるのだとは思いますが、こと対IS戦では長く感じる。

現在空軍で採用されている戦闘機は音速…つまり秒速換算で345 m/s、時速換算で1225 km/hとなる。

すべてのISの元祖となる白騎士の時点で、白騎士事件の際に戦闘機を無力化して振り切ったと言う事実があることに加え、戦闘機よりも速い数百発に及ぶ弾道ミサイルをたった一機で撃墜したと言う事実がある。

この弾道ミサイル、最低速度でもマツハ5:6120 km/hだ。それらを鑑みれば狭いアリーナとは言え、ISの戦闘機動は推して知るべし。

超高速戦闘ともなれば、この一分と言う時間は非常に長いものとなるだろう。

「お前の強さであれば、ワンオフ・アビリティに頼らなくても問題ないのではないか？」

「千冬や一夏みてえに攻撃系の能力ならまだしもな…言い換えれば一瞬しか展開できねえ盾みてえなものだ。俺以外の生き物を移動させられるわけでもねえし、あの長さは手痛いしさ」

V・T・システムの問題をどういった形であれ解決したとしても、今後も俺や一夏絡みで事件が起きないとは決して断言できない。

あのスコール、どうにもこっちに興味津々って感じで仕事でもないのに首を突っ込んできそうだからな。

俺だけがトラブルに巻き込まれるならまだしも、生徒まで巻き込む羽目になつては目も当てられない。

「ほんつと優しいよねえ。かんけーない其処らの凡人なんか切り捨てちやえばいいのにさ」

「お前はそれで良いんだろうが、俺はそれでもねえんだよ…なんせ繊細に出来てっからな」

束は俺の思考を読み取って、不満げに唇を尖らせながら俺の頬を指先で突っついてくる。

千冬は千冬で呆れたようにクスリと笑って、より身体をこちら側へ

と寄せてくる。

「フン、そう言う所が良いんじゃないのか？こいつの面倒見の良さは折り紙付きだろう」

「え、視線は独占したいんだよね、束さんは」

「視線だけで良いなら私は身も心も頂くがな」

「牽制しあうの止めろっつもの」

束と千冬は俺の身体を挟んで視線でバチバチと火花が散る様な殴り合いを行い、俺はそれをすぐさま止める為に二人の額にデコピンをお見舞いして黙らせる。

二人ともその一撃で渋々と言った感じで矛を納めてくれたので、俺としてはホッと一安心したところだ。

「で、束…:できんのか？」

「できない事も無いけど、こればかりは一朝一夕って訳にも行かないだろうねえ。コアも束さんほど頭良くなならないし、まずは色々と数をこなしていかないと」

「<sup>セカンド・シフト</sup>第二次形態移行をしろとでも言うのか？戦争をしているわけでもないし、この学園で数をこなすなんて到底不可能だと思いが…」

千冬の口から出たセカンド・シフト…:これはISに蓄積された経験値を基に、より最適化された姿へと進化する…:と言う事らしいのだが、発生件数が片手で数えるほどしかなく、またその条件も推測でしかない。

仮説は色々と立てられるが、それを実証するにはコアの数が希少だと言う事もあって実験することも儘ならないと、何かと謎が多い現象ではある。

束はまるでチェシャ猫の様なニヤケ面を浮かべると、掛布団の中に潜り込みモゾモゾと下の方へと行ってしまふ。

「…:たまにお前らが本当に人間なのか疑わしく思う事があるんだけどな？」

「あそこで切ったと言う事は、話に飽きたかセカンド・シフトをしろと言う事なのだろうな」

俺は下で悪戯をしようとしている束の首を足で羽交い絞めにしな



がら、静かに溜息を吐いた。  
夜はまだ、長い。

学校での授業は終わり、アリーナのスタンドライトに照らされながら、その艶やかな黒い装甲を身に纏って俺は敵意の籠った数々の攻撃を避け続ける。

反撃は無し。

ワンオフ・アビリティの使用は無し。

瞬時加速はアリ。

以上の条件の下で、一夏、鈴、セシリア、シャルロットの4名を相手にしている為だ。

ラウラが参加していないのは、単純にアイツが今日の授業を欠席したためだ。

軍人であるラウラが体調を崩してしまう…と言うのは、彼女の出生からしても俄かには信じがたいものがあつたが、遠い異国の地に1人きりと言うのも少々心細いものがあるだろう。

俺はあまり追及はしてやるなよ、と千冬にやんわりと釘を刺しておいた。

「装甲には掠ってるのに…!!」

「とことん遊んでるわね、シシヨー!!」

シャルロットと鈴が未だ決定打を与えられない事に焦りを感じてきたのか、可能な限りの弾幕を展開して俺の動きを制限しようとしてくる。

シャルロットは素早く弾切れになる銃器ラビット・スイッチを高速切替で次々に切り替えていく。

その豊富さたるや空飛ぶ武器庫と言っても差し支えないだろう。

シャルロットのIS『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』は第3世代型ではないものの、第2世代型の特徴である大容量の拡張領域を持っている。

故に他機種よりも豊富な重火器を搭載することが可能だ。

そこにラピッド・スイッチが加わることで、残弾量に気を配る必要があるものの、濃密な弾幕を展開し続けることが出来ている。

其処に加えて鈴の見えない衝撃砲による攻撃だ。

一撃必殺ではなく、短時間でチャージし発射することができる散弾状に放ってきている。

見えない分非常に厄介ではあるが、完全に見えないと言う訳ではない。

それが弾丸上に発射されていると言う事は、大気中の空気の動きに多少の変化が起こると言う事だ。

圧縮すれば大なり小なり加熱もするしな。

俺は黒鬼のハイパーセンサーを高感度モードに切り替えてデータを検出。

最初のころこそ幾度か攻撃を喰らう羽目になったが、弾道予測さえできるのならば避けられない道理は無い。

また、黒鬼に搭載されているアンロック・ユニット型のウイングスラスターは高出力の物を積んでいる為、速度と言う点では近接格闘型の白式に迫るものがある。

意のままに動かすことができる今となっては、避けるだけの鬼ごっこなどそれこそ見戯に等しい。

「いただきましたわー！」

「ちよいとー！」

シャルロットと鈴の弾幕に翻弄される体で機体を動かしていくと、それを隙と見たセシリアがBT兵器を俺の周囲に展開し、一斉射撃。

その避ける隙間が無いと思わせるような幾筋もの光を僅かに身体を傾け、足と腕の隙間を縫わせる様にする事で直撃を避ける。

「出鱈目ですか!!」

「そおこおだあああ!!」

どうしてもその瞬間、俺の動きは止まってしまう。

シャルロットと鈴による面制圧のような弾幕。

セシリアの檻のようなBT兵器による射撃。

この3つがカチリとピースが嵌ったパズルの様に組み合わさる事

で、俺の動きを刹那にも満たない時間制限させる。

やってくるのは若武者。

零落白夜に対する恐れが抜けきらなくても、必死に足掻いて折り合いをつけようとしているクソガキ。

織斑 一夏はタイミングを見計らったように鈴とシャルロットの弾幕を、瞬時加速を織り交ぜながら掻い潜りその手に持つ雪片式型から光を迸らせながら大上段で振りかぶる。

俺は鬼面の奥で口元を笑みに歪め、微かに後方へと軸をずらす。

振りかぶった以上は最早振り下ろさざるを得ない。

振り下ろされた雪片式型は俺の身体を撫でる事無く空振りに終わる。

「クソツ!!」

「ケ〜ツケツケツ、どうしたどうした?そんなもんかあ?」

俺は目の前で悔しがる一夏達の激情を逆撫でするように挑発し、一夏から全速後退をかけようとした瞬間、側頭部にとんでもない衝撃が走る。

ロックオンアラート無しと言う事はマニュアル射撃:ずいぶんと精密なその一撃は、無防備だった俺の身体を容易く弾き飛ばして地面へと墜落する。

「アモン兄!」

「……貴様ら、そこを退け」

ISの生体保護機能によって意識を失うと言う事はないし、絶対防御によって傷つく心配も今のところはない。

俺は身体をバネの様にして跳ね起こし、墜落したことで起きた砂埃の中から歩いて出てくる。

視線の先に居るのは、俺と同じ機体色であるドイツ製第三世代型IS『シユヴァルツエア・レーゲン』。

使用者は――

「随分な挨拶じゃねえか:ラウラ?」

「:私と戦え、アモン・ミュラー」

「待てよ、ラウラー!」

ラウラ・ボーデヴィツヒは努めて感情を表に出さないように冷淡な表情を浮かべたまま、主武装である大型のレールカノンの砲口を此方へと向けてくる。

ロックオンアラートが鳴り響いたところを鑑みるに、ラウラは俺と本気で戦いたいようだ。

しかし、訓練に水を差された一夏は、黙っていることはできずにラウラへと不用意に近づいていく。

「不意打ちでアモン兄撃つておいて、戦えも何もないだろう！」

「黙れ、織斑 一夏。黙らなければお前から潰す。他の奴らもだ…私の邪魔を、するな！」

鬼気迫る…と言って差し支えないラウラのその表情は、明らかに異常とも言える。

一夏はラウラの気迫に気圧される様に動きを止め、セシリア達は咄嗟に手に持つ武器をラウラへと差し向け、一瞬で緊迫した空間が広がっていく。

俺はそんな状況を打破するように、片手を上げて退いてると言わんばかりに手を振ると同時に、東へと連絡を入れる。

『おんやあゝ、いっくん達と遊んでるあつくんじゃないですかあゝ』

ニヤニヤとチエシヤ猫の様な笑みを浮かべているのが、ありありと想像できるような声で東が応答してくると、俺は溜息を吐きたいのをぐっと堪えて東へと話しかける。

「あゝ、単刀直入に。ドイツで何かあったな？」

『えゝ、東さん知らなくい』

「知らないきや、シユヴァルツェア・ハーゼ隊の周辺調べろ。俺が遊んでやっってる間にな」

学園で過ごしているラウラは、堅苦しいところはあっても少女らしい一面を持つていたし、事実としてそれなりに付き合いも良いと言うのが俺の中での評価だ。

それが今日授業をサボった拳句に無警告からの砲撃だ…なにかキナ臭い事が起きていると考えるのも良いだろう。

「で、何して遊ぶんだ？鬼ごっこなら俺が強すぎて話になんねえぞ？」

「……!!」

冗談めかして減らず口を叩いてやれば、ラウラは問答無用とばかりに俺目掛けてレールカノンの砲弾を警告なしに撃ち込んでくる。

砲弾は正確に俺の胴体…心臓目掛けて飛来するが、俺に直撃する瞬間にその姿を消してしまい、終ぞ俺に当たることは無い。

「プロレスごっこか? かかってこいよ黒兎。俺よかISに慣れてるんだろ?」

「莫迦に…するなっ!!」

ラウラは両手に仕込まれていた近接用の格闘戦用装備である。プラズマ手刀を起動させ、近接戦闘を仕掛けるべく瞬時加速で突撃をする。

俺はその場から動かずにまるで舞台役者の様に大仰に両腕を広げてラウラを迎え撃ち、そして俺との距離3メートルと言った至近距離でラウラは動きを止める事になる。

「なにっ…!?!」

「阿呆が…何の下準備も無しに舞台上上がるからだ」

両腕を広げた際に展開された可視化困難な程に細められ、しかし頑丈な鋼糸…黒鬼に搭載されているワイヤーブレードは俺が使用している糸と遜色なくその強度を示し、若干の違和感が残るものの俺の繊細な指の動きに合わせ変幻自在にその姿を変えていく。

ラウラは俺が作り上げた文字通りの網によって突撃を阻止され、身動きを封じられている。

「無警告で人の頭ぶち抜きやがって…泣くまでテメエを折檻してやろうか…!」

「まだまだ!!」

ラウラは身を振る事で可動範囲が狭まっていたレールカノンの砲口を大まかに此方へと向ければ、そのまま我武者羅に砲撃を始める。

初撃で鋼糸に触れた砲弾は、まるでバターの様に真つ二つに斬り裂かれて別れていき、俺の両脇の地面を深く抉っていく。

しかし鋼糸もタダで済むわけがなく、その初撃でラウラの拘束が緩む形になってしまう。

ラウラは拘束が緩んだ瞬間に砲撃を出鱈目に行つて此方を牽制しながらプラズマ手刀を振るう事で、ハイパーセンサーによって可視化された糸を斬り裂く。

「ぐあっ!!」

「……」

しかし隙は隙：俺はラウラがプラズマ手刀で鋼糸を斬り裂いた瞬間に、先ほど拡張領域に仕舞い込んだレールカノンの進行方向を調節してラウラの脳天へとお返しする。

完全に不意を突いて放たれたその一撃に、ラウラは思わず前のめりになつて地面へと転がり込んでしまふ。

「さて……どう料理してやろうか……」

「シシヨー、完全に悪役……」

「うるせえよ!!」

前のめりに倒れたラウラの頭を思い切り踏みつけて地面に縫い付け、鬼面の奥でニイツと笑みを浮かべる。

ピットに下がらせていた一夏達から非難するような野次が飛んでくるが、俺はそれらを一括して黙らせる。

「捕まえたぞ……アモン・ミュラー……」

絞り出すような声でラウラは俺の足を掴む。

執念……と言つても差し支えないかもしれない。

決して気圧された訳ではなく、しかし身動きが一つも取れなくなる。

「砲身が焼け付くまで……立っていられるか!!!」

「このクソガキ……!!!」

アリーナに轟音が響き渡つた。